ヒステリー

フロイド 著
安田徳太郎 訳

ARS

フロイド精神分析大系

最近の學界を惡魔の如く攪亂し神の如く驚倒歸依せしめたる

大膽奇拔の新學說「精神分析」とは何ぞや

こは……人間行爲の錯誤、夢の諸現象を分析闡明する微妙なる心理研究の結晶である。

こは……人間の現實生活を左右する驚くべき恐るべき潛在意識の摘抉である。

こは……神と惡魔とを同時に忌憚なく暴露し人間內奧の眞を示す新しき哲學である。

こは……勃起恐怖、中絕性交、潛在的同性愛、近親相姦等精神と性慾の聯關交錯を立證せる新しき實驗科學である。

こは……恐怖、假面、催眠狀態、死の象徵、詩的描寫、處女錯綜、夢の怪奇性、罪惡意識等精神作用の神祕を解明せる新心理學である。

こは……狂氣、ヒステリー、一切の精神病の原因を分析し、適切なる療法を明示せる最新の醫學である。

豫約に非ず選擇隨意

Freud · Studien über Hysterie ·

Freud

ヒステリー

安田徳太郎訳

アルス刊

Freud

ヒステリー

安田徳太郎訳

フロイド
精神分析大系
1

アルス刊

譯　序

ここに譯出する一卷は精神分析學の出發點をなし、叉精神分析學の發展の根抵をなした劃期的研究である『ヒステリー研究』である。この書はもとブロイエルとフロイドの共著をもつて世に問はれたものであつて、本書は實に當時の歐米の神經學界に對する爆烈彈であり、今日においてもその價値を決して損ずるものでない。ヒステリーはフロイドと共に有名になつた。二つの名は一つのシノニムとなつた。ヒステリーの歷史の上にフロイドの名は不朽となつた。

全集においてはブロイエルの手になる疾患史の中のアンナの分析及び學說が省略されてゐる。私も單行本を棄てて全集によつた。最初私は『ヒステリー研究』と竝んで『ヒステリーの病理』さらに後期の夢判斷による分析の一例たる『ヒステリー分析の斷片』を飜譯する計畫であつたが種々なる事情によつてこの一卷だけにとどめた。この飜譯は意外にも甚だ長い時日を要した。それは私の生活が多忙であつたためにもよるが、叉その飜譯が私にとつて甚だ困難であつたためにもよる。併し十四箇月の後この飜譯を完成して日本の讀者に送り得ることを私は大きな喜びとし

てゐる。

私はこの飜譯を携へて靜かなる京都から東京の地に移り住むこととなつた。十幾年の大學生活から浪人生活にはひることとなつた。私の生活は急變した。フロイドの飜譯もおそらくこれが最後となることであらう。

京都よ。フロイドよ。さらば！　私は私の世界に向つて勇敢に驀進しよう。

一九三〇年十一月

東京郊外東中野にて

譯　者

目次

ヒステリー

ヒステリー現象の精神機構に關して（豫報）

一

偶然な觀察に鼓舞されて私達は數年來、ヒステリーの種々なる形態や症候について、該現象を最近、若くは大抵の場合數年前に喚發せしめた誘因、過程を探究した。症例の大多數において、たとひ徹底的に行つたものであつても、單純なる診察からは、この出發點を明白にすることに成功しなかつた。その理由の一部は、患者が口にのぼすのを不快とするやうな體驗がしばしば、原因の中心をなしてゐたからであるが、大部は患者が本當にさういふ體驗を思ひ出すことが出來ず、しばしば原因的過程と病的現象の因果關係を氣附かなかつたためであつた。大概の場合、催眠術をかけて、患者を催眠狀態に陷らしめて、症候が最初に現れたその當時の囘想をよびさます必要があつた。その曉にこそ、この關聯を最も鮮明に、最も確實に說明することに成功したのである。

この硏究方法は極めて多數の症例において、理論的にも實踐的にも貴重なる結果を私達に惠んで吳れた。

理論的方面においては、この方法は私達に、偶然的因子は既知の公認された範圍以上に、ヒステリーの病原を決定することを證明したからである。「外傷性」ヒステリーでは症候群を喚發したものは災害であることは明瞭である。そしてヒステリー發作において、患者がどの發作にでもおきまりのやうに、最初の發作をひきおこしたと同一の過程が幻覺として現れると陳述するならばこの點においてもまた、その因果關係は鮮明になる。だが他の現象における實相はもつと暗黑である。

ところが私達は經驗から次のやうな事實を知つた。ヒステリーの自發的な、いはば特發性のはたらきと考へられる種々なる症候は、上述の、この關係において透明な現象と同じに、はつきりと誘因的外傷と連絡してゐるのである。種種さまざまなしばしば數年間にわたる知覺脱失、攣縮、痲痺、ヒステリー發作、すべての觀察者が眞正な癲癇と考へる癲癇性發作、プチ・マル、チック樣疾患、持續性嘔吐、食餌嫌忌にまで高まる食思缺乏、さまざまな視覺障害、繰返し反復される幻覺等々をかやうな誘因的因子に歸着せしむることが出來た。數年間も持續するヒステリー症候とただ一回限りの誘因との不均衡は、外傷性神經症についていつも見馴れてゐるものと同じである。非常にしばしば子供時代の經驗がその原因をなしてゐることがある。その經驗がずつと

長い歳月可なり强烈な病的現象を作つてゐたのである。

しばしば因果關係が非常に明瞭であるために、誘因的事件がどうしてこの現象を作り、他の現象を作らなかつたかが完全に明白になる事もある。さういふ症例は誘因によつて完全に明瞭に決定されてゐるのだ。たとへば最もありふれた實例を拾つてみよう。食事の際にこみ上つて來た悲しい情緒をぐつとおしつけた時に、惡心と嘔吐が發して、これがヒステリー性嘔吐として數箇月持續した。恐ろしい不安に包まれて病人を看護してゐた娘が朦朧狀態に陷つて恐ろしい幻覺を見た。同時に右の腕を椅子の肘掛にかけながら寢入つてしまつた。この結果この右の腕の不全痲痺、同時に攣縮と知覺脫失が發展したのである。娘は祈禱しようとした。併し、一言も物がいへなかつた。最後にやつと英語の子供の祈禱が口に出せた。その後重篤な非常に複雑なヒステリーが發展した時に、娘は英語でしか話すことも、書くことも、解することも出來なくなつた。丸一年半娘は母國語が全然理解出來なかつた。重症の子供はやつと眠についた。母親は身うごきのため子供をおこしては大變だとぐつと意力をひきしめた。彼女は丁度かう決心したがために却つて舌でちつといふ音をたてた。(ヒステリー性反對意志!)この舌打は後日他の機會、卽ち絕對に靜かにしようと思つた場合に反復された。そしてこれに基づいてチックが發展した。チックは舌打

として數年間あらゆる興奮に伴はれた。――極めて聰明な男が、弟が麻醉をかけて强直した股關節を伸して貰ふ際に立會つた。關節が伸びてぺきつと音をたてた瞬間に、男は自分の股關節に烈しい疼痛を感じた。この疼痛感は殆ど一年もの間殘つてゐた等々。

他の症例においては因果關係はそれ程に單純でない。誘因と病的現象の間に丁度健康人が夢においても作るやうに、いはば象徵關係だけが介在してゐる。たとへば、精神的苦悶を神經痛で、道德上のけがらはしさの感情を嘔吐で表現する。かやうな象徵を非常に豐富に行使するのを常とした患者を研究したことがある。――さらに他の症例にあつては、この種の決定にさしあたつてはつきりした理解が下せない。半身知覺麻痺、視野狹小、癲癇樣痙攣等々の如き定型的なヒステリー症候はこれに屬する。この群團に關しての吾々の見解の說明を題目の詳細なる論議に保留しておかねばならぬ。

かやうな觀察は尋常なヒステリーと外傷性神經症の病原的類同並に「外傷性ヒステリー」の概念の擴大を正當化さすやうに思はれる。外傷性神經症にあつては、些細なる肉體的外傷が有力な病因であるのでなくて、驚愕情緖、卽ち心的外傷がその病因となり得るのである。

これと同じに、吾々の探究から、大概ではないが、多數のヒステリー症候に對して、心的外傷

と命名しなくてはならぬ誘因が存在することが分明する。驚愕、恐怖、羞恥、苦悶といふやうな悲痛な情緒を喚起する經驗がこのやうな作用力を逞しくする。そして該體驗が外傷的に作用するかどうかは、概念的にはその人の感受性に(同様に後段で述べる條件に)かかつてゐるのである。尋常なヒステリーにおいては、大きな外傷の代りに、多數の部分的外傷、集合した誘因を發見することが稀有でない。それらが總合されてはじめて、外傷的作用を發揮することが出來るのであり、又哀話の一部を構成する限りにおいて、それらは相互に連絡してゐるのである。さらに他の症例においては、一見何でもない情況も、眞實有力な事件若くは特別過敏な瞬間と合致することによつて、外傷としての威嚴を具備することがある。普通の時ならそんな威嚴は想像することも出來ないのだが、その瞬間と合致して外傷としての威嚴を具へるのである。

併し誘因的なる心的外傷とヒステリー現象との因果關係は、外傷が導火線として症候を喚發せしめ、ついで症候は獨立的となつてずつと存續するといふやうに行はれない。むしろ私達はかう主張しなければならぬ。卽ち心的外傷、あるひは外傷への回想は、異物のやうに作用し、その異物は押し入つたのちのち迄も、現在もなほ作用してゐる動力として働かねばならぬ。そして私達はこれに對する證明を、吾々の發見と同時に重大な實踐的興味を與へたところの極めて注目すべ

き現象の中に見るのである。

即ち各箇のヒステリー症候は、若し誘因的過程の回想を十二分なる鮮明にまでよびさまし、同時に回想に伴ふ緒情をも喚起さすことに成功するならば、その時若し患者がその過程を出來る限り詳細に敍述し、情緒を言葉でもつて表現するならば、直ちに永久に消失してしまふことを發見して、最初非常に驚歎したのである。情緒なき回想はいつでも全然無力である。最初の時に拒否された精神過程はいきいきと更生されて、その結果、必然的に、發生狀態にもたらされ、ついで言葉によつて吐き出されるのである。若し刺激現象が中心である時は、それが——痙攣、神經痛、幻覺——この際もう一度非常な强さで現出し、ついで永久に消失してしまふ。機能脫落、痲痺、知覺痲痺も同じやうに消失する。併しこの際それらの一時的の亢進が目につかないのは勿論である。（1）

（1） デルブーフとビネーはかやうな治療の可能なことをはつきり認めてゐた。次に示す引用文がこれを證する。デルブーフ、動物磁氣、巴里、一千八百八十九年。「催眠術家がいかに治療に役立つものかを早速に說明するであらう。彼は患者を病氣が姿を見せる狀態において、その病氣を再生さすことによつて言葉でもつて排擊するのである。」——ビネー、人格の轉換、一千八百九十二年、二四三頁。「……症狀が

はじめて現れたその瞬間にまで心的トリックによつて患者を運ぶことによつて、この患者を治療的暗示にはるかに感應しやすくすることが多分出來るであらう。」――ピエル・ジヤネーのものした興味ある著述、心理學的自動現象、巴里、一千八百八十九年の中でヒステリーの娘に、吾々のと同じやうな方法を應用して効果を收めた治療の報告が存してゐる。

さて偶然な暗示が治療の核心をなしてゐないかといふ疑惑が當然におこつてくる。患者はこの方法によつて病氣から釋放されると期待する。そして有力なる因子は言葉でいふといふことでなくて、この期待に存してゐるのだと。併しさうとは限らない。ヒステリーの非常に複雜な症例をかやうな方法によつて分析し、それぞれの原因を持つた症候を又別箇に除去した、この種の最初の觀察は一千八百八十一年に、卽ち暗示派前期に發してゐて、患者の偶然な自己暗示によつて成就し、觀察家に非常な驚異を與へたものであつた。

「Cessante causa cessat effectus」(原因がなくなれば結果もなくなる)といふ格言と違つて、私達はかういふ觀察から、原因的過程にある何等かの狀態においてずつと長年月、間接、原因的連環の鎖の仲介によつてでなく、覺醒的意識において悲痛なことを思ひ出せばあとあとまでも淚がこぼれると同じに、直接、喚起的原因として作用する。ヒステリー患者は大部分回想にやんで

ゐるのである。（1）

（1） この豫報の本文では、そのものの內容において新しいもの、及びヒステリーに關し同様な意見を代表したメビウスやストリュンペルのやうな他の學者において氣附くものを私達は區別することが出來ない。吾々の理論的及び治療的詳說に非常に近いものを求めるならば、それは時々に發表したベネヂクトの少數の論文であらう。これについては他のところで論する積りである。

二

昔々の忘れ果た事件がかくも强烈な作用力を持つてゐること、その事件の回想は、吾々のすべての回想が消滅するやうには腐朽しないものだといふことは、とにもかくにも奇怪至極なことと思はるれる。この事實は次のやうな考察から少しばかり理解が開ける。

回想が褪せ果てること、若くは回想が無情緒になることは、數多の要素にかかつてゐる。とりわけ重要なことは、感動的な事件に本人が强力に反應したかしないかにかかる。私達は反應といふものの下に、經驗上情緒が發射されると考へる流涕から復讐に至る迄の不隨意乃至隨意の反射

の全系列を知つてゐる。この反應が十分な程度にまでなされるなら、情緒の大部はこのために消失してしまふ。日常目にするこの事實は怒りに狂ふ、泣き潰れる等々の言葉によつて立證されてゐる。反應が抑制される時は、情緒は回想と結合して殘留する。侮辱もせめて言葉でもつて報酬しておけば、默つて勘忍した侮辱よりは思ひ返へしてもむかむかしない。言語もまた精神上及び肉體上の結果におけるこの差別を認めてをり、ぐつと勘忍した苦痛を「Kränkung（クレンクング）」なる實に特色のある言葉でもつて表現してゐる。――侮辱された人間が外傷に對する反應は、たとへば復讐の如く、それが適應反應である場合にのみ、完全な「瀉下」作用を有するのである。併し人間は言葉の中にその行爲に對する代用を發見する。この代用の助を借りて、情緒は殆ど完全に「反撥（アブレアギーレン）」され得るのだ。他の場合においては、話すこととそれ自體が適應反射となる。ある祕密の苦痛に對しての愁歎とか漏洩（懺悔！）。かやうな反應が行爲、言葉、最も容易な場合、流涕によつて果たされない場合では、事件に對する回想は先づ情緒的强調を帶びることになる。

しかしながら「反撥（アブレアギーレン）」だけが必ずしも、心的外傷を受けた健康人における常態なる精神機構が行使する解決の唯一の方法でない。外傷に對する回想は、たとひそれが反撥されなくても、聯想の大きな錯綜の中にはひる。その回想は他の、恐らくはそれと矛盾する體驗と並んで排列し、他

の觀念によつて訂正を受ける。たとへば災害のあとで、危難に對する回想、驚愕の（弱められたる）反復に、それ以後の經過の回想、救助、現在の安心の意識が加へられる。侮辱の回想は實相の整頓、自らの品格の熟考等々によつて訂正されて、その結果正常な人間は、聯想の働きによつて、それに伴ふ情緒を解消さすことに成功する。

ついで印象の全般的消失、回想の褪色が現れる。私達はそれを「忘却」とよんでゐる。就中それは情緒的にもはや作用力のない觀念を腐蝕して行く。

私達の觀察から、ヒステリー現象の機緣をなした回想は、驚くべき清新さにおいて、それの完全なる情緒的强調をもつて、長年月保存されるといふ事實が明瞭になる。併し私達はさらに著明なる、後段で役立つところの事實を述べなくてはならぬ。卽ち患者はこの回想を彼の人生におけるる他の回想と同じやうに處理出來ないといふ事實である。反對に、この體驗は正常なる精神狀態における患者の記憶の中に缺損してゐる、あるひはたかだか概要的に記憶の中に存してゐるに過ぎない。患者を催眠狀態において質問する時にはじめて、この回想は事件當時とそのままのなまなましさでもつて甦つてくる。

吾々のある患者は催眠狀態において半年間もぶつ通しに、幻覺的にありありと、前年の同じ日

に（急性ヒステリーの間に）彼女を興奮せしめたすべてのものを再生したのである。この女患者が氣附いてゐない母親の日記帳によつて、その再生されたものが一部始終正しいことが立證された。又ある患者はある時は催眠狀態において、ある時は偶然な發作において、幻覺的な鮮明さをもつて、十年前に經驗したヒステリー性精神病のすべての出來事を浮べた。彼女はその事件の大部分が再生されるその瞬間までそれを忘却してゐたのであつた。十五年から二十五年までも永續した箇々の病原的に重要な回想は、彼女においては驚くべき完全と感覺力を持つてゐて、その再生において新しい體驗と遜色のない十分な情緒力をもつて作用した。

私達はこれに對する理由として、この回想はさきに論じた腐朽とのすべての關係において、例外的な地位をとつてゐるといふ事實だけを擧げることが出來る。卽ちこの回想は十分に「反撥」されなかつたところの外傷に該當してゐることが敎示出來る。そしてこれを阻止した理由をさらに詳しく硏究するならば、私達は少くとも外傷に對する反應が阻止された場合の條件の二つの系列を發見することが出來る。

私達は第一の部門に、代へ難く見える愛人の喪失の場合のやうに、外傷の性質が反應を排斥したために、若くは患者が忘れようと思つた、患者がこの故に意識的思考から驅逐し、抑制し、抑

歷したところの事物を中心としたために、患者が心的外傷に對して反應しなかつた場合が數へられる。催眠狀態においてヒステリー現象の基調として（聖者、聖尼、禁慾婦人、上流の子供におけるヒステリー性譫妄）發見するものは、丁度かやうな悲痛なる事物事象である。

條件の第二の系列は回想の內容によつてでなしに、患者における適應體驗が結びつくところの精神狀態によつて決定されてゐる。卽ちヒステリー症候の誘因として私達は催眠狀態において、それ自體においては意義重大ではないが、症候が維持されるのは、それがたとへば驚愕のやうな極度に痲痺した情緒狀態において、若くは直接異常なる精神狀態、たとへば覺醒夢の半催眠的朦朧狀態、自己催眠狀態等々において發生したといふ情況に基づいてゐる觀念をも發見する。この點においてそれは事件に對する反應を不可能ならしめたこの狀態の性質である。

二重の條件は勿論結びつく。事實においてしばしば結びつく。それ自體において有力な外傷が極度に痲痺した情緒狀態において、若くは變化した意識狀態において起る場合がこれである。併し心的外傷のために、多數の人間においてその時反應を不可能ならしめる異常なる狀態が惹起されるといふことが起るかも知れぬ。

だが條件の二つの部門に共通な點、反應によつて解決されない心的外傷は又聯想的推敲によつ

ての解決を缺かなくてはならぬといふことである。第一の部門において、それは、悲痛なる體驗を忘れようとし、從つてその體驗を出來る限り聯想から追ひ出さうとする患者の決心であり、第二の部門において、正常なる意識狀態とこの觀念の發生した異常なる意識狀態の間に、自由なる聯想的關係が存在しないがために、この聯想的推敲は成就してゐないのである。この關係をさらに論ずる機會が早速に到來するであらう。

そこで私達はかう言ふことが出來る、卽ち病原的となつた觀念は、反撥による、自由なる聯想狀態における再生による正常なる腐朽がそれらに許されぬがために、かくも鮮明にかくも強い情緒力をもつて維持されてゐるのだと。

三

吾々の經驗に從へば、心的外傷からヒステリー現象が發展する事實に對する基準となる報告を發表した時に、旣に私達はかやうな病原的觀念の發生した意識の異常狀態を語らねばならなかつた。そして有力な心的外傷に對する回想は患者の正常な記憶に存在するのでなくて、催眠狀態に

おかれた患者の記憶に存在してゐるといふ事實を強調しなければならなかつた。私達がかやうな現象を研究すればする程、二重意識（ドブル・コンシヤンス）として知られてゐるクラシックになつた症例において甚だ顯著である意識分裂が、痕跡的ではあるが、どんなヒステリーにも存在してゐること、この分離の傾向、從つて吾々が「擬眠」狀態として總括するところの異常なる意識狀態の現出の傾向はこの神經症の基本現象であることを知る。この見解においては私達はビネーとも兩ジャネーとも一致する。なほ知覺痲痺についての彼等の最も注目すべき所見を私達は經驗してゐない。

この故に、「催眠狀態は人工的ヒステリーである」といふしばしば口にされる公理に加へて、「ヒステリーの土臺と條件は擬眠狀態の存在である」といふ別の公理を並べたいと思ふ。かういふ擬眠狀態はそれぞれ相互に相違點があるが、又相互に一致點があり、その狀態において現出する觀念は非常に熾烈であるが、爾他の意識內容との聯合交通が遮斷されてゐるといふ一點において催眠狀態と合致してゐる。さういふ擬眠狀態は相互に聯絡し合つてゐて、その結果この觀念內容は精神組織のさまざまな高さに達する。これに加へて、私達が催眠術から知る如く、その狀態の性質及びその狀態が爾他の意識過程から遮斷される度合には同じやうに變異があつて、輕度の嗜眠狀態から夢遊狀態に至るまで、完全なる記憶から絶對的なる健忘にわたつてゐるのである。

このやうな擬眠狀態が既に顯在的なる疾患前に存在してゐるならば、その狀態は情緒が病原的回想とそれの肉體的なる歸結現象を植ゑつける土壤を準備する。この態度は素因的なるヒステリーに相當する。併し吾々の觀察から、强力な外傷(外傷性神經症のそれのやうな)、苦心慘憺たる抑壓(たとへば性的情緒の)は、普通なら囚れない筈の人間においても、觀念群の分裂を成就せしめることが出來る。そしてこれこそ心的に獲得したヒステリーの機構であつたのだ。これら二つの形態の兩端の間に一つの系列が存在しなくてならぬ。この系列中にその當人における分裂の容易さと外傷の情緒の大さは反比的に變化する。

素因的なる擬眠狀態がどこに基礎をおいてゐるかについて私達に何等新しいことを述べる必要はない。その狀態においてもよく存在してゐる「白日夢」から發展すると私達は考へる。たとへば婦人の手仕事はかういふ機會を非常に援助する。かやうな狀態を作る「病的聯想」が何故に頑强であり、何故に肉體的過程の上に私達が日頃觀念について見馴れてゐるよりも何倍かの强さで影響を與へるかの疑問は、一般催眠暗示の作用力の問題に合致する。私達の經驗はこの點に關して何等新しいものを惠まない。これに反して私達の經驗は「ヒステリーは精神病である」といふ公理と、ヒステリー患者の中には透徹した頭腦の、意志の極めて强固な、節操の正しい、鋭い批

判眠を具へた人間が存してゐるといふ事實の間の矛盾を解決する。これらの症例において、かやうな性格は人間の覺醒的思惟にとつては正しいものである。吾々すべてが夢においてかくあるやうに、かやうな人は擬眠狀態においては錯亂する。併し吾々の夢精神病は吾々の覺醒狀態に影響を與へないが、擬眠狀態の產物はヒステリー現象として覺醒狀態に突き出て來る。

四

私達がヒステリー性持續症候に對して列擧した殆ど同一の主張をヒステリー發作にも繰返すことが出來る。御承知のやうに、吾々はシャルコーが唱へた「大」ヒステリーの模型的記述を所有してゐる。それによれば完全なる發作は四つの段階を示す。(一)癲癇狀の段階、(二)大運動の段階、(三)熱情態度（アチチユード・パシオネル）の段階(幻覺的段階)、(四)大詰の譫妄の段階。それぞれの段階が短縮したり、延長したり、脫落したり、孤立したりすることから、シャルコーは、完全なる大發作（グラン・アタク）として頻繁に觀察されるヒステリー發作のすべての形態をつなぎ合はしたのである。

私達が試みた說明は第三の段階、卽ち熱情態度（アチチユード・パシオネル）の段階に關聯してゐる。この段階が著明であ

る場合は、ヒステリーの勃發に重要であつた回想の幻覺的再生が存在してゐる。それは κατ' ἐξοχήν とよばれた外傷性ヒステリーの根柢をなす同種の部分外傷の系列への回想である。あるひは最後に發作は特殊なる素因のモメントとの合致によつて外傷にまで高められたさきの事件を連れ戻してくる。

併し一見運動現象だけから成つてゐて、熱情段階（ファーズ・パシオネル）が缺けてゐる發作も存してゐる。全身痙攣、カタレプシー性强直のかやうな發作において、あるひは嗜眠發作（アタク・ド・ソメイユ）において、その發作の最中に患者と交通することに成功するなら、あるひはもつとうまく行つて、催眠狀態で發作を喚發さすことに成功するなら、心的外傷への回想、若くは普通なら幻覺段階に顯著であるところの外傷の系列への回想がこの場合にもまたその根柢をなしてゐることを發見するのである。小さい娘が數年來全身痙攣の發作をやんでゐた。その發作は癲癇性のもののやうに考へることが出來、又さう考へてもよかつたのである。鑑別診斷のためにこの娘に催眠術をかけた。そして彼女は直ちに發作を示した。あなたの眼に只今どんなものが映りますかと私は尋ねた。併し彼女は答へた。犬です。犬がやつて來ます。そして實際この種の最初の發作は野犬に追跡されたあとで現れたことが分かつた。治療の成功は吾々の診斷を確證した。

上役からこつぴどく虐待された結果ヒステリーになつた使用人が發作にやんでゐた。發作が起ると彼は卒倒し、一言も物をいふことなしに、あるひは幻覺を見ることなしにあばれ廻り狂ひ廻つた。催眠狀態にして發作を喚發さした。その時患者は、上役が自分を街上で侮辱しステツキでなぐりつける光景を繰返しいきいきと回想したと語つた。數日後彼は例の發作が新しく起つたといふ訴へをもつて再びやつて來た。そして今度は催眠狀態において、疾患の勃發に眞實關係のある光景をはつきり回想したと言つた、その光景といふのは、その虐待に對して名譽毀損を訴へて彼が勝訴にならなかつた時の法廷の光景であつた等々。

ヒステリー發作中に現出する、あるひは喚起されることの出來る回想は、あらゆる他の點においても、ヒステリー性持續症候の土臺として私達が發見した誘因に相當してゐる。これらと同じに、回想は反撥（アブレアギーレン）によつて、若くは聯想的思考作業によつての解決を阻止された心的外傷に該當してゐる。これらと同じに、回想は全然あるひはそれの根本的なる成分において正常意識の回想力を缺いてゐて、拘束された聯想をもつ催眠的意識狀態の觀念內容に所屬してゐるやうな姿を示してゐる。最後に回想は治療的試練をも許すのである。吾々の觀察からしばしば、催眠狀態においてその回想に反射及び聯想を行はしめる時は、これまで發作を喚發してゐた回想も無能力に

なるといふことを教へられた。

ヒステリー發作の運動現象は一部は回想に伴ふ情緒の一般反應形態（四肢をもぢもぢするやうな、既に乳兒もこれを利用する）として、一部はこの回想の表出運動として解釋出來る。その他の部分は持續症候におけるヒステリー性スチグマタと同じに、この假定から解釋出來ない。

ヒステリーにおいて爾他のものとの聯想的交通を遮斷された、しかも相互の間には交通のある第二の意識の多少高度に組織づけられた痕跡、即ち二次的狀態（コンヂシヨン・スゴンド）を示すところの、擬眠狀態において發生した觀念群が存在してゐるといふ前述の理論を考慮する時は、ヒステリー發作に對して特別な評價が下せるやうになる。だからヒステリー性持續症候は通常は正常なる意識によつて支配されてゐる身體神經力にこの第二の狀態が割り込んだ形であるが、ヒステリー發作はこの二次的狀態の高度な組織から生じたものである。そして最近に現れたものなら、この擬眠意識が全存在を支配するモメントを意味する。從つて急性ヒステリーが現れる。だがそれが回想を持つた回歸發作であるなら、單に同じものの回歸が現れる。シヤルコーは既に、ヒステリー發作は二次的狀態の痕跡でなければならぬといふ意見を表明した。發作中に身體の全神經力に對する支配が擬眠狀態に移行する。既知の經驗が示すやうに、この際正常な意識は全部驅逐されない。その狀態は

發作の運動現象だけは認識することが出來るが、運動現象の心的過程の方は全然認識されない。
重症ヒステリーの定型的な經過は、すべての人が知つてゐるやうに、先づ第一に擬眠狀態において一つの觀念內容が構成され、つぎに十分に發展してから、「急性ヒステリー」の時期に身體の神經力及び患者の存在を支配し、持續症候と發作を作り、ついで殘餘をのこして全部治癒してしまふ。正常な人格が再び支配權を握るなら、擬眠的觀念內容から殘留したものがヒステリー發作の中に再び現れて、再び感應しやすい、外傷に創つきやすい狀態へその人格を時々引き戾す。しばしば一種の平衡狀態が精神群の間に作られて、精神群は同一人格の中で結合する。發作と常態生活は相互に影響することなしに竝立して行く。吾々において回想が現出するのと同じ工合に發作も突然に現れてくる。併しすべての回想は聯想の法則によつて喚起されると同じ工合に、發作もまた喚起されるのだ。發作の喚起はヒステリー發生帶の刺激によつてか、あるひは類似な點において病原的體驗を想起せしむる新しい體驗によつて行はれる。私達は一見非常に相違してゐる二つの條件の間に、根本的な區別が存在してゐないこと、兩者において、知覺過敏の回想が感動されることが敎示出來ることを希望してゐる。他の場合にはこの平衡は非常に不安定であつて、發作は擬眠的意識の殘餘の表出として現れ、しばしば、正常人格が困憊して無能力になつてしま

ふ。かやうな場合に發作はその起原的なる意識を脱ぎすてて、內容のない運動反射として戻つてくるといふ事實を私達は度外視することは出來ない。

ヒステリー個性が發作の中に、持續症候の中に現れるか、若くは兩者の夾雜の中に現れるかを決定するものがいかなる條件であるかをさらに硏究すべき任務が殘されてゐる。

五

私達がここに展開した精神療法がどのやうにして治療的に作用するかを只今はつきり理解することが出來る。吾々の精神療法は起原において反撥されなかつた觀念の作用力を、觀念の監禁されたる情緖を談話をもつて放出せしめることによつて廢棄せしめる。そして觀念を正常なる意識內にひき上げることによつて(輕度なる催眠狀態において)、若くは夢遊狀態において健忘症に對してやるやうに、醫師の暗示をもつて觀念を廢棄せしむることによつて、觀念に聯想的訂正を行はしめるのである。

この操作の利用によつてかち得る治癒的利益を私達は重大視する。勿論私達はそれが素質であ

る限りではヒステリーを治癒せしめることは出來ないし、擬眠狀態の回歸に對してもどうすることも出來ない。又急性ヒステリーの產生期の間には、私達の操作とて、やつとこさで除去した現象が忽ち新しい現象によつておきかへられることを喰ひ止めることも出來ない。併しこの急性期が過ぎ去つて、その期の殘餘がヒステリー性の持續症候及び發作としてなほ進行してゐるならば私達の方法はその殘餘をしばしば根本的であるが故に永久に除去することが出來る。そして今日精神療法家が行ふやうに、直接の暗示的除去の効力はこの點において遙かに優れてゐるやうに思はれる。

ヒステリー現象の精神機構の發見において、シャルコーがはじめてヒステリー性外傷麻痺の說明と實驗的追試をもつて非常に成功的に足を踏み入れた荊棘を、私達がさらに深く切り開いたなら、この進歩をもつて、ヒステリーの內的原因でなしに、ヒステリー症候の機構だけに對して、吾々の知識をうんと發展さしたことを看過することが出來ない。私達はヒステリーの病原にだけ觸れたのだ。そして獲得形態の原因、神經症に對しての偶然的因子の意義を僅かに闡明することが出來たのである。

疾患史

一

エンミー夫人

一千八百八十九年五月一日から私は四十歳あまりのさる夫人を診療することになつた。私はこの夫人の疾患と人格に非常な興味をいだいて、私の時間の大部をさいてその疾患を治すことを私の任務とするやうになつた。夫人はきはめて容易に夢遊狀態に陷るところのヒステリー患者であつた。そしてこれに氣が附いた私は、最初の女患者の治療史に關するブロイエルの報告から知つた、催眠狀態における探究といふあのブロイエル氏法を一つこの夫人にかけてみようと決心した。この治療法を實地に應用するのは私にとつてはこれが最初であつた。私はこの方法を自分のものとする迄には未だ十分な熟練を積んでゐなかつた。そして實際のところ私は症候の分析を完全に行ふことにも、分析を計畫的に行ふことにも、練達してゐなかつたのである。私が每晚行つた最初の三週間にわたる治療における記錄をここに複寫することは、患者の狀態と私の醫者とし

てのやり方を具體的にする上に最も適切なことだと考へてゐる。そして後日の經驗によつて私の理解がもつともつと深められる場合には、脚註や挿註をもつて補筆することにしよう。

一千八百八十九年五月一日。上品な美しい顔附の年よりも若く見える夫人が革の枕をうしろにしてヂワンの上に横たはつてゐた。夫人の顔は緊張した悲しさうな表情を示してゐる。瞼をたれ目を伏せ、額を強くよせ、鼻から脣にかけての皺が深くなつてゐる。夫人はぽつりぽつりと低聲で語り出す。時々痙攣的に口ごもりつひには言葉が吃つて話がとぎれる。その時彼女は兩手を堅く組合はす。そして指は絶え間なしにアテトーゼ樣の痙攣を示す。しばしば顔面、頸の筋肉、殊に右の胸鎖乳樣筋の上にチツク樣の痙攣が波うつて現れる。さらに夫人は私にはとても眞似も出來ない特有な舌打をするために談話が途中で何度もとぎれた。(1)

夫人の語るところは飽く迄も筋道の通つたものであり、それは尋常ならぬ教養と聰明さをはつきり證するものであつた。奇怪なことに、彼女は二三分毎に突然話を切つて、恐怖と嫌忌の表情の下に顔面をゆがめ、曲げて擴げた指の手を私の方に差しのべて、こはばつた震聲で「お靜かにして下さい。物を言つてはなりません。――あたしに觸れてはなりません。」といふ言葉を叫んだ。繰り返へし襲ひくる恐ろしい幻覺が目に映るらしかつた。そして夫人はこの文句をもつて他

人の干渉を防ぐのであつた。ついでこの挿句を突然ぷつつりやめてしまふ。そして今の今までの興奮を續けることなしに、自分の今の振舞を說明したり言譯したりすることなしに、卽ちまるで話を途中で切つたのを自分で氣が附かないやうに、患者は再びさきの談話を續けて行くのであつた。(2)

(1) この舌打は多數のテムポから成つてゐた。獵に詳しい同僚がこの舌打を聞いて、この最後の音はやまどりの舌打にすつかりだと言つた。

(2) この言葉は實は呪文に相當してゐた。その說明は又後段ではつきりする。私はそれに似た呪文を後年あるメランコリー患者で觀察した。この患者は自分に浮ぶ惱ましい思考(自分の夫、自分の母に何か禍が、神罰等が起るとよいがなといふ願望)をかういふ呪文で抑へつけようと試みた。

(3) これはヒステリー性譫妄である。この譫妄は丁度眞正なチックが隨意運動の中へ、それを擾亂することなしに、それと錯綜することなしに挿入されたやうに、正常なる意識狀態と交代するのである。

彼女の境遇について私は次のやうなことを知つた。彼女の家は中部獨逸の出であつて、二代前から露領バルト沿岸州に定住し相當の財產家になつた。家には十四人の子供があつて、彼女はその十三人目の娘である。そのうち四人だけが現在未だ生きてゐる。彼女は嚴格な非常に精力家の

母親の下に注意深くしかも壓制的に教育された。二十三歳の時に彼女は頭のよい腕利の男と結婚した。この人は大工場主として立派な地位にあつたが、彼女よりはずつと年上であつた。夫は短い結婚生活の後心臓痲痺で突然死亡してしまつた。自分の病氣の原因として夫人はこの事件とそれから、神經障害に罹つてゐる虚弱な現在十六歳と十四歳になる二人の娘の教育をあげた。丁度十四年前に夫が死んで以來夫人はいつも大抵は病氣がちであつた。四年前に電氣浴と併せてマッサージ療法をやつて貰つたのに容體は一時的に良くはなかつたが、それ以外自分の健康を元に還へさうとする彼女の努力も一切徒勞であつた。夫人はよく旅行に出た。そして趣味も豐富でいきいきしてゐた。現在はある大都市に近いバルト海岸の別莊に住んでゐる。數箇月前から再び病氣が重くなり、氣分が惡く不眠が續き疼痛になやまされて、アッバチアで治療を受けたがはかばかしく行かず、六週前からギーンにおいてある有名な醫者の診療を受けてゐるのである。

家庭女教師をつけて二人の娘から離れて、私が毎日通つてゐるさるサナトリウムに入院してはといふ私の提案を夫人は一言の反對もなしに快諾した。

五月二日の晩に私は夫人をサナトリウムにたづねた。不意にドアをあけられると、夫人はいつでもはげしく身を縮めるといふことに私は氣が附いた。そこで私は病室に出入する家庭醫と附添

に、病室にはひる時は強くノックをするやう、夫人が内から「おはひりなさい」と言ふまでは決してはひつてはならないやうに命じておいた。それにも拘らず、誰かが病室にはひつてくるといつでも齒を喰ひしばり總身を縮めた。

彼女の主訴は今日は右の下肢における冷感と疼痛に關してゐた。疼痛は腸骨櫛の上方の背中から發してくる。私は溫浴を薦めた。そして夫人は毎日二回全身をマツサージして貰ふことになつた。

夫人はとりわけ催眠術にかかりやすかつた。指を突附けて「おねむりなさい」と叫ぶと、彼女は失神と混亂の表情をもつて寢入つてしまふ。私は安眠、すべての症狀の回復等々を暗示する。彼女は目を瞑つたまま、しかも明かに注意を緊張してそれに傾聽する。その時夫人の顏面は漸次に柔かくなつて、なごやかな表情をとつて來る。この最初の催眠術のあとで私の命じた言葉は記憶にぼんやり殘つてゐた。第二回の催眠術のあとで早くも完全な夢遊狀態（健忘）が現れた。催眠術をかけませうと私は夫人に宣告した。夫人は反抗も示さずにそれを承諾した。彼女は催眠術の經驗はなかつたが、催眠術の書物を讀んだことがあると想像してもよかつた。勿論催眠術に關してどういふ想像を持つてゐたかは私には分からなかつた。（1）

溫浴、二回のマッサージ、催眠暗示の療法を翌日も持續した。安眠がとれ、目に見えて元氣になり、一日の大部分をやすらかな容體で過すことが出來た。子供に會つたり、讀書をしたり、手紙を書くことも別に禁ずる必要もなかつた。

（1） 催眠狀態から醒めるとその瞬間いつでも攝まれたやうに周圍を見廻し、次の瞬間私を凝視し、一寸思案して、寢る前にはづした眼鏡をかける。そして元どほり機嫌よくなる。本年は七週間、翌年は八週間行つた治療中に私達は及ぶ限りすべてのことを語り合ひ、殆ど毎日二回宛催眠術を施したといへ、夫人は催眠術に關して未だ一言も私に質問したり批判したりしなかつた。彼女は覺醒狀態では自分が催眠術にかかつた事實を努めて知らないやうにしてゐるらしかつた。

五月八日朝夫人は一見平氣を裝つて物凄い動物話を私に語つた。丁度卓子の上にのつてゐたフランクフルト新聞で、夫人はある小僧が子供を縛つて、子供の口の中へ鼠をおしこめた、子供は恐ろしさのあまり死んでしまつたといふ記事を讀んだ。K博士が白鼠を一杯箱につめてチフリスに送つたといふ話を彼女にしたことがある。かう話しながら恐ろしいといふ表情がありありと顏一面に現れる。手を痙攣でうち顫はしながら夫人は叫ぶ。――お靜かにして下さい。物を言つてはなりません。あたしに觸れてはなりません。――そんな動物がベットにもぐり込んでゐました

かけの。

なら(恐怖)。まあそれがほどかれた時を想像して下さい。そこに死んだ鼠がをります。ああ齧り

催眠狀態において私はこの動物幻覺を逐つ拂はうときばつた。彼女が寢てゐる間に、私はフランクフルト新聞を手にとつた。實際小僧の惡戲の記事があるが、鼠のことなどまるで書いてなかつた。だから新聞記事を讀んでゐるうちにそんなことを妄想したのである。

その晩私は白鼠に關する朝の話を夫人に話した。夫人はまるで憶えてゐなかつた。非常にびつくりしたやうな顏をして大聲で笑つた。(1)

午後に所謂「頸痛」(2)があつた。併し極く短くてそれは二時間ぐらゐだけであつた。

(1) 覺醒狀態で譫妄がこのやうに突然にはひつてくるのはこの夫人には別にめづらしいことでなかつた。さういふことは私が觀察してゐる間に何度も反復された。談話中にこれまで何度も途方もない返答をするために相手の人が面喰ふと夫人はこぼしてゐた。私達が初めて會つた時に、お年はおいくつですかといふ私の質問に對して、非常に眞面目くさつて「あたしは前世紀の女でございます。」と返答した。一週間後に夫人は私に、丁度その時に譫妄の中で骨董道樂家として旅行中に掘り出した美しい古びた簞笥を頭に浮べたのだと說明した。お年はおいくつですかといふ私の質問は年代な答へる機會を與へたために、前世

紀といふのはこの箪笥に關聯してゐた。

（2） 一種の偏頭痛。

五月八日の晩私は夫人を催眠狀態において話をするやうに命じた。それは大した努力もなしに成功した。彼女は靜かに語り出す。返辭をする前にはきまつたやうに一瞬間考へ込む。彼女の表情は話の內容によつて變化し、私の暗示によつて、話の印象が消えるや否や元の靜かな顏附になる。どういふ譯であなたはさう驚きやすいのかと質問した。それは隨分若い頃の記憶でありますと彼女は返答する。——若い頃と言ふのはいつ頃ですか？——一番最初は五歲の頃でございました。私の兄さん達が殺した動物をよく私になげつけました。さういふ日に私は痙攣を伴つた最初の失神發作に陷りました。隨分厭なことだ。そんな發作があつては大變だ。かう叔母が申しました。それから發作は無くなつてしまひました。次は七歲の頃であります。丁度不意に私の姉が死んで柩の中に收めてあるのを見た時に又發作が起りました。第三回目は八歲の頃で私の兄が白い敷布をかぶつて幽靈だと嚇かした時でございます。それから九歲の頃に私の叔母が死にまして柩の中に收めてあるのを見ました。そして突然叔母の下顎ががくりと落ちました時に發作が起りました。

どういふ譯であなたはさう驚きやすいのかといふ私の質問に對する返答として、夫人が報告した外傷的機緣の系列は明かに彼女の記憶の中にちやんとあつたのである。質問に應じて返答をする迄のそんな短い瞬間に、夫人が自分の子供時代のいろんな年代にわたる誘因をそんなに迅速に集め出すことは出來なかつたであらう。一つ一つの物語を終る每に彼女は全身に痙攣を起してこはい、恐ろしいといふ表情を示した。その恐怖のあとで夫人は口を大きくあけて强く喘いだ。體驗のうちのこはい內容を語る時には、その言葉はとぎれ勝ちになり、まるで喘ぐやうに吐き出された。そのあとで彼女の表情は落ついた。

私の質問に對して、談話を進める間に、その談話に該當する光景がいきいきと天然色のままに自分の眼に浮んでくると夫人は保證した。夫人はこれらの體驗を非常に幾度も記憶に浮べた。そしてつい最近にももう一度考へたことがあつた。さういふ體驗を考へる時はいつでも其當時の光景がまるで現實のやうにいきいきと眼に映るのであつた。私は今や何故に夫人が何度となく動物の光景とか死骸の姿を語るかを解した。私の治療はさういふ姿を拭うてやつて、さういふものが二度と彼女の眼に浮ばないやうにしてやるところに存してゐる。暗示を利用して私は幾度も彼女の眼の上を拭うてやつた。

五月九日の晩。夫人は別に暗示をかけなくても熟睡したが、明方に胃痛が起つた。昨日も庭園で子供達と可なり長い間一緒にゐた時に同じ胃病を持つた。子供の訪問を二時間半ぐらゐに短縮するやうにといふ私の注文を彼女は快諾した。數日前には彼女は子供達をうつちやらかしてゐると悲しんだが、今日は幾分興奮しながら、額に皺をよせ、舌打をし言葉を吃るのを見た。マッサージの間に夫人は子供の先生が自分に歴史地圖を持つて來て吳れたこと、挿畫の中の動物に假裝した印度人の繪を見て非常にびつくりしたことだけを物語つた。「あんなものが生きてゐてごらんなさい。」(恐怖)。

あなたはもう動物に對してはこはがらない筈になつてゐるのに、どうしてこの繪にそんなにびつくりされたのであるかと私は催眠狀態で質問した。夫人は兄の死去(十九歲)の時に見た幻覺を回想した。この回想は暫くお預りしておく。ずつと昔からそんなに吃る癖があるのか、いつ頃からチック(特有な舌打)が現れたのかとさらに尋ねた。(2) 吃言は疾患現象である。そしてチックは五年以來、丁度一日非常に病身な下の娘をベツトに寢かしつけて、ぢつと身動きもしまいと思つた時から現れたのであつた。——娘さんには別に變つたことも起らないと言つて、私はこの回想の持つ意味を和らげるやうに努めた。不安になつた時とかびつくりした時にはいつでも痙

攣が再發しますと夫人は言ふ。――印度人の繪などにこはがつてはならない、むしろ腹の底から笑つて、私にもそんな繪を見せるやうにして欲しいと命令した。覺醒のあとで私の命じた通りをやつた。夫人は本を探し出して、この本を先生はいつか見たことがあるかと尋ね、私に頁をまくつて呉れて、何の恐怖もなしに、平氣な顏で、その印度人のグロテスクな姿に對して腹の底から笑つた。この時ブロイエル博士が家庭醫と一緒に突然はひつて來た。夫人はびつくりして舌打をやつたので、二人は慌てて立ち去つた。家のお醫者がいつでも一緒について來るのが不愉快だから興奮するのだと彼女は說明した。

催眠狀態において私はさらに胃痛を手でさすつて取除いた。そして食後お腹が又痛むだらうと待ち構へても、そんなものは絕對に起らないと言つた。

晚。夫人は初めて晴れ晴れした顏でおしやべりし出した。この氣むづかしい夫人の口からとても期待の出來ないやうな輕口を聞いた。とりわけ氣分がさつぱりした喜びのあまり私の先輩ブロイエル博士の治療を冷かした。夫人は可なり以前からこの治療から逃げようと計畫してゐたのであつたが、ある日訪ねて呉れたブロイエル博士の偶然な言葉からうまい方便が思ひ附く迄その口實が發見出來なかつたのである。この話を聞いて私が驚いたやうな顏をしたために、夫人は不安

に感じて、輕率なことを話したと非常に後悔した。だが私が別に氣にも留めなかつたので一見安心したやうに見えた。——夫人が待ち構けたにも拘らず胃病は起らなかつた。

催眠狀態においてこれ迄にこはいと感じたいろんな體驗を語るやうに命じた。夫人は娘時代に起つたかやうな第二の系列を、さきの子供時代のと同樣に迅速に語り始めた。このやうな光景のすべてが、ありありと、天然色のまま、幾度も自分の眼に映ると斷言した。自分の從姉が瘋癲病院に運ばれて行くのを見た時に(十五歲)、夫人は救助を叫ばうと思つたが聲がつまつてしまつた。そしてこの日は日暮迄口が利けなかつた。夫人は覺醒時の話の間にたびたび瘋癲病院のことを口にするので、私はこの問題を打切つて、狂人に關係を持つてゐる別な事件を質問した。彼女は自分の母が暫くの間瘋癲病院に入院してゐたと語つた。長い間瘋癲病院にゐたといふ奥さんのところに奉公したことのある女中が昔彼女の家で働いてゐた。この女中が病院では患者を椅子に縛りつけて折檻するといふやうな物凄いお話をよく話して聞かした。かう語りながら夫人の兩手はこはさのあまりぶるぶる痙攣する。すべての光景がありありと彼女の目に映る。私は瘋癲病院に對する彼女の觀念を訂正しようときばる。あなたはそんな病院のことを自分には何の關係もないもののやうに平氣で聞き流すことが出來るでせうと保證してやる。そしてこの時夫人の顏はや

すらかになつた。

彼女は恐ろしい回想の物語を語り續けた。自分の母が蛇に觸れて驚きのあまりぶつ倒れ（十五歳の時）、それから四年間生きてゐたこと、十九歳のある日家にはひつた時にしかめた顏のまま母が死んでゐるのを見たことを語つた。かういふ回想を弱めるために當然私の前に大きな困難が横たはつてゐた。長々しい說明のあとで、今度目に浮べる時は、この光景は朦朧として最早力を失つてゐるだらうと保證した。――さらに十九歳の頃に石をのけたはずみにその石の下に一匹のひきがへる（1）がゐて、そのために數時間物が言へなかつたと語つた。

覺醒狀態では何も憶えてゐないといへ、前回の催眠狀態中に見たことを彼女は殘らず憶えてゐることを今回の催眠狀態で私は確めた。

（1）このひきがへるにはある特殊な象徴が關聯してゐなくてはならなかつたが、それを追求しようと試みなかつたのは遺憾である。

五月十日朝。夫人は今日初めて溫浴の代りに糠粃浴をとつた。兩手をショールで包み、不機嫌な、險しい顏附をして、冷却の疼痛を訴へる夫人を私は見た。どうしましたかと私が尋ねた時に小さい浴糟の中に窮屈にはひつてゐたために痛みがするやうになつたと語つた。マッサージの間

に、彼女が丁度昨日ブロイエル博士を裏切つたことをやつぱり氣にしてゐるやうであつた。敬虔な嘘をもつて、私ははじめからそれを知つてゐたと言つて慰めた。同時に彼女の興奮（舌打、顔面痙攣）はをさまつた。このやうにしてマッサージの度毎に早くも私の感化は現れ出した。夫人は平靜になり、頭腦もはつきりとし、催眠狀態にして質問しなくても、その時その時の不機嫌の原因を自分で發見するやうになつた。彼女がマッサージの間に私とかはした談話もまた、外觀だけで考へる程には出鱈目なものでなかつた。それはむしろ回想の可なり完全な再生と、私達の最近の談話以來彼女の受けた影響の新しい印象を藏してゐた。そしてしばしば思ひがけなく、その談話は彼女の方から極力否定するところの病原的回想に辿り着くのであつた。恰も私の操作を我物として、一見强制されない、偶然のやうに導き出された談話を催眠狀態の補足に利用してゐるやうであつた。たとへば今日は自分の家族のことを談話して、いろんな脇道からある從姉の話を語り出した。この從姉は大變な偏屈で、その兩親が一遍で彼女の全部の齒を拔かしてしまつた。夫人はこの話を語りつつ、恐ろしいといふ顏附をして、幾度となく例の呪文（お靜かにして下さい。物を言つてはなりません。あたしに觸れてはなりません。）を繰返した。ついでその表情はやはらかくなり彼女の機嫌は快活になつた。覺醒時の彼女の行動は、覺醒時にはまるで憶えてゐな

いときめてかかつてゐる、彼女が夢遊狀態で持つたところの經驗によつて指導されてゐた。

催眠狀態において私は夫人にあなたはどうしてさう機嫌が惡いのかといふ質問を繰返した。その度毎に彼女は同じ返答をしたが、その順序は轉倒してゐた。一、昨日のおしやべり、二、浴槽に窮屈にはひつてゐたための疼痛。——例の「お靜かにして下さい……」といふ呪文が何の意味かと今日質問した。こはい考へがふと頭に浮ぶと、忽ちすべてが混亂してますますいらいらしてくるために、頭にある今迄の考へが中斷してしまはないかと心配するからだと說明した。「お靜かにして下さい」といふのは、氣分の惡い時に彼女の頭に浮んでくる動物の姿が暴れ廻つて、萬一誰かが自分の前で動くなら、その動物が自分に飛びかかつてくるといふことに關聯してゐた。最後に「あたしに觸れてはなりません」といふ呪文は次の經驗に由來してゐる。彼女の兄が多量のモルヒネを服用したために重症になり、物凄い發作を起した時（十九歲の時）に、突然兄が幾度も彼女を引摑まへた。次にある時知人が彼女の家で突然發狂して彼女の腕を摑まへて離さなかつた（はつきりとは思ひ出せない第三回目の同じやうな經驗）。そして最後に自分の娘が病氣になつた時（二十八歲の時）に、娘は譫妄狀態において自分に堅くしがみついたため殆ど息がつまりさうになつたことがあつた。夫人はこの四つの經驗——年代はそれぞれ非常に懸隔つてゐたにも拘

らず――を一つの命題に結びつけ、まるでおのおのの事件を四場に描出するやうに、非常にすらすらと次から次へと物語つて行つた。このやうに群をなす外傷のすべての報告はなほ「時に」といふ言葉を持つて、各箇の部分外傷は「そして」といふ言葉で相互に結びつけられてゐた。同様な經驗の再發を自分に防禦する目的にこの呪文を唱へるのであると氣附いた私は、この恐怖を暗示によつて除去してやつた。そして夫人はこの呪文をそれから二度と口にしないやうになつた。その晩夫人は非常に快活であつた。庭園で小さい犬に吠えつかれてびつくりしたと笑ひながら話した。併し彼女の顏はその時僅に歪められたに過ぎなかつた。そして胸中に蠢く興奮は、夫人が朝のマツサージの間に自分の話した言葉を私が惡くはとらなかつたかと尋ねた時に、私がそれを否定したあとではじめて鎭まつた。殆ど十四日に近い間歇をおいて今日月經が現れた。私は催眠暗示によつて、彼女の月經を約束し、催眠狀態中に休止期が丁度二十八日になるやうに命令した(1)。

さらに夫人に最近催眠狀態中にあなたが私に語つたことを憶えてゐるかどうかを尋ねた。そしてこの時私は昨晩から二人に殘されてゐる問題を追求しようとした。ところが夫人は訂正的に午前中の催眠狀態のあの「あたしに觸れてはなりません」でもつて話を始めた。そこで私は昨日の

問題に彼女を引き戻した。私は吃音が何に由來してゐるかを尋ねた。そしてあたしは存じてゐません(2)といふ返答を持つた。そこで私は夫人に今日の催眠術の時までにそれを思ひ出すやうに命じておいた。そのためか夫人は今日は何の躊躇もなしに返答したが、非常に興奮して痙攣のために言葉が縺れた。ある日のこと子供達の乘つてゐた馬車の馬が急に駈け出しました時に、そしてある日のこと私は暴風雨の最中に子供達と一緒に馬車で森の中を駈けてゐました時に、丁度馬のすぐ前方の木に雷が落ちまして、馬が大變驚きました。そしてその瞬間「おまへはぢつとしてゐなくちやいけない。泣かうものなら馬は一層びつくりして、御者は馬を鎭めることは出來ない。」と考へたのでございます。その時から吃音が現れました。かう物語るうちにも彼女は激しく興奮した。私はさらに夫人から、吃音は二つのうちはじめの機會の直後に現れたが間もなく消失して、第二の機會からずつと現れて治らないことを聞いた。私はこの光景のなまなましい回想を拭つて、夫人にもう一度目に浮べるやうに命じた。彼女は浮べようと試みるやうに見えた。だがその時夫人は興奮を示さなかつた。この時以來夫人は痙攣的な吃音なしに催眠狀態中に話が出來るやうになつた(3)。

(1) それは又命令どほり行つた。

（2）「あたしは存じてゐません」といふ返答は正しいものであるかも知れぬが、同時に理由を語る不快を表示するやうであつた。私は後年他の患者で、催眠狀態中、問題とする事件を意識から無理やりに出さうときばればきばる程、患者はますます考へがまとまらないといふ經驗を持つた。

（3）只今知るやうに、この女患者の示すチック樣の舌打と痙攣狀吃音は、同種の機會と相似の機構に由來する二つの症候である。私は「催眠療法の一例。附ヒステリー性反對意志」（催眠術雜誌。第一卷。）といふ小論文でこの機構に注意を拂つたが、只今の場合でも同じ機構で說明したい。

夫人は私に說明したがつてゐるやうに思へたから、私はさらに進んで、あなたの頭になまなましい回想を殘す程に强くあなたを驚かしたのは、あなたの生涯のどういふ事件であつたかと質問した。夫人はさういふ事件を蒐集して返答した。母が死んでから一年して彼女が親しい佛蘭西女のところにゐた時に、字書を持つてくるやうに家の娘と一緒に隣室にやらされた。その時寢臺から人間が立ち上つたのを見た。その人間の顏は丁度今一緒に部屋にゐたあの人とすつくり同じやうに見えた。彼女はまるで釘附にされたやうにぎよつとした。あとでそれが天井からぶら下げた人形であることを聞いた。私はこの幽靈は幻覺だと說明して、そんなものを氣にしないやうに命じた。そして彼女の顏はおだやかになつた。

彼女が病氣の兄を看病してゐた時に、そして兄がモルヒネのために激烈な發作を起した時に、その時兄は彼女を恐れさし彼女を引つ摑んだ。この事件は今朝既に話したことに私は氣が附いて、このやうに引つ摑まへられたことがいつももつとあつたかと試みに聞いてみた。返答をする迄に夫人が今度はしばらく考へ込んだのは私にとつては悦ばしい不意打であつた。そして最後に「子供ですか」と曖昧な質問をした。彼女は他の二つの機會を全然考へることが出來なかつた。卽ち私の禁止、回想の消失は作用したのだ。さらにかう語る。彼女が兄を看病してゐた時に、兄をカトリック敎に改信さすためにやつて來た叔母が、不意に衝立の上から靑ざめた顏をぬつと出した。――これによつて、私は不意打に對する彼女の間斷なき恐怖の根元を突留めたことに氣が附いた。そして、そんなことはいつかもつと起らなかつたかと尋ねた。――彼女が實家にゐた頃に一人の友達があつた。この友達はよくこつそりと部屋の中へ拔足差足で忍び込んで來て突然わつと驚かした。彼女が母の死後病氣になつて溫泉場で養生してゐた時に、一人の狂人が部屋を間違へて夜中に何度も彼女の部屋にはひつて來、はてはベツトのところへ來ることがあつた。そして最後にアツバチアからここへの旅行の途上知らない男が四回も不意に列車の寢臺のドアをあけた。その度毎に彼女はぎよつとした。夫人はボーイを呼ぶ程までにそれをこはがつたのであつ

た。

私はかういふ回想をすつくり拭つて、彼女を呼び醒まし、今晩はよく寢られませうと保證した。私は催眠狀態中に彼女にこれに相當する暗示を與へることをやめにした。今日は一日まるで讀書いたしませんでした、あたしはまるで幸福な夢に浸つてゐるやうでございます。——彼女はいつもなら內心の不安のために絕えずいらいらして何かしなければならなかつたのに。——かういふ言葉は彼女の一般狀態の恢復を保證して吳れる。

五月十一日朝。上の娘の月經困難を診察して貰ふため、今日は婦人科のN博士に會ふことになつてゐる。私はエンミー夫人が可なりいらいらしてゐるのを見た。だが夫人は今日は以前にくらべてはそのいらだたしさをあまりからだに示さなかつた。「あたしは何だかこはくなります。そのこはさは死ぬに違ひないといふ恐怖でございます。」と時々叫んだ。「ではあなたは何をこはがるのですか。N先生をこはがるのですか。」夫人は何をこはがるのか知らなかつたが、兎に角ただ譯もなくこはがつた。N君がやつてくる迄に行つた催眠狀態で、夫人は昨日マツサージ中に自分に無禮と思へる言葉で私を侮辱したのが氣になると告白した。彼女は新しいのはどんなものでも、新しい醫者に對しても恐怖を抱いた。私は彼女を宥めた。夫人はN博士の前で何度も痙攣を持つ

たが、態度は別に變つたところもなく、舌打や吃音も示さなかつた。N博士が立ち去つてから、博士の訪問からの興奮の何程かの餘燼を除去するために、私は再び彼女を催眠狀態においた。夫人は自らの行動に自分ながら非常に滿足して彼の治療に大きな希望を繫いだ。そして私は新しいものを決してこはがる必要はない、新しいものには又よいものも含まれてゐるからといふことをこの實例で彼女に示さうと試みた(1)。

（1） 結果から知るやうに、かやうな學ぶべきすべての暗示はエンミー夫人では失敗に終つた。

その晩は夫人は非常に快活になつて、催眠術をかける前に談話において、いろんな心配を自ら取り拂つた。催眠狀態にして私はあなたの生涯のうちにどういふ事件が最も強く作用したか、回想としてあなたに最も頻繁に浮んでくるのはどういふ事件であるかと質問した。――夫の死。――私は夫人にこの事件を出來る限り詳細に語らしめた。彼女はそれを譬へやうもない程深い感動を持つて物語つたが、その時舌打も吃音も現れなかつた。

二人が一番愛してゐたリヰエラのある地に滯在して一日夫婦連れ立つて橋の上を歩いてゐた。その時夫は心臟痲痺を起して突然ぶつ倒れて、數分のうちに死んだやうになつた。併し再び蘇生して起き上つた。それから間もなく、夫人が産褥で赤ん坊と一緒に寢てゐた時に、彼女の枕邊の

小さいテーブルで朝食をとりつつ新聞を讀んでゐた夫が不意に立ち上り、夫人をぢつと見詰め、數步あゆんで床にばつたり倒れた。彼女はベツトから跳ね起きた。呼ばれた醫者はいろいろ手當を試みた。彼女は別室からそれを聽いてゐた。併し夫は二度と立たなかつた。夫人はさらに話を續ける。そして生後二三週しかたたない赤ん坊が病氣になつてそれからずつと六箇月も病人であつたこと、その間に彼女も亦高熱のため病床にあつたこと。――それから年代的にこの子供に對する自分の苦勞を展開する。人がある人のことを語る時に人はその人にあきあきしてしまつてゐるといふやうに、いらいらした表情でもつて彼女はその苦勞を急速に吐き出して行く。長い間この子供は世間普通の子供とは非常に違つてゐた。絕えず泣き續けて一睡もしなかつた。左の下肢に痲痺が現れてゐた。その治療はどんなお醫者にかかつても殆ど絕望であつた。四歲の時に子供は幻覺を持つやうになり、やつとして步き出しやつとして物が言へるやうになつた。このために長い間この子供は低能だと極められてゐた。醫者は腦髓と脊髓の炎症で、それ以外別に病氣はないと診斷した。私はここで彼女の話を遮つて、この子供は今日では丈夫になつて誰にもひけをとらない立派な娘さんだと指摘した。そしてかやうな悲しいことのすべてを再び目に浮べるやうに夫人に命じた。このやうにして私はなまなましい囘想を消散さしたばかりでなく、彼女の記憶か

ら全回想を、恰もそんな記憶がはじめから頭の中になかつたかのやうに見事に斷ち切つてしまつた。夫人が絶えず心を惱ましてゐる不幸の到來、夫人が物語の最中に訴へた全身の疼痛、そんなものは全部なくなつてしまふと彼女に約束した。その數日後さういふものは彼女の話にのぼらなくなつた(1)。

私の驚いたことに彼女は私のこの暗示の直後L公爵のことを語り始めた。その人が瘋癲病院から脫走したことは當日自ら話したものであるが、瘋癲病院では頭部に氷のやうに冷い水を浴びせて治療するとか、ある裝置の中へ押し込んでその患者がおとなしくなる迄ぐるぐる廻轉さすといふやうな新しい恐怖觀念が湧き上つて來た。丁度三日前に彼女が瘋癲病院の恐怖をはじめて訴へた時に、病院では患者を椅子に縛りつけるといふ最初の物語のところで私は彼女の話をおしとどめた。そんなことではまるで効果がないこと、どこ迄も辛抱して話はどんな點でも最後まで聞いてやらなくてならぬことに氣が附いた。今度はこの通りやつたあとで私は彼女の新しい恐怖の光景をもとり拂ひ、瘋癲病院の中の恐ろしい設備の話を彼女に聞かせたあの愚な女中より私の話の方がずつと信用がおけると說得した。かう追加して話してゐる時にやつぱり時々吃音のあることに氣が附いて私は夫人にどもりの由來を尋ねた。――一言の返辭もなかつた。――あなたは御存

じないのですか？――はい。――では、どういふ譯で？――どういふ譯ですつて？　私は中上げたくございませんもの。（この言葉は烈しく腹立たしげに吐き出された。）私はこの表現の中に私の暗示の効果を見たと信じたが、夫人は催眠狀態から醒めたいらしい態度を示したので私はそれを聽き容れてやつた。（2）

（1）今度は私の力の及ぶ限りのことをやつた。それから一年半もたたないうちに、可なり健康になつたエンミー夫人に會つた時に、自分の半生の非常な重要なある瞬間のことを朧氣ながらにしか記憶してゐないのは不思議であると私に訴へた。夫人はこの中に自分の記憶薄弱の證據を認めたが、この特殊な健忘を夫人に説明することを私は警戒しなければならなかつた。この點における治療の卓效は、いつもなら大抵は簡單な報告で滿足する私が、この回想は徹底的に詳細に（本文に述べたよりはもつともつと詳細に）語らしめたところに由來してゐる。

（2）私はこの小さい光景をやつと翌日に理解した。覺醒狀態にあつても人工的催眠狀態にあつても、強制されることはどんなことでも反抗する彼女の我儘な性質から、私が彼女の物語がもう濟んだものだと思つて、私の最後の暗示をもつて彼女の物語をおしとどめるのに非常な立腹を示した。夫人はその催眠狀態的意識において私の分析を批判的に監視してゐることについて私は別に澤山の證據を持つてゐる。先日

あの癲癇病院の恐怖の時に彼女の話を妨げたと同じに、今日も私が彼女の物語をこちらから妨げ、しかも露骨にこれを行はずに、この追加を一見出し拔けに、思考の聯絡を洩すことなしに提出したことについて夫人は私を非難したく思つたらしい。その翌日私の失策に對する非難の言葉の理由がはつきりした。

五月十二日。夫人は私の期待に反して殆ど睡眠が出來なかつた。彼女は非常に不安さうであつたが、恐怖に對するいつものやうな肉體上の徵候は示さなかつた。夫人はこの原因を話さうと思はない。たゞこはい夢を見て、今でも絕えず同じものが目に映ると言ふばかりであつた。「あんなものが生きてゐましたなら、まあ何て恐ろしいことでございませう。」マツサージの間に質問によつてそのあるものを解決した。それから快活になつて、バルト海岸における彼女の未亡人生活の交際や彼女が隣の町からお客にいつも招待する名士の話などをした。

催眠狀態。夫人は恐ろしい夢を見た。椅子の脚や安樂椅子の凭がみんな蛇になつた。禿鷹の嘴を持つた怪物が彼女に跳びかかつて、彼女の全身を喰ひまくつた。又別の野獸が彼女に跳びついた。それから彼女は直ちに別の動物譫妄に移つて行く。併しその譫妄は「それは本當でございました。」(夢ではない)といふ附けたしを特色としてゐた。彼女が(昔のある日のこと)毛絲の絲毬を拾ひ上げようと思つた時に、それが鼠であつて逃げ去つてしまつた。散歩の道で大きなひき

がへるが突然彼女に跳びついた。私の一般禁止が何の効果も奏しなかつたこと、私は彼女のかやうな恐怖印象を一つ一つ除去して行かねばならぬことに氣が附いた(1)。何等かの方法をもつて何故あなたは胃痛を持つたか、この胃痛が何に由來するかを夫人に尋ねることが出來るだらう。彼女の胃痛はいつも動物幻覺の發作を伴つてゐると私は信じた。あたしはそれを知りませんといふのが彼女の可なりぶつきら棒な返答であつた。明日までにそれを思ひ出しておいて下さいと私は彼女に注文する。先生はそのことの由來、理由などをあたしにもう尋ねなくてもよい、あたしが先生に言はなくてはならぬことをあたしに語らしめなくてはならぬ。夫人は非常に不機嫌にかう言ひ放つた。私はそれに同意した。そして夫人は何の前置もなしに語り續ける。人々が夫を運び出した時に、あたしは夫が死んだといふことをどうしても信ずることが出來なかつた。(夫人は再び夫のことを話し出した。そして今の夫人の不機嫌の理由として、この物語のうちの、ためらひながら未だ隱してゐる殘餘にやんでゐることを認めた。)それから夫人は三年間その子供を憎んだ。赤ん坊のために産褥などについてゐなかつたら、自分は甲斐甲斐しく夫の看病が出來たであらうのにと夫人はいつも口癖のやうに言つた。事ごとに彼女の結婚に反對して、次には彼女がそんなに幸福に暮してゐるのを嫉ましく思つた親戚の人達は、彼女が手づから夫に毒を盛つて殺

したために、彼女は取調べを受けるだらうといふあらぬ噂を立てた。ある惡者が手下をつかはして夫人を脅喝せしめ、夫人に關する中傷記事を地方新聞に投書して、その切拔を夫人のところに送つて來たりした。それ以來彼女は人を警戒するやうになり、他國者に對して憎惡を抱くやうになつた。彼女の物語に結びつけた私の慰撫の言葉を聞いて夫人は大變安心したと言明した。

（1）私はこの實例において動物幻覺の意味を追求し、年若い神經病患者の多數のものに固有なやうに、動物恐怖において最初の恐怖が何であつたかといふことと、どういふ象徴であるかといふことを區別しようとするのをつい怠つたのは遺憾である。

五月十三日。夫人は再び胃痛のためによく寢られなかつた。昨夜は夕飯もとらなかつた。右の腕にも疼痛を訴へた。併し彼女の氣分はよかつた。彼女は快活に、昨日以來私を特別鄭重にもてなして呉れた。夫人は私に自分に重要と思はれるいろんなことについて私の批判を求めた。そして私がたとへばマッサージに入用なタオルを探さねばならなかつた時に、夫人は今迄にないやうな興奮を示した。舌打と顔面のチックが頻繁に現れた。

催眠狀態。昨晩突然床が墜落して、このために目の前の小さい動物がお化のやうな大きなものになつた。これは彼女がDにおける芝居で初めて見たもので、この時は舞臺にお化のやうに大き

い蜥蜴が登場した。夫人は昨日はこの回想に非常に惱まされた。（1）
舌打が再發するやうになつたのは、昨日下腹に疼痛が起つて、呻けば疼痛が嗅附けられると一所懸命にそれを隱したのに由來してゐる。夫人は舌打の本當の原因をまるで知らなかつた。私がいつか胃痛の由來を發見せよといふ命題を出したことを彼女も思ひ出した。併し夫人はその由來が分らないので私の助力を求めた。彼女は大きな興奮のあとで食事を無理やりにとつたことがなかつたかと私は考へた。それは命中した。夫の死亡後長い間食慾が衰へて義理か厄介かのやうに食事をとつた。そしてその當時本當に胃痛が起つた。――私は一撫二撫して胃痛を除去した。それから夫人は突然思ひ出したやうに自分に非常に感動を與へた事柄を語り始めた。「あたしはあの子供を眞から愛してゐないことをいつかお話ししましたね。でも人樣はあたしの態度からはさうとは分らないと申します。これも申上げておかなくてはなりません。あたしは盡すべきことはどんなことでもいたしました。あたしが長女の方ばかり可愛がつたことは隨分惡かつたと今日でも氣にいたします。」

（1）大きな蜥蜴の視覺的回想は、彼女があの芝居の間に感じたに相違ない大きな情緒との年代的合致によつてのみこの意味に解せられる。併し私は前にも告白したやうに、この患者の治療にあたつては、し

ばしば表面的な報告だけに滿足して、この患者にあつても突込んだ研究の鋒先を向けなかつた。――この例はヒステリー性視大症を思ひ起さしめる。エンミー夫人は高度の近視でおまけに亂視であつて、視覺認識の不鮮明のために、頻繁に幻覺が惹起されるのであつた。

五月十四日。夫人は氣分がすぐれて快活であつた。八時半まで寢込んだ。手の撓骨部の疼痛、頭痛、顏面痛を少しばかり訴へた。催眠術をかける前の談話はますます意義を持つてくる。今日はこはいことはまるで口に出さなかつた。彼女は右の下肢の疼痛と無感覺を訴へて、丁度一千八百七十一年に下腹部の炎症に罹つて、ついでそれは殆ど全治して、丁度兄を看病してゐる頃に疼痛が再發して、時々右の足の痲痺を伴つたと語つた。

催眠狀態において、あなたは人に雜つて歩くことが現在では出來るかどうか、やつぱり恐怖が勝つてゐるかどうかと尋ねた。誰かが自分のうしろ、或ひは自分の側に立つてゐる時はやつぱり不安を感じると言つて、これと關聯して、突然に人が飛び出して非常に驚かされた經驗を語つた。夫人が一日リューゲンで娘達と一緒に散歩してゐる時に、叢林の中から怪しい男が二人突然現れてからかつた。アバツチアで夫人が夕方散歩してゐる時に、石陰から突然乞食が現れて彼女の足下に跪いた。この男は別に危險性のない狂人であつたり相違ない。さらに夫人は隣近所に家のな

い自分の邸宅へ夜半に强盜が忍び込んで非常にびつくりしたことがあると語つた。人間に對するこの恐怖は夫の死後彼女を襲つたあの脅喝に發してゐることは容易に氣が附くことである。（1）

（1） その當時私はヒステリーにおけるどんな症候にも無暗に精神的由來を假定しようとしてゐた。今日では私は禁慾生活をしてゐるこの夫人における恐怖傾向を神經症的（恐怖神經症）に說明するやうになつてゐる。

晩。一見快活に夫人は私の顏を見るなり「私は恐ろしさのあまり死にさうでございます。ああ私は先生に物を言ふことも出來ません。」と叫んだ。私は結局ブロイエル博士が彼女を見舞つたこと、彼女は博士の姿を見て縮み上つたことを知つた。ブロイエル博士がそれに氣が附いた時に、夫人は今度だけだと彼に請合つた。夫人が以前のこはがりのこの殘餘を未だ洩らさなければならなかつたとは。私の興味においては、それは衷心同情に堪へ得ぬものであつた。夫人は自らにどれほど愛想をつかしてゐるか、とるにも足らぬつまらぬことに——マッサージ用のタオルがちやんとおいてない時、彼女が寢てゐる間に私が讀むことになつてゐる新聞が目につくところにちやんとおいてない時——どれほど容易に氣を腐らすかに氣が

つく機會をこの一日に持つたのである。煩はしい回想の最初の最も上層のものが除去されたあとで、道德的に潔癖な、努めて卑下しようとする彼女の性格が頭を出した。私はそれを覺醒狀態でも催眠狀態でも豫言出來た。それは古い諺「minima non curat praetor」(最小のものは最大のものを心にかけない)の書きかへである。卽ち善と惡との間に分化しない小さいものの大群が存してゐる。何人もさういふものに對しては非難することがない。神の指と惡魔の誘惑をその遭遇する最も小さい體驗の中にも思ひ出すところの、どんな小さい瞬間においても、どんな小さい距離においても、世界を自らの人格と無關係に想像することの出來ないところのあの中世紀の禁慾的な僧侶と同じ程に夫人はこの信條を守るのだと私は信ずる。

催眠狀態において夫人はこはい光景に對していろんな追加を話した(たとへばアバツチアにおいて血のついた首が波のまにまに漂つてゐるといふ光景)。覺醒時に話したあの敎を私は夫人に對してもう一度繰返し言つた。

五月十五日。夫人は九時半まで寢込んだが、明方に苦しくなつた。そして私が訪ねた時はチツク、舌打、幾分かの吃音があつた。「私は恐ろしさのために死にさうでございます。」どういふ譯かと尋ねた時に、夫人は娘達の預けてある寄宿舍は四階建でエレベーターで昇降することになつ

てゐると話した。夫人は昨日娘達が降りる時はエレベーターを利用するやうに希望した。そして今日はエレベーターといふものは本當に安心出來ないものだといふ理由で自らの希望を咎めた。寄宿舍の持主自らもさう云つたのである。羅馬でエレベーターの墜落のため慘死したスユ……伯爵夫人の話を御存じか。私はあの寄宿舍も知つてゐる。又そのエレベーターが寄宿舍の持主の私有財産であることも知つてゐる。このエレベーターをわざわざ廣告で自慢するこの男が、自分だけはこのエレベーターを利用することを警戒してゐたといふことはどうも私は信じられなかつた。恐怖に染められた回想錯覺がそこにあると考へて、夫人に私の意見を打開けた。そして私は何の苦心もなしに、彼女自らが自分の恐怖の馬鹿らしさを笑ふやうにしむけることに成功した。成功したといつて、これが彼女の恐怖の眞因だとは信ずることが出來なかつた。そこで私は彼女の催眠的意識に對して質問の鋒を向けようと決心した。數日間休止して今日再び行つたマツサージの間に、夫人はまばらに連絡したとびとびの物語を話した。だがその物語は本當にあつたことかも知れぬ。例へば穴藏で見附けたひきがへるとか、自分の白痴の子供を奇妙なやりかたで養育する變人の母親とか、メランコリーのために瘋癲病院に幽閉されてゐるさる婦人とかに關する物語であつた。そして憂鬱が彼女を支配する時は、回想として何が彼女の腦裏を掠めて行くかを敎

へて呉れた。夫人がこの物語を言ひ終るや急に非常に快活になつて、自分の邸宅における日常生活や獨逸や北獨逸の名士達との交際について語つた。そしてこのやうに派手な交際振をこのやうにいらいらした神經持の夫人の觀念に結びつけることは私には本當に困難であつた。

そこで催眠狀態にして私はどういふ譯であなたは今朝はそんなにいらいらしてゐるのかと尋ねた。そしてエレベーターに對する不安の代りに、月經が來潮してこのためまたぞろマッサージを休まねばならぬことを心配してゐるといふ報告に接した。(1)

私はさらに彼女をして下肢の疼痛の由來を語らしめた。その發端は昨日のと全く同じである。ついで悲痛な身を削るやうな體驗の盛衰の長い系列が展開される。丁度その體驗當時に彼女は下肢に疼痛を持つて、その體驗の作用を受けてその度每に疼痛が激烈になり、遂には兩下肢の痲痺が現れ知覺が消失してしまつた。腕の疼痛も同じである。それは看病の間に頸痛と同時に始まつたのである。私は「頸痛」に關して次のことだけを聞く。頸痛は昔から存在してゐる不機嫌ないらいらした特有な狀態と關係を切つて、今度は四肢の强直、刺すやうな冷感、會話不能、全身虛脫を伴ふところの、頸部を氷で摑まへられるやうな狀態中に現れた。その狀態は六時間から十二時間も續いた。回想としてのこの症候複合を剝ぎとらうとする私の試みは失敗した。あなたは諸

妄狀態を看病してゐた兄さんの頸を一度は掴まへたことがあるかといふ私からの大切な質問は否定された。夫人はこの發作の由來を憶えてゐなかつた。（2）

晩。夫人は非常に快活になつてすばらしいユーモアを連發した。昨日私に語つたやうな、エレベーターのことは一言も口に出さなかつた。エレベーターといふことは降下するといふ口實だけに利用されなかつたらしい。澤山の質問、それには病的なものはまるでなかつた。夫人は顔面、拇指側に沿つた手、下肢に非常に強い疼痛を持つた。長い間ぢつと坐つてゐるとか、ある一點をぢつと見詰めるとかしてゐる時に、强直と顔面疼痛を感じる。重い物を持上げると腕に疼痛が發してくる。右の下肢の檢査によつて、上腿の知覺は可なり正常であり、下腿と足には高度の知覺麻痺があり、骨盤部と腰部には輕度の知覺麻痺があることが分かつた。

催眠狀態においてわたしは未だ時々恐怖觀念に襲はれると述べた。例へば子供達に何か變事が起つてゐないだらうかとか、自分は病氣にならないだらうとか、あるひは長生きは出來ないだらうかとか、只今丁度新婚旅行にある兄が何か災害に遭つてゐないだらうとか、自分の兄弟姉妹はみんな結婚後間もなくして連合を亡くしたから、兄の花嫁も死んではゐまいだらうとかいふ恐怖觀念であつた。夫人からこれ以外の杞憂は誘き出せなかつた。あなたは何の理由もないのに勝手

に心配するのだと私は夫人を叱責した。夫人は「先生がさう仰しやいますから」あたしはもう心配しますまいと約束した。私はさちに疼痛、下肢等々に對して暗示をかけた。

（1）　詳細なことは次の如きである。夫人が朝眼を覺ました時に、何となく不安な氣持であつた。そしてこの氣持を一掃するために、丁度この時浮んだ次の不安な觀念に救助を求めた。子供達の寄宿する家のエレベーターに關する談話は前日の午後に行はれたのである。いつも心配勝ちのこの母親は家庭教師に、右側卵巢と右の下肢の疼痛のためにしつかり歩行することの出來ぬ上の娘は下へ降る時にエレベーターを利用するかどうかと尋ねた。この時一つの回想錯覺が彼女にこのエレベーターの觀念に彼女の意識してゐる恐怖を結びつけることを許した。夫人はその意識において彼女の恐怖の眞の原因を知つてゐなかつた。だが私が催眠狀態において夫人にそれを質問した時にはじめて何の躊躇もなしにその原因が報告なされたのである。これはベルンハイム及びその他の人が、催眠狀態中に與へた命令を覺醒後實行する人で研究した同じ事象であつた。たとへばベルンハイム（暗示。獨譯、第三一頁。）は患者に覺醒後兩手の拇指を口にくはへよと暗示をかけた。患者は催眠狀態から醒めてそのとほり實行した。そして前日癲癇狀發作の時に舌を咬んで以來舌の尖がちくちくすると言譯した。ある娘が暗示の命令どほりに自分には全く未知のある裁判官に殺害を加へようとした。捕縛されて殺害の理由を訊問されたために、娘は自分に加へられた復讐に價するある侮辱の物語を發明した。意識してゐる精神現象と他の意識を因果關係に連結する欲求が存在

してゐるやうである。眞の誘因が意識の認識に觸れないところに、人は自らが信ずる他の連結を、たとへそれが間違ひであらうとも、何の躊躇もなしに試みる。意識內容の現存する分裂がかやうなる「間違つた連結」に最大の援助を與へなくてはならぬことは明白である。

私は只今述べたやうな間違つた連結の實例にもう暫く觸れてみたいと思ふ。といふのはそれは一つの點よりもつと多數の點において、典型的と名附けられるからである。第一にこの女患者の態度は典型的である。この女患者は治療の經過中に催眠術的闡明をもつてかやうなる間違つた連結を解決し、さやうなる連絡から生ずる作用を廢棄する機會を私に何度も與へて吳れたのである。私はこの種の一例を詳しくお話しない。その理由はその一例が只今問題としてゐる心理學的事實を最も鮮明に照し出して吳れるからである。私はエンミー夫人にいつもの微溫湯浴の代りに私がうんとせいせいすると約束した冷半身浴をとることを提案した。夫人は醫者の指圖には無條件に服從するのであるのに、この指圖にはいつでも不平面をしてしぶしぶ從ふのであつた。夫人に施した醫者の治療が今迄に殆ど效果のなかつたことは既に述べた。冷水浴をやれといふ私の提案は大して嚴命的に下したのでないので、彼女は自分の躊躇を私に吐き出すまでの勇氣を發見しなかつた。「冷水浴をとります時はいつでも私は一日中憂鬱になります。でも先生がやれと仰しやいます故又やることにいたします。先生の仰しやいますことを私が一向實行しないなどとお考へになつては困ります。」私は見掛けだけ私の提案をひつこめたが、次回の催眠狀態において、あなたは今自分で

冷水浴だけを自らに提案するがよい、あなたは思案してゐるやうだが、思ひきつてやつぱり試みようと欲してゐると夫人に暗示した。私の暗示どほりになつた。夫人は冷半身浴を試みる觀念を丁度その翌日に取り上げて、私がさきに彼女に陳述したすべての論證を使つて私の贊成を求めようと試みた。そして私はあまり熱心な顏もせずに贊成してやつた。ところが半身浴をやつた一日は夫人は本當にすつくり鬱ぎこんでしまつた。今日はどうしたのですか？——私は前からちやんと知つてゐました。冷水浴をやりますといつもさうなんでございます。——御自分が勝手にやられたのではありませんか。冷水浴はあなたには駄目だといふことを知りましたね。前の微溫湯浴に戻すことにしませう。——それから催眠狀態において私は尋ねた。あなたがすつくり鬱ぎこんだのはやつぱり冷水浴のためですか？——いいえ。冷水浴とはまるで關係がございません。私は今朝新聞でセント・ドミンゴーで革命が勃發したといふ記事を讀みました。その地で動亂が起りますれば、いつでも白人は襲擊されます。セント・ドミンゴーには昔から私達に大變心配をかけてをりまする兄が居住してゐます。そして只今兄がどうなつてゐるかが氣がかりでございます。かういふ返答であつた。私達の間の要件はこれですつくり片附いた。夫人は翌朝まるで當然であるかのやうに冷半身浴をとつた。そして不機嫌の原因をこの冷水浴に連絡することなしに數週間もそれを持續した。

この實例は醫者の命ずる治療に對する他の多數の神經病患者の態度にとつても定型的であると讀者は進んで私を認めて吳れるであらう。セント・ドミンゴー、あるひはどつかの土地の動亂がある日にある症候

を惹起さすのか。患者はいつもこの症候を醫者から受けた最近の影響から引出すことになつてゐる。かやうな間違つた連結の惹起を要求する二つの條件のうち、一つの條件、即ち疑惑がいつも存在してゐるやうに見える。他の條件即ち意識分裂は、大抵の神經病者が自分の疾患の眞の原因（若くば臨時の原因）に一部は全然無知であることによつて、一部は、患者がその干與を心から回想しようとせず、それを自らが當然受くるべき罰とするために、故意に無知であらうとすることによつて代償される。

ヒステリーを除いた神經病者に著しい無知若くは故意の不注意の心的條件は、間違つた連結の發生を、意識から因果關係のための材料を奪ひ去る意識分裂の存在よりはるかに都合よくさすと思惟することが出來るだらう。この分裂のみが稀には純粋なものである。大抵は意識下の觀念錯綜が普通の意識に聳え、これがかやうなる攪亂への機縁を與へる。普通それは錯綜に結台した全身感覺、即ち不安と悲哀の情緒である。これはさきの實例におけるやうに意識的に感覺され、一種の「聯想への强迫」によつて意識に存する觀念錯綜との連結がこのために形成されなくてはならぬ。（私が神經學中央雜誌、一千八百九十四年、第十號及び第十一號に報告した「强迫觀念の機構」を參照。さらに「强迫觀念とホビー」神經學雜誌、一千八百九十五年、第二號をも參照して欲しい。）

聯想へのかやうなる强迫の力について私は最近他の領域において觀察を通して確證することが出來た。私はいつも使用してゐたベットを數週間堅いベットと取換へねばならなかつた。この堅いベットで寢ると

私は澤山のいきいきした夢を見、普通の睡眠の深さに達することが出來ないやうであつた。覺醒後の十五分間は夜中に見た夢を全部憶えてゐて、その夢をノートにつけ、その夢を解釋しやうと苦心した。ところがかういふ夢は全部二つの要素に還元出來た。即ち第一は私が晝間一寸頭に浮べただけの。一寸觸れて解決をつけてゐないところの觀念の推敲への督促に、第二は同一の意識狀態に存する事物を相互に連結する强制に還元出來た。夢にある無意味と矛盾撞着はこの第二要素の自由なる支配に還元出來た。

一つの體驗に屬する情緖とその體驗の內容はいつもきまつて最初の意識から離れた關係において現れ得ることを私は別の女患者、チェチリー夫人で見たのである。このチェチリー夫人とは私はこの書物で述べる患者よりもつと昵懇な間柄であつた。私はこの夫人についてヒステリー現象の、私達がこの研究で主張するやうな精神機構に關して最も豐富なる最も確實なる證據を蒐集した。併し殘念にも私個人の立場から、私と云ふ人間が時々顏を出してくると考へられるこの疾患史を詳細に報告することが躊躇される。チェチリー夫人は最近特有なヒステリー狀態にあつた。この狀態は前から知られてゐるかどうか分からないが、兎に角散在的に存してゐないのは確かである。かういふヒステリー狀態を「ヒステリー性償却精神病」と名附けることが出來る。——患者は無數の心的外傷を體驗してゐた。そして非常に多樣なる現象を伴つた慢性ヒステリーで長い年月を過したのである。かやうな狀態の原因は彼女にも他人にも分からなかつた。彼女のすばらしく正確な記憶も最も著明なる間隙を示してゐる。あたしの生涯はきれぎれになつて

ゐると夫人自ら歎くのである。ある日のこと古い回想が突然新しい感覺のあらゆる新鮮さをもつて如實に浮び上つて來た。そしてこの時から殆ど三年にわたつて彼女はその生涯のすべての外傷——長い間忘れてゐたと信じてゐるそして本當に回想に浮ばない——に煩悶の莫大なる消費と彼女が前に持つたすべての症候の再演をもつて新しく遭遇したのである。この「古い負債の償却」は三十三年の時日を要し、彼女のそれぞれの症狀からしばしば非常に幅輳した決定因子を認識せしめた。彼女が丁度惱んでゐる回想を催眠狀態において、情緒とそれの肉體的表現に必要な一切の費用をもつて語り出さしめる機會をある人が與へることによつてのみ、彼女を恢復に導くことが出來た。そして彼女が羞しさを感ずる人の面前で彼女が話をしなければならないために、私がそこにあるのを阻止された時に、彼女はこの人には全く冷靜にその物語を語り、あとで催眠狀態において、彼女が物語に本當に伴はしめようとするあらゆる慟哭、絕望のあらゆる表現を私にさらけ出すといふことが數度おこつた。催眠狀態におけるかやうな瀉下のあとで彼女は數時間全く快活に現在的になつた。間もなく次の順序の回想が湧き上つた。併しこの回想はそれに屬する情緒の方を數時間前に先發させた。この情緒が現在でなしに彼女が最近に罹つた狀態に屬してゐると感附かずに、彼女は神經過敏に、あるひは不安げに、あるひは絕望的になつた。それからこの移行時におきまりのやうに間違つた連結を作つた。彼女はこの連結に催眠狀態まで頑强に固着してゐた。たとへばある日私に會ふなり彼女は「あたしは墮落した人間でございませんか、あたしが昨日先生にああ申しましたのは墮落

の徵候でございませんか。」といふ質問を浴せた。彼女が前日言つたことはこの呪詛を何とかして正しとするために私は實際適當な人間でなかつた。彼女は暫し議論を鬪はしたあとで非常に快活に見えたが、次回の催眠狀態で、十二年前に彼女が自らを非常に譴責したことがあつたといふ一つの回想が浮び上つた。もつとも現在においてはこの譴責にもはや拘泥してゐなかつた。

（2） あとで考へ直してみると、この「頸强直」は器質的に條件づけられた、偏頭痛と類似の狀態であつたかも知れぬと言はなくてはならぬ。實地にかやうな狀態に澤山お目にかかる。さういふ狀態は記載されてゐないが、偏頭痛の昔流の發作と著明に一致してゐて、後者の定義を擴大して疼痛の限極な二次的に取扱ひたくなつてくる程である。神經病の女患者の大抵は偏頭痛發作にヒステリー發作（痙攣と譫妄）を結びつけるのを常とすることは周知である。私がエンミー夫人において頸强直を見る時は大抵おきまりのやうに譫妄の發作が伴つてゐた。

腕と下肢の疼痛に關しては、偶然な一致によつての、決定力の大して興味はないが、それだけ月並な種類の一例がここに存してゐることを私は考へる。彼女は興奮と看病のあの時の間に疲勞のためにかやうな疼痛をいつもより强く感じた。そして起原的にはあの體驗と單に偶然に關聯してゐるこの疼痛はその時彼女の回想において聯想錯綜の肉體的象徵として反復された。私はあとでこの過程を立證する實例をもつと澤山擧げることが出來るであらう。その疼痛は起原にあつては僂麻質斯性のものであつたらしい。卽ち非

常に濫用される言葉に一定の意味を與へるために、專ら筋肉に存する、筋肉の著しい壓痛と硬度變化によつて立證出來る、兩肢の長時間の安靜若くは長時間の固着の後、換言すれば朝に最も激烈になる、無理やりの運動の練習において良くなり、マッサージによつて消失するといふやうな疼痛であつた。すべての人によくあるこの筋肉性疼痛は神經病者においては大きな意義を持つてくる。彼等はこの疼痛を筋肉を指壓で檢査する習慣を持たない醫者の援助を受けて神經性のものだときめて、甚だ澤山あるヒステリー性の神經痛、所謂坐骨神經痛等々の材料になる。この疾患と痛風性素因との關係をここでは極く簡略に論及しておく。私の患者の母親と二人の姉は非常に强い痛風（あるひは慢性僂痲質斯）をやんでゐた。彼女が當時訴へる疼痛の一部は現在的の性質のものでもよかつた。私はそれを知らない。私は當時筋肉のこの狀態を判定する上には未だ十分な熟練を積んでゐなかつた。

五月十六日。夫人はぐつすり眠つたが、やつぱり顏面、腕、下肢に疼痛を訴へた。氣分は非常に快活であつた。催眠術にはまるでかからなかつた。知覺痲痺のある下肢に感應電氣筆をあててやつた。

晩。私が部屋にはひつてくるのを見て夫人はぎよつとした。——誰だと思つたら先生でございましたか。私は本當にびつくりいたしましたわ。——この時恐怖のすべての徵候、吃音、チック

が現れた。私はまづ第一に覺醒狀態において一體どうしたかと言ふことを語らしめた。この時夫人は指を曲げ兩手をさしのべて驚愕を巧みに描出した。——庭園で一匹の大きな鼠が突然自分の手の上を掠めて消えてしまつた。鼠は間斷なくあちらこちらと掠めて行く(影繪の幻覺か?)。木の上に本當の鼠が坐つてゐる。——曲馬場で馬が足搔いてゐるのが聞えませんか。——その側で一人の紳士が呻いてゐます。手術後の疼痛のためだと私は信じます。——私はリューゲンにをります。そこで私は一つのストーヴを持つてゐましたわ。——その腦裏に交錯して溢れ出ようとする思考の下に、現在を發見しようとする努力において、夫人は錯亂狀態になつた。現在の事物、例へば娘さんはそこにゐましたかと尋ねても夫人はまるで答へる術を知らなかつた。

私は催眠狀態にしてこの狀態の縺れを解かうと試みた。

催眠狀態。あなたは何をこはがつたのですか?——夫人はこはいといふあらゆる表情をもつて鼠の話を繰返した。彼女が階段を步いてゐる時に身の毛もよだつやうな氣味惡い動物がそこにゐて突然姿を消した。それは幻覺だと說明し、鼠の恐怖は、飮酒家にのみ現れるのだと敎へてやつた。(夫人は飮酒家を非常に嫌つてゐた。)私は夫人にハツトー法王の話をして聽かせた。夫人もその話は知つてゐてこはさうな顏で傾聽してゐた。——あなたはどうして曲馬場などを考へたの

ですか？　――馬が馬小屋で足掻いてたづなに絡んで、そのために負傷しかけるのが耳元ではっきり聞える。その時はいつでもヨハンが飛び出して馬をほどいてやるのである。――私は馬小屋の近所と隣人の呻きといふことを彼女に反駁した。――自分が現在どこにゐるかを彼女は知つてゐるが、先刻は自分はリユーゲンにゐるものだと信じてゐた。――彼女はこの回想にどうして達したのか。――彼等は庭園においてある場所は大變暑いことを話し合つてゐた。そしてその時ふとリユーゲンの日陰のない臺地が頭に浮んだ。――では夫人はリユーゲン滯在に對してどんな悲しい回想を持つてゐるのか。――夫人はその回想を並べたてる。彼女はその地で腕と下肢に激烈な疼痛を持つた。夫人は幾度となく霧の中をついて遠足して、濃霧のために道を失つた。二度ばかり散歩の道で牛に追ひかけられた。――今日はどうしてこんな聯想を浮べたのか。――ええどうしてと？　彼女は二時間も三時間もかかつて非常に澤山の手紙を書いた。そのために頭がぼんやりなつてしまつた。――卽ち疲勞のためにこの譫妄の發作が惹起されたのだと考へることが出來る。それの內容は、庭園における日陰のない場所といふやうな餘韻によつて決定されてゐる。――私が夫人にいつも敎へてゐるすべての助言を繰返し述べて、彼女が寢入るのを見て立ち去つた。

五月十七日。夫人はうんと熟睡した。今日とつた糠粃浴の中で彼女は何度も叫びをあげた。といふのは糠が小さい蟲に見えたからである。私は附添女からこの話を聞いた。夫人はこのことを話すまいとした。彼女は無暗にはしやいでゐたが、「ウー」といふ叫び、恐怖を示す澁面によつて、幾度となくその快活さはさつと曇らされ、吃音も前日よりは激しく現れた。本當の水蛭の上を歩いてゐる夢を夜中に見たと夫人は語つた。その前の夜に恐ろしい夢を見た。澤山の死人に裝束をとりつけて、棺の中へ收めてやらねばならなかつたが、棺に蓋をする氣になれなかつた。（これは明かに自分の夫に關する回想である。）さらに自分の生涯に澤山の動物椿事があつたことを夫人は語る。たとへば化粧箱に入れてあつた蝙蝠の恐ろしい椿事。その時彼女は裸のままで部屋から飛び出した。彼女のこの恐怖を治す積りで兄が蝙蝠の形の美しい留針を贈つたが、彼女はそれをさす氣になれなかつた。

催眠狀態において。ある日のこと夫人は美しい針山の贈物を貰つた。翌朝それを使はうと思つて出したのに、針山から小さい蟲が這ひ出して來た。それは針山に詰めた糠がすつかり乾燥し切つてゐなかつたためである。蟲に對する彼女の恐怖はこれに由來してゐる。（幻覺か？恐らく幻覺ではなくて事實であらう。）私はもつと動物の話があるかと尋ねた。夫人がある日夫と一緒にべ

テルスブルグ公園を散策してゐる時に、壕ばたまで一面ひきがへるで道がうづまつてゐた。このために二人は道をひき返へさねばならなかつた。夫人はある期間こはさのために誰にも手を差し出すことが出來ないことがあつた。といふのは、しばしばさうであつたやうに、人の手が恐ろしい動物に變ずるからである。私は彼女の動物恐怖を逐拂つてやらうと思つた。そこで私は動物を一つ一つ數へあげて、彼女がこはがるかどうかを尋ねた。夫人はある動物では「いいえ」と返答し、ある動物では「私は別にこはがらなくてもよいのでございます」(1)と答へるのであつた。私はどういふ譯であなたは、昨日も今日もそんなに痙攣をしたりどもつたりするのですかと尋ねた。夫人がこはがる時はいつでもさうであるのである。(2)——昨日は何故にあんなにこはがつたのか。——庭園にゐる時にこれ迄抑へてゐたいろんなことが彼女の頭に浮んだ。とりわけ、治療が濟んだあとで、彼女にあるものが堆積するのをどうして阻むことが出來ようか。——私は夫人に既に覺醒狀態で申してゐた、なだめるための次の三つの理由を繰返した。第一に彼女は全般に健康になつて抵抗力がついて來た。第二に彼女は自分の側にゐる人の誰に對しても物が話せる習慣がついて來た。第三に彼女はこれ迄氣になつた澤山のことを今後は何でもないものに考へることが出來るであらう。——彼女は私の遲くやつてくることに一向感謝しなかつたこと、私が夫

人の最近の再發のためすづくり根敗けしてゐるだらうと彼女が心配した事が夫人にさらに氣になつたのである。庭園において家庭醫が一人の紳士に手術を受ける勇氣があるかと尋ねたことが胸に響いて非常にこはくなつた。夫人はその側に腰をかけてゐて、今日はこの氣毒な男の方の最後の晩となるのだと、心のうちに考へずにはをられなかつた。この最後の報告と共に不機嫌は消え去つたやうに見えた。（3）

晩に夫人は非常に快活で滿足さうであつた。催眠術はまるで何の效果も與へなかつた。私は筋痛の治療と右の下肢の知覺の囘復に一所懸命になつた。それは催眠狀態で非常にたやすく成功した。感覺は現れたが覺醒後一部が再び消失した。私が去るにあたつて、いつもなら雨天の前にきまつて現れる頸强直が長い間一向現れないのに夫人は驚歎の聲を放つた。

五月十八日。夫人は今夜は數年來久し振りにぐつすり熟睡したが、入浴以來頸部の冷却、顏面手、足の攣縮と疼痛を訴へた。彼女の顏面は緊張し、彼女の兩手は痙攣狀態にあつた。催眠狀態は「頸强直」といふこの狀態の心的內容を全然語つて吳れなかつた。私はついで覺醒狀態においてマツサージによつてこの狀態を良くした。（4）

（1）良い方法とは言へなかつたが、兎に角私は遂行してみた。この方法では結局十分な成功を收める

ことが出來なかつた。

（２）初期の二つの外傷に溯ることが出來ても吃音と舌打は根本的に除去されなかつた。勿論この時から二つの症候は著明な減弱を示したが。患者自らがこの結果の不全を說明して吳れた。彼女はびつくりする拍子に、いつでも舌打と吃音が發する習慣になつてゐた。そしてこの症候は專ら初期外傷のみに關聯せずに、この初期外傷に關聯をもつ、私が拭ひとることを怠つてゐた回想の長い連鎖に關係してゐた。これは一番よく頻發する症例であり、瀉下法による治療力の優雅と完全をいつでも侵害するところのものであつた。

（３）新しいヒステリー性譫妄の催眠術的解決において、患者の報告は年代の順序を顚倒してゐることを私はここで初めて紹介する。この事實は後年何度となく確證したものである。たとへば最初に最近に起つた大して重要でない印象との聯想を報告し、最後になつてはじめて初期の恐らく原因的に重要な印象を語つた。

（４）長い間頸强直がなかつたといふ夫人の昨夜の驚歎は、その時丁度準備されてゐる、無意識において氣附かれてゐる、將に來らうとする狀態の豫感であつた。豫感のかやうな注目すべき形態はさきに述べたチエチリー夫人においてもある點よくあるものであつた。彼女が健康の優れてゐる時に「もう隨分長い間私は夜中に巫女をこはがらなくなりました。」とか「眼の痛みが隨分長い間出ませんのは何んて嬉しいこ

とでございませう。」とか私に申す時にはいつでも、明日の夜は附添女は定めし巫女に對する非常な恐怖にひどくへこたれるとか、明日は氣にかけてゐる例の眼痛が現れるだらうとか極めることが出來たのである。それはいつでも無意識に既に準備的に形成されつつあるものの先驅であつた。そして豫感のない(「公式」意識(シヤルコーの命名))は突然聯想として浮び出る觀念を、迅速に確實に、虚僞を處罰する滿足の表現にまで推敲した。チエチリー夫人は非常に聰明な女で、ヒステリー症候の理解についての非常な進歩を私はこの夫人に負つてゐる。このチュチリー夫人はかやうな出來事は叱聲と呼出の有名な迷信への機緣を與へることに私の注意をひいて吳れた。人は幸福を自慢してはならぬ。他方人は壁に惡魔も描いてはならぬ。さうでなければ惡魔はやつてくる。實際不幸が既に待伏せてゐる時に初めて人は幸福を自慢する。そして人は自慢の形態で豫感を捉へるのである。何となれば回想の內容はその內容に屬する感覺より早くに現れるために、卽ち意識において喜ばしき對照が存してゐるからである。

*　*　*

患者の容體、私が治療に捧げた努力、治療の効果を一目瞭然とするために、最初の三週間の日記から前述の如き拔萃をするだけで十分であらうと私は希望してゐる。私はこれからこの疾患史を完備することにする。

最後に記載したヒステリー性譫妄はエンミー夫人の容體における最後の重大な障害であつた。私は獨立して症候とそれの據つて來る理由を研究したのでなく、あるものが現れるまで或ひは夫人が一つのこはがつてゐる思考を私に告白するまでぢつと待ち設けたために、催眠術はある時は無効になつた。大概の場合彼女の思考に常に現存してゐる助言を彼女に與へるために私はそれを利用し、それによつて家庭において最近同一狀態に陷らないやうに彼女を警戒してやらねばならなかつた。當時私は暗示に關するベルンハイムの書物に完全に囚はれてゐた。私が今日期待するより遙かに大きな影響を期待してゐた私の患者は短期間に非常に快方に赴いて夫の死去以來これほど健康な氣持を感じたことはないと保證するほどであつた。七週間の治療をもつて一先夫人をバルト海の鄕里に歸還せしめることになつた。

私でなしにブロイエルに博士が凡そ七箇月後に夫人から便りを貰つた。彼女の健康は數箇月間大變すぐれてゐたが、最近のある精神感動のためにまた惡くなつたと言つてよこした。ギーンの最初の滯在中に母親と競爭のやうに頸强直と輕度のヒステリー狀態にあつた、特に子宮後屈のために歩行困難にあつた上の娘が私の勸告によつて、私達の信賴深い婦人科醫N博士の治療を受けた。博士はマツサージによつて後屈の位置を正しそのために數箇間疼痛がなくなつてゐた。娘が

家に歸つてから、母は隣の大學町の婦人科醫に再び診療を受けさした。この醫者は娘に局處療法と全身療法を一緒に行はしめたが、却つて重い神經病を發せしむるに至つた。明かにこの中に當時十七歳になる娘の病的素因が早くも姿を見せてゐた。その素因はそれから一年後に性格變化として現れたのである。服從と疑惑の、例によつての混亂をもつて、兎に角娘を醫者に一任した母は、この治療の結果が却つていけなかつたために非常に立腹して、私達二人、即ちN博士と私が子供の病氣に責任があるといふ、私が一寸想像出來ないやうな結論を作つたのである。といふのは、私達は娘の重い病氣を夫人には輕いやうに瞞したからである。夫人はいはば意思行爲によつてのやうに折角の私の治療作用を破棄して、私が治療してやつた元の狀態に間もなく還つたのである。夫人が一任したあの隣の大學町の有名な醫者と夫人が交通してゐるブロイエル博士は私達二人には何も責任はないのだと彼女に說得しようときばつたが、當時私に對して抱いてゐたこの反感はこの說得のあとあとまでもヒステリー性殘餘として彼女に遺された。そして夫人は私の治療をもう二度と受ける氣がないと明言した。それからある大家の勸告によつて北獨逸のさる療養所に入院した。そして私はブロイエルの依賴を受けてその療養所の主治醫に催眠療法のどういふものが夫人に効果を與へるかを尋ねた。

夫人をほかの醫者に委任したといふことは非常な失敗であつた。夫人ははじめつからその醫者と啀み合つたやうである。醫者が命ずることは何でもかでも反抗して、そのため困憊の極に達し衰弱がひどくなり、睡眠と食慾を失つた。丁度療養所に見舞に來た女友達が見るに見兼ねて夫人を鄕里に連れて歸り、自宅で養生せしめてやつと健康に赴いたのである。それから間もなく、私がギーンで初めて會つてから丁度一年目に、夫人は再びギーンにやつて來て、再び私の診療を受けることになつた。

手紙で想像してゐたよりは、夫人はずつと元氣であつた。夫人は活潑でまるで物に怖ぢけなかつた。私が昨年與へてやつたいろんなものは未だ保存されてゐた。彼女の主訴は頻發する頭腦の混亂である。彼女の言葉を借れば「頭の中の嵐」である。なほ夫人は不眠に惱んでゐる。時には數時間も泣かなくてはならなかつた。一日のある時刻（五時）にはきまつて悲しくなつた。五時といふのは夫人が丁度冬に療養所に入院してゐる娘を訪問するときめてゐた時刻であつた。夫人は大變にどもり大變に舌打ちし、まるで激昂するやうに何度となく兩手をすり合はし、澤山動物が見えますかと尋ねた時に、夫人は「ああ。お靜かにして下さい。」と答へるばかりであつた。

夫人を催眠術にかけようとする最初の試みにおいて、彼女は拳をかためて叫んだ。「アンチピ

リンの注射などして欲しかありません。そんな注射をするぐらゐなら、痛みがある方がよろしうございます。R先生は嫌ひです。あのお方は私に反感を抱いてをられます。」催眠狀態の回想において彼女は瘋癲病院に監禁されてゐることを私は認めた。そして私が夫人を現在の狀態に戻してやつた時に彼女は安心したのであつた。

丁度治療の開始にあたつて、有益な經驗を持つた。私はいつ頃から吃音が再發したのかと尋ねた。そして彼女は（催眠狀態において）ためらひながら、それは丁度冬にDにおいて遭遇した驚愕以來だと答へた。夫人の泊つたホテルの給仕人が彼女の部屋に潛伏してゐた。彼女は暗がりの中にあるものを外套だと思つて拾ひあげた。その時一人の男がむくむくと起き上つた。私は彼女からこの回想を拭ひとつた。そして實際この時以來催眠狀態においても覺醒狀態においても吃音は殆ど見られなくなつた。結果をここで試驗するやうに何が私を誘つたかを私は知つてゐない。晩に再び見舞つた時に、私は一見さらぬ體で、あなたがねむりについたのを見て私がこの部屋から出る時に、誰も忍び込まないやうに戸を閉めるためには、一體私はどうしておいたならよいのかと質問した。私が驚いたのに、夫人は極度に狼狽して齒をがちがちいはし兩手をもみ始めた。夫人がDにおいてこの種の激しい驚愕を持つたことを示したが、その話を進んで語らうとはしな

かつた。夫人が午前中に催眠狀態で語つた、そして私がちやんと拭ひ去つてしまつたと思つてゐた同じ物語を彼女がさしてゐるのに氣が附いた。次の催眠狀態において夫人ははじめて詳細に如實に物語つた。夫人は晩に興奮のあまり廊下をあちらこちら步いた。ふと附添の女のゐる部屋の戶があいてゐるのを見た。そして腰をかける積りでその部屋にはひらうとした。附添の女は夫人がはひらうとするのを見て遮つたが、夫人はそんなことに頓着せずに部屋の中にはひつた。その時壁に男の姿とおぼしい黑いものを見たのである。明かにそれはこの小さい冒險のエロチツクな要素であつた。この要素が彼女に不忠實な敍述をなさしめるやうにしたのである。しかしながら催眠狀態において徹底的に話して貰はねば治療の效果はまるでないといふことを知つた。私は語る話が大して役に立たない時はその話を不徹底ときめてしまふ習慣であつた。そして夫人が私に告白の本質的な部分を隱してゐるかどうかを患者の表情において見拔くことを漸次に學んで來たのである。

私が今回夫人について行つた硏究は、彼女が娘の治療中及びあの療養所における自らの入院中に受けたところの不快な印象の催眠術的解消に存してゐた。催眠狀態においてひきがへると綴るやうに强制した醫者に對して彼女は內心激しい怒を感じてゐた。そして彼女にこの言葉を決して

要求しないといふ誓約を私に無理やりに結ばしめた。この時私は一つの暗示的の冗談を自らに許した。それは私がこの女患者で犯したところの催眠術のたつた一つの殆ど無害に近い濫用であつた。＊＊＊谷の逗留は彼女には遠い遠い過去のものとなつて、そのために名前すら思ひ出すことが出來ない、そして彼女がその名前を口に出さうとする時にはいつでも……山、……谷、……林の間に迷ひこむであらうと保證してやつた。これはうまく命中した。そしてこの名前における不正確は、私がブロイエル博士の注意を受けて記憶錯誤へのこの強迫から彼女を釋放するまで觀察すべきであつた唯一の言語抑制であつた。

この體驗の殘餘にくらべてはるかに長く、私は彼女が「頭の中の嵐」と稱する狀態と鬪はねばならなかつた。私がはじめてかやうな狀態にある夫人を見た時に、彼女は顏をゆがめ、總身を絕えず不安にびくつかし、雙手を繰返し繰返し額にあててヂワンに腰かけてゐた。その時夫人は自分の名前であり又上の娘の名前である「エンミー」といふ名前を、まるで焦れるやうにまるで途方に暮れたやうに呼んだのである。催眠狀態において夫人はこの狀態が丁度娘の治療の間に感ずるのを常とした絕望の多くの發作の反復であると報告した。そのあとで夫人は數日間、口實を見附けることとなしに、治療の惡結果をどうすれば訂正出來るかと考へこんだ。ついで夫人が自分の

頭は混亂してゐると感じた時に、自分の頭を再び明瞭にさすために、娘の名前を大聲で呼ぶ習慣になつてゐた。といふのは、娘の容體が夫人に新しい義務を負はし、神經質が再び自分を征服してゐると感じたその時に夫人はこの子供に關する一切のことは混亂の埒外にあらねばならぬが、その他の一切のものは自分の頭の中を狂ひまはらねばならぬときめてゐた。

數週間後にこの回想もまた克服されて、エンミー夫人は私が數度觀察するまでにはもうすつくり健康に復してゐた。夫人の滯在の最後にあたつて、私がこれから詳しく述べようとするある事件が起つた。といふのは、このエピソードは患者の性格とその症狀の發生樣式を鮮明にしたからである。

ある日のこと丁度晝飯の最中に私は夫人を見舞つた。彼女はこの時びつくりして何か新聞紙に包んだものを庭先に投げた。丁度そこにゐた小使の子供達がそれを拾つた。私の質問に對して夫人はそれが(乾いた)プデングであること、毎日同じやうに投げることにしてゐると告白した。かう聞いて私はふと食事の殘り物に目がとまつた。そして皿の中に夫人が食べられるよりもうんと澤山の食物が殘つてゐるのを發見した。あなたはどうしてあまり食べないのですかといふ私の言葉に對して、自分は大食しない習慣である、大食は自分のからだには有害である、小食であつた

ところの死んだ父と自分は同じ性質であると答へた。あなたはどういふものを飲むかと私が尋ねた時に、自分は粘つた液體、牛乳、珈琲、ココア等だけをとる、清水や炭酸水をたびたび飲むと胃を毀すと答へた。これは明白に一つの神經症的選擇の極印を帶びてゐる。私は檢尿を行つた。そして尿は非常に濃厚で尿酸鹽を澤山含んでゐた。

そこで私は夫人が澤山飲料水をとる方がからだによいと判定し、又食餌の量も多くにしようと考へた。夫人は決して目に立つ程に瘦せてゐなかつたが、ある程度の肥胖療法をやる方がよいやうに思はれた。次回に夫人を見舞つた時にアルカリ性の飲料をすすめプデングのいつもの使用を禁じた。その時夫人は可なりの興奮を示した。「先生が希望されますから、私はさうすることにいたします。でも前以て一言申上げておきます。それは却つて惡い結果になりませう。と申しますのは、それは私の體質に合ひませんもの。私の父もさうでございました。」催眠狀態において、どういふ譯であなたはさう小食でちつとも飲料水をとることが出來ないのかといふ質問に對して、「私は存じません。」と可なりぶつきら棒な返答をした。その翌日附添の女がエンミー夫人は一人前の食事を全部平げておまけに炭酸水をコップに一杯飲んだことを私に知らして吳れた。私は夫人が寢ころんだまま、非常に不機嫌な表情で非常に鬱ぎ込んでゐるのを見た。彼女は激しい胃痛

を訴へた。「私は先生にちやんと申上げておきました。私達が折角長い間骨を折つて得た結果は全部再びなくなりました。私はすつくり胃を毀してしまひました。澤山食物をとつたり氷を飲んだりいたしますと、いつもかうなのでございます。幾分よくなります迄には、五日から八日も又絶食しなければなりません。」私は夫人にわざわざ絶食しなくてもよい、こんなことぐらゐで胃を毀すやうなことは絶對にあり得ない、あなたの胃痛は單に飲食の時に懐く恐怖から發するのだと保證してやつた。明かにこの説明は夫人に可なりの印象を與へた。といふのは、それから間もなく私が彼女を眠りこまさうと思つた時に催眠術ははじめて失敗した。そして夫人が私に投げつける怒つたやうな眼差の中に、夫人が私に對して非常な反抗心を持つてゐること、事態は非常に險惡であることを見てとつた。私は催眠術を中止して、彼女の胃痛は單に彼女の恐怖から發してゐるといふ見解に服せしめるために、彼女に二十四時間の猶豫期間を與へると宣告した。この期間が過ぎてから私は夫人に胃といふものは一杯の炭酸水と控目がちな食事で八日間も損ねるものだとあなたはやつぱり考へてゐるかと尋ねるだらう。そして夫人が萬一さう考へてゐると肯定する時は、私は夫人に旅立つやうに賴むであらう。この小さい場面は私達のいつもの非常に親密な關係と全く鋭いコントラストを作つた。

私は二十四時間の後にすつくり萎れこんだ夫人に會つた。あなたは胃痛の由來についてどういふ考へを持つてゐるかといふ私の質問に對して、夫人は嘘つくことも出來ずに、「胃痛は私の恐怖から發してゐると信じます。でも先生がさう仰しやいます故。」と返答した。ついで夫人に催眠術をかけて新しく「どういふ譯であなたは澤山飯べないのですか。」と尋ねた。

その返答は即座に出た。そして例によつて回想からの年代的に排列された系列の陳述であつた。「私がまだ子供でありました頃、お食事の時に惡戯からたびたびお肉を食べようとしませんでした。さういふ時は母はいつでも大變嚴格でございました。そして私はその懲罰としまして二時間あとでお皿に殘した肉をどうしても食べてしまはねばなりませんでした。肉はすつくり冷たくなつて脂身は堅くなつてゐました(惡心)。……今でも眼の前にフオークが浮びます。……そのフオークの先が少し曲つてをりました。食卓につきます時はいつでも眼の前に冷えた肉と脂身が映ります。それからずつと後年兄と一緒に住んでゐました頃、私の兄は軍人で厭な病氣に罹つてゐました——その病氣が傳染性のものであることを私は存じてゐました。そして萬一食器を間違へて兄のフオークとナイフで食べないだらうかと非常に心配いたしました(恐怖)。でもやつぱり兄と一緒に食事をしてゐましたので、誰も兄が病人であることに氣が附きませんでした。それか

ら間もなく丁度肺病を患つてゐたもう一人の兄の看病をしてゐました頃に、私達は兄のベットの前で食事をするのでございました。痰壺がいつでもちやんと卓子の上においてありました。中が見えるのでございます（恐怖）……そして兄は卓子の向側からぷつと痰壺に痰を吐きこむ習慣でした。その時私はいつでも惡心が催しました。」惡心を與へたこの器具を私は勿論すつくり除去してやつて、ついでどういふ譯で水を飲むことが出來ないのだと質問した。夫人が丁度十七歳の頃に、家族をあげてミユンヘンで數箇月を過した。その頃不良な飲料水を飲んだため家中のものが胃加答兒になつた。ほかの人は醫者の藥で病氣は直ぐに治つたが、彼女の方は一向治らなかつた。炭酸水を飲むやうに薦められたがまるで効目がなかつた。お醫者がどうして炭酸水などを飲むやうに言ふのかと彼女はその時考へた。炭酸水など確かに何の役にも立たないだらう。その時以來清水や鑛泉に對するこの不堪症は頻々として現れた。

この催眠的研究の治療力は卽刻にきいて永續的であつた。夫人は八日間も絶食するに及ばなかつた。早くも翌日から何の故障も訴へずに飲食したのであつた。二箇月後に夫人は手紙にかう認めた。「お食事はおいしく戴けますし、それにだんだん澤山戴けるやうになりました。水はコップに十四杯も飲んでゐます。やつぱりかういふやうに續けて行くべきかを先生にお尋ねいたしま

す。」

私はその翌年の春に夫人にDにおける邸宅でお目にかかつた。丁度（頭の中の嵐）の間に夫人が名前を呼ぶのを常としたあの上の娘はこの頃に發育異常の時期にはひつて、彼女の貧弱な天賦から見ては柄にもない、大それた野心を懷き、誰の言ふことも耳にせず、母に對してさへ口答をするのであつた。私は未だ母親に信頼されてゐたので、年頃の娘のこの状態に對して一つ意見を下して貰ふやうに依頼された。この娘に現れた精神變化に對してはあまり良い印象を受けなかつた。そして豫後を下す場合にあたつて、患者の異腹の同胞（夫の先妻の子供達）がみんなパラノイアで死亡したといふ事實をなほ考慮しなければならなかつた。母方の家系にも明かに神經病の遺傳が存してゐた。勿論彼女の近親には精神病で死んだ者は一人もなかつた。夫人が注文するまに私は可なり遠慮のない意見を出した。その時夫人は落ついていちいち頷きながら傾聽してゐた。夫人はすつかり丈夫になつてゐた。まるで娘盛りのやうないきいきした顏附をしたゐた。最後の治療を終へてからこちら、九箇月間は比較的健康に過した。尤もその間に頸强直やその他の輕い病氣で健康が時々損はれるぐらゐである。私が夫人の邸宅に數日間滯在してゐるうちに、私は夫人の職務とか働き振り、夫人の趣味方面をすつくり知ることが出來た。私はまた家庭醫にも

ば妥協してゐたのである。

會つた。この醫者は夫人についてはあまり話す種も持つてゐなかつた。卽ち夫人は職業とはいは

夫人はますます健康にますます元氣になつて行つたが、すべての有益な暗示に拘らず、彼女の性格の特徴はたいして變化を蒙らなかつた。夫人は「些細なる事」の範疇を私が氣附いてゐると思つてゐた。彼女の自責傾向は治療の頃に比較して大して減少してゐなかつた。ヒステリー性素因はこの健康な時にさへやつぱり依然として活動を續けてゐた。例へば夫人は最近計畫した長い鐵道旅行をする元氣がないと訴へた。そしてこの障害を夫人から除去しようとする餘儀ない緊急の試みは、彼女が最近のDに行く旅行とその周圍から受けたこまこましい種々雜多な不快印象のみを與へるに過ぎなかつた。併し夫人は催眠狀態において自ら進んで語らうとは見えなかつた。その時私は、夫人が私の感化から又ぞろ逃げようとしてゐること、鐵道旅行の祕密な目的はギーンへの最近の旅行をやめようとするところに存してゐることを私は早くも推察したのであつた。

この數日間は夫人は自分の回想において最も重大な事件だけが拔けてゐることを私に訴へた。私はこの事から、二年前の私の努力が深刻に持續的に作用してゐることを知つた。——ある日夫人が私を案內して自分の屋敷から入江に通ずる並木道を步いてゐる時に、私は思ひ切つてこの並

木道にはひきがへるが一杯ゐることがあるかと尋ねた。返答の代りに私に對して睨みつけるやうな眼差がさしむけられたが、それには恐怖の徴候が伴つてゐなかつた。ついで夫人はまるで附けたすやうに「でも本當にこのあたりにはをりますわ。」と返答した。——鐵道旅行の抑制を除去するためにかけてみた催眠狀態の間に、夫人は自分の答へた返答に自ら飽き足らないやうに見えた。そして彼女は顏に恐怖の色を浮べた。夫人は今や以前のやうに催眠術に對して最早從順ではなくなつた。私は彼女を逆の方から信ぜしめようと決心した。私は紙片に二三の文字を書きつけて、それを夫人に手渡した。そして私は次のやうに言つた。「昨日と同じやうに今日も一つお晝にはロートワインを御馳走して貰ひませうね。私がコップに口をつけた時に、あなたはかう仰しやいませう。どうか私にも一杯ついで下さいませ。それから私が瓶をとつた時にあなたはかう叫びませう。いいえ。私はやつぱり飮みたくはございません。ついであなたは衣嚢に手を入れて同じ文句を書きつけたあの紙片をとり出すでありませう。」それは丁度午前のことであつた。それから數時間のあとで、夫人に言ひつけておいた通りの筋書そのままに小さい場面が展開された。食卓についた人達の誰にも怪訝に見えない程すべては自然に行はれた。夫人が私にロートワインを所望した時に、彼女は明かに一寸躊躇するやうに見えた。——實際夫人は葡萄酒を一滴も口にし

たことはなかつた。――そして夫人が安心したやうにロートワインの注文を取消したあとで、衣嚢に手を入れてあの紙片を引出した。その紙片の上に夫人が今しがた口にしたばかりの言葉が書かれてあつた。夫人は一寸首を振つてびつくりしたやうに私を睨みつけた。

一千八百九十年五月のこの訪問以後夫人に關する消息はだんだん跡絶えがちになつて行つた。私は人傳に、夫人にいろいろさまざまな心痛を與へたところの娘のはかばかしくない容體はつひに夫人の健康を破壞してしまつたことを耳にした。最近（一千八百九十三年夏）私は夫人から簡單な手紙を貰つた。その手紙に自分はまた病人になつてギーンまではるばる出掛けることが出來ないから、別のお醫者に催眠術をかけて貰はうと思つてゐるが、一つ先生のお許しが得たいとしたためられてあつた。最初私はどういふ理由から夫人がわざわざ私の許可を求めるのであるか了解出來なかつたが、つひに丁度一千八百九十年に別のお醫者に催眠術をかけて貰ひたいといふ彼女自らの希望を私が許可しなかつた記憶がふと思ひ出された。夫人はこのために當時＊＊＊ベルグ（……谷、……森）で彼女に同情心のないさる醫者の悲しい强制の下になやむ危險を再び脫した。そこで私は夫人に返事をしたためて私の手にこれまで獨擅してゐたところの特權を今度こそさつぱり拋棄したのであつた。

批判

ヒステリーといふ名前の價値と意義を前以つて十分理解しておかねば、一つの症例がヒステリーの中に數へらるべきか、はたまた他の（純粋な神經衰弱症的でない）神經症に數へらるべきかを容易に判定することは出來ない。普通に現れる混合神經症の領域において境界石をたて分類に必須な特徴を特記して呉れる組織者の手を吾々は待つてゐる。この故に若し人が今日まで狹義のヒステリーに對して廣く知られてゐる定型的な症例との類似に準てじ診斷を下す慣例であるなら、エンミー夫人の症例にヒステリーといふ病名を奉るのに誰も異存はない筈である。精神的活動が完全であるに拘らず、譫妄や幻覺を容易にひきおこすこと、人工的夢遊狀態における人格と記憶の變換、疼痛のある四肢における知覺麻痺、既往症のある事實、卵巢等々は疾患の、少くとも患者の疾患のヒステリー性について何等の疑惑をも與へない。萬一疑惑が起るといふ場合、それは普遍妥當なる記述の機會をも與へることの出來るこの症例のある性質に存してゐる。卷頭につけておいたあの『豫報』から知るやうに、私達はヒステリー症例を情緒とし、神經系統に外傷として影響した興奮の殘餘として觀じてゐるのである。このやうな興奮の殘餘は、若し起原的興

奮が反撥（アブレアギーレン）によつて或ひは思考活動によつて瀉下される時は、決して殘るものでない。この點において人は分量（たとひ測定されなくても）を考察し、神經系統に近接する興奮の總量は、それの分量に應じて外界への行動に消費されない限り、持續的症例に轉化されるといふやうにその過程を想像することを妨げない。私達は只今外傷の「興奮總量」の多大なる部分が純粹に肉體的なる症例に轉化することをヒステリーにおいて發見する習慣がついたのである。これこそ長い年代ヒステリーを心的障害として觀ずることを妨害したところの特徵である。

心的興奮がヒステリーを特徵づける肉體的な持續症候に轉化することを簡單に「轉化（コンヱルジオン）」といふ名稱で呼ぶならば、エンミー夫人の症例は轉化の小量を示してゐる、起原的な心的興奮は大部分精神領域に殘つてゐると主張することが出來る。この故にヒステリーは他種のヒステリー性でない神經症と類似してゐることが容易に分かるのである。轉化が全興奮增大にあづかつて、ためにヒステリーの肉體的症候が見かけだけは完全に正常な意識の中に聳えてゐるといふヒステリーの症例が澤山存してゐる。併し不全なる轉化が普通であつて、そのために少くとも外傷を伴ふ情緒の一部は氣分の成分として意識に殘存してゐる。

轉化の强くないヒステリーに屬する只今の症例の心的症候は氣分變化（恐怖、メランコリー性

憂鬱）、ホビー、意志缺乏として分類することが出來る。佛蘭西の精神病學者の一派が神經病的變質の瘢痕と觀じてゐる精神障害のあとの二種は、只今の症例から外傷的經驗によつて決定されたものであることが證明出來る。これから詳しく述べようと思つてゐるやうに、それは大概外傷的ホビーと意志缺乏である。

勿論ホビーのうちのそれぞれのものは人類の特に神經病者の原始ホビー、就中動物恐怖（蛇、ひきがへる、なほこの外にメフイストフエレスがその大將だと自慢した毒蟲）、雷雨恐怖等々に一致してゐる。併しかういふホビーも亦、外傷的經驗によつて鞏固にされるのである。例へばひきがへるに對する恐怖は、兄が死んだひきがへるを投げつけて、それに對して彼女がヒステリー性痙攣の最初の發作を起したといふ子供時代の印象によつて、又雷雨恐怖は舌打の發生の機緣となつたあの驚愕によつて、霧の恐怖はリユーゲンにおけるあの散歩によつて鞏固にされた。これらの部類においていつでも心的瘢痕と見られる原始的な、いはば本能的な恐怖が主役を演じてゐた。

他種の特殊なるホビーは特別の體驗によつても正當化される。豫期しない突然の驚愕に對する恐怖は、ぴんぴんしてゐる夫が突然心臟痲痺で死亡したのを見た時の、夫人の生涯におけるあの

恐ろしい印象の結果である。他人に對する恐怖、一般人間恐怖は、夫人の一家が脅喝されて、他人といふものがみんな親戚のスパイのやうに見えた時代の、あるひは口や筆で自分に關して撒き散らされた噂を他人は知つてゐるといふ考へが夫人を惱ましてゐた時代の遺物として現れてゐる。瘋癲病院とその病院内にゐる人達に附する恐怖は、彼女の家庭內の悲しい出來事の全系列と、何でも聞きたがる子供に愚昧な女中が話した物語に發してゐる。なほこの外にこの恐怖は一方においては狂人に對する健康人のはじめての本能的な戰慄から、他方においては、神經質な人間にも彼女にも常に存してゐる、自分も氣違ひにならないだらうかといふ懸念から發してゐる。誰かが自分のうしろに立つてゐないだらうかといふやうな限定された恐怖は、子供時代及びそれから後年にわたる澤山のこはい印象を動機としてゐる。ホテルにおける彼女に特に悲痛な、エロチークと結びついてゐるため特に悲痛といへる事件以來、誰かが潛み込んでゐないだらうかといふ恐怖が特に强まつて來た。最後に神經病者にしばしば固有であるホビー、生きながらに埋葬されるといふホビーは、夫の遺骸が運び出された時に自分の夫は死んでゐないといふ信念、愛する人との共同が突然斷絕するとはどんなにしても合點が行かないといふことを極めて感傷的に表現する信念から完全に說明が出來る。加ふるにこれらすべての心的要素はホビーの持續でなしに、ホ

ビーの選擇だけを說明することが出來ると私は考へてゐる。ホビーの持續に對しては私は神經症的要素、卽ちこの女患者が數年來禁慾生活にあつて、從つて恐怖傾向への最も頻繁な機會の一つに惠まれてゐたといふ情況を考へねばならぬ。

私達の患者に存してゐるアブリー（意志抑制、不能）はホビーに比較しては、心的瘢痕は一般に狹められた作業能力の結果によるといふ見解に大して役に立たない。むしろ催眠狀態における症例の分析から、アブリーはこの場合二重の精神機構、結局はただ一つの精神機構によつて條件づけられてゐることが分明する。アブリーは單にホビーの結果である、卽ちホビーが期待の代りに自らの行動に結びつく（外出、訪問——誰かが潛み込んでゐるといふ他の場合）すべての症例に存してゐる。そして意志抑制の原因は行動の結果に結びつく恐怖である。この種のアブリーをそれに相應するホビーと並んで特殊な症候に數へるのは大變な間違である。ただこの種のホビーはアブリーに發展しない程に高度でない時は存在出來るといふことを認めなければならぬ。他種のアブリーは新しい聯想、特に調和し難いやうな聯想との聯合に反抗する、感動の強い解決の不可能な聯想に基因してゐる。かやうなアブリーのすばらしい實例を私達の患者の食思缺乏が惠んで吳れる。夫人は食物が不味いといふ理由からちよつぴりしか食べなかつた。そして夫人は食物に

まるで味といふものを感じなかつた。といふのは、食事といふ行爲は夫人にあつては昔から惡心の回想と結びついてゐたからである。この回想の情緒量は未だ一向減退してゐなかつた。併し惡心と快味とを同時に持つて食事することは不可能である。彼女が反應によつて惡心から釋放されずに、いつでも惡心を抑壓しなければならなかつたために、昔から食事にまとひつくこの惡心は寸毫も減退しなかつたのである。子供時代に彼女は懲罰の恐怖から惡心を持つていやいや冷えた食事をとらなくてはならなかつた。大人になつてから彼女は兄と一緒に食事をしなければならない時に持つた情緒を、兄に對する遠慮から放出することが妨げられた。

ヒステリー性麻痺に心理學的説明を下さうと試みた私の小さい研究を只今思ひ出さねばならぬ。この研究において私は、この麻痺の原因は例へば四肢の觀念圈が新しい聯想と結合出來ぬところに存してゐる、併し新しい聯想と結合出來ぬといふことは、麻痺した四肢の觀念が未だ釋放されない情緒にまとひつく外傷の回想の中にひきこまれたところに由來してゐるといふ假設に達した。私は日常生活の實例から、觀念が未だ釋放されない情緒でもつてかやうに裝塡されることはいつでもある程度の聯想的接近難、新しい裝塡との不調和を伴つてくることを知つたのである。

今日までのところ運動麻痺の症例に對しての私の當時の前提を催眠狀態的分析によつて立證す

ることに成功してゐないが、あるアブリーに對するこの機構は適切であること、アブリーは非常に限定された――佛蘭西人の言葉を用ひば「系統づけられた」――心的痲痺に外ならぬことに對する證明として夫人の食思缺乏を擧げることが出來る。

若し次の二つの事實を特記するなら、エンミー夫人における心的狀況を本質的に特徴づけることが出來る。二つの事實といふのは、第一に夫人にあつては外傷的經驗の悲痛なる情緒、例へば不機嫌、悲哀（夫の死に對する）、憤怒（親戚の脅喝）、惡心（强制的の食事）等々が釋放されずに殘留してゐた。第二に夫人において熾烈なる回想活動が存してゐた。その活動はある時は突發的にある時は現在の覺醒刺激に應じて（例へばセント・ドミンゴーの革命の報）、外傷の一片一片をそれに伴ふ情緒と一緒に眞正な意識に甦らせた。私の治療はこの回想活動の進展と步調を合はし、毎月毎月、その日に表面に浮び上つたものを解消せしめ釋放せしむるやうに努め、たうとう病原的回想の豐富なる貯藏がからつぽになつてしまつたのである。

私がヒステリー發作において一般的所見と觀するこの二つの心的特徴に、肉體的症候の機構にある注意を喚起する迄に擴大したいところの二三の重要なる考察を結びつけることにする。

患者の肉體的症候の一切に對して同一の推論を與へることは出來ぬ。むしろ人は大して豐富と

いへないこの症例から、ヒステリーの肉體的症候は種々さまざまな道筋を通つて現出することを知るのである。私は何はともあれ疼痛を肉體的症候の中に數へたいのである。私が觀察出來た限りにおいて、疼痛の一部は筋肉、腱、筋鞘における輕度の（僂痲質斯樣の）變化によつて確かに器質的に制約されてゐた。さういふ變化は神經質な人間には健康人より遙に强い疼痛を與へるものである。疼痛の他の部分はたかだか疼痛回想、患者の人生において深甚な意義を有する興奮と看病時代への回想象徵であつた。このやうな疼痛もまたその起原にあつては一度は器質的に存在してゐたのだが、それ以來神經症の目的にかなふやうに推敲されたのであつた。エンミー夫人における疼痛に對するこの證言は、私がこの研究の後段で報告する筈の別箇の經驗から確證出來る。患者自らは丁度この點をあまりはつきり證明して吳れなかつた。

夫人が示す著明なる運動現象の一部は感動の單なる表現であり、この意味において、例へば指を擴げ指先を曲げて兩手を差出すのは恐怖の表出、表情術であると、私達は容易に理解することが出來る。勿論この夫人のこれ以外の表情術としての、感動のいきいきした自由なる表現は、彼女の敎養、彼女の民族性に準じてゐる。ヒステリー狀態でない時でもその夫人の表情運動は形式的であり、甚だぎごちないものであつた。夫人の運動症候の他の部分は彼女の口述によれば自分

の疼痛と直接關係を持してゐた。泣きじやくりたいのをぢつと抑へるために、彼女はひつきりなしに指先をいぢくつたり(一千八百八十八年)、兩手をこすり合せたり(一千八百八十九年)した。そしてこの運動の動機は表情運動の説明に對するダアヰンの原則の一つ、卽ち「興奮の誘導」の原則を如實に想起せしめた。例へばダァヰンはこの原則によつて犬が尾を振ることを説明した。悲痛な刺激に際する叫喚を他種の運動神經力によつて置換することは私達誰もが行ふことである。齒科醫のところで、頭と口をぢつと保つて兩手をあげないやうにされた時は、その代り少くとも兩足をぢたばたさすものである。

轉化の複雜な道をエンミー夫人のチック運動が知らして呉れる。舌打と吃音、錯亂の發作においての「エンミー」といふ自分の名前を呼ぶこと、合成された呪文――「お靜かにして下さい――物を言つてはなりません――あたしに觸れてはなりません」(一千八百八十八年)。これらの運動性の表現から吃音と舌打に對して一つの機構への説明が可能となる。私はこの機構を催眠術雜誌掲載の小論文(一千八百九十三年)で「對照觀念の客觀化」と名附けた。私達の實例からも分かるやうに、この場合における過程は次のやうになる。心痛と看護でへとへとになつたヒステリー女が自分の病兒の枕邊に坐つてゐた。やつと子供は寢入つてしまつた。彼女は獨言をいふ。「でも

子供をおこさないためにはおまへの方が今度はぢつとしてゐなくてはならぬ。」この決心は一つの對照觀念、卽ち彼女はやつぱり音を立てて、そのために子供は折角の睡眠から目を醒ますだらうといふ心配をよびさます。決心に對するかやうな對照觀念は、私達が一つの重大な決心の遂行にあたつて自信を感じない時にも明白に現れてくる。

自己意識において、沈鬱の、不安なる期待の特性が稀に存しない神經症患者はかやうな對照觀念を非常に多數に形成する。あるひは患者はかやうな對照觀念を遙かに容易に認識し、對照觀念は患者にもまた意義重大に見える。私の女患者が陷つてゐた衰弱狀態において、普通ならば拒否されるであらう對照觀念が今やさらに强いものとして現れた。對照觀念は客觀化されるものであり、患者自らが驚愕したやうに恐れてゐる物音を本當に作るものである。全過程を說明するために私は、衰弱が部分的のものであること、衰弱は、ジャネー及びその一派の術語を借りて申せば患者の一次的自我にのみ關係すること、衰弱の結果對照觀念の方はまるで稀薄にならないことを信じてもよい。

さらに私はそれが意志に反して發生したところの物音に對する驚愕であること、この物音は外傷的に作用する契機となり、この物音が全光景の肉體的回想象徵として固定されることを假定す

る。然り、痙攣的に喚起された、休止をもつて相互に切斷されてゐる、大抵の場合舌打と類似してゐる多くの音響から成つてゐるところのこのチック自體の性質のうちに、その發生に與つて力ある過程の痕跡を認めると私は信じてゐる。決心と對照觀念、卽ちチックにひき立たしめる性質を與へた、對照觀念を聲帶筋肉の異常なる神經力に限極せしめた「反對意志」との間に闘爭が演ぜられたやうに見える。

根本にあつては類似した機會から、痙攣的發言抑制、特異なる吃音が遺された。ただ違ふのは今度は、終結の神經力の結果、卽ち叫喚でなしに、神經力の過程、卽ち發生器官の痙攣的抑制の試みが回想のための事件の象徵にまで高められたのである。

それの發生史によつて密接してゐる二つの症候、舌打と吃音はさらにまた聯合され、類似の機會における反復によつて持續症候となつた。ついで症候は廣汎な利用に供せられた。激しい驚愕の下に發生して、症候はこの時以來（私が第四例で示さうとする單特症候的ヒステリーの機構によつて）、その驚が愕對照觀念の客觀化に機會を與へることが出來ない時は、どの驚愕にも參加して行つた。

症候は最後に澤山の外傷に結びつき、回想の中に再生する權利を確保し、その結果、症候は深

かけのチックのうちにいかに重大な意義が藏せられてゐるかを示すことが出來た。そしてこの二つの症候を一擊の下に完全に消滅さすことがブロイエル氏法で成功しなかつたなら、瀉下法は三つの主要外傷にとどまつて、二次的に聯合した外傷にまで波及しなかつたのに因したのである（1）。

（1）この點において私は、症候の細目にあまりに重きをおき過ぎて、餘計な豫言に迷行するやうな印象をよびさますことが出來た。ヒステリー症候の決定力はそれの最も微細なる實行にまで及んでゐることと、人はヒステリー症候に輕々しくあまり多くの意味を與へることが出來ないことを私だけは學んだ。私のいふことを正當化するであらう實例たここに述べたいと思ふ。數箇月前に私は遺傳の存する家系に屬する十八歲の娘を治療した。その娘の複雜な神經症の中にヒステリーが相當に參加してゐた。私がこの娘から知つた第一のことは、二重の內容をもつた絕望の發作の訴へであつた。第一の內容において彼女は顏面下部において頰から口にかけてひつぱるやうなちくちくする感覺を持つた。第二の內容において兩足の趾が痙攣的に伸び絕間なしに左右に動くのであつた。私は最初この細目を重要視する氣になれなかつた。かやうな現象の中にヒステリー發作における大腦皮質中樞の刺激に對する證據を認めようとするのは確かに

ヒステリーの昔の改修者に近接してゐた。かやうな知覺異常の中樞がどこに存在してゐるかを私達は知らないが、かやうな知覺異常は部分的癲癇を誘發せしめ、シャルコーのいふ知覺癲癇を決定することは周知である。正中裂溝の直ぐ左右にある相對の大腦皮質部が足趾の運動に關聯してゐたかも知れぬ。併しまるで違つた説明が下せた。私はこの娘とは昵懇な間柄であつたので、ある日直接に、かういふ發作の時にどういふ考へが頭に浮ぶか、あなたは羞しがらなくてもよい、あなたは二つの現象に對して説明を下さなくてはならないと質問した。患者は羞恥のために赤面した。併し催眠狀態にしなくても最後に次のやうな説明を下すまでになつた。その説明の關係は列席してゐる彼女のお附の女の證言をもつて立證された。彼女は月經初潮以來數年間破爪期頭痛をやんでゐた。そのために根氣のいる仕事が出來なくなり、學校もとかく休み勝ちになつた。遂にこの障害から釋放されて、功名心の强い、幾分單純なこの子供は、自分の姉達や同年輩の友達に追ひつくために、力の限り勉强しようと決心した。この時彼女は力以上にあまり焦り過ぎた。そしてかやうな努力の結果は大抵、自分は自分の力を過重してゐたといふ絕望の勃發に終るのであつた。勿論彼女は肉體上でもほかの娘と競爭しようとし、肉體上の短所を自分に發見した時は自分は不幸であると考へた。娘は自分の（非常に著明な）上顎突出の顏を氣にし始めた。そして一日十五分宛突き出た上齒の上へ上脣をひつぱり伸す練習をなして、自分の顏を矯正してみようといふ考へが浮んだ。かういふ子供臭い努力は結局徒勞であつたために、遂にある日絕望の勃發を招來したのである。そしてこの時以來

頬から下方にかけてひつぱるやうなちくちくする感覺が一種の發作内容として現れた。趾が伸び蹠が絶間なしに震顫するといふ運動性症候をもつた他の發作の決定力も決して不可解でなかつた。この最初の發作はイシュルのシャーフベルグの遠足から歸つた後に起つた。勿論家のものは過勞のためにさういふ發作が起るのだと考へた。ところが娘は次のやうな報告を與へる。誰の目にも長いと思はれる自分達の足趾を互に冷かし合ふことが、兄弟達がよくやつたからかひの題目であつた。この女患者は可なり以前から自分のこの肉體の缺點を厭なものだと考へて、わざと小さい靴をはいて自分の足を無理に小さく見せようと試みた。注意深いパパだけはこんな足趾を氣に留めずに、彼女がゆつくりした靴をはくやうに心配した。娘はこの命令には滿足せずに、いつでも自分の足を氣にかけて、靴がどれ程大きいか、どれ程小さい靴がはけるものかを計る時に私達がよくやるやうに、靴の中で足趾を動かすことが習慣になつた。彼女には大して苦しいと思へなかつたシャーフベルグの遠足の間に、例によつて又短い上衣姿の靴恰好が話題となり出した。姉の一人が途中で彼女に「でもあんたは今日は特別大きな靴をはいてゐるのね。」と言つた。この時彼女は靴の中で足趾を動かして大きいか小さいかを檢査した。そして自分にも成程大きいと思へた。醜い程大きい足に對する興奮は最早彼女から消えなかつた。そして一行が家に歸つた時に、最初の發作が爆發した。この發作の中に鬱々たる思考に對する回想象徵として足趾が痙攣し不隨意的に震顫した。

只今のは發作であつて持續症候でないことに氣が附く。さらに私はこの告白の後には第一の種類の發作

が消失し第二の足趾の震顫をとる發作が持續した。即ち告白されない一部がこの際未だ殘らねばならなかつたことを附加しておく。

追加。私は後年又同じことを經驗した。この愚かな娘は自分を美しくするために極度に熱心であつた。といふのは——若い從兄に好かれたいと思つたからである。(數年後に彼女の神經症は早發性癡呆に轉化した。)

ヒステリー發作の規則によつて、娘の治療の間幾度となく困却狀態を作る錯亂の發作において、エンミーといふ名前を呼ぶことは、複雜な思考によつて發作の內容と關聯し、この發作に對する患者の呪文にある點相當してゐた。この叫びはその意義をもつと粗雜に利用することによつてチツクに墮せしめる特質を有してゐた。「あたしに觸れてはなりません等々」の複雜な呪文は旣にこの利用に到達したが、催眠療法は二つの場合においてこの症候のさらに進んだ發展を保持してゐた。は 私「エンミー」といふ新裝をもつて發生した叫びがそれの鄕土、錯亂の發作の中になほ限極されてゐるのを知つた。

これらの運動性症候、たとへば舌打が對照觀念の客觀化によつて、吃音が心的興奮の運動性への單なる轉化によつて、「エンミー」といふ叫びと防禦裝置としての長い呪文が、ヒステリー發作

への患者の随意の行動によつて發生出來るものであるか、運動性症候には一つのこと、卽ちそれらの症候は起原的に若くは持續的に外傷と明白な結合を保ち、外傷に對する象徵として回想活動にはひつてくるといふことが共通となつてゐる。

患者の他の肉體的症候は一般からいへばヒステリー性でない。例へば私が變形した偏頭痛と考へ、かやうなものとして本來は神經症でなしに器質的疾患の中に數へらるべき頸强直はヒステリー性のものでない。併しヒステリー症候といふものはおきまりのやうに器質的疾患と結びついてゐる。エンミー夫人においては、頸强直はヒステリー發作に利用されたが、一方それはヒステリー發作の定型的現象形態を處理しなかつた。

エンミー夫人の精神狀態の特徵を、夫人において立證される意識變化を指示することによつて完全なものにしたいと私は思つてゐる。頸强直によつてと同じに、彼女もまた現在の悲痛なる印象によつて（例へば庭園における最後の）妄譫、若くは、それらの外傷の一つへの强力なる餘韻によつて譫妄狀態に置かれる。この譫妄狀態において――私がそれに關して行つた少數の觀察に從へば、私はこれ以外のことを述べることが出來ない――意識の同樣な縮小、夢におけると同じやうな聯想强制が支配し、幻覺と錯覺は極端に容易になり、白痴のやうな結論若くは矛盾極りな

い結論が作られる。精神的瘋癲に匹敵出來るこの狀態は恐らくそれの發作、たとへば幻覺的錯亂と分類される發作等價値としての急性精神病を代表する。定型的ヒステリー發作ともつと類似した點は、古い外傷的回想の部分が大概譫妄の基礎として證明されるところに存してゐる。常態からのこの譫妄への移行はしばしば全然氣が附かないうちになされる。夫人は大して感動的でない事柄を全く正しく話してゐた。そして悲痛な觀念に導く談話を續けてゐる時に、ふと私は彼女の興奮した表情によつて、彼女の極り文句の現出等によつて、彼女が譫妄狀態にあることに氣が附いたのである。治療のはじめ頃は譫妄狀態は終日持續して、そのために箇々の症候から、それら——例へば表情——が發作症候としての心的狀態のみに屬するか、或は舌打や吃音のやうに本當の持續症候となるかどうかを斷言することがむづかしかつた。譫妄狀態にあつてはどうであつたか、常態ではどうであつたかを、しばしばあとになつて初めて區別することが出來た。詳しく言へば、この二つの狀態は記憶によつて分離されてゐた。そして夫人はその時譫妄狀態が常態においてなされた談話にいかなるものを補足したかを聞かされて極度にびつくりした。夫人との私の最初の談話は、二つの狀態が、相互に氣附くことなしに、いかに相互に移行しあふかを示す最もすばらしい實例であつた。この心的動搖の間に、夫人が私に自分は前世紀の女だといふ譫妄狀

態から發した返答を與へた時に、現在を追求する正常意識の影響がたつた一度だけ現れたのである。

エンミー夫人におけるこの譫妄狀態の分析は十二分とはいへない。その理由は專ら、彼女の症狀がすぐよくなつて、そのために譫妄狀態は常態生活からはつきりと分離されて、頸强直の時代に限局されたからである。私はこの女患者の狀態に關して第三の心的狀態、人工的夢遊狀態において出來る限り澤山の經驗を蒐集した。夫人が自らの正常狀態において自分が譫妄狀態において心的に何を經驗したか、夢遊狀態において心的に何を經驗したかを意識しなかつたが、夢遊狀態においては彼女は三つのすべての狀態の回想を處置出來た。この狀態において夫人は實際最も正常であつたのである。夫人は日頃の生活の最も機嫌のよい時間より夢遊狀態の人としての方が遙に私に遠慮がなかつた、換言すれば、夢遊狀態の人として私に自分の家庭のこと等々を報告し、一方普通の時は私をまるで他人のやうに取扱つたことを論外にする時、夫人は夢遊狀態の人の完全な暗示性を示したことをさらに度外視する時、夫人は夢遊狀態の人として初めて完全に正常な狀態にあつたと私は眞から言はなくてはならぬ。この夢遊狀態が他方において超常態の特徵を何も示さなかつたこと、この夢遊狀態は私達が正常な意識狀態に歸せしめるすべての心的缺點を負

つてゐたことを觀察するのは興味あることであつた。夢遊狀態にある人の記憶の狀況は次の試みを說明する。ある日談話中に夫人はサナトリウムの玄關に飾つてある美しい植木に就いて感歎の聲を發した。「でもあれは何といふ植木でございませう。先生。御存じではありませんか。私は獨逸名と拉丁名を憶えてゐましたのに、二つともすつかり忘れてしまひました。」夫人は植物の名前を非常によく知つてゐた。一方私はこの機會に私の植物學の無知を白狀した。それから數分して私は催眠狀態において夫人に「あなたは只今玄關にある植木の名前を知つてゐませう。」と尋ねた。その返答は早速に出た。「その植物は獨逸名では土耳古百合と呼びますが、拉丁語の方はすかくり忘れてしまひました。」又ある日氣分が大變よい時に夫人は私に羅馬の塋窟を見物した話をした。そして敍述の二つの用語を思ひ出すことが出來なかつた。私とてそれを思ひ出すやうに助けることが出來なかつた。それから直ぐあとで催眠狀態においてあなたはどういふ言葉を言はうと思つてゐるのかと尋ねた。夫人は催眠狀態においても知らなかつた。そこで私はかう言つた。「もう考へるのはよしませう。明日午後五時と六時の間に庭園で、六時に間近い頃に、その言葉が突然あなたに浮んでまゐりませう。」

翌晩夫人が塋窟とまるで關係のない話をしてゐる最中にだし拔けに叫んだ。クリプテです。先

生もう一つはコルンバリウムです。——成程。あなたが昨日思ひ出せないと仰しやつたのはこの言葉でしたか。でもあなたはいつ頃思ひ出したのですか。——今日の午後、庭園で。私がこの部屋に歸つて參ります一寸前に。——あたしは指定された時刻を正確にちやんと守つてゐますと夫人がかういふやうに私に示さうとしたのに氣が附いた。といふのは夫人は六時頃に庭園から歸つてくる習慣であつたからである。かういふ譯で夫人は夢遊狀態においても自らの知識の全量を自由にすることが出來なかつた。彼女にもまた現實の潛在的意識が存してゐた。夫人は夢遊狀態においてこの現象若くばあの現象は何に由來してゐるかといふ私の質問に對して額に皺をよせ暫時して低音で「私は存じません」といふ返辭をすることが幾度も幾度もあつたのである。その時私はいつもの通りに「思ひ出してごらんなさい。あなたは直ぐに氣が附きませう。」と言はねばならなかつた。それから夫人は暫く考へ込んでから求めてゐる報告を私に與へることが出來た。だが夫人には何も思ひ浮ばないことがある。そこで私は一つ明日迄に思ひ出しておいて貰ひませうと提案しなければならぬことになる。この提案はいつでもうまく的中した。いつもの生活では虛僞といふことはどんなものでも極度に避けることにしてゐるこの夫人は、催眠狀態にあつても決して噓をつかなかつたが、時々いい加減な報告をし、私が二回目にはつきり仰しやいと强制する迄、

告白の一部を保留してゐるやうなことがあつた。第八二頁で擧げた實例におけるやうに、催眠狀態において彼女の口を緘せしめるものは、話題が彼女に起させす嫌厭であるのが普通であつた。併し制限のこの特徴に拘らず、催眠狀態における彼女の心的態度の作る印象は、一般に彼女の精神力の自由なる發展のそれであり、彼女の囘想の貯藏に對する自由なる行使であつた。

催眠狀態における彼女の著しく大きな暗示性は、病的な無抵抗とは非常に懸隔つてゐた。非常な信頼と非常な冷靜をもつて私の言ふことを傾聽して與れたいろんな人における精神機構のかやうな研究において、私が期待するより以上の印象を夫人において持つことが出來なかつたと一般に言はなくてはならぬ。ただ違ふのはエンミー夫人は彼女の所謂常態において私に對してかやうな好都合な心的狀態をとることが出來なかつたのである。動物恐怖においてのやうに私が彼女に說得の根據を提出することに成功しなかつた時、若くは私が症候の心的發生史を問題にせずに、高壓的な暗示を借りて働きかけようと欲した時に、いつでも私は催眠狀態にある彼女の顏面に緊張した、不滿な表情を認めた。そして私がその時、「あなたはやつぱりこの動物をこはがるでせうね」と尋ねる時に、その返答は「いいえ。——でも先生がさう仰しやいますから。」といふのであつた。併し私に對する彼女の從順性のみを支柱とすることの出來るかやうな約束は本來として

決して效果を持たなかつた。私が夫人に與へた澤山の通り一遍の訓戒と同じに大した效果を生じなかつた。そんなものの代りに、健康におなりなさいといふ暗示を繰返す方がましだつた。症候が暗示に對してどこ迄も頑張り通し、心理分析又は說得に對してのみ軟化するといふ人は他方において、毒にも藥にもならぬ暗示に、自分の疾患と關係してゐないことが問題となる場合は、一流の病院仲介者のやうに從順であつた。催眠後のかやな從順の實例を私は疾患史の中で報告しておいた。私はこの態度において別に矛盾を發見しない。より强い觀念のもつ權利はここにおいても自らを主張しなくてはならぬ。病的「固着觀念」の機構を硏究する時に、暗示されたある力を賦與された反對觀念に對して徹底的に反抗出來ても一向驚くにあたらない程の、强烈に作用する澤山の經驗によつて、固着觀念が基礎づけられ支持されてゐるのを發見する。これこそ眞實病的と言へる腦髓であつたのであらう。かやうな腦髓にあつては、强烈な心的過程のかやうに權利づけられた成果は一遍の暗示によつて吹飛ばすことが可能であつたらうか。(1)

(1) 催眠狀態にある人の、他のすべての事に對する極度の從順と症候の頑固なる永續(症候は深い根柢を持つて分析の突進を不可能とさす故に)の間のこの興味ある對立に關して、私は他の症例から深い感銘を懷いたことがある。私はさる妙齡の、聰明な元氣に溢れてゐる娘を治療した。この娘は一年半この方

强い歩行困難に罹つて、五箇月以上どうすることも出來なかつた。娘は兩下肢に痛覺脫失と疼痛部位を有し、兩手に急速度の震顫があり、重い足取で小股で前方に屈んだ姿勢で歩行し、まるで小腦性のやうによろよろし、又幾度も轉んだ。彼女の氣分は著しく快活であつた。當時ギーンの大家の一人がこの症候群から多發性硬化の診斷を下した程であつたが、他の專門家はヒステリーとした。疾患の初期における症狀の複雜な形態(疼痛、失神、黑內障)もまたヒステリーに合致してゐた。そしてこの人から私は患者の治療を委託されたのである。私は娘の歩行を催眠暗示により、下肢の治療を催眠狀態等において良くしようと試みた。娘は特別よく夢遊狀態にはひつたに拘らず一向効果が見られなかつた。ある日娘が片腕を父に支へられ、片腕を蝙蝠傘(その尖はすつくり磨滅してゐた)に支へて、よちよちと再び部屋にはひつて來た時に、私は辛抱しきれなくなつて、催眠狀態にして彼女にどなりつけた。「いつまでそんなことをしてゐるんですね。明日の午前にあなたは手にした蝙蝠傘を壓折つてしまひませう。その時からあなたは最早蝙蝠傘なぞに用事がなくなりませう。そしてあなたは蝙蝠傘などなつかずに歸宅しなければなりません。」蝙蝠傘に暗示をかけるといふやうな醜態をどうして私が演じたかを私は知らない。私はあとになつて誠に恥ぢ入つた。そして聰明なこの女患者が醫者であり又催眠狀態に立會つた父に對して私の面目をどうして立てて呉れようとは豫想だにしなかつた。ところが翌日父が私に語つた。「昨日娘がどういたしましたかあなたは御存じですか。丁度私共がリングストラーセを散歩してをりました時に、突然娘が踊り上つて——しか

も大道の眞中で――氣儘氣隨に暮しませうよと唄ひ始めました。そしてその歌に拍子を合はして蝙蝠傘で舗道を敲いて、蝙蝠傘を壓折つてしまひました。」娘自らが一つの馬鹿げた暗示をこれ程までの頓智をもつてすばらしく見事な暗示に轉化したことは勿論彼女には思ひもよらぬことであつた。彼女の症狀が保證、命令、催眠狀態における治療によつてよくならなかつた時に、私は心理分析を利用し、病氣の勃發前にどういふ情緒狀態にあつたかを知りたいと思つた。彼女は今や（催眠狀態において、しかも何の興奮もなしに）つひこの間親戚の青年が死んだこと、その青年とは長年許婚の間柄であつたことを物語つた。併しこの報告は彼女の容體を一向變化さなかつた。次回の催眠狀態において私は娘に、許婚が死亡されたことはあなたの病氣とはまるで關係がない、あなたが口にしない何か別の事件がある筈だと語つた。この時娘はそれを肯定する素振をちらつと見せたが、一語も口に出さずにだまり込んでしまつた。そして娘のうしろに腰かけてゐた年とつた父が聲をあげて啜り泣き始めた。勿論私はこれ以上患者を追求しなかつたが、娘はこれを最後として私のところに姿を見せなくなつた。

私がエンミー夫人の夢遊狀態を研究した時に、「tout est dans suggestion」（一切は暗示にかかつてゐる）といふベルンハイムの信條の正當に對し、又彼の明敏なる友人デルブーフの「Comme quoi il n'y a pas d'hypnotisme」（まるで催眠術など存在しないやうに）といふ思想に對

して、私ははじめて重大なる疑問を感じたのである。指を差出して「おねむりなさい」と一回いふことが、すべての心的經驗が患者の記憶に包括されるところの特殊なる心的狀態を作るとは今日でも私は解することが出來ない。私はこの狀態を喚起することは出來たが、私はその狀態を暗示によつて作つたのでなかつた。といふのは他の點において普遍妥當であるそれの性質が非常に私を驚ろかしたからである。

夢遊狀態において治療がどういふ道を通つて奏功するものかは疾患史から十分に明確になる。催眠的精神療法において慣用となつてゐるやうに、保證、禁止、あらゆる種類の反對觀念の注入によつて現存する病的觀念と鬪つたが、私はそれだけに飽き足らずして、病的觀念の土臺をなしてゐる前提と鬪ふために、箇々の症候の發生史を追求した。かかる分析の間に、患者は激しい興奮の表情の下に、それにまつはる情緒がこれまでにただ氣分運動の表出としてはけ口を見附けてゐた事物を物語るのがお極りのやうに起つた。毎回の治療效果のうちのどれだけのものが、發生狀態にあるこの暗示作用に基づき、又どれだけのものが反撥（アブレアギーレン）によつての情緒の消解に基づいてゐたかを私は定めることが出來なかつた。といふのは私はこつの治療的要素を協力ささなかつたからである。從つて治療の作用力は瀉下療法に潛んでゐるといふ嚴密な證明にこの症例は利用

出來ぬが、とにかく私が心理療法を行つた症候だけは實際永久的に除去されたと私だけは言はねばならぬ。

治療的効果は全體として甚だ顯著であつたが、持久的のものでなかつた。患者の遭遇する新しい外傷の下で同じ工合に患ふといふ患者の資格は取り除かれない。かやうなヒステリーを根本的に治療しようと欲する人は、現象の關聯を私が當時試みたよりもつともつと詳細に說明しなければならなかつたらう。エンミー夫人は確かに神經病の遺傳がある家系に屬してゐる人であつた。かやうな素因がなければヒステリーといふものは恐らく發病しないものである。併し素因だけでヒステリーなど生ずるものでない。發病するためには動機が必要である。私が提唱するところの適當な動機、ある性質の病原が必要である。エンミー夫人においては情緒は非常に澤山の外傷的經驗を保持してゐるやうであつたこと、活潑な回想活動はある時は甲の外傷、ある時は乙の外傷を心的前景に運んだことを私は既に述べておいた。私は只今エンミー夫人におけるこの情緒の保持といふことに對する理由を敢て定めたいと思つてゐる。それは勿論夫人の遺傳的素質にかかつてゐる。即ち彼女の感覺は一方においては非常に敏感であり、彼女は生來感情的な性質であり、情熱の最大の放出に可能であつたが、他方において彼女は夫の死去以來完全な精神的孤獨の中に

その日を送り、親戚の脅喝のために友人に對して猜疑深くなり、何人かが自分の行動の上に大きな影響を及ぼさないかと嫉妬深く監視するのを常とした。夫人の義務の範圍はさらに大きく、それは彼女に强制される全精神的課業であつた。夫人は友達もなく相談相手もなく、家族のものから殆ど隔離され、彼女の良心、自責への彼女の性癖、しばしば叉女としての彼女の當然なる困却が彼女に加へる重力の下にただ一人を固守してゐたのである。略言すれば、大なる興奮總量の貯溜の機構それ自體は承認出來るものである。この機構は一部は彼女の生活狀態に、一部は彼女の生來の素質に立脚してゐる。例へば自分のことを打開けることを嫌ふのは非常なもので、そのために、私が一千八百九十一年に氣が附いて驚いたやうに、夫人の邸に每日出入してゐるものは誰一人彼女が病んであること、私が彼女の醫者であることを知らなかつた程であつた。

ヒステリーのこの症例の病原學はこれで全部であるか。私はこれが全部とは信ぜぬ。と申すのは、二回にわたる治療期に解答と十分な說明を必要とする何等の疑問をも未だ提起しなかつたからである。長い歲月の間これといふ變化のない、しかも病原的に作用力を具備した環境にあつて、疾患の勃發を丁度近年に生ぜしめるために、その上になほあるものを必要としなければならぬと私は今日考へてゐる。患者が私に打開けた親密な報告のすべての中に、結局外傷の機會を與

へるといふべき性的要素が全然缺けてゐることが私の注意を惹いた。何等かの殘餘なしに興奮はこの領域に留まることが出來なかつたであらう。それは恐らく私が傾聽出來た彼女の生活史の極祕版であつた。患者の擧動は最大の、態とらしくは見えない端正を示し、まるで氣取り込んだところも示さなかつた。併し催眠狀態において夫人がホテルにおける給仕女の小さい冒險を語る際にとつた遠慮といふものを考へる時に、感情的な、極度に感動しやすいこの夫人が激しい鬪の後やつと自らの性慾を克服し、その時あらゆる衝動のうちのこの最も强力なるものの抑壓の試みにおいて精神的に極度に疲勞したと疑はずにをられなかつた。夫人は一度私に自分は財産が澤山あるから萬一求婚者があつてもその人の無慾といふことは信用出來ぬし、又再婚のために二人の子供の將來を傷つけると非難されるだらうし、かういふ理由から再婚しなかつたと告白したことがあつた。

エンミー夫人の疾患史を語るにあたつて、私はなほ一言附け加へなくてはならぬ。私達二人、即ちブロイエル博士と私は夫人を可なり正確にそして可なり長い年月にわたつて知つてゐた。そして彼女の性格の姿を古代より今日に至る書物や醫者の意見から知つてゐるヒステリー精神の記述と比較する時に、私達は常に微笑を禁じ得なかつたのである。チェチリー夫人の觀察から、最

も重症のヒステリーは最も豐富なる最も獨創的なる天稟と結びついてゐること——加ふるに歴史や文學において有名な婦人の傳記から明白に分かる事實——を推知した時に、私達はエンミー夫人においてヒステリーはまた完全なる性格發展と目的意識的な行狀を除外するものでないといふ事實に對する實例を手にしたのであつた。私達が知合ひになつたこの夫人は一個の非凡な女性であつた。自らの義務觀念における彼女の道德的嚴肅、彼女の男まさりの才智と精力、彼女の高い教養と眞理熱愛は、私達二人を畏敬せしむるものであつた。一方目下の者に對する彼女の心からなる親切と彼女の社交における優雅は夫人を又貴婦人と尊敬せしめるに十分であつた。かやうな婦人までを「變質者」と名附けるのは、變質者といふ言葉の意義を鑑別出來ないまでに歪曲してしまふことになる。「素因ある人間」と「變質した人間」を概念的に區別するのはよいことである。さうしなければ、人類はその偉大なる業蹟の隨分澤山を變質した個人の努力に負つてゐるといやいや告白しなければならないだらう。

エンミー夫人の歴史において、私はピエル・ジャネーがヒステリー發生の原因とした「心的低格行爲」の何ものも發見出來なかつたと私もまた告白する。ジャネーによれば、ヒステリー性素因は意識限界の(遺傳的變質によつての)異常なる縮小に存してゐて、この縮小の結果として、

多數なる認識の等閑、さらに進んで自我の崩壞、二次的人格の組織が招來される。從つて自我の殘餘もまた、ヒステリー的に組織された精神群の退却のあとで、正常なる自我に比較してその能力を減じなくてはならぬといふのである。そして事實ジャネーによればヒステリー患者におけるこの自我は心的症候を負はせられ、單一觀念狂の宣告を受け、人生の普通一般の意志活動が不可能となる。この點においてジャネーはヒステリー性意識變化の續發狀態を不當にも第一次條件の等級に昇格せしめたのであると私は考へてゐる。この題目は別の箇所で詳しく論じなければならぬものである。併しエンミー夫人においてさやうな低格行爲は寸毫も認められなかつた。最も重態な症狀の時期の間に、夫人はある大工場主の事業に自ら助力することが出來、自分の子供達の敎育も絕えず監督することが出來、又敎養ある名士達とも書簡の往復を續けることが出來た。一言にして蔽へば、夫人は自分が病氣であることを隱せることの出來る範圍で、自らの一切の義務を果すことが出來たのである。だがそれは當然、勿論永續的のものでないといへ、衰弱は、二次的の心理學的不幸に導かずにおかない可なりの程度の精神過勞を伴つたと考へずにおられなかつた。私が夫人に初めてお目にかかつた頃には旣に彼女の能力におけるかやうな障害が目に立ち始めてゐたが、重症なヒステリーは結局衰弱のこの症候の前に存してゐたのであつた。（1）

〔1〕〔一千九百二十四年追記〕 今日この疾患史をお讀みになつた分析家は定めし同情ある微笑を禁じられないことを私は承認してゐる。併しこれは私が瀉下法を思ひのままに應用したところの最初の症例であつたことを一考して欲しい。この理由から私はこの報告を昔の姿のままに留め、勿論今日になればいくらでも批判の餘地はあるが、それも全然加へずに、無數に存する缺點もそのままにしてあとから訂正しないことにした。ただ私は二つの點、卽ち疾患の眞正な病原學に關して後年に贏得た私の見解とその疾患のその後の經過の報告を追記したいと思つてゐる。

さきに述べたやうに、夫人の別莊でお客として數日を過した時に、食事に一人の見知らぬ人が列席した。その人は努めて愉快らしくつくらうと骨を折つてゐるのが目に見えてゐた。その人が辭し去つてから夫人は私に「あの男の方は先生のお氣に入りますか」と尋ねた。そして序でに「あの方が私と結婚したいと仰しやるぢやございませんか」と附け足した。私がつい聞き流した他の言葉と關聯して、夫人が當時再婚したいと希望してゐたが、現に二人の子供があるし又父の遺產の相續人であるし、かういふために自分の目的は到底達せられないといふ說明を私は聞かねばならなかつた。

數年後に私は自然科學者のある集會でエンミー夫人と同鄉のある有名な醫者に會つた。私はその人に夫人を知つてゐるか、夫人のこの頃の樣子について何か聞いてゐるかと尋ねた。この醫者は夫人と懇意な間柄であつて自ら夫人に催眠療法を施したことがあつた。夫人はこの醫者と一緒に——そしてなほ外の澤山

の醫者とも一緒に――私と一緒にやつたと同じお芝居を演じたのである。彼女は悲慘な容體になつた。催眠療法は異常な效果を奏したが、次いで突然その醫者に敵對しその醫者を寄せつけなくなつた。そして彼女の疾患の全部が再び活動し出した。それは正眞正銘な「反復强迫」であつた。

それから二十五年の後に珍らしくも私はエンミー夫人の近況を知つた。私が昔豫後は悪いと診斷したことのあるあの年上の娘が、昔私の治療を受けたことがあるといふ理由から自分の母親の精神狀態の鑑定を依賴して來た。娘は自分の母親を訴訟する計畫であつた。娘は自分の母を血も泪もない冷酷無道の暴君だと敍してあつた。夫人は二人の子供を勘當して、その物質的困窮において彼等を扶助することを拒絕した。私に手紙を吳れたこの上の娘は學位號を獲得して結婚してしまつた。

二

ルシー孃　三十歳

一千八百九十二年の末にさる親しい同僚が丁度再發性の慢性化膿性鼻炎で加療中の若い婦人を私に紹介して來た。あとで分かつたことであるが、その婦人の疾患が執拗であつたのは篩骨の骨瘍がその原因をなしてゐたのである。患者は最後に新しい症狀をその醫者に訴へ出した。耳鼻科の專門醫が診てもどうしても疾患部位をつきとめることが出來なかつた。彼女は完全に嗅覺を失つて、一二の自覺的嗅覺が鼻についてたまらなかつた。彼女はそのにほひが氣になつてしかたなかつた。それに加へて、そのにほひのために氣分が重苦しくなり、疲勞しやすくなり、頭が重たくなり、食慾が減退し、働く元氣がなくなつてしまつた。

この若い婦人はギーン郊外のさる工場主の家に家庭教師として居住し、時々私の外來時間に診療を受けに來てゐた。彼女は英吉利生れで、纎弱な體質で貧血があつたが、鼻の病氣を除いては健康であつたのである。彼女の最初の話は私の同僚の報告を裏書して吳れる。氣分が重く、から

だがだるくてたまらぬ、自覺的な嗅覺に惱まされてゐる。ヒステリー症候のうち可なり著明な全身痛覺脱失を示してゐるが、觸覺においては異常はなかつた。視野は（手で行つた）粗雜な檢査において別に縮小してゐなかつた。鼻腔粘膜は完全に無痛覺であり無反射であつた、觸覺は存在してゐたが、この感覺器は特殊な刺激に對しても、又他の刺激（アンモニア、醋酸）に對しても無感覺であつた。化膿性鼻炎は最早恢復期にはひつてゐた。

この症例を理解しようとする最初の試みにおいて、自覺的嗅覺は持續的ヒステリー症候を解釋する反復性幻覺と觀じなければならなかつた。憂鬱は恐らく外傷に屬する情緒であつた。そして現在自覺的になつてゐるこのにほひが嘗ては他覺的であつた時の經驗を發見しなければならなかつた。この經驗こそ外傷でなくてはならぬ。回想におけるこの外傷の象徵として嗅覺が再歸したのであつた。この反復性嗅覺幻覺はそれを伴ふ憂鬱をこめてヒステリー發作の等價と觀ずるのは恐らく正當であつたであらう。反復性幻覺の性質は持續的症候の役割に對して嗅覺幻覺を不適當とした。この痕跡的に形成された實例にあつてはそれは實際肝要でなかつた。併し自覺的嗅覺がそれの起原において現實のある確定した對象に一致出來るやうな分化を示したかを徹底的に追求しなければならなかつた。

この豫想は直ちに實現された。どんなにほひが鼻につきますかといふ私の質問に對して、焦げたプデングのやうなにほひだと返答した。そこで私は外傷的に作用した經驗の中に現れたものは實際に焦げたプデングのにほひであると假定することが出來た。嗅覺が外傷の囘想象徵に選擇されるといふことは、さうざらにあることでないが、かういふものを選擇する上には、そこに何か理由がなくてはならぬと想像出來る。患者は化膿性鼻炎をやんでゐる。この故に鼻とその鼻の嗅覺が彼女の注意の中心にあつたのである。患者の生活狀態においては、彼女がそのお邸で二人の子供の面倒を見てゐること、その子供には母親がないこと、母親は急性の病氣のために死んだことだけを私は知つた。

そこで私は焦げたプデングのにほひを分析の出發點にとらうと決心した。私はこの分析の歷史をお話したい。それは適當な狀態の下で起り得たのであつた。眞實は僅か一囘の問診だけで十分出來ることが數囘にわたつたのである。といふのは患者は私の診察時間にしかやつてくることが出來なかつた。その時私は彼女のためにほん僅かの時間しか費せなかつた。そして職務のために彼女は遠い工場からそんなにしげしげ私の家にやつてくることが許されなかつたために、一囘で濟む談話も一週間以上もかかつたのである。このために私達は途中で談話を打切つて、次回に會

ふ時に同じ話の緒口を又ぞろ拾はねばならなかつた。
ルシー孃に催眠術をかけた時に、彼女は夢遊狀態にならなかつた。そこで私は夢遊狀態をやめて、彼女に對する全分析を正常な狀態と大した逕庭のない狀態で行つたのである。
私の操作のテクニークにおけるこの點を私は詳細に述べなくてはならぬ。一千八百八十九年にナンシーのクリニークを訪問した時に、私は催眠術の老大家なるリエボー博士が「いかなる人間をも夢遊狀態に出來る手段を私達が所有するなら、催眠的治療法はあなゆる治療法のうちの最も强力なものとなるであらう。」といふ言葉を聞いた。ベルンハイムのクリニークにおいて、本當にさういふ術が存してゐるやうな、その術をベルンハイムから學ぶことが出來るやうな印象を受けた。併しこの術を私が患者に實施しようと試みるや否や、少くともこの方面における私の實力には非常なる限度があること、二三回の試みの後患者が夢遊狀態にならぬ場合は、患者をその狀態に導く他の手段を私は一つも持つてゐないことに氣が附いた。だが夢遊狀態になる人間の百分率は私の經驗ではベルンハイムの報告した百分率に較べて遙かに劣つてゐた。
そこで私は、適當と思はれる大概の症例に瀉下法をかけるものか、或は夢遊狀態の外に催眠的影響の少い若くは疑はしい症例に瀉下法をかけるものか、その選擇に迷つた。催眠狀態のどれほ

どの深度がこれに用ひられる尺度に從つて――夢遊でない狀態に該當するかは私にはどうでもよいやうに思はれた。といふのは、暗示性のどの方向も元來他の方向に依存しない。そしてカタレプシー、自動的運動等々の喚起は、私が入用とするやうに、忘却した回想の覺醒を容易ならしめるために何ものも豫斷しない。私は早速に催眠狀態の深度を定めなくてはならぬやうな試みの計畫を抛棄した。その理由はかういふ計畫は症例の全數において患者の抵抗を刺激し、重要な心的作業の上に必要な私の信用を濁してしまふからである。加ふるに、「おねむりなさい。おねむりなさい。」といふ保證と命令において、深度の淺い催眠狀態において「でも先生、私はねむられません。」といふ抗議をいつでも聞かされ、それから「私は普通の睡眠を申してゐるのでありません。催眠狀態をいふのです。あなたは催眠術にかけられてゐるのが分かりませう。目をあけては駄目ですよ。何も本當に寢込まなくてもよいのです。」といふやう大變あぶなつかしい區別を言はねばならなくて、私はうんざりしてしまつた。精神療法を行つてゐる私の多數の同僚は私より遙に巧妙にこの難局を切り拔けることを心得てゐると私は信じてゐる。彼等は臨機應變に違つたやうに行ふであらう。然しながら、一つの言葉の使用によつて狼狽に陷ることをかほど迄頻繁に見積らねばならぬなら、さやうな言葉、さやうな狼狽を取り除く方がよいと私は思ふ。そこでこの最初

の試みにおいて、夢遊狀態とか、ある深度の催眠狀態を著明な肉體的變化と共に喚起さすことが出來ぬ場合は、私は催眠術をやめてしまつたやうな顏をし、ただ「精神集中」だけを要求し、仰臥を命じ、この「精神集中」に至る方法として任意に眼を閉づるやうに命じた。私はこのやうにして能ふ限り深い程度の催眠狀態を極めて容易に作つたのである。

併し夢遊狀態を抛棄したために、瀉下療法を行ふ上に不可缺な準備條件を失ふことになつた。患者が變化した意識狀態においてかやうな回想を行使し、正常な意識狀態では一見存在してゐないやうな關聯を認識するといふところに瀉下療法の本領は存してゐる。記憶の夢遊狀態的擴大が脫失してゐる場合には、患者が自分に既知のものとして醫者に提供出來ないやうな因果關係を作るべき可能性も脫失しなければならなかつた。そして「正常なる精神狀態における患者の記憶の中には完全に缺損してゐる、あるひはたかだか概要的に記憶の中に存してゐるに過ぎない」(豫報)ものこそ病原的回想であるのである。夢遊狀態の回想は覺醒狀態にあつては單に見かけだけ忘れられたものであり、他の意識狀態を指示すると見るべき一寸した骨と結ばれた僅の督促によつて再び喚起されるといふ證據を、ベルンハイム自らが私に見せて吳れたといふ追憶がこの新しい困却から私を救つて吳れた。例へばベルンハイムは夢遊狀態にある女に私は最早この席にゐな

いといふ陰性幻覺を與へ、ついで種々さまざまな方法で遠慮會釋のない攻擊によつて彼女の注意を惹くやうに努めた。それは成功しなかつた。患者が醒めたあとで、私はこの席にゐないと彼女が信じてゐる間に、彼は彼女と何を行つたかを知りたいと要求した。彼女は非常に驚いて自分は何にも知らないと返答した。併しベルンハイムは承知せずに、あなたは皆な殘らず思ひ出すだらうと頑張つて、彼女の額に手をあてて注意を一點に集中せしめた。その時彼女はたうとう夢遊狀態において一見氣附いてゐなかつた、覺醒狀態において一見知つてゐなかつたすべてのことを語つたのである。

この驚歎すべき有益な實驗こそ私が拜借しようとするお手本であつた。私の女患者は病原的意義を有してゐたすべてのものを知つてゐる、彼女に報告を强制することが緊要であるといふ前提から出發しようと私は決心した。そこで私が「いつからこの症狀が出ましたか」あるひは「何が原因ですか」といふ質問に對して「私はまるで存じてゐません」といふ返答を得るといふ一點に到達した時に、私は次のやうな操作を行つた。患者の額に手をあてるとか、或ひは患者の頭部を兩手で挾んで「只今私が手を押します時にあなたに聯想が浮びませう。私が手を放します瞬間に、あなたの眼に何か映りませう。頭の中を何かある聯想が走りませう。そいつを一つ捕まへて

りましたか。」と申した。

貰ひませう。それこそ私達が探してゐるものであります。――さあ。何か見えましたか。何か映

この方法をはじめて應用した時に（ルシー孃が實ははじめてではない）、それは丁度私が必要としてゐるものを提供して與れることを知つて自分ながら感心した。そして私はかう言つてもよかつた。それ以來この方法はもう一日といへども私を見捨てなかつた、私の探究の進むべき正道を常に私に指示して與れ、夢遊狀態など借らなくとも、かやうな分析を終結までに漕ぎつけるやうにして與れた。私はだんだん大膽になつて、「何も見えません」とか「何も浮びません」とか返辭をする患者に、そんな筈がないと頑張るまでになつて來た。患者は確かに正しいものを知つてゐるのだ。それをさうだと信じないだけだ。それを握り潰してしまふだけだ。私は懲り性もなく幾度も同じ操作を繰返へす。患者はいつでも同じものを見るであらう。確かに私のやり方は正しかつた。患者は自分の批判を鎭めることを未だ學んでゐなかつた。浮んだ囘想とか聯想を、適切なものでないとか、餘計な邪魔者だとかの理由で握り潰してしまつた。そして患者がさういふものを眞直に報告したあとで、それが正しいものであることがいつでも分かつたのである。私が三度、四度と頭を壓へて報告を强制した時に、私は折々「ああ。これなら實は一番最初の時に浮ん

だのでありますが、どうも口に出したくなかつたのです。」とか「實はそれがさうでないことを希望してゐたんですが。」とかいふ返答を持つた。

この方法によつて一見縮小された意識を擴大することは、夢遊狀態で探究するよりも數倍も苦心を要するものであつたが、この方法は私を夢遊狀態と無關係にさし、回想の「忘却」に對してしばしば決定的である動機への洞察を私に許して呉れた。この忘却はしばしば故意の、ことさら望んでゐたものであると私は主張することが出來た。それはいつも見かけだけで成功した忘却である。

一見すつかり忘却して了つてゐる數とか日附を同じ操作で思ひ出さしめ、その結果記憶の思ひもかけぬ忠實さが證明出來たのは、私にとつては誠に注目すべきものに思はれた。

數とか日附の追求において現れる僅少の選擇は、失語症の學說から知らるる公理「認識するといふことは偶然に思ひ出すことに比較して記憶の働きは僅少ですむ」といふことを利用するやうに許して呉れる。

どうしても思ひ出さぬといふ患者に、ある事件は何年何月に、又何日に起つたか、その事件が起つたと思はれる年數や十二箇月の月名や三十一日の日數を數へてやつて、正しい數、正しい名

前の時に眼を開くであらうとか、或ひはどの數を正しいと感ずるであらうと保證してやる。大抵の場合、患者はその時實際にある一定の日附に贊成し、よくあるやうに（例へばチェチリー夫人の場合のやうに）、その日附が正しく認められた事がその時代の何かの記事から裏書されるのである。他の場合、別の患者では、回想された事實との關聯から、このやうにして發見された日附が確然たるものであることが明白になる。例へば數を數へてやつて日附が發見出來たあとで、「この日附は父の誕生日であります。」と述べて、「確かにさうです。この日は父の誕生日でありました故に、私達がお話してゐますこの事件を豫想しました。」

私はこの題目に一寸觸れることが出來る。私がこれらすべての經驗から下した結論は、たとひ忘却してゐるやうに見えるとも、たとひそれを思ひ出す能力が患者に缺けてゐるようとも、病原的に重要な經驗はそれに隨伴するすべての狀況と共に記憶に保存されてゐるといふことであつた。（1）

（1）夢遊的でない狀態における、卽ち擴大される意識におけない訊問の上のテクニークの實例に、私は最近に分析した症例をお話したいと思ふ。私は三十八歲の恐怖神經症（アゴラホビー、死の恐怖發作等）に罹つてゐる婦人を治療した。この病氣の澤山の患者と同じに彼女はこの病氣に結婚生活にはひつて

から罹つたと告白するのを厭がつて、この病氣はずつと子供時代からあつたと言ひたかつたのである。彼女が十七歲の時に自分の小さい鄕里の町の街頭で恐怖と卒倒感を伴つた最初の眩暈發作を持つたこと、この發作は時々再發して、數年前からこの發作がなくなつてその代りに現在の疾患が現れたと私に報告した。恐怖がますます拭はれて行くこの最初の發作はヒステリー性のものだつたと私は臆測した。そしてこの發作の分析に着手しようと決心した。大通の商店で買物をするために外出してゐる最中に、この最初の發作が自分を襲つたことだけを彼女は知つてゐた。――あなたは一體何を買ふ積りでしたか。――いろんなものを。丁度招待されてゐました舞踊會に入用なものだつたと信じます。――その舞踊會はいつ開催されるのでしたか。――丁度二日の後だつたと思ひます。――その數日前にあなたを興奮さすやうな、あなたに感銘を與へるやうなことが起つたに相違ないでせうね。――でも私は覺えてゐません。もう二十一年も昔のことですもの。――そんなことは關係しません。あなたはきつと思ひ出す筈です。あなたの頭を壓へませう。そして手を緩めました時に、あなたの頭に何か浮びませう。あなたの眼に何か映りませう。それを仰しやつて下さい……。私はその操作を行つた。併し彼女は默つてゐた。――何も浮びませんか。――あることが浮びました。でもそれはまるで緣故のないものでございます。――仰しやいませ。――一人の女友達が頭に浮びました。この世にゐない若い娘さんが。その娘さんは私が十八歲の時に、丁度それから一年後に死にしました。――よろしいです。一つその娘さんの話をして貰ひませう。そのお友達をど

うしましたか。――そのお友達と仲よくしてゐましたので、その人の死んだことは私に非常な感動を與へました。丁度その數週前にその町の小町娘と唄はれた若い娘さんが死にました。その時私は十七歳でございました。――手をおして頭に浮び上つたものは信頼出來るものだと私があなたに申上げたことがお分かりになつたでせう。それでは次に、街頭で眩暈の發作が起りました時に、あなたはどんなことを考へていらしたかを一つ思ひ出して貰ひませう。――その時何にも考へてゐませんでした。ただ眩暈だけが起つたのでございます。――そんな筈がありません。かういふ狀態の時にはきつとそれに伴つてある觀念が存してゐる筈です。もう一度手でおさへませう。そしておさへました時にその時の考へがあなたに浮びませう。――どんなことが浮びましたか。――今度こそ私の番だといふことが浮びました。――それはどういふ意味なのです。――丁度眩暈發作の時に、あの二人の若い娘さんと同じに今度は今が死ぬのだと考へずにをられませんでした。――成程それがその時の觀念でしたね。發作の時にあなたはお友達のことを考へたのですね。そのお友達の死はあなたを隨分感動さしたに相違ありません。――本當にさうでございます。お友達の死を聞きました時に、私はとても恐ろしく感じたことを今でも思ひ出します。それにお友達が死んでゐるのに私は舞踊會に行かねばなりません。私は舞踊會が樂しみでございました。そして買物に夢我夢中になつてゐました。私はあの悲しい出來事を決して思ひ出すまいとしました。（友達の回想を病原的にせしめる意識からの故意の抑壓に留意して欲しい。）

今や發作はある程度迄闡明された。併し私は丁度その時この回想を誘發せしめた偶然の要素をなほ必要とした。そしてそれに關して私は思ひもかけず幸福な臆測をたてた。――その時どの通を歩いてゐたかをはつきり覺えてゐませんか。――覺えてゐます。古い家が並んでゐます。大通でございます。只今その大通が眼に映ります。――それではあなたのお友達はどこに棲まつてゐましたか。――その大通に面した家でございます。私はお友達の家の前を通り過ぎました。それから二軒行つたところで發作が起りました。――あなたが通りすがりに死んだお友達を思ひ出したのはその家だつたのですね。その時何も考へまいと思はれた對照が再びあなたをつかまへたのですね。

私は未だ滿足でなかつた。この日迄正常であつた娘に、ヒステリー素因を喚起さす、或ひは强めるところの何か他のものが恐らく存在してゐた筈である。私の臆測はそれに適當な要素としての周期的不快にさしむけられた。そして私は尋ねた。その月の何日頃に月經があつたか覺えてゐますか。――彼女はむつとした。そんなことを今頃覺えてゐるものですか。その當時月經は非常に少なく又非常に不順であつたことだけ覺えてゐます。十七歲の時にはたつた一回限りしか月經がありませんでした。――月經がいつあつたかを一つ數へてみませう。――數をかぞへるうちに月經のあつた月ははつきり分かつた。そして月經のあつた日の方は祭日にあたる日附の前の二日の間を動搖した。――兎に角それは舞踊會の日に合致してゐるのですね。――彼女は低聲で返辭した。――舞踊會は丁度祭日でありました。その年に現れたたつた一度

の月經が折惡しく舞踊會の前日に現れたことが私の印象に殘つたことを只今思ひ出しました。舞踊會に招待されたのはこれが最初でありましたもの。

只今事件の聯絡を容易に構成することが出來る。そしてこのヒステリー發作の機構が洞察出來る。確かにこの結果は非常な苦心ののちに得られたものであつた。覺醒時にある懷疑的な女患者に二十一年前の忘却裡の事件をこのやうに詳細な點まで蘇生さすために、私の方からの技術の十分な信頼と箇々の指導する聯想を必要とした。併しその時すべてはうまく辻褄に合つてゐた。

餘儀なくもこんなに長く話が脇道に逸れたがこれから一つルシー孃の物語に戻ることにしよう。さて彼女は催眠術をかけた時に夢遊狀態にならなかつた。彼女は眼をぢつと閉ざし、幾分か緊張した顔附をし、肢體を不動のままにし、ある程度の輕い感化狀態において、單に平靜に横たはつてゐるだけであつた。私は彼女に、どういふきつかけにプデングの焦げたにほひの感覺が鼻につくやうになつたか覺えてゐるかと質問した。——はい。私ははつきり存じてゐます。それは丁度二箇月前の、私の誕生日にあたります日の二日前でございました。私はお子さん達と一緒に勉强室にをりまして、皆なに(二人の娘の子)お料理を敎へてゐました。その時郵便屋さんがほりこんだばかしの一封の手紙を戴きました。その局名のスタンプとその宛名の筆蹟から、グラスゴ

ーにをりまする母からの手紙だといふことが分かりました。私は早速に封を切つて讀みたいと思ひました。その時お子さんが私にしがみついて來て、私の手から手紙をひつたくつて叫びました。「いけませんわ。今お讀みになつてはいけませんわ。これはきつとあんたの誕生日のお祝でせう。誕生日まであたい達がおあづかりしておきませう。」お子さん達がこのやうに私にふざけまはつてゐるうちに、突然に焦臭いにほひが漲りました。丁度煮てゐましたプデングの御馳走をお子さん達がついそのままにして忘れてゐましたため、焦げついてしまつたのでございます。その時以來そのにほひが私の鼻についてしまひました。そのにほひは本當に私の鼻先についてをります。氣がいらいらいたしまする時には、そのにほひは一層強くなります。

その時の光景がはつきりあなたの眼に映りますか。――まるでその當時そのままのやうにはつきり眼に映ります。――あなたをそんなに興奮さしたのは一體なんですか。――お子さん達が私にあまりやさしくして下さいますのが、私をひどく感動さしました。――お子さん達はいつもあなたにやさしくはなかつたのですか。――いつでもさうではございません。私が母の手紙を受けとつた時は特別でございました。――お子さん達のやさしさとお母さんのお手紙があなたには隨分密接に見えますが、又どうしてそんなコントラストになつたのか、私にはどうも合點が行きま

せんね。――私は母のところへ歸りたいと思つてゐました。そしてこの時こんな可愛いお子さん達を棄てて行くのはと考へてもう胸が一杯になりました。――あなたのお母さんはどうしていらつしやいますか。お母さんはお一人で淋しいのであなたをお呼び寄せになつたのですか。それともその當時御病氣であなたのお便りを待つていらしたのですか。――いいえ。母は虚弱ではありますが、病氣ではございません。母のお相手をして呉れます女の人が一緒にをります。――それではどういふ譯であなたはお子さん達の家を出なければならなかつたのですか。――私はお邸にいづらうございました。家政婦や料理女、それに佛蘭西女までが、私が自分の地位を鼻にかけてゐると陰口をきいてゐるやうに思はれました。みんなの者がぐるになつて私の惡口を言つて、お子さんのお祖父樣に、私のあることないことを告口いたしました。私がお祖父樣と御主人樣に言譯をいたしました時に、私が豫想してゐましたやうな御好意がお二方にないのを知りました。私は早速に御主人樣にお暇をお願ひいたしました。その御主人樣は、私が最後の決心をきめる迄二週間の猶豫を與へるから、もう一度篤と考へ直してみるがよいといふ、大變御親切な御返辭を下さいました。その當時私は大變ぐらぐらして決心がつきませんでした。このお邸からお暇を戴く方がよいと考へてゐましたものの、矢張私はそのままずつとお邸に勤めてゐるのでございます。

――お子さんがあなたにやさしくして下さるといふ以外、あなたは何か特別にお子さんにひかされるものがありますか。――はい。お子さんのお母さんは私の母の遠緣にあたつてゐました。そのお母さんの臨終に、私はどんなことがあつてもお子さん達を引受けませう、私はお子さん達のお側に一生ゐて、お母さん代りになつてしつかりやりませうとお約束いたしました。私がお暇を戴けばそのお約束を破つてしまふことになります。

このやうにして自覺的な嗅覺の分析は完結したやうに思はれた。この自覺的な嗅覺は事實嘗ては他覺的な嗅覺であつたのである。詳しくいへば、それは一つの經驗、一つの小さい光景と密接に關聯してゐたのである。この光景の中に、あひ抗爭する情緖、子供達と別れようとする悲哀と彼女をこの決心にまで思ひ詰めさした侮辱が對立し合つたのであつた。母の手紙は彼女に當然にこの決心への動機を思ひ起さしめた。といふのは彼女はお邸から母のところへ歸らうと考へてゐたからである。情緖の葛藤は外傷への契機を與へた。そして外傷の象徵としてそれにからまるにほひの感覺が彼女にこびりついてしまつた。彼女があの光景に對するすべての知覺的認識から特に一つのにほひといふものを象徵に選擇したことについてなほ說明を必要とする。併し彼女の鼻の慢性疾患がこの說明の鍵を與へることを私は旣に用意しておいた。私の短刀直入の說明に對し

て、彼女は丁度その當時非常にきつい鼻風邪をひいて、もののにほひが殆ど分からないぐらゐであつたと答へた。それにも拘らず、彼女はプデングの焦げたにほひをその興奮の中で知つた。そのにほひは器質的に發してゐる嗅覺脱失を突發せしめたのであつた。

そのやうにして得た說明だけに私は滿足しなかつた。すべては成程と頷ける程度を越えてゐない。この說明にはあるものが缺けてゐる。

興奮のこの系列と情緒のこの抗爭が何故にヒステリーに至らねばならなかつたかといふ當然あがるべき理由が缺けてゐる。何故に正當な精神生活の土臺の上に一切のものが存存してゐなかつたのか。換言すれば、只今問題としてゐる談話は何によつて正當化されるか。彼女は何故に回想に對する象徵として選擇したところの、光景に結びつく感動の代りに、光景そのものを常に思ひ出さなかつたのか。轉化のこの機構が常習的である年とつたヒステリー女を取扱ふ場合には、このやうな質問は出過ぎた餘計なものではあるが、この娘の方はこの外傷によつてはじめて、少くともこの小さい哀話によつてはじめてヒステリーに罹つたのであつた。

同じやうな症例の分析から、私は旣に、ヒステリーが新しく獲得さるべき場合には、一つの心的條件がこのために不可缺なものであること、詳しく言へば、一つの觀念が故意に意識から抑壓

され、聯想的推敲から除外されるものであることを知つたのである。

私はまたこの故意な抑壓の中に、全部的であるか部分的であるかは問題外にして興奮總量の轉化に對する理由を看取した。心的聯想にはひらない興奮總量はもつと容易に肉體的表出への間違つた道を發見する。抑壓自體の理由とするものは一つの不快感覺であり、抑壓さるべき觀念と自我の支配的なる觀念群との不調和に存してゐる。併し抑壓された觀念は自らが病原的になることによつて自らに復讐するのである。

この事實からルシー孃はあの瞬間においてヒステリー性轉化に陷つたこと、あの外傷の前提として、彼女が故意に曖昧にしようとした、彼女が努めて忘れようとしたあるものが存在しなくてはならなかつたといふ推論が湧いてくる。

子供達に對する愛情と召使の人達に對する敏感を合せ考へるなら、かういふすべてのことは結局たつた一つの解釋を許す。私は勇氣を奮つて女患者にこの解釋を報告した。私は彼女にかう言つた。「かういふすべてのことが二人のお子さんに對するあなたの感情の原因をなしてゐるとは私にはどうも考へられません。むしろあなたは御主人に、工場主のお方に、勿論御自身にはお氣附にならないでせうが、戀していらつしやるのだ、あなたは實際なくなられたお母さんの代りを

務めたいといふ希望を、懷いてをられたのだと私は臆測します。そのためにこそあなたは數年間も平和に一緒に暮らしてこられた召使の人達に對して感じやすくなつたのです。これ等の人達があなたの希望をかぎつけて、そのためにあなたを嘲笑するだらうとあなたは勝手に恐れてをられます。」

彼女の返答は簡單にして明瞭であつた。はい。その通りだと私は思ひます。――併しあなたが御主人に戀してゐるといふことをいつ頃意識しましたか。あなたはどう言ふ譯でそれを私に話さなかつたのですか。――私はちつとも存じてゐませんでした。むしろ私は意識しようとは思はなかつたのでございませう。私は頭の中からそんな考へを逐ひ出さうと思ひました。そんな事はもう決して考へまいと思ひました。そしてたうとう最近になつてそれに成功したと信じます。(1)

(1) 人があることを知り同時にあることを知らないといふ特有な狀態を、これ以上うまく敍述したものを私ば擧げることが出來ない。自らがかやうな狀態に處してゐる時にのみ人はそれを明白に理解することが出來る。私は今もいきいきと眼に殘つてゐるこの種の非常に奇怪な回想を手にしてゐる。その當時私の心に起つたものを回想しようと努力する時に、私の得るものは非常に貧弱である。私はその時私の期待に全然はづれてゐるあるものを見た。私の見たものは少くとも私のある目的からはづれてはゐなかつたが

この認識は私の目的を廢棄さすべきものであつた。私はこの矛盾を意識しなかつたし、又この認識が何等心的效力に達しなかつたことに全責任のある反撥の情緒に私は殆ど氣が附かなかつた。娘に對する母親において、妻に對する夫において、寵臣に對する君主において人が非常に驚歎する、見える眼におけるあの盲目に私はかかつてゐたのであつた。

どういふ譯であなたは、この愛情を自らに認めようとされなかつたのですか。男の方を愛するといふことをあなたは羞しく思つていらつしやるのですか。――いいえ。私はさう無暗なはにかみ屋さんではありません。人といふものは感情に對してさう責任を負ふ必要はありません。それが苟しくも一家の御主人樣でありますために私は煩悶いたしました。私はその御主人樣に召使はれてゐる身分でございます。お邸に寄宿してをる身分でございます。さういふお方に對して他のお方に對すると同じに赤の他人のやうな氣持を感ずることは出來ません。それに私は貧乏な家の娘でございますし、御主人樣は名門のお金持のお方でございます。萬一他人が私の心を嗅附けましたなら、私はきつと大勢の物笑の種となつたことでありませう。

この愛情の起原を闡明する上にこの後私は何の抵抗にも會はなかつた。その家に住むやうになつた最初の一年間は、何のわだかまりもなしに、果敢い望も心に描くこともなしに、その日その

日の職務にいそしんでゐたと彼女は語つた。ある日のこと、嚴格な多忙な、いつもは彼女に遠慮勝ちの主人が子供の教育上の注文について彼女にいろいろ物語つた。主人はいつもよりやさしく溫くあつた。母親のない子供の教育のために私はどれ程あなたを賴りにしてゐるか分からないと彼女に述べた。さう言ひつつ彼女をぢつと見詰めた……この瞬間に彼女は主人を愛し始めた。そしてこの談話から汲み出せる樂しい希望に、彼女自ら好んで耽けるやうになつた。併しその後別段これといふこともなく、いくら待つてもいくら辛抱してゐても、あのやうな親しい話はその後二度とかはされなかつたために、そんなことはもう考へまいと、彼女は決心したのであつた。あの談話中に主人がぢつと見詰めたのは、なくなつた奧さんの追憶に耽つてゐたのでせうといふ私の說明に彼女は同意した。そして彼女の愛情が全然見込のないものであることも明瞭になつた。

私はこの談話から彼女の症狀は根本的に變化するだらうと期待してゐたのに、當分の間は依然として同じ狀態であつた。彼女はますます沈鬱になりますます不機嫌になつて行つた。私が同時に命じてゐた水療法は朝のうちは幾分か彼女の氣分を淸新にして、プデングの焦げたにほひは完全に消失はしなかつたが、次第に少く次第に弱くなつて行つた。彼女の言ふところによると、非

常に興奮する時だけ、そのにほひが鼻についた。
この回想象徴の持續は私をして、それは主要光景以外多數の小さい副外傷の代表を藏してゐると想像せしめた。そこで私は焦げたプデングのにほひと他の點で關聯してゐるらしい一切のものを探究し、邸内の軋轢とか祖父の態度等々の題目を取調べた。このやうにするうちに焦げたにほひの感覺はだんだんと消失して行つた。この頃に鼻の疾患が又ぞろ再發したために、私の方も長い間休止しなければならなかつた。この鼻の疾患は篩骨の骨瘍から來てゐることが今度しつかり分かつたのであつた。
彼女が再び訪れた時に、私はクリスマスに御主人樣二人からも、おまけに邸の召使の人達からも澤山の贈物を戴いた。まるでみんなが私と仲直りをし、この間の紛議の回想を私から拭はうと努めてゐるやうであつたと彼女は報告した。だが彼等のこの公然たる迎合は彼女に何の感銘も與へなかつた。
私が別の機會に再びプデングの焦げたにほひを質問した時にあのにほひはもうすつかり鼻につかなくなつたが、その代りに私は別のそれとよく似たにほひ、葉卷のやうなにほひが鼻につき出して困つてゐるといふ報告を聞いた。葉卷のやうなにほひは以前から鼻についてゐたのであつた

が、プデングのにほひで掩はれてゐたのであつた。今やそのにほひが純粹に出て來たのである。

私は自分の治療の效果に大して滿足しなかつた。私の治療で行はれたものは、單なる對症療法の咎に歸せしめねばならぬものであつた。一つの症候をとりのぞくことは、その代りに新しい症候が出しやばる場所を作つてやるだけに過ぎぬ。そこで私はこの新しい回想象徴の分析的除去にとりかかつた。

併しこの自覺的嗅覺がどこに由來してゐるか、それがいかなる重要な機會に自覺的になつたかを彼女は今度は覺えてゐなかつた。「毎日のやうにお邸ではみなさんが煙草を吹かしていらつしやいます。私の鼻につきますにほひが特別な機會を意味してをりますものか、私にはさつぱり見當がつきません」と彼女は申した。そこで私は例によつて私が手をおさへました時にあなたは何を浮べるかを試みてみませうと提案した。彼女の回想が造形的ないきいきしたものであること、彼女は「眼に浮べる」人であることを私は既に述べておいた。事實私の强制の下に彼女に一つの光景が最初のほどはためらふやうに僅かに斷片的に浮び上つて來た。それは彼女のお邸の食堂である。彼女は食堂で子供達と一緒に主人が工場から午餐に歸つてくるのを待つてゐた。――とうとう私達はそろつてテーブルに、御主人樣、佛蘭西女、家政婦、お子さん、それに私といふ順でつ

きました。併しそれはいつもと別に變つたところがございません。――その光景をぢつと見續けてゐて下さい。それは今に展開して複雜になりますよ。――ええ、そこへお客さんがこられました。會計課の主任のお方でございます。年とつた紳士のお方でございます。そのお方はここのお子さん達をそらあまるで自分のお孫さんのやうにお可愛がりになります。よく中飯時にお越しになりますので、それは別に變つたことでもありません。――ぢつとしてゐて下さい。その光景をぢつと見詰めてゐて下さい。何か變つたことが起つたでせう。――別に變つたことは起りません。私達はお食事をすましました。お子さん達はお辭儀をなさいまして、いつものやうに、私達と一緒に二階の方に出て行かれます。――よろしいですか。――でもいつもと違つてゐます。今その光景が目に映ります。お子さん達がお辭儀をされました時に、主任のお方がお子さんに接吻しようとされました。その瞬間、御主人樣がつとお立ちになつて「子供に接吻はよして呉れ。」とそのお方にえらい劍幕でお叫びになりました。その時私ははつといたしました。そして御主人樣もお客樣も丁度葉卷を吹いていらつしやいましたから、そのにほひが私の記憶に殘つたのでございます。

これは第二のさらに深部に存してゐる光景である。この光景が外傷として作用して回想象徵を

殘したのである。だがこの光景の作用力は何に基づいてゐるのであるか。――私は尋ねた。この光景とさきのこけたプデングの光景と、どちらが先きに起つたのですか。――あとの方が先きです。そして殆ど二箇月先きに起つたのでございます。お父さんがおとめになつた時にどういふ譯であなたはつとされたのでありますか。何もあなたをお叱りになつたといふ譯ではないのでせうに。――でも御老人にそんなに、親しいお友達であるお方、お客にこられたお方に對してそんなにえらい權幕で物を仰しやるのは間違つてをりますわ。もつとやさしく仰しやるべきでありませうのに。――あなたは御主人の劍幕にはつとされたのですね。恐らくあなたは御主人に對して恥しく思はれたのですね。或ひは御主人がそんなつまらぬことで年とつたお友達のしかもお客においでになつたお方にあんなにまでひどく仰しやるのなら、私が萬一あの人の奥さんであつたなら、あの人は私に對してどんな仕打をされるだらうとお考へになつたのですか。――いいえ。そんなことは考へませんわ。――ですが、やつぱりあのひどい劍幕のためであつたのでせうね。――ええ。お子さんの接吻のためでございます。御主人樣はそんなことをお好みになりません。――そして私が再び手でおした時にもつと古い光景の回想が浮び上つて來た。その光景は眞に有力な外傷であり、又さきの主任の光景に外傷的効力を與へたものであつた。

丁度さきの事件の數箇月前に起つたことであるが。友人關係の婦人が訪問して、歸る際に二人の子供の口に接吻した。その時側にゐた父はこれを見たが、ぢつと辛抱して婦人に何も口に出して言はなかつたが、その婦人が歸つてしまつてから、可哀相にもこの家庭敎師に向つて彼は怒を爆發さした。主人は彼女に向つて、何人といへども子供の口に接吻などするなら、それは君の責任である、そんなことをしないやうに制するのが君の義務である、そして君がそれを許すのなら君は自分の義務を怠つたことになると說明した。再びこんなことがあれば、僕は折角だが子供の敎育はあなた以外の人の手にお任かせするばかしだとも言つた。丁度その當時は、彼女が主人から愛されてゐると信じてゐた頃であつた。あの最初の親しい物語がもう一度繰返へされないだらうかと心待にしてゐた頃であつた。この光景は彼女の希望を壓折つてしまつた。彼女は心の中で呟いた。御主人樣がこんなつまらないことのために、そして私には何も落度もないのに、私にこんなにお當りになり、私にこんな脅迫がましい言葉をお吐きになるとすれば、私はすつかり思ひ違ひをしてゐたのだ。あのお方は私などにまるで好意など持つてをられなかつたのだ。本當にもつと愼重な態度をとつて欲しい。——あの主任が子供達に接吻しようとして父から叱りつけられた時に、彼女の心に浮んだものは明かにこの悲しい光景に對する囘想であつたのである。

ルシー孃がこの最後の分析の二日後に再び私の診察室を訪れた時に、私は彼女に何か嬉しいことがあつたのですかとつい質問しなければならなかつた。

彼女は生れ變つたやうににこにこして最早頭を垂れてゐなかつた。この瞬間、私はやつぱり狀況に誤つた判斷を下してゐたのだ、子供の家庭敎師は今度こそ工場主の花嫁になつたのだと考へた。だが彼女は私の推察をはねとばした。「ちつとも嬉しいことなどございません。先生はふだんの私を知つていらつしやいません。先生は病氣の時の機嫌の惡い時の私だけを御覽になつていらしたのですもの。いつもの私は本當に快活なのでございます。昨朝眼を覺しました時にあの重苦しいものがすつかりなくなつてゐました。そしてそれ以來私はもう健康になりました。——ではお邸でのあなたの見込をどうお考へですか。——私は大變はつきりしてゐます。私は見込などもう持つてゐないことを知つてゐます。でもさうだと言つて私はちつとも不幸ではございません。——そしてあなたはお邸の人達と仲直りをするつもりですか。——仲直りが出來ると信じます。いろんなことは私の神經がとがつてゐたせゐでございます。——そしてあなたはやつぱり御主人を愛してをられますか。——はい。愛してをります。でもそれ以上何のこともございません。人間と申すものは自分の好きなことを考へ、自分の好きなことを感ずることが出來ます。

この時私は彼女の鼻腔を検査した。そして痛覺も反射も完全に回復してゐるのを知つた。彼女はにほひをも識別した。勿論はつきりではないが、にほひの强いものだけはしつかり分かつた。併し鼻の疾患がこの嗅覺脫失にどれだけ關係してゐるかを私は決定せずに棄ててしまはねばならなかつた。

全治療期間は九週間にわたつた。それから四箇月の後私はある避暑地で偶然この女患者に行き會つた。彼女はいきいきしてゐた。そして健康はあれ以來ずつとよいと保證して吳れたのであつた。

批判

只今お話した症例がたとひ輕症の小ヒステリーに相當し僅かの症候のみしか示し得なかつたといへ、私はこの症例を輕視したくはない。神經症としては貧弱なかやうな疾患ですら、かやうに澤山な心的前提を必要とするといふことはむしろ私を啓發するところである。そしてこの疾患史を詳細に批判することによつて、この症例をヒステリーの類型に對して典型的なものとして、卽ち遺傳を通して素因を有しない人が適當なる體驗をきつかけに獲得することの出來るやうなヒス

テリーの形態に對して典型的なものとして擧げたい氣持になつてくる。素因といふものにまるで關係のないヒステリーに就いて私が申してゐるのでないところに留意されたい。そのやうなヒステリーは恐らく存在しないだらう。人間がヒステリーになつて初めてかういふ種類の素因が問題になるのである。そんな素因などは何ものをもつてしても豫め證明出來るものでない。世人が普通に申してゐるやうな神經病的素因は別のものである。神經病的素因は發病の前に既に遺傳的素因の程度によつて或ひは個體の精神異常の總和によつて決定されてゐる。ルシー孃にあつては、私の研究した限りにおいてこの二つの要素の一つも證明することは出來なかつた。だから彼女のヒステリーは後天的のものと名附けてもよかつた。そして恐らく非常に廣く散在してゐる資格、ヒステリーが獲得出來る資格以外何ものも前提が出來ない。だが私達は未だこの資格の特徴を殆ど知つてゐないのである。併しこのやうな症例においては外傷の性質を、勿論外傷に對する人間の反應を念頭において重要視しなければならぬ。自我と自我に近づく觀念の間に矛盾の關係が生ずるといふことが、ヒステリーの獲得に對する不可缺な條件となる。種々なる神經症的障害がこの矛盾を解決するために「自我」の行ふ種々なる處置からどのやうに發するものかを他のところで指示出來ることを希望してゐる。防禦のヒステリー型——この防禦に對しては、特殊な資格が

要求される——は興奮を肉體的神經力に轉化するところに存してゐる。そしてこの際に得る利益は、矛盾する觀念が自我意識から抑壓されるといふことである。その代りに轉化によつて生じたところの肉體的囘想——只今の症例では自覺的な嗅覺——を含んでゐる。そして多かれ少なかれ明瞭にこの囘想に結びついてゐる情緒の下に自我意識は煩悶する。このやうにして作られた情況は今やこれ以上變化しなくなる。情緒の解決を要求した矛盾は抑壓と轉化によつて廢棄されたからである。ヒステリーが發生する機嫌は一方においては道德的臆病の行爲に相當してゐるが、他方においてその機構は自我を行使する防禦作用の姿を示してゐる。興奮增大をヒステリーの產出によつて防禦することが、その時にさへ最も合目的性なものであつたと承認しなければならぬ症例が澤山存してゐる。道德的に大いに勇敢にやる方が個體にとつては利益であつたと結論しなければならぬことがしばしばあるぐらゐである。

從つて眞の外傷的要素は矛盾が自我におしせまり、自我が矛盾する觀念の拒絕を決心するところに存してゐる。かやうな拒絕によつて矛盾する觀念は根絕されずに、單に無意識に抑壓されるだけである。萬一この過程がはじめて行はれるなら、自我から隔離される精神群の形成に核と結晶化中心が與へられ、その周圍に向つて幾層にも、矛盾する觀念の受理の前提をなした一切のも

のが集積される。かういふ點から、獲得されたヒステリーの症例では、意識の分裂は望んでゐたもの、故意のもの、しばしば少くとも自分勝手の行爲によつて導かれたものである。實際個體が目指してゐたものとは幾分違つた姿のものが出來上る。恰も何の關係もないもののやうに、一つの觀念を揚棄しようとするが、單にその觀念を心的に隔離することに成功するだけである。

私の女患者の物語においては、外傷的要素は主人が子供への接吻のために彼女を叱責したあの光景に相當してゐる。併しこの光景はその當座は目につくやうな作用を持たなかつた。不機嫌と神經過敏がそのために現れ始めたぐらゐの程度であつた。私はこれについては何も知つてゐない――ヒステリー症候はずつとあとで「補助的」と名附けらるべき動機において發生したのであつた。この動機において、二つの懸隔つた精神群がまるで擴大された夢遊的意識の中へのやうに合流するといふことを、この補助的意識の特徴として擧げたい程である。轉化が起るといふこれらの動機の一つは、ルシー孃においては、あの主任が子供達に接吻しようとした時の食卓の光景であつた。この光景の中に外傷的回想が渦巻いてゐる。そして恰も主人に對しての愛情に關聯する一切のものを彼女が處理しなかつたかのやうに彼女はふるまつてゐる。この種々なる動機は他の疾患史においては一つとなつて、轉化は外傷の作用下に直ちに惹起されるのである。

第二の補助的動機は可なり正確に第一の動機の機構を反復する。強い印象は意識の統一を一時的に建て直す。そして轉化は第一回目に作られたものと全く同一な道を走るのである。興味あるのは、第二回に發生した症候は第一回症の候を隱蔽し、そのために第一回の症候は第二回の症候が除去されるまでは明瞭に感ぜられないのである。順序の轉倒も私には注目すべきものに思はれた。かやうな轉倒に向つては分析もまた適應されねばならぬ。症候の全系列において同じことが現れた。例へばあとで現れた症候が初めの症候を蔽ひ、分析をおし進めた最後の症候がはじめて全體の鍵を惠んで具れたのである。

治療の中心は分裂した精神群を自我意識に結合さすやうに强制するところに存してゐる。その效果は行つた分析の尺度に平行しないのは注目すべきである。最後まで殘留する部分が解決されてはじめて回復が突然に招來されるのであつた。

三

カタリナ

一千八百九十年の暑中休暇にしばしの間醫學、殊に神經症から離れるために私はホーエン・タウエルンへの登山に旅立つた。ある日のこと連峯から孤立してゐるある離山に登るために本道からそれた。その離山は眺望が大きいことと行き屆いた旅館のあることで有名であつた。險しい山路を登りつめて山頂に達した私は元氣をもりかへして靜かに憩うた。そして縹渺たる大自然にうつとりとして坐つてゐた。私はもうすつくり恍惚としてゐたために、「先生はお醫者樣でございますか。」といふ聲が私に呼ばれてゐることに氣が附かないぐらゐであつた。併しその質問は私に向けられてゐるのであつた。そしてその聲の主は十八歳ぐらゐの娘さんであつた。その娘さんはかなり無愛想に食事のお給仕をして呉れて、お上さんからカタリナと呼ばれてゐた。着物から見ても、ものごしから見ても、彼女は女中では確かになかつた。この宿のお上さんの娘か親戚の

ものに相違なかつた。

思はず我に還つて私は答へた。「ええ。僕は醫者ですよ。あなたはどうしてお知りになつたのですか。」

「先生は宿帳にさうお書きになりました。そして先生に只今少しでもお暇がございますならと私は思つてゐたのでございます。――實は私は神經病に罹つてゐます。一度L町のお醫者さんに診ていただきまして、……病氣は少しはよくなりましたが、でもやつぱり未だにすつきりしないのでございます。」

私は又ぞろ神經症にとつつかまへられてしまつた。娘は大柄でがつしりしてゐたが、悲しみのためか面やつれしてゐた。それ以外別に變つたところも見えなかつた。海拔二千米の山頂にも神經症が繁茂してゐることは私の興味をひきつける。そこで私は早速次のやうな質問をした。

私達の間にとりかはされた談話を、私の記憶を辿つてここに書き記すことにしよう。

「どうお惡いのですか。」

「始終ではありませんが、息が苦しくなります。時々まるで息がつまるやうな氣がいたします。」

この症狀は第一に神經性のものでないやうだが、この症候は單に恐怖發作を代用する記號でな

くてはならぬと私には考へられた。恐怖の感覺錯綜のうちから彼女は不法にも呼吸困難といふ一つの要素を引立てた。
「まあお掛けなさい。その呼吸困難の狀態がどういふものなのか、一つ私に話して聞かせませんか。」
「突然に息が苦しくなります。一番はじめに眼がおさへつけられたやうになり、頭が重たくなつて耳鳴がしてまゐります。そして目まひがして卒倒するのではないかと思ふほどでございます。それから胸が絞められるやうになつて、息がすつかりつまつてしまひます。」
「その時頸のあたりに何も感じませんか。」
「首が絞められてまるで窒息するやうでございます。」
「そしてそれ以外頭に何か變つたことが起りませんか。」
「ええ、まるで心臟が裂けないかと思ふ程に胸がどきどきいたします。」
「さうですか。で、その時あなたは恐ろしくなりませんか。」
「本當にこはくなります。私は死ぬのではないかと思ひます。いつもなら私は實はそんなにこはがりではないのでございます。私はどこへでも一人でまゐります。穴藏へでも山里へでもみんな

一人でまゐります。でもさういふことが起りました日は私はもう自分を賴ることが出來ません。私のうしろに誰かがゐて、私の首を突然絞めるのではないかと思ふほどでございます。」

これは確かに恐怖發作である。そしてヒステリー性アウラの特徴を伴つてゐる。もつとうまく言へば、恐怖といふ内容を持つたヒステリー性發作を伴つてゐる。さういふ場合一體これ以外の内容があらうか。

「そんな發作が起つた時に、あなたはいつもどんなことを考へますか、あなたの目にどんなものが映りますか。」

「その時きまつたやうに私に恐ろしい顏が現れます。その顏がぢつと私を見つめます。私はもうたまらない程こはくなります。」

このことは事物の核心に一直線におし入る道を開いて吳れるやうであつた。

「顏が見えるといふのですね。その顏はあなたがいつか本當に御覽になつた顏でありますか。」

「いいえ。」

あなたは何のために發作を起すのか存じていらつしやいますか？——存じてをりません——。

そんな發作がはじめて起つたのはいつですか？——二年前でございます。丁度私は叔母と一緒に

未だ別の山にをりました。叔母は以前からその山に宿屋を經營してゐました。私達は一年半前からここへまいつてをるのでございます。併しこの山に來ましてもいつでもその顏が現れます。

私は進んで分析を試みなくてはならぬのか。私には催眠術をこの高山に植ゑつける勇氣が出なかつた。多分單純な談話によつて分析は成功するであらう。幸運にも私は推測しなければならなかつた。若い娘に現れる恐怖をしばしば私は、性の世界がはじめて展開された時に、處女の情緒を襲ふところの恐怖の結果と觀じてゐる。（1）

（1） 私がこの因果關係をはじめて發見した實例をここに述べたいと思ふ。私は複雜な神經症の若い夫人を治療してゐた。この夫人は現在の病氣を結婚生活にはひつてから持つた事を認めようとしなかつた。彼女は早くも娘時代から失神に導く程の恐怖發作に罹つたと反對した。私達は懇意な間柄であつたからある日のこと夫人は突然私にこんな話をした。「娘時代に私の恐怖狀態が何のために起つたかを只今先生にお話ししたいと思ひます。その當時は私は兩親の隣室に寢てゐました。ドアはあけたままで、卓子の上に明りがつけてありました。私は再々お父さんとお母さんがベツトで何をするかを見たのでございます。そしてあることを耳にしました。それは私を非常に興奮さしました。それから私は發作を持つやうになつたのでございます。」

そこで私はかう語つた。「あなたが御存じないなら、その發作が起つたことについて私が考へてゐることをあなたに申上げることにしませう。あなたは二年前に一度、何かあなたが非常に羞しく思はれるやうなこと、あなたがむしろ見たくないと思はるやうなことを、目にしたり或ひは耳にされたことはなかつたでせうか。」

それに對して娘はかう語る。「ございます。叔父さんが娘を、私の從姉のフランチスカをつかまへてゐるところを見ました。」

「その娘さんとどうしたといふのですか。私に話して下さいませんか。」

「お醫者さんにならら何でもすつかり打開けてもかまひません。御存じのやうにその叔父は先生が只今御覧になりましたあの叔母の夫でございます。その當時叔父は＊＊コーゲルで宿屋を叔母と一緒に經營してゐました、でも現在では別れてゐます。そして二人が夫婦別れをいたしましたのは私の罪でございます。私が叔父とフランチスカの關係をうつかり言つたのでございますもの。」

「どうしてあなたは見附けたのですか。」

「それはかうでございます。丁度二年前のある日のこと、一組のお客さまが山に登つておいでになりました。そしてお食事を注文されました。叔母は生憎留守でございました。それで料理の方

をすることになつてゐますフランチスカを探しましたが、どこをどう探しても見附けることが出來ませんでした。叔父もどこへ行つたのか姿も見せません。私の從弟にあたるアロアといふ男の子が『フランチスカは叔父さんとこにゐるんだよ』と言ひました。私達二人は聲をあげて笑ひました。でもその時私達は何にも惡いことを考へたのではございません。私達は叔父の寢起きいたします部屋にまゐりましたが鍵がかかつてゐてどうしてもあきません。この時私はどうも變だと思ひました。アロアは『廊下のところに窓がある。あすこからなら部屋の內がよく見える』と申しました。私達は廊下をのぼつて行きました。併しアロアの方は窓の側に行かうとしません。そして『こはい、こはい』と申しました。それを聞いて私は『隨分馬鹿な子ね。あたしは行くよ。ちつともこはくはないよ』と申しました。私の心には本當に惡いたくらみなどなかつたのでございます。私は窓から覗きこみました。部屋の中は可なり暗くありましたが、叔父とフランチスカ姿のがよく見えました。そして叔父とフランチスカが一緒に寢てゐました。」

「それから。」

「私は思はず窓から離れました。壁にからだを支へました。息が苦しくなつたのでございます。その時以來呼吸困難を持つやうになつたのです。私は氣が遠くなり、目がくらんで、頭の中がが

んがん鳴り耳が唸りました。」
「あなたはその日早速に叔母さんにお告げになりましたか。」
「いいえ。私は何も申しませんでした。」
「二人が寢てゐるのを見附けた爲に、どういふ譯であなたはそんなにびつくりされたのですか。あなたは二人が何をしてゐるか朧ろながらお曉りになりましたか。」
「いいえ。その時は私にはちつとも分かりませんでした。私は未だ十六歲でありましたもの。何故さうびつくりしたのか存じてゐません。」
「カタリナさん。その時あなたはどういふ感じを持たれましたか、その時あなたの頭にどういふことが浮んだかを、只今思ひ出すことが出來ますればあなたの病氣はなほります。」
「思ひ出すことが出來ますれば。でも私はあんまりびつくりしましたために、何もかもすつかり忘れてしまひました。」
（これを私達の『豫報』の言葉に飜譯すればかうなる。情緒はそれ自體で擬眠狀態を作る。その狀態で產出されたものは自我意識との聯想的交通の外に存してゐる。）
「呼吸困難の時にあなたの目に映りまする頭は、あなたがその時御覽になりましたやうに、フラ

ンチスカの頭でありますか。」
「いゝ。えそれは恐ろしくはありませんでした。それは男の頭でございます。」
「では、叔父さんのですか。」
「叔父の顔ははつきり見えませんでした。部屋の内は大變薄暗くございました。そして叔父はあの時どうしてあんなこはい顔をしたのでございませう。」
「御尤もです。」(その時突然分析の行く手が塞がれたやうに見えた。多分後段にあるものが存してゐたのである。)
「そしてもつと何か起りましたか。」
「ええ。二人は物音を聞きつけたに相違ありません。二人は早速にはねおきました。私はその一日中むしやくしやしました。私は始終考へに沈まねばなりませんでした。その日の二日目が丁度日曜日でありました。そして用事が山程ございました。私は一日中働きつづけました。そして日曜日の朝早く私は再び目まひを感じて嘔吐を催しました。そして私はベツトについて、三日三晩吐きつづけました。」
對譯のついた二三の碑銘の發見後讀むやうになつた變形文字を私達はしばしばヒステリー症候

學と比較した。この象形文字のアルハベツトによると嘔吐は嫌忌を意味した。そこで私はかう言つた。「三日目にあなたが嘔吐を催されたといふなら、あなたが部屋の中を覗かれたその時に、いやらしいとお思ひになつたと私は考へます。」

「はい。私はいやらしいと思ひました。」と彼女は一寸考へ込で言つた。「でもその時何のためにいやらしいと思つたのでございませう。」

「あなたは恐らく何か裸のやうなものを御覧になつたのでせうね。部屋の中で二人はどうしてゐましたか。」

「部屋の中は暗くて何もしつかり見えませんでした。そして二人とも着物をつけてゐました。その時何のためにいやらしいと思つたかを私が知つてをりますなら。」

私もそれを知つてゐない。併し彼女の頭に浮ぶものをもつと話し續けるやうに請求した。丁度この症例を鮮明にさすものが彼女にきつと浮ぶと私は期待してゐたからである。

彼女がたうとう叔母にその發見を話した時に、叔母が血相を變へたのを知つて、彼女はその裏にある祕密を臆測したこと、それから叔父と叔母の間に大喧嘩が持ち上つたこと、子供達はその時いろんなことを耳にし、いろんなことに對して眼が開かれたこと、そしてさういふことは子供

などが聞かない方がよかつたこと、最後に叔母は自分の子供達や姪を引き連れて別の宿屋を經營し、丁度姙娠になつてゐるフランチスカと一緒に叔父を棄ててしまはうと決心した事を語つた。併し私が驚いたことに彼女はこの緒口を棄てて古い歴史の二つの系列を語り始めた。その歴史はこの外傷的モメントから三年前に遡つてゐるものであつた。第一の系列は丁度娘が十四歳の時にその叔父が彼女を性的に襲つたといふ機會を含んでゐた。冬のある日彼女は叔父と一緒に谷に遠足をして、そこの宿屋で泊まることになつた。叔父は部屋で酒を呑んで骨牌を弄びつつ坐つてゐた。彼女は眠くなつて來た。そして叔父より一足先に二人にあてがはれた寢室にはひつた。彼女は叔父がはひつて來た時にうとうとしてゐたが再び寢入つてしまつた。突然ふと目を覺ました。彼女はベットの中に「叔父のからだ」を感じた。彼女は跳起きて「叔父さん、何なさるの。どうして御自分のベットに休まれないの。」と詰問した。彼は彼女を口說かうとした。「何だと。馬鹿奴。靜かにしろ。いいことをしてやるといふことをおまへは知らないのだ。」――「あたしは叔父さんなぞからいいことをして貰ひたくはありません。私はちつとも寢たくはありません。」彼女は戸口に立ちはだかつて廊下づたひに逃げようと身構へた。たうとう叔父は根敗けをして一人で寢込んでしまつた。それから彼女は自分のベットに歸つて朝迄寢續けた。彼女が告白した防禦の種類から、そ

の襲撃が性的のものであることを彼女がはつきりと知つてゐないことが想像出來る。その時叔父さんがあなたをどうしようとする積りであつたかをあなたは知つてゐますかと尋ねた時に、自分にはその當時は分からなかつたが、あとになつて眞相がはつきり分かつたと返答した。睡眠を攪亂されるのが不快であるためと、そんなことは聞いたこともないものであつたために彼女は反抗したのであつた。

私はこの一件を詳しく報告しなければならぬ。といふのは、この事件は後年に起つた一切のものを理解する上に大きな意義を有してゐるからである。――それから彼女はこの事件から間もなく起つたところの他の事件を物語つた。ある宿屋で叔父がへとへとに醉つぱらつた時に、彼女がいかに自らを防禦したかを語つた。あなたはこの事件を機會に後年の呼吸困難と同じやうなものを感じたかどうかと私が尋ねた時に、彼女はその時も眼と胸が壓迫されるやうに感じたが、あの發見の場面の時のやうには、それは強くはなかつたときつぱり返答した。

回想のこの系列を話した直後に、彼女は第二の系列を語り始めた。その物語は彼女が叔父とフランチスカの間にあるものを嗅ぎつけた機會を中心としてゐた。ある日のこと家族のものがみんな一緒に枯草倉の中で晝着のままで一夜を送つた。そして彼女は物音のために突然目を覺まし

た。自分とフランチスカの間に寢てゐた筈の叔父が轉がり出て、フランチスカの側で寢てゐるのにふと氣が附いた。又ある日のことＮ村の宿屋に泊つたことがあつた。彼女と叔父は一つの部屋に寢、フランチスカは隣の部屋に寢た。夜中に彼女は突然目を覺ました。そして戸口に長い白い人影がハンドルに手をかけようとしてゐるのを見た。叔父さん。どこへいらつしやるの。戸口で何をしていらつしやるの。――靜かにしろよ。俺は探しものをしてゐるのだ。――叔父さんは隣の部屋に行かれるのだわ。――俺は實は寢惚けてゐたのだ。

あなたはその時何ものかを邪推しなかつたかと私は尋ねた。いいえ。私はその時別に深いことを考へてゐませんでした。一寸變に思はれただけであります。でも私はそれ以上別にどうもしませんでした。――あなたはこの時別にこはくは感じませんでしたか。彼女はこはくは感じたが、この時は大してはつきりしたものではなかつた。

物語のこの二つの系別を語り終つたあとで、彼女はすつかり沈默してしまつた。彼女は變つたやうに見えた。陰氣さうな悲しさうな顏面は俄かにはればれし、兩眼はいきいきし肩の荷をおろしたやうに彼女はすがすがしく見えた。併し彼女の症例の理解が私に開かれた。この娘が私に最初一見無計畫に語つたところのものは、發見の場面における彼女の態度を立派に說明するもので

あつた。彼女の記憶に殘つてゐる經驗の二つの系列を彼女はその當時所持してゐたのであるが、その經驗の意味を理解せず、終結にまで評價しなかつた。ところが關係してゐる男女を見た瞬間に彼女は卽座にこの新しい印象をさきの二つの回想の系列に結びつけて、理解し始め、同時に防禦し始めた。ついで推蔵の、「潛伏」の短い時期がやつて來た。そして間もなく轉化の症候、道德的及び精神的惡心の代用としての嘔吐が現れた。謎はかくて氷解されたのである。彼女は男女二人の光景に對して惡心を催したのでなく、彼女にこの光景をよびさます回想に對して惡心を催したのである。そして一切を吟味する時に、これはただ彼女が「叔父のからだを感じた」時のあの夜中の襲擊に對する回想であつたのである。

彼女がこの告白を語り終つたあとで、私は彼女にかう言つた。「部屋の中を覗かれた丁度その時にあなたの頭に何が浮んだかを只今知りました。あなたはかうお考へになつたのでせう。丁度現在叔父さんがあの女にしてをられるのと同じことを、あの夜や又ほかの機會に私にしようと思つたのだ。これに對してあなたはいやらしいと思はれたのです。といふのはあなたが夜中に目を覺まされて男のからだを感じられたその時の感覺を思ひ出されたからであります。」

彼女は答へる。「私はそれに對していやらしいと思ひましたことや、私が丁度その時さういふ考

へを持ちましたことは確かでございます。」

「私に一度はつきりと仰しやいませ。あなたは現在は一人前の娘さんです。そしていろんなことは御承知の筈です。」

「勿論現在はさうでございます。」

「あなたはあの夜叔父さんのからだから一體何を感じられたのか私にはつきり仰しやいませ。」

だが彼女ははつきりした返答をしなかつた。彼女は狼狽を微笑で打消して、口に出して多くを語ることが出來ぬ事柄の根柢に達したと白狀しなくてはならぬ人のやうに、靜かに頷いたのであつた。彼女が後年判斷出來るやうになつた觸覺がどういふものであつたかを私は想像することが出來なかつた。先生は正しいものを考へていらつしやると私は想像しますと彼女の顏は私に物語つてゐるやうに見えた。併し私はこれ以上彼女の心におし入ることが出來なかつた。都會で見るいやにとり澄した、自然のことは恥づべきだと思ふ御婦人達に比較して、この娘が至極淡白に語つたことに對して私は感謝しなければならなかつた。

このやうにしてこの症例は明瞭になつた。しかしながら、發作の時にきまつて現れるそして彼女を脅かすあの頭部の幻覺はどこから來たのであらうか。恰もこの談話において彼女もまた自ら

の理解を廣めたかのやうに、彼女は卽座に返答した。「ええ。只今私は知りました。頭といふのは叔父の頭でございます。でもその頭はあの時に見たものではありません。あとになつて叔父さんと叔母さんが喧嘩をしました時に、叔父さんは私に對して非常に立腹しました。みんな貴樣のせゐだ、貴樣がしやべらなかつたら、夫婦別れなどしなくて濟んだのだ。かう叔父さんはしつこく申しました。叔父さんは私を脅迫しました。叔父さんは私を窘めました。叔父さんが遠方から私の姿を見ますと、叔父さんは恐ろしい顏をしまして、手をふりあげて私の方に突つかかつて來ました。私はいつも叔父さんがどつか物陰から私にとびかからないだらうかと考へていつも空恐しくなりました。只今目に映ります顏は怒に燃えてゐる叔父さんの顏でございます。」

この報告から私は、ヒステリーの最初の症候であつた嘔吐は消失して、恐怖發作が殘り、それに新しい內容が盛られたのだと思ひ出したのであつた。從つてこの症例は大部分まで瀉下されたヒステリーである。實際彼女は自分の發見をすぐあとで叔母は打開けてゐる。

「あなたは叔母さんに叔父さんがあなたを追ひ廻はしたといふやうな話まで話されましたか。」

「その時には申しませんでしたが、あとで、丁度離婚の話が持ち上つた時に申しました。その時叔母は、そのことは私達の間だけにしておかう、萬一裁判で話がむづかしくなつた時は、そのこ

とも話すことにしようと申しました。」

家の中にごたごたした場面が積重なり、彼女の持病のために、あの闘着から當然要求出來る叔母の同情が冷却した丁度最近から、堆積と貯溜のこの時期から回想象徴が殘つたことを私は理解することが出來た。

あまりにも早くその性的感情を傷つけられたこの娘に對して、彼の談話は幾分かためになつただらうと希望した。私はそれ以後彼女に會つたことがない。

批　判

この疾患史はヒステリーの分析例でなくて、剔發によつて解決した症例であると何人かが言はれる時に、私はそれに對してまるで反對が出來ない。患者は私が彼女の告白の中におしこんだ一切のものをありさうなものとして承認したが、それを體驗したものとして再認することは出來なかつた。そのために私は催眠術を必要とすべきだと考へた。私が正しく忖度したと假定し、そして第二の症例から知つたやうに、只今の症例を獲得したヒステリーの模型にあてはめようと試みる時に、外傷的モメントを有するエロチツクな體驗の二つの系列、男女の姿の發見における光景

を一つの補助的モメントと比較しなければならなくなる。兩者の類同は次の點に存してゐる。卽ち前者においては自我の思考活動から遮斷されて保留されてゐる意識內容が作られ、後者の光景においては、新しい印象が排斥されて存在してゐるこの群と自我を聯想的に結合させるやうに强制した。他方において等閑にする事の出來ぬ相違がまた存在してゐる。隔離の原因は第三の症例のやうな自我の意志でなくて、性經驗に對して未だ何の知識も持たぬ自我の無知である。この點においてカタリナの症例は定型的である。性的外傷に立脚するヒステリー分析において、子供に當時無作用であつた思春期前の印象が後年になつて、妙齡の女とし又は妻として性生活の理解を持つた時に、回想として外傷力を有するやうになることを知る。情神群の分裂はいはば青年男女の進化における常態な過程である。そして後年自我がこれをどう攝取するかが、精神攪亂に對して夥しく利用される機會となることが分かつてくる。さらに私はこの箇所において、無知による意識分裂が意識的拒絕による意識分裂と斷然と相違してゐるものか、青年男女とて大人が想像する以上に、彼等自らが自信してゐる以上に、豐富な性知識を所有してゐるものかといふ疑問を表明したいのである。

この症例の精神機構におけるもつと進んだ相違點は、私達が「補助的」と命名したあの發見の

光景は同時にまた「外傷的」の名稱に價するところに存してゐる。その光景は單に以前の外傷的經驗の覺醒によつてでなく、それ自らの內容によつて作用して、「補助的」モメントと外傷的モメントの性質を結合したのである。併し私はこの結合において他の症例ではまた時間的區別に一致する概念的區別を拋棄する理由を見ないのである。可なり以前から氣が附いてゐたカタリナの症例における他の特徵は、轉化、ヒステリー現象の產物は外傷の直後でなく潛伏期のある間隔をおいて現れたといふことである。シャルコーはこの潛伏期を好んで心的推敲の時期と呼んだ。

發作中にカタリナを惱ました恐怖はヒステリー性恐怖である。換言すれば、性的外傷のどんなものにも現れる恐怖の再生產である。私は非常に多數の症例において例外なしに的確に認めた過程、卽ち處女における性關係の豫感は恐怖情緖を喚發せしめるといふことをここで詳論するのを罷めておく。（1）

（1）〔一千九百二十四年追記〕長い年月の後に私にその當時守つた遠慮を潔く捨てる勇氣が出來た。實を言ふとカタリナは姪ではなくて宿のお上さんの娘であつた。だから娘は實父から挑まれた性的誘惑の下に病氣になつたのである。この症例において私がやつたやうな歪曲は疾患史において絕對に避けなくてはならぬものである。勿論この歪曲は例へば舞臺を山頂から他の場所に移すのにくらべてはその理解に對して決して些細なものだとは申せない。

四

エリザベート孃

一千八百九十二年の秋私は親しい同僚からさる令孃の診療を依頼された。この女は二年前から下肢の疼痛をやんで歩行することも困難なぐらゐであつた。神經症の尋常な症狀は發見出來ないが、どうもヒステリー症らしいと添書に書きそへてあつた。友人は家庭方面のことはあまり詳細には知らぬが、兎に角近年不幸が續いてあまり樂しい日を送つてゐないことは承知してゐた。はじめに患者の父が死亡し續いて母が眼病のため手術を受けなければならなかつた。それから間もなく他家に緣づいてゐる姉が分娩後間もなく古い心臟病のため死んでしまつた。この女患者は心痛と看病のために非常に心身を勞したのである。

二十四歲のこの令孃にはじめて會つたあとで、私は彼女の病氣をあまり深く理解することが出來なかつた。彼女は聰明に見えた。精神上にも別に異常が見えなかつた。社交と享樂を妨げると

ころの疾患を彼女ははればれした容貌で、ヒステリー患者の「麗はしい無關心」でもつて擔つてゐるのだと私は考へずにをられなかつた。彼女は上體を前方に曲げて歩行する。だが別に杖などついてゐない。その歩行は病的として知られてゐる歩み方と全然一致してゐない。といつてその歩み方は人目に醜いものでもなかつた。歩行すると非常な疼痛がして、歩いてゐても立つてゐてもすぐに疲勞してしまふ。そして少しすればすぐに休まねばならなかつた。休むと疼痛は輕くはなるが、全然消失するものでなかつた。疼痛は不定のものであつた。それは痛い疲勞と譬へてもよいものであつた。右の大腿の前面にある可なり大きい、境界不明瞭な部分が疼痛の部位と考へられる。この部位から疼痛が最もしばしば四方にひろがり、その部位が疼痛の一番強い箇所であつた。この部位では皮膚と筋肉はおさへても抓つても特別感覺が鋭敏であつた。これに反して針で刺す時は感覺はむしろ無痛に近かつた。この部分ばかりでなく、兩下肢の可なり全幅にわたつて皮膚と筋肉に同じやうな痛覺過敏が立證出來た。筋肉は皮膚よりはるかに痛覺が强かつた。併しこの二種の疼痛は明かに大腿において最も强かつたのである。下肢の運動力は微弱とはいへなかつた。腱反射は中等度で亢進してゐるとはいへなかつた。その他の症狀はすべて缺損してゐた。このために本當の器質的疾患を想定する支點が全然存してゐなかつたのである。この疾患は

二年前から漸次に發展して行つて、その疼痛の强度は一進一退した。

私は早速には診斷を下すことが出來なかつたが、二つの理由から私の同僚の診斷に贊成しようと決心した。第一の理由として患者は非常に聰明であるのに、疼痛の性質に關してはあまりはつきりした陳述が出來なかつた。器質的疼痛にやむ患者は、若し神經質を伴はなかつたなら、疼痛の性質をはつきりと冷靜な態度で敍述する。例へば疼痛は電擊性のものだとか、ある間隔をおいて現れるとか、この場所からこの場所へひろがるとか、又患者の意見によつては疼痛はあれやこれやの影響によつて喚發されるといふのである。自らの疼痛を敍述する神經衰弱患者(1)はその話の最中に、まるで自分の力以上のむづかしい精神的作業に自分がついてゐるやうな印象を與へる。患者の顏面は緊張し、まるで苦痛な情緖の支配下にあるやうに歪められ、その聲は震へ、自分の疼痛をなんとかうまく形容しようと努力し、その疼痛について醫者の方から持出す特徴は、たとひあとでその形容がきはめて適切であることが分かつても、とにかく一應はどんなものでも否定する。患者は自分の感覺を形容するためには言葉はあまりにも貧弱であるといふ意見を公然と示す。こんな感覺は無類のものである。こんな感覺はこの世では未だ嘗て見ないものである。だからこの感覺を完全に敍述することは出來ない。この理由から患者は倦むことなしに次から次

へと新しい細目を附加して行く。そして談話を中絶しなくてはならぬ時は、患者は所詮お醫者なぞに分かつて貰へないものだといふ印象にはつきりと支配されてゐる。自分の疼痛は自分の全注意力を集中させるといふ事實にそれは由來してゐる。ところがエリザベート孃の狀態は全く正反對であつた。そして私達はこの點から、彼女は疼痛に十分な意義をおいてゐるが、彼女の注意は何か別のものに、疼痛はまるで副現象にしか見えない程に、言ひかへれば、疼痛に關聯する思考と感情に集中されてゐると結論しなくてはならなかつた。

併し疼痛の理解に對してもつと確實に第二の要素が存在せねばならなかつた。器質的疾患を訴へる患者とか神經衰弱患者において、私達が疼痛部位を刺激する時に、患者は不快の或ひは肉體的疼痛の表情を呈示するものである。さらに患者は縮み上るか、觸診から身を卻けるとか、とにかく防禦の狀態を示すものである。ところがエリザベート孃において下肢の痛覺過敏な皮膚とか快筋肉を抓るとか、或ひはおさへるとかする時に、彼女の顏面は異常な表情、疼痛よりも寧ろ快感の表情をとつた。彼女は聲を立てた――まるで擽つた場合の快感のやうだと私は考へずにをられなかつた。彼女は潮紅し、顏をそむけ、眼を閉ぢ、軀幹をうしろにそらした。すべては大して露骨ではなかつたが、兎に角際立つて現れた。そしてすべては、疾患はヒステリーである、刺激

は丁度ヒステリー發生帶に命中したといふ見解とぴつたりあつてゐた。

その表情は筋肉や皮膚を抓つた時に生ずると思はれる疼痛に合致しなかつた。その表情はむしろこの疼痛のうらにかくされてゐる、患者について思考と聯結をもつ肉體部位を刺激する時に甦つてくる思考の內容に合致してゐるやうに思はれる。私は同じやうにしてヒステリーの正眞正銘の症例において、痛覺過敏帶を刺激するに時に幾度となく意味深い表情を觀察したのであつた。他の動作は明かにヒステリー發作の最も輕い暗示に一致してゐた。

ヒステリーを發作せしめる、卽ちヒステリー發生帶の通常な部位に對してさしあたつて說明が見附からなかつた。痛覺過敏が專ら筋肉に存してゐることは一考に價するものであつた。筋肉の彌漫的及び限局的壓感の原因をなす最もよくある疾患は筋肉の僂麻質斯性浸潤、卽ち一般の慢性僂麻質斯である。このものの特徵が神經症的疾患と混同されやすいことは私が旣に述べたところである。エリザベート孃にあつては疼痛のある筋肉の硬度はこの假定と矛盾しない。そこには硬い筋束が澤山あつて、それは特別敏感になつてゐるやうに思はれた。この故に今假定したやうな器質的變化が筋肉に現はれて、この變化の上に神經症が寄生し、神經症によつてその意義がさらに誇張されたのであつた。

治療は混合疾患のかやうな前提から出發する。私達は疼痛のある筋肉に系統的にマッサージと電氣治療を疼痛などにおかまひなしに持續的にやるやうに薦めた。そして私は患者と交際を續けるために、フランクリン氏閃光放射をもつて下肢の治療を行ふことにした。無理にでも歩いてこなくてはならぬかといふ彼女の質問に對して、私はきつぱり歩いていらつしやいと返答した。

このやうにして病氣は幾分か快方に向つた。感應發電機の痛い電撃は彼女には特別氣持がよいやうに見えた。電撃が强ければ强い程患者の固有の疼痛が鎭まるやうに見えた。私の同僚は精神療法の土臺を準備しておいて奥れたのだ。そして四週間にわたる尤もらしい治療のあとで私は精神療法を提案し、患者にその操作とそれの作用法について二三の說明を與へた時に、私は急速な理解と僅かばかりの抵抗を發見した。

これから開始しようとする仕事は私が遭遇したもののうちの最も困難なものであることが分かつた。そしてこの仕事に關して報告する困難は、私がその時克服した困難とあひ伯仲するものである。私は疾患史と體驗のこの系列によつて惹起され決定された疾患の間に關聯を發見することを長い間解しなかつた。

この種の瀉下療法を行ふにあたつて、先づ第一に何はともあれ女患者に病氣の由來や機緣が分

かつてないかと質問する。それがうまく行けば、疾患史の再現を彼女に行はしめるのに特別の技術を要しない。彼女にひきおこさしめる興味、彼女に豫想せしめる理解、彼女に懐かしめる恢復への希望は必然自らの祕密を告白させるやうに誘導する。エリザベートにあつては、彼女が自らの疾患の原因を意識してゐる事、卽ち彼女は意識內の異物でなしに、たつた一つの祕密を持つてゐることを私は最初から想像したのであつた。彼女を見た瞬間に詩人が唄つたところの「假面こそ隱された意味をさし示す」(1)といふ言葉を考へなくてはならなかつた。

(1) それにも拘らず私が間違つてゐたことが後段になつて分明する。

そこで私は第一に催眠術をやめることにした。勿論告白の途上において彼女の回想をもつて十分な說明が與へられない關聯が現れた現合にあとで催眠術を用ひることを留保しておいた。このやうにして私が手をつけたヒステリーのこの最初の完全な分析において、私が後年一つのテクニークにまで築き上げ、目的意識をもつて紹介したところの一つの操作、私達が埋沒した都市の發掘のテクニークに好んでなぞらへるのを常とする、病原的な心的材料を一層一層取除いて行く操作に到達したのであつた。私はさしあたつてどんなことが患者に旣知のものであつたかを語らしめ、脈絡が謎のやうにぼんやりしてゐるところ、誘因の全連鎖において鎖が切れてゐるやうな

ところに注意を集中しついで回想の深層に突入した。そして、私はこの場所へ臆測的探究若くはそれに類似したテクニークでもつて働きかけたのであつた。全作業の前提は完全といへる程十分な決定力を立證する期待であつたのは當然である。今や深層探究の方法が問題となる。

エリザベートの語る疾患史は種々さまざまなる悲痛な體驗を織り込んだ長々しい物語であつた。物語る間の彼女は催眠狀態においてではなかつた。併し私は彼女をベツトに寢かして目をつむるやうに命じた。彼女が時々目を開いたり、姿勢を變へたり、起き上らうとする時には、私はそれに對して別に何も言はなかつた。彼女が物語のあるところで非常に感動する時に、偶然に催眠狀態と同じ狀態に陷るやうに見えた。その時彼女はぢつと横たはつて目を堅く閉ざしてゐた。

彼女の回想の最上層として現れたものをここに複寫することにしよう。三人娘の末つ子として彼女はとりわけ兩親に寵愛され子供時代は匈牙利の莊園で暮した。母の健康は幾度となく眼疾によつて、又神經質狀態によつてかきみだされた。この娘は快活な大まかな父に特別になついてゐた。父はこの娘を男の子代り、友達代りにして、いろいろ話相手に出來ると口癖のやうに言つてゐた。父とのこの親しみにおいて娘が智的刺激を得れば得る程、彼女の精神的素質が娘に好んで實現をはからうとする理想とへだたつてゐることがこの父にも氣が附いた。父は娘をよく揶揄半

分に「無鐵砲な理窟屋さん」と呼んで彼女の判斷における非常な確信、遠慮會釋なく誰にでもあまり本當のことを言ふ彼女の性質を警戒した。そしてこの子に御亭主さんを見附けてやるのはなかなか骨が折れるだらうと父はよく言つた。事實彼女は自らの娘氣質に滿足しなかつた。彼女は野心に滿々たる計畫を夢みて學問とか音樂で立身出世しようと希望し、結婚を犧牲にして、自分の趣味、自分の判斷の自由に生きようといふ考へにいらいらした。これに加へて彼女は自分の父、自分の家門、自分達の社會的地位を鼻にかけ、これらに關聯することならどんなことでも嫉妬深く用心したのであつた。事あるごとに母や姉を蔑視しようとする彼女の冷淡さは、彼女の性格の無愛想から來てゐるのだと兩親は考へてまるで氣にも留めなかつた。

娘時代は家をあげて首府に移轉して、その地でエリザベートはある期間裕かなはなやかな家庭生活を樂しむことが出來た。併し間もなくこの幸福を破壞する嵐がやつて來た。父は慢性の心臟病を隱してゐたためかあるひは氣にもかけなかつたためか、ある日のこと突然肺水腫の最初の發作のあとで昏睡狀態に陷つて、そのまま家に送られて歸つて來た。娘はそれから一年半近く父の看病に盡力したのである。エリザベートは父の看病に一番お氣に入りの女となつた。彼女は父の病室に寢おきして夜中でも父が聲をかける時は目を覺まし、終日父の枕邊に侍つて、わざとはれ

ばれしい顔を裝つたのであつた。父はその間娘のいぢらしい甲斐甲斐しい姿を眺めて自らの望のない病氣を慰めて行つた。看病のこの時期に彼女の疾疼のはじまりが結びついてならねばならなかつた。といふのは、彼女は看病の最後の半年にまる一日半右の下肢の疼痛のためにベツトについたことを思ひ出したからである。併しこの疼痛は直ぐに治つてその後は一向氣にもかけなかつたと彼女は主張した。事實彼女が病氣であると感じ、疾痛のために歩行が困難になつたのは父の死後二年目からであつた。

父の亡きあと女四人ぎりの家族の生活に漂つたものだよりなさ、訪問客も見えない寂しさ、興奮や歡樂を約した數多の交際の消失、母の新らしく高まり出した病氣、これらのすべてがこの女患者の氣分を沈鬱にしたが、同時に彼女の心中に自分の家庭は今に失つた幸福に代るべき何ものかを手にするだらうといふ強い希望が動いて、彼女は自らの愛情と細心のすべてを捧げて生き殘された母のために盡さうと決心した。

一年の喪期があけて間もなく一番上の姉は高い身分の才能に富んだ奮鬪的なある青年のところにお嫁にいつた。頭がよい點からその夫の前途は極めて有望に見えたが、結婚後間もなく夫の病的に近い神經質や我儘なむら氣が露骨に現れて、夫は家庭内で年とつた義理の母に何の思ひやり

も示して吳れなかつた。それはエリザベートが辛抱出來る以上に冷酷なものであつた。彼女はまるで義兄と喧嘩をするために召集されたやうな氣持になつた。義兄の方からたびたび喧嘩の口火を切つたが、母も姉も興奮しやすい彼の氣質の爆發を輕く受け流した。過ぎし日の樂しい家庭の再建がかやうな攪亂を蒙つたことは彼女にとつては悲痛なる幻滅であつた。姉が女らしい服從をもつてこのいさかひに包きこまれまいと努めるのはエリザベートにとつては赦し難いものであつた。かやうな光景の全線がエリザベートの記憶にありありと殘つてゐた。その記憶に彼女の最初の義兄に對して一部公然と口に出さなかつた不平がこびりついてゐた。しかしながら、義兄が一身の榮達のために彼の小さい家庭を墺太利の遠い都會に移して母の孤獨を一そう大きくしたことは彼女の最も大きい非難であつた。この時にエリザベートは自らの腑甲斐なさ、母に昔の幸福に代るべきものを與へることの出來ない自らの無力、父の臨終に誓つた決心が實行出來ない自らの無能をしみじみと胸底に感じたのである。

二番目の姉の結婚は家庭の將來にもつと幸福なものを約するやうに見えた。といふのはこの義兄は大して秀才ではなかつたが、御行儀よく育てられて來た、感情の濃やかな女達の胸には氣に入る青年であつた。そしてこの義兄の態度からエリザベートは結婚制度とそれに結びつく犧牲の

思想を理解し始めた。この新婚の夫婦は母のゐる土地にふみとどまつて吳れることになつた。そして義兄と二番目の姉の間に出來た赤ん坊はエリザベートの寵兒となつた。悲しいことにこの赤ん坊の生まれた年は又別の事件によつて攪亂された。母は眼病のために數週間暗室療法を受けることになりエリザベートも一緒について行かねばならなかつた。この療法がすんでからどうしても手術が必要だと宣告された。最後にある大家の手によつて手術は成功して、三つの家族はある避暑地に落合ふことになつた。最近數箇月にわたる心痛のため疲勞し切つたエリザベートは、父の死去以來初めてこの家族に惠まれた、悲しみと心配のない日を十二分に樂しむことが出來た。

併しこの避暑地に滯在してゐた時に、丁度、エリザベートの疼痛と步行困難が勃發したのであつた。可なり以前から少しは氣になつてゐた疼痛が、この小さい溫泉地の浴場でとつた溫浴のあとで突然激しくなつた。勿論數日前の長い散步、半日にわたるピクニツクがこの疼痛に關係してゐた、そのために最初のほどは、エリザベートは疲れ過ぎて風邪を引いたのだと考へられた程であつた。

この時からエリザベートは一家の病人となつた。醫者の勸告に從つて彼女はこの夏の殘りをガ

シュタインの溫泉場で保養することになつた。そして彼女は母と一緒にその地に旅立つことになつた。併し新しい心配が又ぞろ襲ひかかつて來た。二番目の姉は最近姙娠してゐた。そして姉の健康が非常に惡いといふ知らせがやつて來た。このためにエリザベートはガシュタインに旅立つ氣にどうしてもなれなかつた。ガシュタインの滯在が殆ど二週間近くなつた頃、母と妹に直ぐ歸れの電報がやつて來た。病床にある姉はいよいよ危篤に陷つたのである。

悲しみに閉ざされた旅行、その旅行の間にエリザベートに疼痛と恐ろしい期待がいりみだれた。停車場に着いた時に不吉を豫感せしめるある前兆。そして二人が姉の病室にはひつた時に、最期の別離を告げるにはあまりに遲かつたといふ確信。

エリザベートは心から自分を愛して吳れたこの姉の死去を悲しんだばかりでなく、それ以上にこの死去が喚起する思考、この死去が齎す變化を悲しんだのである。姉は心臟病で亡くなつたのだ。心臟病は姙娠のために增惡したのだ。

その時心臟病は父方からの遺傳であるといふ思考が浮び上つた。それから死んだ姉は子供時代に輕い心臟病の伴つた舞蹈病を患つた事を思ひ出した。家族のものは姉に結婚を許した自分達と醫者を怨んだ。家族のものは續けざまに二度も姙娠さして妻の健康を危くした不幸な夫を怨まず

にをられなかつた。幸福な結婚のこんな珍らしい好條件に出會ふや否や、この幸福がかくも無慙に粉碎されるといふ悲しい印象は、この時以來矛盾もなしにエリザベートの心を領した。さらに彼女は母のために計畫した一切のものが消滅したのを見た。愛妻を失つた義兄は悲歎に暮れて妻の家族から遠のいた短かかつたが幸福であつた結婚生活の間踈遠勝ちであつた義兄の家族のものは、丁度よい機會とばかりに彼を再び自分達の方にひつぱり寄せたやうに見えた。以前のやうな親しみを續けて行く道がなかつた。義兄が母の家に暮らすことは未婚の義妹に對しては遠慮すべきことであつた。そして義兄は母と妹に死んだ妻のたつた一つの形見である愛兒をあづけることを拒んで、彼は初めて二人から薄情の非難を受ける機會を持つたのである。最後に――そしてそれは、最も深い悲しみでなかつたが――エリザベートは二人の義兄の間に釀された軋轢を朧ろながら耳にして、それの原因を想像することが出來た。下の義兄が財産上のある要求を提起したらしい。上の義兄はその要求を不當として郤けて、未だ日も淺い母の悲歎を考へて、その要求を恥知らずの脅喝だと罵倒したのであつた。以上のことが功名心の強い愛情に渇してゐるこの娘の哀話であつた。自らの運命を憎しみつつ、家名を再建しようとする自らの小さい計畫の失敗を悲しみつつ――自らが愛する人は、ある人はこの世を去り、ある人は遠くに行き、ある人は踈遠にな

つて――ほかの男の愛情の中に逃げ場所を求めようとする心もなしに、彼は一年半この方殆ど世間のつきあひを斷ち切つて、自らの母と自らの疼痛の看護の中に生活を續けて行つた。

大きな悲哀を忘却して自らをこの娘の精神生活の中におかうと欲する人は、エリザベート孃に心からなる同情を禁ずることが出來ない。併しこの哀話に對する醫者としての興味、この哀話と彼女の疼痛を伴ふ歩行困難との關係、この心的外傷の知識から生ずるこの症例の說明と恢復への展望はどういふものであらうか。

醫者にとつてはこの女患者の告白は何はともあれ大きな失望を意味する。それは世にありふれた精神感動から構成されてゐる疾患史であつた。この娘が何故にヒステリーに罹らねばならなかつたか、どうしてヒステリーが疼痛を伴ふ歩行困難の形態で現れたかをこの疾患史から明瞭にすることが出來ない。今問題としてゐるヒステリーの誘因をも決定力をも鮮明にして吳れない。女患者は彼女の悲痛な精神上の印象と丁度その當時偶然に感じた肉體上の疼痛の間に一つの聯合を形成したこと、彼女は今やその囘想生活において肉體的感覺を精神的感覺の象徵として利用したことが假定出來るかも知れなかつた。彼女はこの代用に對していかなる動機を有してゐるか、この代用がいかなる動機を有してゐるかこの代用がいかなる契機に行はれたかは不明のまま殘され

てゐる。確かにこれらは疑問であつた。これまで一人の醫者もそんな疑問を提起しなかつたものである。この患者は丁度體質的にヒステリーであつた、興奮の種類が何であらうとも、とにかく激しい興奮の壓迫の下に、ヒステリー症候が發展出來るのだといふ報告で私達は滿足するのを常とする。

この告白は症例の説明以上に症例の治療に大して役に立たないやうに思はれる。彼女の家ののがみんな知つてゐるやうな最近の哀話を、彼女に對して心からの同情も表さうとしない赤の他人にぶちまくといふことが、エリザベート孃にどんな好い影響を與へるものかは洞察出來るものでなかつた。告白の結果別にとりたてた恢復の兆候が現れなかつた。患者はこの治療のこの第一期の間醫者に、「病氣は惡くなる一方でございます。以前と同じ疼痛がいたします。」と繰返すばかりであつた。そして彼女が狡猾な意地惡さうな目附で私をぢつと見た時に、私は年とつた父が自分の愛兒を「この娘は無鐵砲で意地惡い」といつた批判を思ひ出さずにをられなかつた。併し彼女の言分も尤もであることを私は認めなければならなかつた。

若し私がこの段階においてこの患者の精神療法を棄ててしまふなら、エリザベート孃の症例はヒステリーの學説に對して無價値なものとなつてしまつたであらう。私は私の分析をおしすすめ

た。何となれば、私は意識の深層からヒステリー症候の原因と決定力に對する理解をかち得るだらうとの自信ある期待を所有してゐたからである。

そこで私は患者の擴大された意識に對して、下肢における疼痛の最初の發生がいかなる心的印象に關聯してゐるかといふ直接の質問を向けようと決心した。

この目的のために患者を深い催眠狀態におかなくてはならなかつた。だが遺憾なることに所期の目的のための私の操作は一向變らぬ意識狀態にしかこの患者を導けないことを認めなければならなかつた。「私は寢ることが出來ません。私は催眠術なんかにはかかりません。」と彼女は勝ち誇つたやうに私にきめつけることを今度こそ思ひとどまつたことを私は心から喜んだ。かやうな急迫狀態において私はあの壓迫操作を應用することを思ひ出した。その操作の由來については私はルシー孃の觀察のところで詳細に報告したところである。手でおさへた瞬間にどういふものが目に映るか、或ひはどういふものがあなたの頭を掠めるかと患者に要求することによつて、私はこの操作に着手したのである。彼女は長い間だまつてゐた。ついで間もなく私の强制によつてある青年がある會合が果てた後家まで自分を送つて吳れたある晩のことや、その道々二人がかはした談話、父を看病するために家路に歸る道々胸に懷いた感情などを思ひ出した。

彼女が青年のことをはじめて口に出したのをきつかけに、新しい戰鬪の幕は切つておとされた。私はその內容に向つてしだいしだいに肉迫して行つた。これはむしろ一つの祕密を中心としてゐる。と申すのは、彼女は一人の親しい女友達以外誰にも、その關係、それに結びつく希望を打開けなかつたからである。その青年は彼女の昔の家の近所に住んでゐた昔から親しく交つてゐる家族の息子であつた。この青年は兩親がなかつたので、彼女の父に非常になついてゐた。彼女の父の助言に從つて青年は將來の方針をたて、父に對する青年の尊敬は家族の女達にも及んで行つた。一緒に讀書したり、お話をし合つたり、彼女に幾度となく語られた青年の好意に對する無數の思ひ出は、青年は自分を愛してゐる、自分を理解してゐるといふ確信、この青年との結婚は、結婚に對して彼女が恐れてゐる犧牲を齎さないだらうといふ確信をしだいしだいに成長さして行つたのである。不幸にも青年と彼女は年齡があまり違つてゐなかつた。青年が獨立する迄にはこれからなかなかのことであつた。だが彼女は青年が獨立する日まで、どこへもお嫁に行かずに待たうと心に堅く決心したのであつた。

父の病氣がますます重くなり、看病にますます多忙になつたために、二人の交際はしだいしだいに少なくなつて行つた。彼女が最初に思ひ出したあの晚は、丁度彼女の感情の高潮時を示して

ゐた。併しその晩も二人はそんなことを口には出さなかつた。彼女はその晩は家族のものと父の方から無理にすすめられたので、やつと父の病床から離れて會合に出掛けることになつたのである。彼女はその會合で青年に會へるだらうと期待してもよかつた。彼女は早くに家に歸らうと思つたが、みんながもう暫くゐるやうにとおしとどめた。そして青年があとでお宅まで送つてあげませうと約束した時に、彼女は無下に一足先きに歸ることが出來なかつた。かやうな幸福な氣持に包まれて夜おそく家に歸つた時に、彼女は父の症狀が非常に惡くなつてゐるのを知つた。そして自分の勝手な樂しみに長時間を費したといふ苛責に彼女は心を痛めた。娘が父の病床を一晩あけたのはこれが最後であつた。それ以後は彼女が青年に會ふこともきはめて稀になつた。父の死後青年は彼女の悲しみを思ひやつて訪問することも遠慮してゐるやうに見えた。ついで人生は彼女を別な道に導いて行つた。彼女に對する青年の關心がほかの感情によつて抑壓されて、青年は彼女から離れてしまつたといふ考へを彼女はしだいしだいに懷かずにをられなかつた。そして初戀のこの破滅は彼女が青年のことを思ひ出す每に彼女の心を痛めるものであつた。

この關係の中に、そしてこの關係に導いた上述の光景の中に、私は最初のヒステリー性疼痛の誘因を求めなければならなかつた。彼女があの時に身に感じた幸福と家に歸つた時に見た父の不

幸のコントラストから一つの葛藤、妥協出來ない一つの狀態が作られた。この葛藤の成果として、エロチツクな觀念は聯想から抑壓され、この觀念にまつはる情緒はその時（若くは少し以前）に存してゐた肉體的疼痛の增大若くは更生に利用されるに至つた。この故にそれは防禦の目的を持つた轉化の機構であつた。そのことについては私は別の論文で詳しく論じたことがある。

確かにこの點に關してはいろんなことを述べるべき餘地が殘されてゐる。丁度家に歸つたその瞬間に轉化が行はれたことを彼女の回想から立證することに私は成功しなかつたことを特記しなくてならぬ。このために私は父の看病時代からこれと似た經驗を探究して、このやうな光景の系列を喚起せしめたのである。その中に、冷えきつた病室で父の聲を聞いて素足のままベツトから跳起きたといふ光景が幾度ともなく繰返へされたために特別はつきりと浮び上つた。私はこれらのモメントにある意義を與へようとした。何となれば、下肢の疼痛の訴へと並んで身にしみいる冷感の訴へが存してゐたからである。それにも拘らず、私は轉化の光景と確かに名附けることの出來る光景をここでも捉へることが出來なかつた。この故に私は說明の上に間隙があると認容するやうになり、たうとう下肢のヒステリー性疼痛は父の看病時代にはまるで存してゐなかつたといふ事實を考へるに至つたのである。彼女の回想から二三日引き續いた一度ぎりの疼痛發作が報

告された。彼女はその當時その發作をまるで氣にも留めなかつた程である。今や疼痛のこの最初の發現に私の探究をふりむけた。そしてこれに關する回想を實事に活かすことに成功した。丁度その當時は彼女は病氣のために床についてゐて、親戚のものが折角訪ねて吳れたのに會ふことが出來なかつた。その人が二年後に訪ねて吳れた時も、彼女は又病氣で寢てゐた爲にその時も會ふ機會を失した。併しこの最初の疼痛に對する心的誘因の探究はたびたび反復されるに從つて不成功に終らなかつた。その最初の疼痛は心的誘因からでなしに實は輕症の僂麻質斯のために發したのだと私は假定せずにをられなかつた。その上にこの器質的疾患、後年のヒステリー的模倣の原型は青年が見送つて吳れたあの光景の前のある時にどうしても存在せねばならぬことを知ることが出來た。この疼痛は輕度であるが器質的に發して、かなりの歲月大した注意も拂はれずに持續したといふことは、疾患の性質から考へてもあり得べきことであつた。これから生ずる不明瞭、卽ち分析は心的興奮の肉體的疼痛への轉化が、かやうな疼痛が確實に感ぜられない、確實に思ひ出されない時代に旣に存してゐたと指示すること——この問題を私は後段の考察及び別の實例をもつて解決出來ることを希望してゐる。(1)

(1) 專ら上腿に存してゐたこの疼痛は神經衰弱症の性質であつたことは否定も出來ぬし、それかとい

つてはつきり證明するも出來なかつた。

最初の轉化に對する動機の發見と共に治療の實り多き第二の時期が開始される。そのすぐあとで第一に患者はどういふ譯で自分は疼痛をいつも右の上腿といふ極まつた箇所で感ずるか、そして、その箇所が一番痛みが强いかといふことを只今知つたといふ報告でもつて私は驚かされた。浮腫のためにひどく腫脹してゐる父の下肢に卷きつけた繃帶を每朝彼女が交換する間に、彼女の右の上腿といふその場所へ父の下肢をのせかけたのであつた。さういふことは何百回となく繰返へされた。そして今日まで不思議なことに、この關聯を一度だつて思ひ出したことがなかつた。彼女は不定型なヒステリー發生帶の發生に對するこんな都合のよい說明を私に與へて吳れた。さらに疼痛の發する下肢は私達の分析にいつも「仲間入り」し始めたのである。それは次の注目すべき實狀を意味する。私達が分析の作業に從事してゐる間は患者は大抵疼痛を感じない。ところが私が質問するとか手で頭をおさへるとかして、回想を喚び出す時に患者は何をおいても先づ第一に痛みがすると私に訴へるのだ。その疼痛は大抵の場合非常に激烈であるために、患者は總身を縮め、手で痛い箇所をおさへるのであつた。喚起されたこの疼痛は患者がある回想の支配下にある限りは存在し、彼女がその報告における根本的な決定的なものを將に口に出さうとする瞬

間に、その疼痛は最高に達する。そしてこの報告を終ると同時にその疼痛は消失するのであつた。しだいしだいに私はこの喚起される疼痛が羅針盤代りに使用出來ることを曉つて來た。彼女が沈默してしまつて疼痛がなほ存在する時は、彼女は一切のことを未だ言つてしまつてゐないと私は考へて、疼痛が消失するまで、告白をさらに續けるやうに強制した。その結果私ははじめて一つの新しい回想をよび出したのである。

反撥(アブレアギーレン)のこの時期に患者の狀態は肉體的にも精神的にも非常に目立つて良好になつて行つて、私は戲談半分に、いらつしやる度每に痛みの動機の一定量づつをとり除いてあげませう、そして全部とり除いてしまへば、あなたは健康になるのですといつも主張する程であつた。彼女はやがて一日中まるで疼痛を感じないまでになつた。努めて澤山步きまはり、これまでの孤獨生活を捨ててしまふまでになつた。分析の期間中に私はある時は彼女の容體の突然の動搖に追從し、ある時は彼女が哀話のある一部を未だすつかり言ひ盡してゐないといふ私の査定に追從した。この分析中に私は二三の興味ある觀察を持つた。それの理論を私は後年他の患者について實證することが出來た。

第一にこの突發的な動搖に關しては、その日の出來事によつて聯想的に喚起されなければ、そ

んな動搖はまるで現れなかつたある場合は彼女が知人のところで自分の父の病氣をそのまま髣髴たらしめるやうな病氣の話を聞いた。ある場合は死んだ姉の子供が訪ねて來て、その子供の顏が姉と生寫しであることが今さら亡き人への悲しみを新しくさした。又ある場合は遠國にゐる姉から手紙が來た。その文面にはありありと思ひやりのない義兄の感化が滲み出てゐて、それが又新しい悲しみを喚びさまし、これまでに未だ私に話してなかつた家庭内のある光景を報告する機緣となつた。

彼女は同じ疼痛動機を二度も持ち出さなかつたので、このやうな方法でもつて貯藏のものは汲盡くされるといふ、私達の期待は正しいやうに思はれた。そして私は表面に未だ出てゐない新しい回想を喚起さすに適切な狀況に彼女をやることに、例へば姉の墓地に詣でるとか、現在同じ土地にゐるあの靑年に會へることとの出來る會合に行かしめるとかに決して反對しなかつた。

かやうにして私は單特症候と名附けられるヒステリーの發生樣式に、ある洞察を持つたのである。吾々の催眠狀態中に例へば父の看病、靑年との交際、病原的時代の初期に起つた他のことに關する回想を題材とする時に、右の下肢が痛み出し、一方死んだ姉、二人の義兄に關する回想、換言すれば哀話の後期の印象を喚起せしむるや否や、疼痛が左の下肢に發することを發見した。

この一定の行動に注意を促されて、私はさらに探究をおしすすめ詳細なことはもつと深いところにあるやうな、痛覺の新しい心的動機は下肢の疼痛圏の他の場所に結びついてゐるやうな印象を受けるに至つた。右の上腿における起原的な疼痛の箇所は父の看病に關聯してゐた。疼痛の領域は新しい外傷の機會の添加によつてその箇所を中心に擴大されて、そのために、嚴密な意味において幾重もの心的回想錯綜と結びついた單一な肉體的症候が存在してゐるのでなくて、表面的な觀察によつて一つの症候に融合してゐるやうに見えるいくつもの相同の症候の重疊が存在してゐたのである。勿論私は各箇の心的動機に相應する疼痛帶の境界を追つて行かなかつた。といふのは私はかういふ關係に患者の注意が注がれてゐないことを知つたからである。

歩行困難の全症候錯綜がどういふやうにしてこの疼痛帶の上に建設されたのであるかといふ方式に私は一段の興味を覺えて、この目的のためにいろんな質問を試みた。例へば、歩いてゐる時立つてゐる時、横たはつてゐる時の疼痛は何に由來してゐるか。さういふ質問に對して、彼女は一部はこちらからの働きかけなしに、一部は私の手の壓迫によつて返答した。その結果私は二種の結果を手にした。一方において彼女は悲痛な印象と結びつく光景を、彼女がその場面で腰かけてゐたか、立つてゐたかに從つて分類して呉れた。――例へば父が心臓發作で倒れて家に送りこ

まれた時には、彼女は入口に立つてゐて、驚きのあまりまるで足が釘附にされたやうに立ちつくしたのであつた。立つてゐる時のこの最初の驚愕を基點に彼女は進んでいろいろの回想を喚びさまし、最後に死んだ姉の枕邊にまるで縛りつけられたやうに立ちつくしたといふ驚愕の光景を思ひ浮べた。回想の全連鎖は疼痛と起立の關係を正當にした。それは又聯想試驗としても立派に役立つたのである。これらすべての機會において注意を——さらに進んだ結果として轉化を——丁度起立(歩行、着座等々)にさしむけた他のモメントがなほ立證されねばならぬといふ要求を忘れてはならなかつた。人は注意のこの方向に對する說明を、歩行、起立、横臥がここでは痛みのある部位、卽ち下肢を擔ふ身體部の働きと狀態に殆ど求める事が出來なかつた。この故に起立不能歩行困難と轉化の最初の機會の間にある關聯をこの疾患の中にたやすく理解することが出來た。

この檢閲に從つて歩行を痛くせしめた光景の中に、一つの光景、彼女があの温泉場でみんなと一緒に行つた、一見あまり長いやうに思はれなかつたピクニックが浮び上つて來た。この出來事の詳細な情況がたじたじの姿で現れて來て、多くの謎を不可解のままに殘した。彼女は特別やわらかい氣分狀態にあつた。顔なじみの人達の仲間に喜んで加はつて行つた。晴れわたつたあまり暑くない日であつた。母は宿にひきこもつてゐた。上の姉は旣にこの地を立ち去つた。下の姉は

氣分が惡いと言つてゐたが、妹の樂しみを妨げようと思はなかつた。この下の姉の夫は細君と一緒に宿に殘つてよやうと最初のほどは言つてゐたが。たうとうエリザベートのために、一緒にピクニックに加はることになつた。この光景は疼痛の最初の發現と深い關係を持つてゐるやうに思はれるといふのは、非常に疲勞して劇しい疼痛を抱いて遠足から宿に歸つて來たことを彼女は思ひ出したが、その以前に疼痛があつたかどうかをはつきり述べなかつたからである。萬一强い痛みでもあつたなら、こんな長い遠足に加はらなかつた筈だと考へた。このピクニックにおいて疼痛は何のために起つたのであるかといふ私の質問に對して、私は彼女から全然明瞭でない返答を持つた。卽ちやさしい義兄がいつも彼女のゐる目の前で病弱の姉をいたはるところの二人の夫婦生活の睦じさと自分の孤獨とのコントラストが、自分には悲しかつたといふのがその返答であつた。

只今の光景と時間的に非常に近接してゐる他の光景は、坐つてゐる時の疼痛との關聯に一つの役割を演じてゐた。それは前の光景から二三日あとのことであつた。下の姉夫婦は旣にこの地を出發した。彼女はいらだたしい、何となく物足りない氣分に包まれて朝早く離床し、小丘に登つてみんなと一緒によく散步に行つた非常に眺望のよい場所まで步いて行つた。そして石のベンチ

に腰をかけて物思ひに沈んだのである。彼女は自分の孤獨、自分の家族の運命を思ひ出した。下の姉さんのやうに幸福になりたいといふ熱望を彼女はこの時はつきりと告白したのであつた。だがエリザベートはふと激しい痛みのためにこの朝の默想から我にかへつた。その晩に彼女は温泉に浸つた。そのあとで疼痛がひつきりなしに感ぜられて、それが今日まで持續してゐるのである。

歩いてゐる時立つてゐる時の疼痛は、最初のほどは寢てゐる時には鎭まるのを常としたことがさらにはつきり分明した。姉が危篤だとの通知を手にするや、ガシュタインをその夜に出發して夜行列車にゆられながら、姉への懸念、同時に煮え返るやうな疼痛に悶々としながら、まんじりともせずに横たはつてゐた時に、寢てゐることと疼痛がはじめて結びついたのである。その一夜は寢てゐることは、歩いてゐる時、立つてゐる時よりもつと强く彼女に痛みを與へた。

このやうにして第一に疼痛の領域は同格をもつて擴大された。卽ち病原的に新しく作用する題目は下肢の新しい領域を占めたのである。第二に印象深い光景のそれぞれがその痕跡を殘して行つた。卽ちその痕跡は下肢の種々なる機能に恒久的なしだいしだいに累積する「裝塡」を作り、それらの機能と痛覺を結合せしめた。併し起行不能の成立になほ第三の機構が明白に協力してゐた。その時「獨りで立つてゐる」ことは自分には痛ましく感ぜられたといふ愁歎をもつて、彼女

が事件の全系列を語り終つた時に、又新しい家庭生活の再建への彼女の空しい努力に關する他の系列において、その時の痛ましさは自分の孤獨感であつた、自分はもうここから一歩もあるけないといふ感覺であつたとしつこく繰返へした時に、歩行困難の形成に彼女のこの反省がある影響を與へたと私は考へずにをられなかつた。彼女は自らの痛ましき思考に對して直接象徵的表現を求め、自らの疼痛の加重の中にその表現を發見したのだと假定しなければならなかつた。このやうな象徵化によつてヒステリーの肉體的症候が發生出來るといふことを、私達はさきに發表した『豫報』の中において主張した。私はこの疾患史の批判において確實な證據となる二三の實例を紹介する積りである。エリザベート孃にあつては、象徵化の精神機構は第一位に存しなかつた。その機構は歩行困難を創造しなかつた。しかしながら既存の歩行困難がこの道程において、根本的な強化を持つたといふことをすべてが物語つてゐた。從つて私が彼女に會つた當時の發展の段階にあつては、この歩行困難は心的の聯想的機能麻痺だけでなく、又象徵的機能麻痺に匹敵出來るものであつた。

この患者の歴史を繼續するにあたつて、治療の第二期における彼女の狀態について一言述べておきたい。私はこの全分析中手で頭をおさへることによつて心像と聯想を浮べしめる方法、卽ち

患者の完全なる協力と自發的なる注意なしに應用出來ない方法を利用した。この方法はしばしの間は私の思ひ通りにうまく行つた。そしてかやうな時期において、いかに迅速に、いかに確實に一つの題目に屬する各箇の光景が年代的に浮び上つて行くかは眞に驚くべきものであつた。まるで長い繪本を繰つて行くやうであつた。その繪本の一頁一頁が彼女の眼前に展開されて行つた。ある時は何か妨害が起つたやうに思はれた。それがどういふ種類の妨害か當時私は未だ想像することが出來なかつた。私が手で頭を壓迫した時に彼女は何も浮んでこないと主張した。私は再三再四頭を手でおさへて彼女の返答を待つた。だがやる度每に一向何も浮んでこなかつた。この反抗が現れた時に、私ははじめもう分析をやめてしまはうかと決心した。今日はどうも工合が惡い、次の日にやらう、ところが二つの認識が私の態度を斷然と變化さすやうにした。第一にこの方法がこの樣に失敗するのは、エリザベートが快活な態度で疼痛を訴へぬ時にのみ存してゐて、日が惡いなどと私が思ふ時には却つて存しなかつた。第二に何も目に映りませんといふやうな返答はしばしば彼女が長い間沈默してやつとしてから發せられるのであつて、その間の彼女の緊張した考へこんだ表情から、私は彼女の胸底に動くある心的過程を看取することが出來た。そこで私はこの方法は決して失敗しない、エリザベートは私が手でおさへる時はいつでも頭の中に一つ

の聯想、目の前に一つの心像を持つ、だがそれを私にいつも進んで語るとは限らない、現れたものを再びおしこめようと努めるのだと假定しようと決心した。かやうな沈默の動機に對して私は二つのものを想定することが出來た。エリザベートは浮び上つた聯想に對して理由のたたぬ批判を下し、與へられた質問に對する返答としては、その聯想は價値がないとか、適切なものでないとか考へるのである。或ひはかやうなことを口に出すのはあまりに不愉快だとの理由でもつてその聯想を承認するのを躊躇する。そこで私はその方法が信頼出來ることに十分な自信を持つてゐるといふ態度で行つた。彼女が何も浮び上らないと主張する時は、私は最早それをそのまま受けとらなかつた。あなたはきつと何かを浮べたに相違ない、あなたは少しも注意を拂はなかつたのだ、そんなことなら何度でも手でおさへますよ、或ひはあなたは折角浮び上つた聯想を正しいものでないと思つていらつしやるのだと私は彼女に駄目をおした。だがそんなことは係りのないことだ、飽くまでも客觀的態度で、たとひ適切であつても適切でなくても、あなたの頭に浮んだそのままを申告すべき義務がある。最後に、彼女にあるものが浮んだ、彼女はそれを私に隱さうとしてゐる、併し彼女がそれを隱してゐる限り、彼女の疼痛は決して恢復しないことを私ははつきり知つたのである。かくの如き強迫をもつて、眞實一つの壓迫といへども無收獲に終らないこと

を發見した。私は實相を正しく認識したと假定しなければならなかつた。そしてこの分析において事實、私のテクニークに對して無條件の信頼を贏ち得たのである。彼女は私から三度も手で壓迫された後、やつと一つの報告をする場合がたびたびあつた。併しその時彼女は、實は私は先生にこのことははじめの時に申上げることが出來たのでしたがと附け加へる。――何故あなたはその時仰しやらなかつたのですか。――それは正しいものでないと私は考へました。或ひはかう言ふ。それを迂回して行けるものだと思つてゐました、それだのに、いつでも同じものが浮び上つて來るのでございました。この多難なる作業の間に私は患者が回想の再生において示すところの抵抗に深い意義を置いて抵抗が特に顯著に現れる場合の原因を綿密に對照し始めたのである。

いよいよ治療の第三期の敍述に移る事にする。患者はますます快方に向つて行つた。彼女は精神的には重荷を下したやうな氣持になつた。そして力が漲つて來た。併し疼痛は明白に除去されたとはいへなかつた。疼痛は時々しかも以前の劇しい痛みを持つて、再發したのであつた。不完全な分析は不完全なる治療効果と平行する。私はその疼痛がいかなる動機をもつて、又いかなる機構を通して發生したかを未だ正確に知つてゐなかつた。第二期におけるさまざまな光景の再生

と物語に對する患者の抵抗の觀察の間に、一つの疑惑が私の心に形づくられて行つた。併し私は進んでその疑惑を私の分析の土臺とする決心がつかなかつた。だが偶然な發見はつひに實を結んだのである。ある日のこと分析の最中に隣室に男の足音がして誰か人を尋ねてゐるやうな話聲が聞えた。その時この女患者は今日は治療をやめて欲しい、私の義兄がここにやつて來て私を探してゐるのだと言つて立ち上つた。この時までは彼女には疼痛がなかつたのに、この攪亂のあとで彼女の表情、彼女の步行は激烈な疼痛の突然の發現を示したのである。私はかねがねの疑惑を强めて徹底的な說明を誘導しようと決心した。

そこで私は疼痛の最初の發現の情況と原因を糾問した。これに對する返答として彼女の思考はガシユタインへ出發するまで滯在してゐたあの溫泉場の避暑に注がれて、二三の光景が再び浮んで來た。これらの光景は今迄に大して完全に論じ盡されなかつたものである。その當時の彼女の氣分、母の視力に對する心遣ひと手術中の看護の果ての疲勞、孤獨な娘として人生を樂しみ或ひは人生において活動することの出來ぬ無限の絕望。彼女はこの日まで男の片腕などに賴らなくても生きて行けると考へる程に强かつたが、今や女性としての彼女の弱々しい感情、彼女自らの言葉を借れば、彼女の頑固さを軟化し始めようとする戀愛への憧憬が彼女の心を支配し始めた。か

ういふ氣持の中で、下の姉の幸福な結婚生活は彼女に強い感銘を與へる。義兄は何とやさしく姉さんをいたはることであらう。二人は一つの目配せで相互に理解するやうになつてゐる、二人は何としつかりとお互に結びついてゐることであらう。二回目の姙娠があまりに早くに來たことは確かに遺憾なことであつた。そして姉はこの姙娠が今度の病氣の原因であることを知つてゐた。併し夫がその元を作つたために姉は甘んじてこの病氣に堪へて行つた。エリザベートの疼痛と深い關係を持つてゐたあのピクニツクに義兄は最初のほどは加はらない積りであつた。彼は病床にある妻の側に殘る方がよいと言つてゐた。併し姉の目配せによつて彼は一緒に遠足に行くことになつた。といふのは兄が行く事はエリザベートを喜ばすだらうと姉は考へたからである。エリザベートはその日は終日兄と一緒に步いた。二人はいろんな親しいことを話しあつた。彼女は兄の語るどんなことにも心から共鳴した。兄さんと同じやうな男の方をあたしは夫に持ちたいといふ願望が彼女の心に熾烈になつて行つた。ついで數日あとの光景が現れる。その日の朝彼女は姉夫婦が出發したあとで兄がよく散步に行つたあの展望臺に步いて行つた。彼女は石のベンチに腰をかけて、再び姉の手にしてゐる幸福、あの兄と同じに自分の心をしつくり理解して吳れるやうな男子を心に描いた。彼女はふと疼痛のために立ち上つた。だがその疼痛は間もなく消失した。そ

れから午後に溫泉に浸つたあとで再び疼痛が襲つて來て、その時以來疼痛は消失しないのである。そこで私は彼女がどういふ思考を描きながら溫泉に浸つてゐたかを探究しようと試みた。併し浴場といふことは彼女に出發した姉を思ひ起さしただけである。姉さんは同じ宿に滯在してゐたからといふことだけが浮んだ。

問題が何であるかはとつくに私に解つてゐなくてはならなかつた。患者は痛く甘き回想に沈んで、いかなる解決に向つて自らが舵を取つてゐるかを意識してゐないやうに見えた。そして彼女は回想の複寫を語り續ける。手紙が來る每に、もしやと胸をうつ心配、最後に姉危篤といふ電報、夜行列車でガシユタインを出發するために夜行汽車を待つまでのもどかしさ。不安に包まれ一睡も出來ない汽車の旅――すべてのモメントは疼痛の激しい亢進を伴つてゐた。彼女はあとで眞實となつた悲しい可能性を列車內で心に描いたかと私は尋ねてみた。彼女はさういふ考へを極力打消さうとしたが、彼女の意見によると、母の方ははじめから今度は到底駄目だと決心してゐたと返答した。――それからギーンに到着した時の知らせの回想、出迎へに出てゐた親戚の人達から受けた印象、ギーンから姉のゐる避暑地への短い旅、晩方その避暑地への到着、庭園を通つて小さい別館の入口までのあはただしい步み――靜りかへつた屋

敷内、重苦しい暗黑。義兄は出迎へに現れなかつた。それから彼女と母はベッㇳの枕邊に立つて死んだ人を見た。そして、たうとう姉さんは亡くなられた、あたしに一言のお別れもされず、臨終にあたしの看護も受けられずにといふ怖ろしい確定の瞬間に——その同じ瞬間にエリザベートの頭を別の思考がかすめた。その思考が現在はつきりと甦つたのだ。闇空に閃く稻妻のやうな思考、「今あの人は獨り身になられた。そしてあたしはあの人のお嫁になれる。」

今や一切のものは明瞭になつた。分析家の努力は立派に酬いられたのだ。和解し難い觀念の「防禦」概念、心的興奮を肉體に轉化することによつてのヒステリー性症候の發生、防禦に導いた意志行爲による分離した精神群の形成、これら一切がこの瞬間にはつきりと私の眼前におしよせて來た、只今の場合からであつてあゝでなかつたのだ。この娘は義兄に戀を感じてゐた。意識においてそれを認容することに彼女の奉ずる全倫理觀は反對する。自分が姉の夫に戀してゐるといふ悲痛なる確定を、それに代つて、肉體的疼痛を作ることによつて逐拂ふことに成功した。そしてこの確定が彼女の心にこみ上つて來ようとする瞬間（兄との遠足、あの朝の空想、浴場、姉のベッㇳの前）に、肉體への見事なる轉化をもつて疼痛が發生したのである。私が彼女を治療してゐる時に、この戀愛に關する觀念群が彼女の知識から早くも分離されてゐた。分離されてゐなけ

れば、彼女は決してこんな治療を承諾しなかつたと考へられる。外傷的に作用する光景の再生に彼女が幾度となく持ち出した抵抗は、融和し難い觀念を聯想から逐拂ふところのエネルギーにはつきり匹敵してゐる。

併しさしあたつて治療家に悲しい時期が現れる。抑壓されたあの觀念を再び攝取するといふことの結果は、哀れなる娘を踏みにじるやうなものであつた。あなたは以前から兄さんに戀していらしたのだといふ冷やかな言葉で私がこの實狀を總括した時に、彼女は大きな叫びをあげた。彼女はこの瞬間に激烈な疼痛を訴へた。この私の說明を否定しようと彼女は命かぎりの反抗を示した。先生が私にそんなことを忖度されるのは間違つてゐる。かりそめにも私にそんな大それたことが出來るとは考へられない。そんなことは私にとつて赦さるべきものでない。彼女自らの報告から別の解釋が出來ないことを彼女に立證することは容易であつた。併し感情に對しては責任はない。かやうな機會における彼女の態度、彼女の疾患は、彼女の倫理觀に對する十分な證據であるといふ私の二つの慰めの理由、いはばこの慰めが彼女の心に徹するまでには可なり長い時日を必要とした。

患者を宥めるために今や私は一つ以上の道を歩まねばならなかつた。先づ第一に私は久しい以

前から貯へられつつあつた興奮を「反撥」によつて釋放しようとする機會を彼女に與へようと思つた。私達は義兄との交際からの、無意識に保たれたあの愛情の芽生からの第一印象を探究した。十分に發展した情熱を回顧的に知らしめる小さい表示や豫想の一切が存してゐた。義兄がはじめて邸を訪問した時に、彼女を自分の婚約の娘だと早合點して、少しふけた地味な姉に挨拶する前に彼女の方に挨拶した。ある晩のこと二人が非常に面白さうに話し合つてゐた。二人はまるで意氣投合したやうな話しぶりであつたので、姉はなかば眞劍にとれる「あなたと妹なら本當にお似合の御夫婦ですのに。」といふ言葉で二人を遮つた。ある時などはある會合で二人の婚約を知らない人達がその青年の姿の缺點をあげて、まるで子供の時に骨の病に罹つたやうな姿であると異議を唱へた。姉の方はその時默つてゐたが、エリザベートの方は嚇となつて、自分にも分からない程の熱心さで近々自分の兄さんになるこの青年の眞直な發育を辯護したのであつた。私達かかやうな回想を掘り返すことによつて、義兄に對する愛情がずつと以前から、恐らくはじめて會つた時から、彼女の心にうごめいてゐて、その愛情は單に親族的な愛情の假面のうらに、彼女の強い家族感情が許す限りずつとかくされてゐたことがエリザベートに明瞭になつた。

この反撥は彼女に非常によい效果をもたらした。だが現在の境遇を友人のやうに心配してあげ

ることによつて、彼女の病氣をずつとずつと樂にさすことが出來た。私はかやうな目的をもつてエリザベートのお母さんにお目にかかつた。彼女は理解のある上品な婦人であつた。勿論打ち續く不幸によつて活氣がなくなつてゐた。上の義兄が母に行つた、そしてエリザベートを悲しませたあの亂暴な脅喝の非難を、詳しい事情を聞くに及んで、撤回しなければならぬことを私はお母さんから承つた。上の義兄の性格は潔白であつた。一つの誤解、金錢を勞働要具と觀ずる商人が官吏の考へ方に反對して起さねばならぬ金錢の價値判斷における當然な見解の相違、一見悲しむべきこの出來事からこれ以上のことは何も殘らなかつた。私はお母さんに娘さんが知りたいことはすつかり說明するやうに頼んだ。そして將來において娘さんに言ひたいことは言はすやうな機會を與へて欲しいと希望した。私はエリザベートにさういふ習慣をつけてやつたのである。

今や意識にのぼつた娘の願望がそれの實現のためにいかなる機會を捉へたかを知りたいと思ふのは自然である。この點に關して萬事はあまり都合よくなかつた。エリザベートが義兄に愛情を懷いてゐることを早くから感附いてはゐたが、さういふ愛情が姉の存命中に旣に動いてゐたとは知らなかつたとお母さんは語つた。彼等二人の交際してゐる――勿論疎遠になつて行つたが――のを見る人にには、彼に好かれようとする娘の意向を疑ふことが出來ないだらう。母ばかりでなく

後見人も二人を夫婦にさすことを非常に希望した。義兄の健康はよくはなかつた。それに愛妻の死によつて新しい衝撃を受けてゐた。彼が再婚するところまでに精神的に恢復してゐるかは疑問であつた。彼はこのために非常に愼重であつたやうに思はれた。恐らくは又、先方の許諾がはつきりしないため、つまらぬ噂を避けようと思つたためでもあつた。雙手からの躊躇のために、エリザベートの熱望してゐた解決は失敗に終らねばならなかつた。

私は娘さんにお母さんから聞いた一部始終を隱さずに話した。あの金錢問題のことも説明して彼女を安心さす喜びを持つた。そして他方において徒らに散じてはならぬ將來の不安を氣長に待つやうに忠告した。併し今や夏も迫つて治療はここで切上げることになつた。彼女は再び健康に復した。私が疼痛の由來した原因を研究して以來、私達二人の間に彼女の疼痛は最早話題とならなかつた。私達二人はやれやれおしまひだといふ感情を持つた。勿論抑壓された愛情の反撥は未だ未だ完全でなかつたと私は心に思つた。私は彼女を全快したものと見た。道が一度開けた以上は、自分で單獨に解決を進めるやうに希望した。そして彼女は私の言つたことに反對しなかつた。娘は母と一緒に避暑地で上の姉、その一家と落合ふために旅行に出發した。

私は簡單にエリザベート孃における疾患のその後の經過を報告しておかねばならぬ。旅行に出

てから二三週目に私はお母さんから絶望したやうな手紙を貰つた。彼女の戀愛に關して母からはじめて話を切り出した時に、エリザベートは非常に立腹して、この時以來又ぞろ激しい疼痛がおこるやうになつた。私が祕密を喋つたといつて娘は私を怨んで、もう誰も寄せつけなくなつてしまつた。治療は全く失敗であつたとしたためられてあつた。それではどうすればよいのか。彼女は私から何も知らうとは思はなかつた。私は返辭を出さなかつた。私の訓練から離れた後は、娘は母の干渉を拒絕し、彼女の孤獨に歸るやうに、もう一度試みるであらうことを待たなければならなかつた。併し私は一種の自信を持つてゐた。萬事はちやんと進んでゐる筈だ。私の努力は決して徒勞ではない筈だ。二箇月の後彼女はギーンに歸京した。そしてこの娘を最初に紹介した同僚が私にエリザベートはすつかり全快して健康者と同じやうにふるまつてゐた、勿論時々未だ疼痛が現れるがと知らせて吳れた。彼女はその後繰返し一度お伺ひしたいと思つてゐますがといふ極り文句の手紙をよこした。さう言ひながら彼女が一度も私を尋ねなかつたのは、さういふ治療において出來上つた個人的關係の特徵であつた。私の同僚が私に保證して吳れたやうに、彼女は全快してゐると考へてよかつた。家族と義兄の關係は從前どほりであつた。

一千八百九十四年の春私が出入してゐた家庭舞蹈會に、彼女が顏を見せるといふことを耳にし

た。その後娘は自由戀愛をもつてある未知の男と結婚した。

批　判

私は精神療法のみを施行したのでない。他の神經病學者と同じに局處診療と電氣診療をも行つた。そして私が書き綴つた疾患史はまるで小說のやうであること、それは所謂科學といふ嚴密な特徵を缺いてゐることは私にさへ特異に感ぜられる。この結果に對して私の趣味よりも對象の性質がむしろその原因をなしてゐると考へて自らを慰めずにをられなかつた。局處診療と電氣感應はヒステリーの硏究において大した役に立たぬが、世人が詩人から聞き馴れてゐるやうに、精神過程の詳細なる描寫は少數の心理學的公式の應用において、ヒステリーの經過に一種の洞察を贏ち得るやうに私に許して吳れた。かやうな疾患史を精神病學的に批判したいと思ふが、後者よりも一つのものの方が、卽ち私達が他の精神病者の傳記において空しく求めるところの哀話と疾患史の密接なる關聯の方が優れてゐる。

私がエリザベート孃の症例に對して下すことの出來た說明を彼女の治療史の描寫に編みこんで

みようと努力した。根本的なものをその關聯においてここに反復するのは無駄ではなからうと思はれる。私は患者の性格に多くのヒステリー患者において再三現れる、そして眞實變質の中に數へたてることが出來ない特徴を描寫した。天稟、功名心、倫理觀、家庭の中においてはじめてはけ口を見出した過大なる戀愛衝動、女性の理想を一歩踏み出した彼女の天性の獨立心、その天性は頑固、喧嘩好き、斷行性の中に十分にその姿を見せてゐた。私の同僚の報告によれば、何等の遺傳的素因も兩親の家系に存してゐなかつた。彼女の母は長い年月あるはつきりしない神經的沈鬱になやんでゐた。併し母のはらから、父、その家族のものは神經質でない圓滿な人間の中に數へてもよかつた。神經精神病の重症のものは近親のものに存してゐなかつた。

この天性の上に今や悲痛なる情緒運動が作用した。第一に愛する父に對する長い看護の抑鬱作用が働いた。

ヒステリー患者の症歴において、病人の看護が重大な役割を演じてゐるならば、それには立派な根據があるのである。この際に作用するモメントの系列は極めて明瞭である。即ち落着いて睡眠出來ないために、肉體的健康を攪亂し、からだの手入を等閑にし、不斷に蝕む心勞が、植物性の機能に反映する。併し最も重大なることは、私の評價に從へば、別のところに存してゐる。引

續き引續き、數週間、數箇月にも亙つて起つてくる種々さまざまな看護の仕事に心が一杯になつてゐる人間は、一方においては自らの感動の一切の表出を抑壓する習慣になり、他方においては、自らの感銘に對していち早く注意をそらすやうになる。といふのは、感銘に適應する上に時と力が缺けてゐるからである。かやうにして病人を看護するものは十分はつきり認識しない、どのみち反撥によつて弱められない情緒的印象の大量を自らに貯藏する。それは貯溜ヒステリーの材料を作るのである。看護してゐる病人が恢復するならば、これらの一切の印象は當然價値を失つてしまふが、病人が死亡して、喪期にはひれば――その時期において亡き人に關するもののみが一切の價値を掌握するやうに見える――釋放を待ちかまへてゐた印象が順々に現れて來て、疲勞の短い期間のあとで、看病の時間に種を播かれたところのヒステリーが勃發する。

看病の期間に集められた外傷を後に至つて釋放するといふ同一事實に、疾患の全印象が現れずに、しかもヒステリーの機構が認められるといふ場合にも、時々遭遇することが出來る。例へば私は輕度の神經質に惱んでゐる聰明な一婦人を知つてゐる。一度も醫者にかからなかつたし、日常の仕事にはまるで差支へなかつたが、その女の全本質はどこから見てもヒステリーであつた。この婦人は愛する人を三四人臨終まで看病したことがあつた。いつでも身體が綿のやうに疲勞し

切つた。彼女はこの悲しい務めのあとでも病氣で倒れなかつた。ところが看護してゐる病人が死んでから間もなく彼女において再生作用が始まつて、病氣や死の光景がもう一度彼女の目前にちらちらした。婦人は毎日毎日いろんな印象を新しく描き、思ひ出しては泣き、思ひ出しては心を勵ました――閑になつたからだと言つてもよかつた。かやうな釋放は彼女においては一日の業務と並んで進行した。この二つの働きは混線しなかつた。全印象が年代的に彼女の目前に展開して行つた。一日の回想の仕事は過去の一日にぴつたり一致してゐるかどうかを私は知らない。これは家政の日々の業務が彼女に許す閑暇にかかつてゐたと私は想像する。

短い間隔をもつて死亡に結びつくこの「おくればせの涙」の外に、この婦人は毎年毎年それぞれの命日に周期的な思ひ出祭を行つたのである。そして彼女のいきいきした視覺再生と彼女の情緒表出はその日附を忠實に追つて行つた。例へばこの婦人が泣いてゐるのに會ふ。そして今日はどうしたんですかと同情的に尋ねる。彼女はなかばいらいらして、私の質問を避ける。「いいえ。今日は丁度N部長が再びお見えになりまして、もう絶望だとお話しになりました日でございます。私はあの日は忙しくてなかなか泣くどころでございませんでしたの。」それは三年前に死去した夫の最後の容體に關係してゐるのである。毎年繰返される思ひ出祭において、夫人がいつも同

一の光景を再生するのか或ひは私が自分の學說に都合のよいやうに臆測するやうに、(1)いつも違つた光景が反撥の材料になるのかを知るのは私には非常に興味深いことであつた。併し私はそれに對してしつかりしたものを知ることが出來なかつた。この聰明な男まさりの夫人は回想が自分に作用する强度を恥ぢてゐたのであつた。

(1) 私は嘗てかやうな「おくればせの反撥」が――看病の場合以外の他の印象によつて――他の點で不可解な神經症の內容を作ることの出來るのを知つて驚歎したことがある。それは十九歲になる美しい娘なるマチルデ孃の症例についてであつた。この娘は下肢の不全痲痺のために私を訪れた。ところが數箇月後に彼女の性格が變つたために往診に呼び出された。彼女は厭世心を起すまでに沈鬱になり、自分の母に亂暴になりいらいらして誰の言ふこともきかなくなつた。この患者の全症狀から尋常なメランコリーの診斷をつけることが出來なかつた。彼女は非常にたやすく深い夢遊狀態に陷つた。そしてこの性質を利用してその度每に彼女に命令や暗示を與へた。彼女はそれを深い睡眠狀態において傾聽してさめざめと泣くのであつた。併しそんなことをしても娘の症狀は大して變化しなかつた。ある日のこと彼女は催眠狀態において非常に多辯になつて、自分が沈鬱になつたのは數箇月前に婚約が破談になつたのが原因であると私に語つた。婚約の人と親しくなればなる程、母も娘もその人にだんだん嫌氣がさして來た。他方において

婚約の物質的利益があまりに露骨になつて、そのために破談の決心がたやすくついて來た。母も娘も長い間二の足を踏んでゐた。娘は狐疑逡巡の狀態にあつた。この狀態において彼女は無關心な態度ですべてのことを忍んでゐた。そしてつひに母の方から彼女にきつぱり斷るやうに申出た。それから後暫くの間は彼女はまるで夢から醒めたやうな氣持になつた。そして破れてしまつた婚約を今さら熱心に考へ始め、贊成であるか不贊成であるかを今さら思案し始めた。かやうな過程が彼女の心中にずつと進行した。娘は現在でもなほ狐疑逡巡のあの時期の生活を續け、毎日毎日あの時時に相當する氣分と思考を懷いた。現在母に對して抱くいらだたしさもまたあの當時の中心をなしてゐる情況から說明がつく。そしてこの思考活動と並んで現在の生活は彼女にはまるでまぼろしのやうに、まるで夢見てゐるやうに思はれた。——私はことで娘に再び語り續けさすことに成功しなかつた。深い催眠狀態において私は私の激勵を續けた。彼女は一言も返辭をせずにその度毎にしやくり泣いた。そしてある日のこと、丁度あの婚約の日から丸一年目に沈鬱の全狀態が消失した。

これは實に私の催眠療法の大きな功績に歸すべきものであつた。私はもう一度强めて言つておきたい。この婦人は病人でない。おくればせの反撥はすべての類同に拘らず決してヒステリー性過程でない。ある看病のあとでヒステリーが起り、他の看病のあとではヒステリーが起らないの

は一體何に基くのかといふ疑問を提起しなくてはならぬ。それは個人的素因に存してゐない。かやうなものは私がここで問題にしてゐる婦人においては實に豐富に存してゐるからである。

再びエリザベート孃に戻らう。卽ち父の看病の間にヒステリー症候がはじめて彼女に發現し、しかも右の上腿のある一定の箇所に基いて十二分に闡明された。病める父に對して果さねばならぬ彼女の義務といふ觀念圈が、彼女のエロッチック な憧憬の當時の內容と葛藤した瞬間に起つたのである。激しい自責でもつて彼女は義務觀念の方に味方し、同時にヒステリー性疼痛を作つた。ヒステリーの轉化說が奉ずる見解に從へば、この過程は次のやうであつたであらう。彼女はエロチックな觀念を意識から抑壓し、その情緒量を肉體的な痛覺に轉化した。最初のこの葛藤がたつた一回だけ、或ひは何度も繰返し彼女に提供されたかは明瞭でない。恐らく、何度も繰返されたのであらう。全然同一な葛藤——非常に高い道德的意義を持つた、そして分析によつてもつと立派に立證される——が數年の後に反復され、同一の疼痛を亢進せしめ、その疼痛を最初に裝塡された境界の外にまでひろめたのである。彼女の道德的觀念と衝突したのは再びエロチックな觀念圈であつた。何となれば、愛情は彼女の義兄に注がれて、彼女がこの男にあこがれるといふことは、姉の存命中にも姉の死去の後にも、彼女にとつては不快なる思考であつたからである。

疾患史の機軸をなすこの葛藤については分析からは詳細なことはわからない。義兄に對する愛情は久しき以前から芽生えてゐた。最近の看病による肉體的疲勞、數年間の打續く失望による精神的疲勞によつてこの發展は助成された。その時彼女の內部的謹直は溶解し始めた。そして彼女は男子の愛の欲求を自らに告白したのである。數週間にわたる交り（あの温泉場で）の間に、このエロチツクな愛情は同時に疼痛をもつて滿開に達した。そして丁度この時期に對して分析は患者の特別な精神狀態を立證して吳れた。その狀態が愛情と疼痛に關聯することは轉化說の意味における過程の理解を開いて吳れる。

患者はその當時非常に熾烈であつたとはいへ、義兄に對する愛情をはつきり意識してゐなかつた。ただ極く稀な場合において、さういふ時は單に瞬間的に意識したといふ主張に私は信賴しなくてはならぬ。若しさうでなかつたならば、彼女はこの愛情と彼女の道德的觀念の矛盾を意識して、分析のあとで彼女が苦悶するのを見たやうに、同じ苦悶が存すべき筈であつたのである。彼女の回想はさういふ苦悶を丸で報告しなかつた。彼女はその苦悶を缺いてゐた。この故に彼女には愛情それ自體は明瞭でなかつた。分析時と同じに當時においても、義兄に對する戀愛は一種の異物として彼女の意識に存してゐて彼女の他の觀念生活とは何の交涉をも有してゐなかつた。こ

の愛情に對しての知識の、同時に無知の特有なる狀態、隔離された精神群の狀態が存してゐた。この愛情が彼女に「はつきり意識され」なかつたと主張する時には、別に外のことを意味してゐるのでなくて、他の觀念内容との自由なる聯想的思惟交通からの隔絶を意味してゐるのである。かやうに熾烈に强調された一つの觀念體がかやうな隔絶において維持されたのはどうして起つたのであるか。一つの觀念の情緒の大さと共に聯想におけるそれの役割も一般に增加する。

私達が自信をもつて利用出來る二つの事實を考慮する時に、この疑問に答へることが出來る。この二つの事實といふのは第一に、ヒステリー性疼痛はこれらの隔絶された精神群の形成と同時に發生すること、第二に患者はこの隔絶した精神群と殘餘の意識内容の間の聯想形成の試みに對して大きな抵抗を提起し、この結合が成就される時に、大きな心的疼痛を感ずるのである。ヒステリーに關する私達の見解は意識分裂の事實と共に、さらに二つのモメントを召集する。即ち第二の事實においては意識分裂の動機の指示を、第一の事實においては意識分裂の機構の指示を含んでゐる。動機は防禦の動機であり、この觀念群に適應する全自我の反抗である。機構は轉化のそれであり、その時免ぜられる精神的疼痛の代りに肉體的疼痛となつて發現する。即ち一つの變形が行はれるのだ。そのために、勿論精神異常即ち承認された意識分裂と肉體的苦痛、即ち起行

不能の土臺をなす疼痛を犧牲にして、患者は堪へられない心的狀態から免ぜられるといふ利益が生ずる。

勿論どうして人間がさやうな轉化を自らに作るかに對して私は手引を與へることは出來ぬ。どうして人間が故意に勝手な行動を行ふのかといふことに對して說明が出來ぬと同じに、只今のことを明瞭にすることは出來ぬ。その組織においてそれの適應——或ひは一時的の變化が存してゐるなら、防禦といふ動機の衝動の下に個體において行はれる過程であるといふことになる。もつと間近く理論に突貫して、この場合肉體的疼痛に轉化するものは、一體何であるかといふ質問を放つ權利がある。用心深い返答は、あるもの、それから精神的疼痛が持たれ得た、持たれるべきであつたあるものである。若しさらに肉迫して觀念機構の一種の代數學的描寫を試みるなら、無意識にとどまつてゐるこの愛情の觀念錯綜にある一定の情緒額を加へ、引いた殘額が轉化されたものとなるのである。この見解から直接生ずる結論は、「無意識的戀愛」はかやうな轉化を通じて非常にその强度を强め、その結果一つの薄弱な觀念に轉落してしまふ。かやうにして隔絕された精神群としてのそのものの存在はこの薄弱化によつてはじめて許されるのである。只今の實例はこのむづかしい材料から鮮明にするに適切でない。この實例は眞實不完全な轉化に一致してゐ

る。他の實例から人は完全なる轉化も生ずること、かやうな場合には、大して熾烈でない觀念が抑壓され得ると同じに、堪へ切れない觀念が事實において「抑壓」されるといふことをはつきりさすことが出來る。聯想的結合が行はれたあとで患者は、自分はヒステリー症候の發生以來、このいやな觀念は最早頭の中からなくなつたと確めて吳れるのである。

患者はある場合瞬間的であるが、義兄にいだく戀愛を意識的にも認めたと私は以前に主張したことがある。かやうな瞬間といふのは、例へば姉のペツトに向つて「今あの人は獨り身になられた。そしてあたしはあの人のお嫁になれる。」といふ思考が頭をかすめた瞬間を指すのである。一般神經症の見解のために私はこのモメントの意義を論じなくてはならぬ。さて「防禦ヒステリー」の假定において、少くともさやうな一つのモメントが現れてゐたといふ要件がちやんと含まれてゐたと思ふ。意識は一つの不快なる觀念がいつ現出するかを豫め知つてゐない。あとでそれの附屬物でもつて隔離された精神群の形成に結びつけられる堪へ切れない觀念は最初の程は思考交通において存在してゐなくてはならぬ。さうでなければ、それの排斥を招來した葛藤は起らなかつたであらう(1)。だからさやうな瞬間こそ「外傷的」と名附けらるべきである。さやうな瞬間において轉化が行はれ、その成果こそ意識分裂とヒステリー症候なのである。エリザベート孃にお

いては、一切はかやうな瞬間（散歩、朝の默想、入浴、姉のベツトの光景）の累積をなす。恐らく治療の間にもこの種の新しい瞬間が現れたであらう。即ちかやうな外傷的契機の重複は、堪へ切れない觀念を第一に移入するやうな同樣な體驗が隔絶された精神群に新しい興奮を注ぎ、そのために轉化の効果を一時的に除去することによつて可能となる。自我はこの突然に強く閃いた觀念に集中されなければならなかつた。そして新しい轉化によつて以前の狀態を再び形成しなければならなかつた。義兄と不斷につきあつてゐたエリザベート孃は新しい外傷の現出にとりわけ晒されてゐた筈である。外傷の歷史が過去に屬してゐる實例は、かやうな描寫にとつては好都合なものである。

（1） 擬眠ヒステリーでは別である。この場合には隔絕された精神群の內容は自我意識に決して存さなかつた。

只今の疾患史の理解に對して困難と名附けられる一つの點をこれから研究しなければならぬ。分析に立脚して私は、患者における一番はじめの轉化は父の看病中に起つたこと、即ち看護婦としての義務が彼女のエロチツクな憧憬と矛盾に陷つた丁度その時に起つたこと、この過程はアルプスの溫泉場で疾患となつて爆發したあの後年の轉化の原型であつたことを假定したい。しかし

ながら、患者の報告から、父の看病の時代に、そして私が第一期と名附けるところのそれに續く年代に、彼女は全然疼痛と步行困難に惱んでゐなかつたことが分明する。彼女は父の病中に一度下肢の疼痛のために數日間就床したことがあつたが、この發作が既にヒステリーに因してゐたかどうかは疑問である。この最初の疼痛と何等かの心的印象との間に存する因果關係は分析によつて立證され難い。その當時の疼痛は普通の僂麻質斯性の筋肉疼痛であつたことも考へられる。この最初の疼痛發作が、その當時のエロチツクな思考の拒絕に基くヒステリー性轉化の結果であると假定したところで、疼痛は數日後に消失したといふ事實が未だ殘つてゐる。そのために患者は分析中に示したとはまるで違つた行動を實際に示したのである。所謂第一期の再生の時期に、彼女は疾患と父の死去、義兄との交際からの印象等々に關するすべての物語に疼痛表情を隨伴せしめたが、一方これらの印象を經驗した年代には全然疼痛を持つてゐなかつたのである。これはかやうな分析の說明的價値に對する信用を非常に低減さすに適した一つの矛盾ではないか。

疼痛――轉化の產物――は患者が第一期の印象を經驗した間には存在しなかつたが、後年に、卽ち患者がこの印象を彼女の思惟において再生した第二期に存在してゐたといふことを假定することによつて、私はこの矛盾が解決出來ると信じてゐる。轉化は新しい印象について起らずに、

その印象の回想について起る。このやうな過程はヒステリーには例外でないこと、ヒステリー症候の發生にいつも干與してゐるものだと私は考へてゐる。併しかやうな主張は十分に明瞭にされないから、私はそれを他の經驗によつて信頼出來るものまでに築き上げることにする。

ある患者のこれと似た分析療法中に新しいヒステリー症候が形成されて、そのために丁度その症狀が現れた翌日に私はその症狀の除去に着手することが出來た。

私はこの患者の歴史をそれの本質的な特徴を捉へてここに挿入したいと思ふ。それはかなり單調に失するが、興味のないものとは申せない。

ロザリア孃、二十三歳。聲樂家志望で數年來勉強してゐたが、彼女の美しい聲がある音階でつまると訴へて來た。喉につまるやうな、絞められるやうな感覺がして、その結果聲がまるでつぶされたやうな響きを持つ。このために先生は彼女に聲樂家として公衆の前にのぼらすことを許さなかつた。この障害は中音階にのみ關してゐたといへ、聲帶の障害では說明出來なかつた。時々この障害がけろりと消失して、先生が大變に喜んで吳れることもあつたが、又別の時に一寸した興奮のため、一見何の理由もないのに、絞められるやうな感覺が再び現れて、自由な發聲がかきみだされた。この煩はしい感覺の中にヒステリー性轉化を認めることは困難でなかつた。勿論聲

帶のある筋肉の攣縮が現れてゐたかどうかは私には決定出來なかつた（1）。この娘に施した催眠的分析から、私は彼女の運命について、從つて彼女の病氣について次のことを知つたのである。娘は早くに孤兒となつて、子供の澤山ある叔母の家に引きとられて、そのために極度に不幸な家庭生活を共にすることになつた。この叔母の夫は明白に病的な男であつた。亂暴にも自分の子供や妻を虐待した。そして叔父が家庭にゐる女中を性的に依怙贔屓することが特に彼女を悩ました。それは子供達が大きくなるにつれてますます目に餘るものとなつた。叔母が死んだ時に、ロザリアは母のない父から虐待され勝ちの子供達の保護者となつた。彼女は自らの責任を嚴肅に考へた。彼女の立場から導かれるあらゆる葛藤と闘つたが、かやうな際に、叔父（2）に對する憎惡と蔑視の表現を抑壓するために最大の忍耐をしなければならなかつた。この時にあたつて彼女に咽が絞められるやうな感覺が發生したのである。彼女が口答を愼しまなくてはならぬ時、彼女がこみ上る口惜しさをぢつと我慢しなくてはならぬ時、さういふ時にいつでも彼女は咽をかきむしられるやうな、咽を絞められるやうな、聲がつまるやうな、一言で申せば喉頭と咽頭に限極された、今日聲樂を妨げてゐる感覺の凡てを持つた。毎日毎日叔父の家庭で繰返へされる興奮と悲しい印象から逃れるために、獨立しようと彼女が懸命にもがいたのは尤もなことであつた。ある

優秀な聲樂の先生が彼女に同情して、彼女の肉聲は將來聲樂家といふ職業を選ぶに十分だと保證して呉れた。このやうにして彼女はこつそりと先生のところに通つて練習をし始めたが、家庭內の激しい光景のあとに殘された咽の絞められるやうな感覺のまま、しばしば聲樂教授に駈けつけてくるために、聲樂における器官の敏感によつて既に道のついてゐたヒステリー性知覺異常の間に一つの關聯が固定化されてしまつた。彼女が聲樂において思ひのままに驅使出來る器官が、抑壓された興奮の無數の光景のあとで、神經力の餘韻によつて裝塡されたことが分明した。彼女はそれ以來叔父の家を去つて、家庭から遠のくために別の町に移つたが、この障害はそのために別によくはならなかつた。この美しい非常に聰明な娘はそれ以外のヒステリー症候を示してゐなかつた。

（1）私は別の症例を觀察した。それにあつては咬筋の攣縮は聲樂家として聲樂の練習を不可能ならしめた。この若い婦人は家庭における悲しい事情のために餘儀なしに舞臺に立たねばならなかつた。羅馬において下稽古をしてゐる際に非常に興奮して、突然あの感覺が現れて、彼女は開いた口を閉めることが出來なかつた。彼女は失神して床に卒倒した。むかへられた醫者が力をこめて顎をおしつけた。併し患者はこの時以來口を指の幅より大きく開くことが出來なくなつてしまつた。そして新しい職業を棄てねばなら

なかつた。それから數年後私の治療を受けに來た時に、その興奮の原因が疾つくにすつかり解決されてゐた。といふのは淺い催眠狀態の下にマッサージをしてやつたのに、直ぐに口を大きく開くことが出來るやうになつた。婦人はその後公開の席で歌を唄つてゐた。

（2）〔一千九百二十四年。追記。〕實をいふとこの場合も叔父でなくて實の父であつた。

私はこの「貯溜ヒステリー」をあらゆる興奮性の印象の再生とおくればせの反撥によつて解決しようと努めた。私は彼女に思ふ存分惡口をいはしおしやべりをさし、叔父の面前で散々言ひたいことを言はさした。この療法は彼女にいい結果を與へた。不幸にして彼女はその時非常に不都合な境遇にあつた。彼女はその親戚のものと折合がうまく行かなかつた。といふのは自分を可愛がつて吳れる別の叔父のところに寄宿してゐたが、叔父が親切にするために却つて彼女は叔母の不興を買つた。この叔母は夫がその姪に對して次第に愛情を深めてゆくのを邪推して、ギーンの滯在を姪にわざといやがらすやうな態度をとつた。この叔母も又娘時代に音樂家志望を懷いたがやむなしにその希望を捨てなければならなかつた。勿論ロザリアは好きからでなしに、獨立の生活がしたいために、しやうことなしに聲樂家の決心を選んだのであるにも拘らず、叔母は姪が自分の天稟を磨くことの出來るのを嫉ましく思つたのである。ロザリアは叔父の家で非常に窮屈に

感じて、そのために叔母が聞いてゐるところでは歌を唄つたり、ピアノをひいたりする勇氣が出なかつた。そして叔母が家にゐる時は、年とつた叔父――母の弟――に歌を開かせたりピアノをひいてあげることを努めて遠慮しなければならぬ程であつた。私が古い興奮の痕跡を消散ささうと努めてゐる間に、彼女の客分といふこの境遇から新しい症候が生じて、そのために私の折角の治療の効果もつひに頓挫し、いい加減なところで治療を切上げることになつた。

ある日のこと患者は新しい、殆ど二十四時間だけ舊いといへる症候を持つて私のところにやつて來た。指先に不快なぴりぴりする感じがすると訴へた。その感覺は昨日以來二三時間每に現れて、そのために指がひとりでに特異なひつこめるやうな運動を示した。私はその發作を直接見ることが出來なかつた。若し見ることが出來たなら、指の運動からその原因を剔發出來たであらうに。併し私は症候(確かに小さいヒステリー發作)の理由を卽座に催眠的分析から探らうと試みた。全體のことは昨日からつい現れたばかりであるから、私は症候の說明と除去は瞬く間に出來ると高をくくつてゐた。驚いたことに、患者は私に――躊躇も見せずに年代順に――早期の子供時代に始まつた光景の全系列を報告した。彼女が言譯もせずに濡衣をぢつと辛抱して、その時彼女の指先がぴりぴり痙攣したといふやうな、例へば學校で先生が定規でもつて打擲する時に、ぶ

たれる手をそのままぢつとしてゐなくてはならなかつたといふやうな光景が殆どすべてに共通であつた。成程それらはすべて月並な原因であつた。そんな原因をとらへて私がヒステリー症候の病原學を硏究する權利を主張するのは問題であつたかも知れぬ。併しそれらの光景に結びつく、彼女の娘時代のはじめのある光景はまるで様子が違つてゐた。僂麻質斯を患つてゐた意地悪い叔父が彼女に背中を按摩するやうに命じた。彼女はそれを拒む勇氣が出なかつた。叔父は按摩をされながらベットに寢てゐた。突然叔父は掛蒲團をはねのけて跳び上り、彼女をつかまへて押し倒さうとした。彼女は按摩の手をやめて、次の瞬間逃げ出して自分の部屋にとび込んでぴちんと錠前をかけた。彼女は明かにこの體驗を回想しようとは思はなかつた。男性の突然の露出において彼女があるものを見たかどうかを語らうとも欲しなかつた。この際の指の感覺は叔父を懲らしめたいといふ衝動の抑壓でもつて說明がつくが、或ひは單に彼女が丁度按摩をしてゐたといふ事がその原因であつたかも知れぬ。この光景のあとでやつと彼女は昨日經驗したものを語り始めた。それによると指における感覺と痙攣は回歸する回想象徴を示してゐた。彼女が現在身を寄せてゐる叔父が何か一曲彈くやうに注文した。彼女はピアノに向つて、叔母が外出してゐるものと思ひ込んで、鍵盤に合せて唄を歌ひ出した。その時突然叔母がドアのところに姿を現した。ロザリア

は跳び上つてピアノの蓋を閉ぢ樂譜をなげ棄てた。この瞬間にいかなる回想が彼女に浮び、いかなる聯想を防禦しようとしたかを剔發すべきである。惡事をしたといふ嫌疑に對する憤激のあまり、彼女は本當にこの家を去らうと決心したであらうが、治療を受けるためにはどうしてもギーンにゐなくてはならなかつたし、又この家以外に賴るべき知邊もなかつたのであつた。この光景の再生に際して私の見た指の運動は丁度人が——文字通り又譬喩的にいへば——樂譜をなげすてるとか、不當な要求をはねつけるとかするやうな、あるものを拒絕する場合の手をうちふるやうな運動であつた。

この症候を以前に——最初に語つた光景の機會からでなく——感じなかつたことは彼女がきつぱり保證して吳れた。卽ち昨日の經驗は昔の同じ內容の回想を第一によびさまし、ついで回想の全群から回想象徵の形成が行はれたこと以外、どんなことが假定出來ようか。轉化は一方においては昨日經驗したばかりの情緖から、他方において回想された情緖から、その資力を貰つたのであつた。

若しこの實相を詳細に考察するならば、人はヒステリー症候の發生において、かやうな過程が例外でなく、むしろ普遍である事を認めなくてはならぬ。このやうな狀態の決定力を探究する時

にいつでも、たつた一つの機會でなく、類同した外傷的機會の一群が存在してゐた（疾患史一のエンミー夫人におけるすばらしい實例を參照）。かやうな多數の症候に對して、問題とするその症候は最初の外傷のあとに短時間であるが早くも姿を見せ、ついで消失し、最後に最初の外傷によつて新しく喚起され、ついで固定されたことを確定することが出來る。併しこの一過性の現出と最初の機會以後の潛伏の間に原則的な區別を設けることが出來ぬ。非常に多數にのぼる實例において、最初の外傷は何等の症候を遺さなかつたが、類同したあとの外傷は症候を喚發せしめ、しかもその症候が發生するためには、それより前にある機會の共同作用を不可缺とし、その症候が消失するためには、實際すべての機會を殘らず考察する必要があることが分かつてくる。轉化說の術語で飜譯すれば、外傷の總和及び症候の初期の潛伏といふこの嚴然たる事實は、轉化がなまなましい情緒によつても、また回想された情緒によつても行はれ得るといふ意味になつて、この假定はエリザベート孃の疾患史と分析に介在するやうに見える矛盾を完全に解決して吳れる。

健康な人間は未決のままの情緒をもつた觀念の意識內の永續に非常に堪へるものだといふことは問題でない。私が只今辯護した主張は、ヒステリー患者の行動を單に健康な人間の行動に近接せしめたに過ぎないのだ。それが量的モメントにかかつてゐるのは明かである。詳しく言へば、

組織がかやうな情緒緊張のどれほどに耐へるかにかかつてゐるのである。ヒステリー患者とてある一定の量なら未解決のまま保存出來るだらうが、若しその一定量が類同した機會における總和によつて個體が耐忍力以上に增量するなら、忽ち轉化が激發するのである。卽ちヒステリー症候の形成もまた囘想された情緒を資力として行はれ得るといふことは異樣なる主張でなくて、一つの必然的なる推論である。

私は只今ヒステリーのこの症例の動機と機構を研究した。なほヒステリー症候の決定力の問題がのこつてゐる。何故に下肢における疼痛が丁度精神的疼痛の代表に立たなければならなかつたか。この症例の狀況が示すところによると、この肉體的疼痛は神經症によつて作られたのでなくて、神經症によつて利用され、亢進され、支持されたのである。私が洞察することが出來たヒステリー性疼痛の殆どすべての症例において同一のことが存してゐたことを附言したいのである。いつでも最初から本當の、器質的に樹立された疼痛が存してゐたのである。人類の最もありふれた、最も普遍的なる疼痛こそ、ヒステリーにおいて一つの役割を演ずるために最も頻繁に召集されるものである。特に齒牙疾病の骨膜及び神經痛性疼痛、種々なる原因から生ずる頭痛、よく誤診をやる筋肉の僂痳質斯性疼痛も可なり利用される。エリザベート孃が父の看病中に持つたとこ

ろの疼痛の最初の發作は器質的に樹立されたものと私は考へてゐる。といふのは、私がそれの心的動機を探究した時に、私は何の報告も手にしなかつたからである。そして若し注意深く活用するならば、隱された回想の喚起を目指す私の方法に私は鑑別診斷的意義を與へるやうに傾くと自ら白狀したい。起原において僂痳質斯性(1)であるこの疼痛は、今や患者において彼女の悲痛なる心的興奮に對する回想象徵となつた。そして私が見ることが出來た限りでは、一つ以上多數の理由があつた。第一にそして殊に重要なのは、その疼痛は殆ど同時に意識における他の興奮と一緒に存在してゐたからである。第二にその疼痛はその當時の觀念內容と幾重にも結びあひ、若くは結びあふことが出來た。その疼痛は多分一般に看護の間接の結果、看病する女の役目がもたらしたところの運動の不足、榮養の不足に過ぎなかつた。併しそんなことはこの患者には殆ど明瞭でなかつた。彼女は疼痛を看病の重要な瞬間に、例へば嚴寒において父の呼び聲に應じてベットから跳ね起きた時に感じなくてはならなかつた事をさらに考察せねばならぬ。だがしかし轉化のとつた方向に對して全く決定的なものは聯想的關聯の他の道、即ち數月間を通して彼女の痛い下肢の一方が繃帶交換に際して父の腫れ上つた下肢に觸れたといふ情況であらねばならなかつた。接觸が行はれた下肢のこの部分はこの時以來疼痛の竈となり、疼痛の出發點となり、人工的なヒ

ステリー發生帶となつたのである。そしてこの症例においてはこの帶の生成がはつきり看取出來る。

（1）併し恐らくは脊髄神經衰弱症か。

何人かが肉體的情緒と精神的情緒の間のこの聯想的關聯をあまりに多様なるあまりに人工的なるものとして驚歎するならば、そんな驚歎は「世界一の金満家は一番澤山お金を持つてゐる」ことに驚歎すると同じにお目出度いことである。豐富なる關聯が存しないところには、ヒステリー症候は形成されるものでなく、轉化は自らの道を發見するものでない。そしてエリザベート孃の實例は決定力の點においてはずつと單純なものに屬してゐると私は保證することが出來る。私は特にチエチリー夫人においてこの種の最もこんがらかつた結節を解かねばならなかつた。

一度轉化がある一定の道を開いた後に、この疼痛の上にこの患者の起行不能がどのやうにして建設されたかを私は前にその疾患史のところで論じておいた。併しそのところで私は患者は象徴化を通して機能障害を作り若くは高めたこと、患者は自らが一本立でないことに對して、卽ち境遇上のあるものを變革さすことの出來ない自らの無能に對して歩行困難といふことの中にその肉體的表現を發見したこと、「一進も三進も行かない」「頼るものもない」といふ成句が轉化のこの

新しい行爲の橋渡しをしたといふことをも主張したのであつた。私はこの見解を他の實例について證明しようと努力した。

それと違つて存在する聯想的關聯において、同時的といふ土臺にある轉化はヒステリー的素因に大して關與しないやうに見える。これに反して象徴化による轉化は、丁度エリザベート孃にあつてもまた彼女のヒステリーのずつと後の段階においてはじめて立證出來たやうに、ヒステリーのうちで最も難解な、しかも最も有益な症例と名附けることの出來るあのチェチリー夫人において、象徴化の最も美しい實例を見た。

チェチリー夫人は他のもののうち特に激烈な顏面神經痛をやんでゐた。この神經痛は一年に三回ほど突然に起つて、五日から十日の間持續し、いろんな治療を施しても効果がなく、時が來るとまるで嘘のやうになくなつてしまふのであつた。この神經痛は偏側の三叉神經の第二及び第三の分枝に限極されてゐた。そして尿酸過多症が立派にあつたし、又はつきりはしないが、患者の顏面における「急性僂麻質斯」がある役割を演じてゐたから、痛風性僂麻質斯といふ診斷は可なり的中してゐるものであつた。發作が起る毎に呼ばれた開業醫も同じ診斷を下してゐた。神經痛は普通のありふれた方法、即ち通電法、アルカリ性飲料、下劑をもつて治療すべきであるが、い

つでも効果が見えなかつた。さうかうするうちに他の症候の割り込む餘地が進んで與へられた。昔は――神經痛は十五歳の時であつたが――齒がこの神經痛を支持する原因であつたので、齒を拔くやうに命ぜられてゐた。そしてある晴れた日に痲醉の下に犯罪人七つの强制施行が行はれた。それは大して樂には行かなかつた。齒は大變かたくて、大概の齒根はそのまま殘さねばならなかつた。この殘酷な手術は一時的にも永久的にも何の効果をもたらさなかつた。神經痛はその當時は數箇月も荒れ狂つてゐた。私が治療を施してゐる間でさへ、神經痛が起る度に齒科醫を呼ばなくてはならなかつた。齒料醫はいつでも齒根が腐蝕してゐると說明した。そして手術にかからうとしていつでも直ちにやめなくてはならなかつた。といふのは神經痛が突然消失して、それと同時に齒科醫がいらなくなるからであつた。休止期には齒はまるで痛まなかつた。丁度發作が又ぞろ起つてゐたある日のこと、私は催眠療法を患者に試みてみた。私は疼痛に對して非常に强い禁止をかけた。そしてこの瞬間以來疼痛がやんでしまつた。その時私はこの神經痛の純正に疑ひを懷き始めたのである。

この催眠療法が奏効してから約一年の後に、チェチリー夫人の症狀は新しい急速な轉向を示した。近年のものとはまるで違つた症狀が突然現れたが、患者は一寸考へた後、かういふ症狀は以

前に一度あつて、しかも彼女の疾患の長期間（三十年間）にわたつて散在してゐた。今や驚くべく豐富なヒステリー發作が眞實展開されたのである。患者はその發作を過去におけるそれの正しい位置におくことが出來た。そしてこれらの事件の順序を決定するところのしばしば非常に錯綜した思考關係がまた直ちに目に立つた。それは丁度說明文の附いてゐる繪本のやうなものであつた。ピートルはそのデリル・エクムネジツク（記憶缺損狂）の提唱をもつて、これに似たあるものに注目しなければならなかつた。過去に屬するかやうなヒステリー狀態がどのやうにして再生されるかの道筋は非常に注目に價するものであつた。第一に患者の健康がよい時に、特別な色彩の病的氣分が浮び上つて、それは患者によつていつも誤認され、最近の平凡な出來事におしつけられる。ついでますます强められ行く意識溷濁の下に、ヒステリー症候たる幻覺、疼痛、痙攣、長たらしい演說が現れ、最後にこれらの症候に、最初の氣分を說明し、その時々の症候を決定出來た過去の經驗の幻覺的甦生が結びついた。發作のこの大詰をもつて再び頭腦が淸澄となり、まるで魔術のやうに病苦が消失してしまふ。そして再び健康がやつて來る――それから一日半すると又ぞろ發作が現れるのであつた。私はいつも症狀の潮時をつかまへて催眠術を行ひ、外傷的經驗の再生を喚起し、人工的手段によつて、發作を頓挫的に終焉せしめた。かやうな循環を患者と

一緒に數百囘も繰返へすことによつて、私はヒステリー症候の決定力に關して最も有益な結論を持つたのである。ブロイエルとの共同によるこの注目に價する症例の觀察はまた私達の『豫報』の發表の直接の動機でもあつたのである。

最後にこれと關係して私が眞正發作としてなほ取扱つてゐた顏面神經痛の再生にも到達した。この場合に心的誘因が存するかどうかに私は好奇心を持つた。私が外傷的光景を喚起させようと試みた時に、患者は夫に對する非常なる精神的過敏の時期にはひつてゐると空想し、夫ととりかはした談話、夫の氣に觸れたと思つた自分の言葉を語り、次いで突然に自分の頬を摑んで、痛みのために大聲で泣きながら、「まるで顏をぶたれたやうでしたわ。」と叫んだ。——併しそれと同時に疼痛も發作も終焉してしまつた。

疑ひもなくこの場合象徴化が中心をなしてゐるのだ。彼女はまるで本當に顏をぶたれたやうに感じた。では顏をぶたれるといふ感覺がどうして三叉神經痛の現出、三叉神經の第二並びに第三分枝への限極、口を開く時、咀嚼する時（話す時はさうでない！）の疼痛の亢進に導いたかの疑問を何人といへども提起するであらう。

翌日になつて再び神經痛が現れて、今度は他の光景の再生によつて消失することが出來た。そ

してその光景の內容は同時に臆測された侮辱を示してゐた。このやうにしてそれは九日間持續した。この結果から、數年間侮辱が、特に言葉による侮辱が象徵化の道をとほつて、この顏面神經痛の新しい發作を喚起したことが分明した。

だが遂に神經痛の一番最初の（殆ど十五年前の）發作におし入ることに成功した。この時には象徵化は存在しなかつたが、同時的なることによつての轉化が存在してゐた。それは一つの悲痛なる光景であつた。その光景において、彼女をして他の思考系列を抑壓せしめたところの一つの叱責が現れた。即ちそれは葛藤と防禦の狀態であつた。この瞬間にどうして神經痛が發生したかを說明しようと思へば、その當時彼女は輕い齒痛乃至顏面痛にやんでゐたことを認めなくてはならぬ。そしてこれは決して尤もらしいものでない。といふものは彼女はその時丁度最初の姙娠の第一箇月にあつたからである。

だからこの神經痛が轉化のありふれた道筋においてある心的興奮の記念碑となつたが、この神經痛はその後思惟生活の聯想的想起によつて、象徵化された轉化によつて覺醒さすことが出來たといふ說明が下される。實際それは私達がエリザベート孃において發見したものと同一な態度であつた。

他の條件下で象徴化の効果を明確にして呉れる第二の實例を紹介したいと思つてゐる。ある時期にチエチリー夫人は踵に激烈な疼痛、歩くたびに刺すやうな疼痛を感じて、そのために歩行不能となつた。分析は私達を患者が外國のさる療養所にゐる時代に導いて呉れた。彼女は病室に八日間寢てゐたが、家庭醫が初めて食堂に出てもよいと呼びに來た。患者が醫者の腕につかまつて部屋を出ようとした瞬間に疼痛が現れた。その疼痛はこの光景の再生の間に、即ち知らない人が澤山ゐる席へ私などがちやんと歩いて行けるだらうかといふ心配がその時自分の心を領してゐたといふ言葉を、患者が口に出した瞬間に消失してしまつた。

さてこれは言語表現を借りての象徴化によるヒステリー症候發生のすばらしい、殆ど滑稽にも近い實例であつた。その瞬間の情況の詳細なる研究のみが他の見解を選出して呉れる。當時患者は足痛をやんでゐた。彼女は足痛のため長い間病床についてゐた。そして彼女が最初の歩行に際して懐いた心配は、同時に存在してゐた疼痛から、一つの象徴的に適合した疼痛を、それを心的疼痛に形成し、それを特に長期の間保存さすために、右の踵に取りあげたといふことのみが認容出來る。

これらの實例において象徴化の機構が、確かに規則的といへるやうに、たとひ第二位におしや

られたやうに見えても、私は單なる象徴化によつてのヒステリー症候の發生を立證するやうに見える實例をちやんと手許に持つてゐるのである。最も鮮かな實例の一つは次のやうなものであつて、それは相變らずチエチリー夫人に關してゐるものである。彼女は十五歳の娘として、嚴格な祖母の監視を受けて病床についてゐた。突然その娘は聲をあげた。彼女に兩眼の間にあたる額のところにゐぐるやうな疼痛を感じた。それからその疼痛が數週間持續した。殆ど三十年後に再生されたこの疼痛の分析において、祖母は彼女をまるで孔のあくほどぢつと見詰めて、その眼光が自分の頭の中深くはひつたほどであつたと彼女は話した。即ち疼痛はこの老人に猜疑の眼で見られることを恐れたのである。この思考の報告に際して、彼女は大きな聲で笑つた。それと同時に疼痛もなくなつてしまつた。この場合においても私は自己暗示の機構と轉化の機構の間にいはば中項を占めてゐる象徴の機構以外の何物をも發見しないのである。

チエチリー夫人の觀察は丁度この種の象徴化の蒐集に着手する機會を私に與へた。普通は器質的に仲介されると見られる肉體的感動の全系列は夫人においては心的起原を持つてゐて、ある場合は少くとも心的解釋を具備してゐたのであつた。體驗のある系列は彼女にあつては心臟部を刺すやうな感覺を伴つてゐた。(「まるで心臟が突かれたやうな感じがしました」)。針で刺すやうな

ヒステリーの頭痛は、彼女にあつては明白に思考疼痛として解釋さるべきであつた(「まるで頭の中に何かが刺さつたやうです」)。それは該問題が解決されると同時にいつも消失した。頭部におけるヒステリー性アラウの感覺は、この感覺が侮辱に際して現れる時は、私はそれを嚥下しなければならないといふ思考と平行してゐた。それは平行に走る感動と觀念の全系列であつた。その系列においてある時は感動が解釋としての觀念を喚起せしめ、ある時は觀念が象徴化によつて感動を作つてゐた。久しく二つの要素のどつちが根元的なものであつたかはしばしば疑問であらねばならなかつた。

私は他の女患者において象徴のかやうな豐富なる利用が發見出來なかつた。確かにチェチリー夫人は全く異常な、特に藝術的天稟に惠まれた婦人であつた。その婦人の形態に對する極度に發達した感覺は完全に美しい詩の中に具象されてゐた。しかしながら、若しヒステリー患者が象徴化によつて、情緒的に强調された觀念に肉體的表現を創作するなら、そこには世人が考へてゐる程には、個人的なるものと隨意的なるものが存在してゐるものでないと私は主張する。彼女が言葉の表現を文字通りにとつて、侮辱的な言辭における「胸を刺される」とか「顏をぶたれる」とかを現實の事件のやうに感覺することによつて、彼女は機智の濫用をやつたのでなく、單に言葉

の表現がそれの存在の土臺をなすところの感覺を新しく蘇生せしめたに過ぎない。侮辱された人について、若し事實侮辱がかやうに解釋しなくてはならぬ心窩感覺を伴ふことなく又彼女によつて氣附かれないならば、「まるで胸を刺されたやうだつた」といふ表現がどうして現れたのであらうか。侮辱をぐつとこらへる時に用ひる「何かを飮みこむやうな」といふ言葉は、若し人が侮辱に對する反射運動を阻止する言葉を我慢する時に、咽頭に現れるところの感覺に實際由來してゐるといふことはどうして尤もでないのだらうか。かやうな感動と神經力のすべてはダアヰンが敎示して呉れたやうに、發生的に意義深い合目的な働きから成つてゐる「情緒運動の表出」に屬してゐる。それらは現代においては大概非常に薄弱になつて、そのためにそれの言葉の表現が繪畫的飜譯のやうに見えるのである。恐らくこれらすべては嘗ては文字通りに意味されたのであらう。そしてヒステリーがそれの强烈な神經力に對して起原的な語義を再び形成する時に、ヒステリーは誠に正しいことを行つたといへるのである。然り。ヒステリーは象徵化によつてかやうなる感動を作つたといふのは正しくない。ヒステリーは恐らく言葉の用法を決して手本にとつたのでなくて、ヒステリーも言葉の用法も共に共通の源泉から發生したのである(1)。

(1) 深甚なる心的變化の狀態において、もつともつと人工的なる言語用法の象徵的刻印が具體的なる

解するためにしばしば多大なる機智を必要としたある時期に處してゐた。その當時夫人は自分は二人の醫者——ブロイエルと私——が庭園に並び合つてゐる二本の木にぶらさがつてゐるといふ幻覺に苦しめられてゐると私に訴へた。分析によつて次の由來が發見されたあとでこの幻覺は消失してしまつた。前夜彼女にある藥を吳れと賴んだのにブロイエルが素氣なく拒絕した。ついで彼女は私からなら貰へるだらうと希望を繫いでゐたが、私もきつぱり拒絕してしまつた。彼女は私達二人を極度に怨んだ。そしてその激情の中で「二人ともどつこいどつこいだ。二人でいい取組だ。」と考へた。

ヒステリーの精神療法

私達は『豫報』において、ヒステリー症候の病原を研究してゐるうちに實踐上意義重大と考へられる一つの治療法をも發見したと報告しておいた。「卽ち各箇のヒステリー症候は、若し誘因的過程の回想を十二分なる鮮明にまでよびさまし、同時に回想に伴ふ情緒をも喚起さすことに成功するならば、その時若し患者がその過程を出來る限り詳細に敍述し、情緒を言葉でもつて表現するならば、直ちに永久に消失してしまふことを私達は發見して、最初非常に驚歎したのである。」(第一〇頁)。

さらに私達はいかなる道筋を通つて吾々の精神療法が作用するものかを闡明しようと試みた。「精神療法は起原において反撥されなかつた、觀念の作用力を、觀念の監禁されたる情緒を談話をもつて放出せしめることによつて廢棄せしめる。そして觀念を正常なる意識内にひき上げることによつて(輕度なる催眠狀態において)、若くは夢遊狀態において、健忘症に對してやるやうに、醫師の暗示をもつて觀念を廢棄せしむることによつて、觀念に聯想的訂正を行はしめるので

ある。」

勿論これに關しての要旨は既に前述の疾患史の中で觸れたものではあるが、この方法がどれだけの効驗があるか、他の方法とどの點が優れてゐるか、どういふテクニークをもつて、又どういふ困難に打克つて、この方法を行ふべきかを私は關聯的にこれから指示しようと思つてゐる。だから同じことをこの章で重複することは已むを得ないことと考へてゐる。

一

『豫報』の内容は飽く迄固持出來ると私は自ら言はなくてはならぬが、それを發表した後の數年間に――ここに觸れた問題を專心研究することによつて――新しい觀點をとるやうに餘儀なくされたと告白せねばならぬ。この新しい觀點の結果として、事實に關してその當時知つた材料に對して少くとも一部は別種の分類と別種の見解を下すやうになつたのである。私の畏敬する友人なるヨセフ・ブロイエル君にこの發展の責任をあまり澤山に課さうと私が試みたなら、それは間違ひであつたであらう。この故に私は次の詳說を專ら私自身の名前で發表することにする。

催眠狀態における探究と反撥(アブレアギーレン)によつてヒステリー症候を治療するといふブロイエル氏法を多數の患者に應用してゐる時に、私は二つの困難に逢着した。この困難を追窮してゐるうちに、私は從來のテクニークと見解を變更せねばならなくなつた。(一) 明白にヒステリー症候を示してゐる、恐らく同一の精神機構によつて支配されてゐると思はれる人間でも皆が皆まで催眠術にかからなかつた。(二) 本質的にヒステリーを特徴づけるものは何であるか、又何によつてヒステリーと他種の神經症の區別をたてるべきであるかの疑問を私は提起しなければならなかつた。

第一の困難をどうして克服したか、この困難から何を學びとつたかを、私は後段で報告する積りである。先づ第一に、私が日常の實踐において、第二の問題に對してどういふ態度をとつたかをこれから述べてみよう。ブロイエル氏法を應用することによつてのみ成果を收めるところの徹底的な分析を斷行するに非ずば、神經症の症例を正しく把握することは非常に困難である。だが診斷と治療法の判定はかやうな根本的な知識なしには當然失敗に歸する。だから私に殘されてゐる唯一のことは、先づヒステリーと診斷の下すことが出來る、ヒステリーのスチグマ、若くは特有な症候の若干乃至多數を示してゐる症候を瀉下療法にかけるやうに選擇することであつた。ところが、ヒステリーと診斷をつけたのにも拘らず、治療的效果が非常に貧弱であつたり、分析を

斷行しても重要なものがまるで現れて來ないといふやうな場合がたびたび起つた。又他の場合では誰がみてもヒステリーとはつきり診斷のつけられない神經症を私はブロイエル氏法で治療してみせた。そしてかういふ神經症がこの方法で影響されおまけにこの方法で治療され得ることを知つたのである。例へば、一見ヒステリーらしい特徴がまるでないやうな症例において、私は强迫觀念、ウエストファール氏の手本そのままの眞正な强迫觀念をこの方法で治療出來た。かくの如くにして『豫報』で發見した精神機構はヒステリーだけに固有なものでなかつた。この機構を擁護せんとする目的に、私は他種の無數の神經症を手あたりしだいにヒステリーといふ壺の中になげこむ決心がつかなかつた。あやしいと思はれる他種の神經症を悉くヒステリーと同じやうに取扱つて、すべてのものに對して病原と精神機構の樣式を探究し、ヒステリー診斷の當否の判定をこの研究の結果に委仕しようといふ計畫によつて、最後に、湧き上つてくるすべての疑惑から私自らを救つたのである。

このやうにしてブロイエル氏法を出發點として、私は一般神經症の病原と機構を研究するに至り、その結果比較的短時日の間に有益な收穫を手にする幸福を持つたのである。

どのやうにして神經症に罹つたかの原因を問題とする限りでは、病原は性的要素の中に求めな

くてはならぬといふ知識が、まづ第一に私に迫つて來た。一般的な意味に於ける種々なる性的要素はまた、神經症的疾患の種々なる症型を作るといふ所見がそれに並立する。そして後者の關係が立證されて行くに從つて、神經症の特徴に病原學を利用し、神經症の症型に嚴然たる區別を設けようとする自信が湧いて來たのである。若し病原的特色と臨床的特色がいつもきつぱり合致するものであるなら、只今述べたことを正當と認めることが出來るのであつた。

神經衰弱症は本來、分析から知るやうに「精神機構」が全然役割を演じてゐない單調な症型であるといふことが、かういふ道筋を通つて私に分かつた。複雜な精神機構、ヒステリーに類似の病原學、精神療法による退散の廣汎な可能が承認出來る强迫神經症、眞正な强迫觀念の神經症を神經衰弱症から嚴然と區別する事が出來た。他方において、神經衰弱症から一つの神經症的な症候複合を分離せよといふ斷乎たる命令が私に下されたやうに思はれた。この神經症的症候複合は全く偏向した、根本的に對立した病原に依存し、一方この複合の部分症候は旣にヘツケルによつて知られてゐる特徴に結合してゐるものであつた。詳しく言へば、その部分症候は症候であるか若くは恐怖表現の等價物並びに痕跡であるかである。この故に私は神經衰弱症から分離したこの複合を恐怖神經症と命名したのである。私はこの恐怖神經症に關して、それは例によつて又性的起

原を有する心的緊張の蓄積によつて惹起されるのだと主張した。この神經症は未だ何等の精神機構を有してゐないが、おきまりのやうに精神生活なるものに影響を與へて、その結果「不安なる期待」、ホビー、痛覺過敏等々がその神經症の一般の表現となる。私が言ふところのこの恐怖神經症と並んで「ヒポコンドリー」の名稱の下に、多數の記述をもつて知られてゐる神經症と一部は確かに合致してゐる。だが違ふところは前述のいづれの研究においても、私はこの神經症の限界を正當なものとすることが出來ないこと、又ヒポコンドリーといふ名稱の使用は「疾患杞憂」といふ症候とその神經症との緊密な關係によつて侵害されることを知つた。

このやうに神經衰弱症、恐怖神經症、强迫觀念の單純な症型を私自らのために構成したあとで私はヒステリーといふ診斷において考察される神經症の尋常な症候の見解に進むことにする。症候複合から少數のヒステリー特徵が著明であるといふ理由をもつて、ある神經症にヒステリーといふレツテルを貼りつけるのはいけないと言はなくてはならなかつた。私はこの習慣を非常にうまく說明することが出來た。といふのはヒステリーは只今考察してゐる神經症のうち最も古い、最も有名な、最も顯著な神經症であるからである。ところがヒステリーよばはりがあまりに亂暴に行はれてゐる。ヒステリーといふ勘定書の中へ倒錯とか變質とかいふ非常に澤山の特徵がほり

こまれてしまつてゐる。心的變質の複雜な症例にはしばしばヒステリー症候、知覺脫失、特有な發作が發見出來るところから、さういふものをひつくるめて「ヒステリー」と名附け、その結果ヒステリーといふレツテルをつけて最も極惡なものと最も矛盾したものを結びつけることが出來た。この診斷は確實に間違つてゐた。同樣に確實に人は神經症の方面に向つても分類しなければならなかつた。そして人が神經衰弱症、恐怖神經症等々を純粹な狀態で知つてゐたなら、最早混合型におけるそれ等を見逃す筈がないのである。

從つて次の見解の方がはるかに正しいやうに思はれる。卽ち尋常な神經症は大概「混合型神經症」と名附くべきである。若い人では最も早期に神經衰弱症と恐怖神經症の純粹な型を見附けることは極めて容易である。ヒステリーと强迫神經症の純粹な症例は稀有である。普通この二つの神經症は恐怖神經症と結合してゐる。混合型神經症がこのやうに頻繁に現れるのは、その神經症の病原的要素が非常にしばしば混合してゐるからである。ある時は單に偶然に、ある時は神經症の病原的要素の根元をなす該過程間の因果關係の結果として現れるのである。このことは箇々の症例について容易に行はれ證明出來るものである。併しヒステリーに關して言ふなら、觀察にあたつてヒステリーを性神經症との關係から分離することが殆ど可能でないこと、ヒステリーは一

般に複雜な神經症的症例の一側面、一方面を描寫すること、ヒステリーはいはば境界線においてのみ隔離されてゐる神經症として發見され治療され得ることが分かつてくる。私達はある一聯の症例において a potiori fit denominatio（要點に準じて名稱が起つて來る）と申しても差支へないのである。

私はここに報告した疾患史がヒステリーの臨床的從屬の私の見解に迎合するものかどうかを檢討してみたいと思つてゐる。ブロイエルの患者であるアンナは私の見解に矛盾して純粹な症型の模範であつたやうに思はれる。ヒステリーの知識に對して莫大といへるほど收穫の多かつたこの症例だけは、その疾患の觀察者によつて性神經症の觀點から全然眺められなかつた。從つて今日もさう簡單にこの觀點から評價出來ない。私が第二の患者なるエンミー夫人を分析し始めた頃はヒステリーの土壤としての性神經症の期待は私には未だ可なり遠いところにあつた。私はシャルコーの門から歸つたばかりで、ヒステリーと性なる題目を結びつけることを——丁度女患者達自らがさう考へてゐるやうに——一種の恥辱と觀じてゐた。今日この症例に關する私のノートをふりかへる時に、性的禁慾から發したヒステリーと結合してゐる、不安なる期待とホビーを伴つた重篤な恐怖神經症の一症例を認めなければならなかつたことは極めて明瞭である。

第二のルシー孃の症例はむしろ純粹なヒステリーの境界症例と名附くべきである。それは明白な性的病原に立脚し、挿話的に發展した小さいヒステリーである。その症例は戀愛が誤解のためにあまりに急速にめざまされたところの、熟しきつた、戀心のついた處女における一つの恐怖神經症に合致してゐたであらう。第三のカタリナの症例は私が處女恐怖と名附けたものの典型である。それは恐怖神經症とヒステリーの結合したものである。前者は症候を作り、後者は症候を反復し、症候と共に發展した。その他の點においてもその症例は「ヒステリー」と命名出來る多數の破爪期神經症の定型的症候を持つてゐた。第四のエリザベート孃の症例は性神經症としては硏究出來ない。私は脊髓神經衰弱症が根柢をなしてゐたといふ疑惑を僅になげることは出來たが、はつきりとそれを立證することは出來なかつた。しかしながら、この時以來私の經驗において純粹なヒステリーがますます稀有になつて行つたと附言しなければならぬ。私がこの四つの症例をヒステリーとして陳列して、その討論において、性神經症を尺度とする觀點を看過してしまつた理由は、それらの症例は私が神經症的、性的基礎の故意に徹底した探究を未だ行はなかつた頃のずつと古い症例であつたといふことである。そして若しこの四つの症例の代りに、分析に立脚して私達の奉ずるヒステリー現象の精神機構の證明を固めることの出來た十二の症例を報告しなか

つたなら、たとひそれらに醫者がヒステリーといふ「病名」を奉ることをきつぱり拒否しても、これらの症例の分析は同時に性神經症の姿を見せて呉れたといふ事情だけに基づいてゐるのである。併しこんな性神經症の說明は私達の共同研究の埒外に屬してゐた。

ヒステリーを獨立した神經病と認めないやうな、ヒステリーを單に恐怖神經症の心的表出と解してゐるやうな、ヒステリーにおいて「觀念原因」の症候だけを認め、恐怖神經症に肉體的症候へは私には毛頭なかつた。すべての混合型から純粹にされヒステリーを、治療の點だけでなく、あらゆる點において、獨立して取扱ふことが出來ると私は考へてゐる。何となれば、治療にあたつては實踐上の目的、卽ち全疾患狀態を除去するといふことが重心をなしてゐるからである。そして若しヒステリーが多數の場合混合型の神經症の成分として現出するなら、その症狀は混合傳染の場合とその揆を一つにする。この場合生命を維持するといふことは、病原菌の作用力の驅逐に一致しないところの使命であることが分かる。

(ヒステリー發生點、知覺脫失)をおしつけようとする誤解を私は與へたくはなかつた。そんな考

この故に混合型神經症の症狀においてヒステリーの持つ擔當を神經衰弱症、恐怖神經症等々から分離することが肝要である。といふのは私はこの分離によつて瀉下法の治療的價値を簡潔に表

現することが出來たからである。瀉下法は――原則的に――任意のヒステリー症候を除去することが出來るが、一方において瀉下法は、容易に想像出來るやうに、神經衰弱症の現象に對しては全然無力であり、又恐怖神經症の心的結果に對してはただ間接的に極めて稀に影響を與へるといふ主張を私は固持したい。卽ち瀉下法の治療的作用力は、各箇の症例において、症狀のヒステリー成分が他の神經症的成分に比較して實踐上意義ある地位を要求するかしないかにかかつてゐるのである。

第二の制限もまた瀉下法の作用力に基づいてゐる。それに關しては旣に『豫報』において述べておいた。瀉下法はヒステリーの因果條件に影響を與へない。換言すれば、除去した症候にとつて代つて新しい症候が發生することを阻止出來ない。卽ち一般に私達の治療法に對して私は神經症治療の範圍內に優秀な地步を要求しなければならぬが、この關係外において瀉下法を評價しそれを應用することを引込めたいと思つてゐる。私はこの箇所において實地醫家が注文するやうな「神經症療法」を述べることが出來ないから、前述の主張を將來の何等かの報告の參考にまで殘しておくだけに留める。だが詳說と說明の便宜に、次の言葉を附加しておくことが出來ると私は考へる。

（一）瀉下療法によつて影響を受けると考へられるヒステリー症候を悉く實際に除去したのだと私は主張しない。併しその影響を阻止するものは症例の個人的事情に存してゐて、原則的本質に存してゐないと私は思考してゐる。外科醫が後出血や偶然な敗血症等々による痲醉中の致死例を新しい技術の選擇によつて除去すると同じに、かういふ失敗の症例は批判を下す場合にわざわざ考察しなくてもよい。あとでテクニークの困難とか缺陷とかを述べる時に、かやうな由來を持つた失敗をもう一度論ずることにしよう。

（二）瀉下法は對症療法であつて原因療法でない。といつてそれの持つ價値は一向損ぜられない。何となれば、原因療法は大抵の場合實は豫防療法に過ぎないからである。原因療法によつて有害物の發展は阻止されるが、有害物が既に產生したものはそれによつて必ずしも除去されるものではない。後者の任務を解決するための第二の行動が常に必要である。そしてこの目的のためにヒステリーの症例には瀉下法こそ比類なき效果を發揮するのである。

（三）ヒステリー產生の時期、即ち急性ヒステリー發作が克服されて、餘韻現象としてのヒステリー症候がなほ殘存してゐる場合に、瀉下法こそすべての適應症を滿たし、十分なる持久的效果を約して吳れる。治療に對するかやうな好都合な狀態は、性慾の度合における大なる動搖と性

的題目に對して要求された條件の複雜さのために、丁度性生活といふ領域の中によく現れる。この場合瀉下法は人が目指すことの出來る一切を遂行する。といふのは、醫者はヒステリックといふ體質を變革しようと決心したのではないからである。ヒステリックの體質に伴ふ、そして外的條件の協力の下に體質から生ずることの出來る疾患を除去すれば、醫者はただそれだけで滿足しなければならぬ。患者が再び働く能力を復興した時に、醫者の使命は終了したのである。これに加へて、醫者が再發の可能を考慮する時に、醫者は將來に對してある希望を懷くことが出來る。醫者は神經症の病原學における重要特徴を知つてゐる。卽ち神經症の發生は大抵複決定されてゐること、多くのモメントがこの作用の下に召集されなければならぬことを知つてゐる。たとひ各箇の病原的モメントがめいめいその作用力を發揮したところで、かういふ召集が立所に再び惹起されるものでないことを希望してもよいのである。

ヒステリーのかやうな進行する症例において、停滯する症例がふいに跡形もなく消滅するといふことを反駁することが出來る。だがこれに對して、かやうな自然治癒だけでは大抵の場合急速に完全に根絕の結果がもたらされないが、治療の干涉によつて自然治癒はすばらしく促進されると返答してもよい。瀉下療法によつて、自然治癒の可能なものだけが治るものか、あるひは自然

的に解決されなかつた別のものも時には治るものか、私達は今日のところこれに對して何とも返答が出來ない。

(四) 急性ヒステリー、卽ちヒステリー症候の最も活潑な產生の、疾患產生(ヒステリー性精神病)による自我の續發的壓倒の時期にある症例に遭遇するなら、瀉下療法とて疾患の外觀と經過に大きな變化を與へるものでない。私達はさういふ場合に神經症に對して、醫家が急性傳染病に對して取る場合と全く同一の立場にあるのである。病原的モメントは過ぎ去つた、今や影響のなくなつた時期にはひつて十分なる威力を發揮するものであつて、潛伏期の克服後はじめてそれらモメントが顯在的となる。疾患は斷絕したのではない。人はそれの進行を待つて患者に最も好都合な條件を作つてやらねばならぬ。かやうな急迫した時期の間に疾患產物、卽ち新しく發したヒステリー症候を除去してやるなら、除去されたものは忽ち他の新しい症候によつて置換されることに私達は留意しなければならぬ。ダナオスの勞働「モール人の洗濯」不機嫌な印象から醫者は逃れることが出來ない。勞力の巨大な浪費、家族のものの不滿、急性神經症に必然に要する持續時間の觀念は、急性傳染病の類同した症例と同じやうに、家族のものにはぴつたりと響かない。あれやこれやのものがかやうな症例に瀉下法を應用することを不可能ならしめる。と申して

急性ヒステリーにおいても疾患産物をその度毎に除去することが、防禦に從事する患者の正常なる自我を支持し、壓倒に對し、精神病への、恐らく最後の錯亂への轉落に對して自我を防衞することによつて、治癒作用を發揮しないものかどうかを一應吟味する必要が殘されてゐる。

瀉下法が急性ヒステリーに對してもどれだけのことを成し遂げるものか、瀉下療法が症候の新產物を實地認められる程度でどの範圍まで喰止めるものかは、ブロイエルが、この精神療法的操作を最初に試みたアンナの症例からはつきり分かる。

（五）ヒステリー症候が中等度に、しかも連續的に產生される慢性ヒステリーを問題とする場合、根本的に働くやうな治療法のないことを非常に遺憾と思ふが、同時に對症療法としての瀉下法の意義を過重評價するやうに習つてくる。次に私達は慢性的に働く病原によつての障害を問題にしなければならぬ。患者の神經系の抵抗力を强める方向にむかつて全力をあげねばならぬ。そしてヒステリー症候の存在することはこの神經系の抵抗の減弱を意味し、ヒステリーに罹りやすいモメントを示すと言はなくてはならぬ。單特症候的ヒステリーの機構から知るやうに、新しいヒステリー症候は既存の症候に關聯し、既存の症候に準じて最もたやすく形成される。一度侵害された場所は、薄弱な箇所となつて、次の機會にも侵害されるであらう。一度分裂した精神群は

結晶化の刺激としての役目を演ずる。それを中心に未だ起らずにゐる結晶化が極めて容易に行はれる。既に存在してゐる症候を除去し、症候の根柢をなしてゐる心的變化を揚棄さすことは、患者に大量の抵抗力を回復してやることを意味する。そして患者は回復した抵抗力をもつて障害作用に立派に反抗することが出來る。私達は長期間にわたる監視と時々の「煙突掃除（チムニー・スウイピング）」によつてこの種の患者に十二分のことを行つてやることが出來る。

（六）ヒステリー症候のどれもこれもが必ずしも精神原因のものでないといふ告白と、ヒステリー症候の一切を精神療法的操作によつて除去することが出來るといふ主張の間に提起される外觀上の矛盾を私達は一應考察しなければならなかつた。精神原因でないこの症候の一部は疾患特徵を示すが、例へばスチグマータのやうに疾病とは稱せられ難いといふことに矛盾の解決が存してゐる。だからかういふ症候が症例の治療的解決後にも依然として存在してゐる場合、實踐上別に氣にかける必要はない。さやうな他の症候に對しては、それは何等かの迂回を辿つて精神原因の症候から分離されたと言ふことが出來る。といふのはさういふ症候は何等かの迂回において結局精神原因に依存してゐるからである。

前述の疾患史からも、又治療法のテクニークに關する後段の注意からも鮮明にされない吾々の治療操作の困難と不都合を、これからいよいよ考察することにする。――私は詳說するよりもむしろ列擧し暗示するに留めたいと思つてゐる。この操作は醫者にとつてはなかなか苦勞が多く、なかなか時間がかかる。それは心理學的現象に對する多大なる興味、さらに患者に對する個人的同情を前提せしめる。下品ないまいましい感じを與へるやうな、いくら親密になつても人間的な同情が起つて來ないやうな人間に就いて、ヒステリーの精神機構の研究に沒頭出來るものだとは私はどうしても想像出來なかつた。と申して一方私は脊髓癆とか僂痲質斯の患者に就いてならそんな個人的な好き嫌ひに係りなく治療を行ふことが出來た。患者に對してこちらからいろんな注文が必要である。智力のある水準以下ではこの操作は一般に適用出來ない。低能の氣が少しでもあればこの操作は極度にむづかしくなる。私達は患者の全幅の同意、全幅の注意、就中患者からの信賴を必要とする。といふのは分析はいつも最も親密な、最も祕密に保たれる心的過程の上に運轉されるからである。かやうな治療に適應する患者の大抵は、醫者の探索がいかなる方向に動いてゐるかを朧ろに勘附くや否や、醫者から遠ざかるのである。醫者は患者にとつては赤の他人である。醫者に一身を委ねて、醫者に信賴を打込まうと決心した別の患者において、さういふこ

とは普通は向うの自由意志から起されるものであつて、こちらから強制出來るものでないが、さう決心した別の患者において、醫者との個人關係は少くとも暫しの間前面に現れないといふことは已むを得ないことである。恰も醫者のかやうな影響は問題の解決を可能とさす條件であるやうな觀を呈する。催眠術を使用すべきか、あるひは催眠術を避けて別のもので代用しなければならぬか、兩者はこの情況にあつては根本的な相違があると私は考へない。この不都合は私達の操作にいつもつきまとふものであるといへ、これは私達の操作の重荷とはなり得ないことを公正に强調出來る。かういふ不都合は治癒すべき神經症の前提の上に立つてゐること、それは患者に對する强い配慮を招致し、患者において心的變化の招來を目ざすどんな醫療的活動にもつきまとふものであることはむしろ當然なことである。私は催眠術の應用に何等の障害、何等の危險を見てゐないから、私はいろいろの症例にこの手段を大膽に活用したのである。萬一障害が起つても、その原因は別なもつと深いところに存してゐた。畏敬すべき私の先輩にして且つ私の盟友たるヨセフ・ブロイエル君と協力して瀉下法を行つて以來の數年間にわたる治療的努力を一覽する時に、催眠術は有害どころか、幾度となく非常に役に立つて、いかなる治療法も及ばぬ數多の良結果をもたらしたと私は考へてゐる。『豫報』でも申上げたやうに、それは全體として「重大な治療的利益」

であつた。

この操作の應用に際してのもう一つの利益を特記しなければならぬ。ヒステリーが多かれ少なかれ混合してゐる複雜な神經症の重篤な症例に就いては、ブロイエル氏法による分析によるに非ずんば、それをさらに立派に解釋することは出來ない。この分析を行ふ時はヒステリー性機構を示してゐるものはまづ第一に解消してしまふ。さうするうちに私はこの分析において現象の殘餘のものを解釋し、そのものの病原に遡及することを學び、このやうにして神經症治療の武器によつて件の症例において現れて來るものに對する支點を手にしたのである。かやうな分析の前後における神經症の症例に對する私の批判の一般的相違を考察する時に、私はこの分析を神經症疾患の知識に不可缺なものだと固持するやうに誘はれて來る。さらに私は瀉下的精神療法の應用を仰臥療法と結びつける習慣になつた。必要に應じてこの仰臥療法をワィル・ミッチェル氏肥胖療法に變へてもよい。私はこのやうにして一方においては精神療法中非常に邪魔になる新しい心的印象の混入を避け、他方においては患者がしばしば有害な夢に陷るといふ弊害のある肥胖療法の倦怠をとりのぞくといふ利益を持つた。瀉下療法の間に患者に課せしめる非常に尨大なる心的勞働及び外傷體驗の再生による興奮はワイル・ミツチエル氏安靜療法に離反し、その療法から求めよ

うとする效果を阻止することを期待しなければならぬ。まるであべこべのことが起るのだ。私達はブロイエル氏法とワイル・ミッチエル氏療法をこのやうに結びつけることによつて、後者のものから期待すべきあらゆる肉體的恢復と、精神療法の件はない安靜療法では決して生じない程の著明な心的影響を收めるのである。

二

ブロイエル氏法を廣汎に應用しようとする私の試みにおいて、ヒステリーの診斷が確實であり私達の記載した精神機構の効力に於いてある程度の確かさがあつたにも拘らず、多數の患者が催眠狀態に陷らないといふ困難に逢着したといふ言葉に立つてこれから議論し直すことにする。正常な意識に存在してゐない病原的回想を發見するために、私は記憶擴大を目的に催眠術を必要とした。この故に私はかういふ患者に全然手をつけないことにするかあるひは他の方法によつてこの擴大を計らなければならなかつた。

ある人はよく催眠術にかかり、他の人はまるでかからないといふ原因が那邊にあるかを、私は

他の人と同じに十分に說明することを知らなかつた。だから私はこの困難を除去するための原因を追求することが出來なかつた。多數の患者においてこの障害はさらに著明であつた。かういふ患者は催眠術の試みを眞向から拒絕した。二つの場合が同一のものであり、双方共催眠術を欲しないといふことを意味することに私はその時ふと思ひあたつた。催眠術にかからない人は、彼が催眠術を公然と欲するとか欲しないとか口に出さなくとも、催眠術に對してある心的躊躇を持つてゐる人である。私がこの見解を固持してよいものかどうかにははつきりした自信がついてゐなかつた。

併し催眠術を廢しても結局は病原的回想をつかみ出すことが必要であつた。このために私は次のやうな方法に辿り着いた。

患者にはじめて會ふ時に、その患者にあなたはその症候の最初の動機を記憶してゐるかどうかと尋ねた。その時ある患者はまるで記憶してゐないと言ひ、他の患者はあることを思ひ浮べるがその記憶は朦朧としてゐて、それ以上詳しいことを追窮することが出來なかつた。私は忘却したと稱する印象を夢遊狀態から呼びさますといふあのベルンハイムの手本によつて追窮して、双方とも私は憶えてゐます、頭に浮んで參りました等々と保證して呉れる時に、ある人はあるものを

思ひ出し、他の人は回想を一歩だけ擴大して吳れる。私はさらに追窮じて、患者にあほむけに寢るやうに命じ、精神を集中さすために目を任意につぶるやうに命じた。さうすることによつて少くとも催眠狀態とある點類似した狀態が作れたのである。そしてその結果催眠術など借らずに、私達のテーマに關係するものと思はれる、もつと深部にある新しい回想を浮ばしめることが出來るといふ經驗を持つた。確實に存在してゐると思はれる病原的觀念の系列を單純なる强制によつて回想さすことが本當に可能だといふ印象を私はかやうな經驗を通して切實に受けたのである。そしてこの强制は私にとつては努力を必要とするものであり、又この强制は抵抗を克服しなければならぬといふ解釋に私を近接せしむるものであつたから、私はこの實況を直ちに次の如き理論に公式化さすことが出來た。卽ち私は私の心的作業を通して病原的觀念の意識化（回想）に反抗する患者の精神力を克服しなければならない。これこそヒステリー症候の發生に共働した、その當時病原的觀念の意識化を阻止した、同一の精神力であるべきであるといふことが私に思ひ浮んだ時に、新しい理解が突然に私の面前に開かれたやうに思はれた。ではいかなる力が作用力として假定さるべきであつたか、そしてその力はいかなる動機を動力としたのであつたか。私はそれに對して容易に一つの意見をたてることが出來た。私は少數ではあるが完備した分析をちやんと

手許に準備してゐる。かういふ分析において私は病原的な、忘却された、意識の外に持ち出された觀念の實例を知つたのである。これらの實例から私はこの種の觀念の一般的性質を知つた。このやうな觀念は悉く悲痛なるものであつて、羞恥、苛責、心的疼痛の情緒、侵害の感情を喚起さすに適したものであり、全部が體驗しない方がよいと思つた、出來ることなら忘れてしまいたいと思つたやうな種類のものであつた。以上のことからひとりでに防禦の思想が湧いてくる。一つの新しい觀念の許諾(信仰の意味における、現實承認の意味における許諾)は既に自我に結合されてゐる觀念の種類と方向にかかつてゐることは心理學者によつて一般に認められ、新しく現れる觀念が從ふ檢閲官の過程に對して特別の術語を創作したのである。患者の自我に向つて和解し難い姿を持つた、自我の側から反撥の力を喚起さすところの觀念が近よつてくる。この和解し難い觀念の防禦こそ自我の目的であつた。この目的は實事に達成される。件の觀念は意識からそして回想から抑壓される。その觀念の心的痕跡は一寸では探し出せないやうになつてしまふ。だがこの痕跡はやつぱり存在しておらねばならなかつた。私がこの痕跡に注意を集中するやうに努力する時に、私はこの力を症候發生に際して反撥となつて現れた抵抗としてかぎつけたのである。觀念は排斥と抑壓の結果病原的となつたといふことを私が想像出來た時に、萬事は解決されたや

うに思はれた。私はさきの疾患史の數多の批判において、又防禦神經症に關する小さい研究において、心理學的臆說を指示しようと試みた。そしてその臆說の助けを借りて私達はこの關聯——轉化の事實——をも鮮明にすることが出來たのである。

卽ち精神力、自我の忌避は起原的に病原的觀念を聯想から抑壓し、それが回想に戻つてくることに極力反抗する。だからヒステリー患者が知らないといふものは本來——多かれ少なかれ意識的に知らうと欲しないものであつた。そして治療家の任務はこの聯想抵抗を心的作業によつて克服するところに存してゐた。かやうな指導は第一に「强制」によつて、求めてゐる觀念痕跡に患者の精神を集中せしめる心的强制の應用によつて行へる。併しそれはそれだけで盡きるのでなくて、私が示したやうに、分析の進行においてそれは別の形態をとり、さらに廣汎なる精神力の應援を要求する。

今のところこの强制をもつと論じたい。あなたは知つてゐる筈だ、仰しやつてはどうですか、直ぐに思ひ出せますよといふやうな、簡單に駄目をおすことだけでは未だ十分でない。僅かの言葉のあとで「精神集中」の狀態にある患者においてすら分析の緖口がほぐれてくる。併しかういふ場合どこでも量的比較、强烈な若くは熾烈な諸動機間の鬪爭が中心をなしてゐることを忘れて

はならぬ。最も重篤なヒステリーにおける「聯想抵抗」に赤の他人の新米の分析家が强制したところでびりつともしない。私達はさらに强力なる手段に訴へねばならぬ。

さういふ時に私は何はともあれ技術上一つの小さいトリックを用ゐることにしてゐる。私は患者に次の瞬間にあなたの額に手をあてませうと話す。そして私が手をおさへてゐる間に回想があなたの目に浮びませう。聯想としてあなたの頭を掠めませうと保證してやる。そして目に映つたもの若くは頭を掠めたものは、どんな種類のものであつても私に報告しなければならぬと患者に命令する。患者は浮んだものが注文のものでないとか、正しいものでないとか、あるひは口に出すのはあまりに不愉快だといふ理由を楯にとつて、患者は私の命令を履行しない。批判を下してはいけない、尻込みしてはいけない、たとへ感情からであつても輕視からであつても！　求めてゐるものが發見さへ出來れば、私達は間違ひなく發見したことになるのだ。次いで私は數分間側に寢てゐる患者の額をおさへ、患者をそのままにして、あてがはづれやうが私は平氣だといふ程の落ついた調子で「あなたの目に何か映りましたか」あるひは「あなたの頭に何か浮びましたか」と尋ねる。

かういふ操作から私はいろんなことを學びとつた。そして例外なく所期の目的に達したのであ

る。私は今日最早この操作なしにやつて行けない程であつた。額をこのやうに手でおさへること
を何か別の信號とか患者の他の肉體的影響によつておきかへることが出來ることを私は知つてゐ
るが、患者が私の前に寢てゐる時は、手で額をおさへるとか、患者の頭を兩手ではさむとかする
ことは、この目的のために利用出來る最も暗示性に富んだ便宜この上もない方法であつた。この
トリックの作用力を說明するために、この方法は「瞬時的に强められた催眠術」に該當してゐると
言ふ事が出來た。併し催眠術の機構からだけではどうも不可解に思はれて、私はそれを詳しく解
釋する氣になれなかつた。むしろこの操作の利益は私がこの法によつて患者の注意を彼の意識的
追求と熟考から、一言でいへば彼の意志が表現するすべてのものから分離せしむるところに存し
てゐると私は考へてゐる。これは丁度水晶球等を凝視する場合と同じである。併し私が手でおさ
へる間にいつも私が求めてゐるものが浮び上るといふ事實から私の推論する學說は次のやうにな
る。一見忘れてしまつたと思ひこんでゐる病原的觀念はいつでも手近にちやんと存在してゐる、
たやすく手のとどく聯想によつてその觀念を摑へることが出來る。だから問題はただある妨害を
除去することにかかつてゐるのである。この妨害はやつぱり患者の意志であるやうに見える。そ
してもろもろの人間は自らの意地を棄て、自らにおける心的過程に對して完全なる客觀的態度を

とるやうに學ぶであらう。

手でおさへた瞬間に浮び上るものはいつも「忘却した」回想とはきまつてゐない。本來の病原的回想が非常に表面で發見出來ることがあるが、これは非常に稀有である。一番よくあることは出發點とした觀念と求めるところの病原的觀念を結ぶ聯想圈の中間をなす觀念とか、あるひは思考と回想の新しい系列の出發點を作りその系列の末端に病原的觀念が立つてゐるといふ觀念が浮び上つてくる。手でおさへるといふことは可なからずしも病原的觀念を直接に剔出するものでないが――加ふるにこの病原的觀念は準備なしに關聯から引き離されてしまへば全く譯の分からないものになつてしまふ――この法は病原的觀念に到る道を指し示し、探究の進むべき方向を與へるものであつた。手でおさへることによつて最初に浮び上る觀念は決して抑壓を受けてはゐないありふれた回想である。病原的觀念に到る途上において連鎖が切斷してしまふ時は、新しい目標と連絡を作るために、手でおさへるといふこの操作を再び反復することだけが必要である。

さらに違つた症例において、手でおさへることによつて、それ自體患者には十分旣知の、だがその現出によつて出發點としてとつた觀念との關係を忘れてゐるために、患者が面喰ふ回想が喚起される。分析をさらに進めるに從つてこの關係は明瞭になつてゐる。この壓迫によつてのすべ

ての結果から、大量の心的材料をある目的のために整頓し、そのものの意識への復歸に際して巧みなる配列を逞しくする、患者の意識の外にある優れた智性から私達は欺瞞的な印象を受ける。私が臆測したやうにこの無意識的な第二の智性は單に一つの假面に過ぎない。

さらに複雜した分析においては、私達は（額をおさへるといふ）この操作を利用して再三再四文字通り間斷なく活動する。その操作はある時は患者の覺醒的遡及の跡切れたところから既知の回想を越えてより廣き道を指し示し、ある時は忘却裡に包まれた關聯に對して私達の注意を喚起せしめる。次いで數年この方聯想を奪はれてゐた、しかも依然として回想として認識され得る回想を喚起せしめ並列せしめ、最後に再生の最高の働きとして、患者が決して自分のものと認めようと欲しない、患者が思ひ出さうと欲しない思考を浮び上らしめる。勿論その時患者はその思考は關聯から無理やりにひつぱり出されたものだと承認し、丁度この觀念が分析の総結と症候の総焉を招來せしめたことを確信するのである。

これから一つこの技術的操作の秀でた働きに就いて少數の實例を列擧したい。

六年前からひつこい慢性の神經性咳嗽をわづらつてゐる令孃を治療したことがある。この咳嗽は明かにありふれた加答兒によつて養はれ、しかもそれの强い心的動機を持つてゐるに相違なか

つた。いろんな治療を試みたがまるで效果がなかつた。そこで私は心理的分析の方法によつて症候を除去しようと試みた。娘はその神經性咳嗽が十四歳の頃、丁度叔母の家に寄宿してゐた時に始まつたことだけを憶えてゐた。彼女はその當時の心的興奮に就いては何も記憶してゐなかつた。彼女はその疾患に動機があることを信じなかつた。私が例によつて手をあてた時に、彼女はまつぱじめに大きな犬を思ひ出した。次いでその回想の光景を認めた。それは叔母の家の犬であつて、その犬は彼女になついてどこへでもついて行つた。こちらから追窮もしないうちに、彼女はその犬が死んだこと、その犬を墓地に埋葬してやつたこと、墓地からの歸途咳嗽が出たことを思ひ浮べた。私はその譯を尋ねた。併し再び手をあてて追窮しなければならなかつた。その時「あたしは一人ぽつちになつた。誰もあたしを愛して呉れない。あの犬は私の無二のお友達であつた。それだのにあの犬は私を殘して死んでしまつた。」といふ思考が浮んだ。――彼女は話し續ける。あたしが叔母のところから自分の家に歸つてから咳嗽はやみましたが、一年半して又咳嗽が再發しました。――その原因は何でありましたか。――私は憶えてゐません。――私は再び額を手でおさへた。彼女は叔父の死去の通知を思ひ出した。その通知を受け取つた時に、咳嗽が再び現れた。さらに類似の思考を思ひ出した。この叔父は家庭において彼女に對して好意を持つた、

彼女を可愛がつた無二のお友達であつた。人は私を愛して吳れない。人はあたしより他の人を愛するのだ。あたしは愛される値打もない人間なのだ。かういふ思考がそれの病原的觀念であつた。併しこの「愛」といふ觀念にあるものが附着してゐた。進んで報告するやうに私は請求したが、激しい抵抗が現れて、分析は今一歩といふところで頓挫してしまつた。

*

少し以前に私はさる老孃を恐怖發作から救治しようと試みてゐた。彼女はその性質からみてこの種の影響にはまるで適せないやうに思はれた。月經閉鎖以後彼女は極度に信仰深くなつて、會ふ度毎に私を惡魔のやうに取扱ひ、手の中に隱してゐる象牙の小さい十字架で魔除をやつた。彼女の恐怖發作はヒステリーの性質を帶びてゐた。それは娘時代に遡つてゐて、輕症の甲狀腺腫をひつこめるために服用した沃度劑の使用に發してゐると唱へてゐた。勿論私はこの由來を却けて神經症的症候の病原學に對する私の見解と巧みに合致する他のものでその由來をおきかへようとした。恐怖發作と因果關係をもつてゐると思はれる娘時代の印象をまつぱじめに尋ねた時に、額に手をあてることによつて、所謂宗敎書の讀書の囘想が浮び上つた。その宗敎書の中に性現象を非常に敬虔に述べた箇所があつた。だがこの箇所はその本を書いた著者の意企に全く反對した印

象をこの娘に與へた。彼女ははらはら涙をこぼしてその書物をほり出した。このことは最初の恐怖發作の直前にあつたのである。再び患者の額に手をあてた時に次の回想が浮んだ。その回想は彼女の兄の先生に關してゐた。この先生は彼女に非常に敬服してゐたし、彼女もまたこの先生に好感を懷いてゐた。この回想の絶頂において兩親の家におけるある夜の光景が浮んだ。彼女は青年達と卓子をかこんでいろんな話題をみんなで面白そうに語り合つてゐた。丁度その夜中に彼女は最初の發作のために眼を醒ました。その發作はその晩に服用した沃度劑のためよりはむしろ官能的興奮に對する反抗と關係してゐた。——私及びあらゆる世界的治療法に反抗するこの強情な女患者において、何か別の方法で、彼女自らの意見と主張に抗してかやうな關聯を發見する期待を私は持つてゐたのか。

*

他の機會に私は幸福に結婚した若い夫人を診療してゐた。この夫人は早くも娘時代に毎朝きまつて暫時失神狀態に陷つた。その狀態で手足が强直し、口をあき舌をつき出した。現在でも、勿論昔程きつくはないが、覺醒時に同じ發作が繰返へされてゐた。彼女を深い催眠狀態に陷らすことが出來なかつたので、私は例の精神集中の狀態において探索を開始し、彼女の額に手をあてて

丁度只今娘さん時代の發作の原因に直接關係してゐる何かがあなたの目に映りませうと駄目をおした。彼女は落ついた素直な態度をとつた。そして自分が娘時代のはじめの頃に棲まつてゐた住宅、自分の部屋、自分のベットの位置、その當時彼女等と一緒に住んでゐた祖母、彼女が非常になついてゐた家庭敎師を見た。これらの場所における、これらの人達の間における澤山の小さい場面が、勿論すべてとるにも足らぬものであつたが、次から次へと浮び上つて來た。次いでお嫁に行くためにこの家を去つて行く家庭女敎師との別離の場面で終つてしまつた。かういふ回想をどういふやうに取扱ふべきか、私はまるで見當がつかなかつた。この回想と發作の病原をどう關聯さしてよいか、私はまるで見當がつかなかつた。勿論發作がはじめて起つた同じ日にかういふいろんな情況があつたことを敎へて呉れたのである。

併し私が分析を進めることの出來る前に、私は嘗てこの女患者の兩親の家の家庭醫であつた同僚と話す機會を持つた。この醫者から私は次のやうな說明を聞いた。この醫者が年頃に達した、肉體的に非常に立派に發育したこの娘の最初の發作の手當をした頃に、娘とその家庭敎師の間の交りに過度の愛情が存することが目についた。彼は疑惑を懷いて祖母に二人の交りを監視するやうに警告した。間もなく祖母はその醫者に、家庭女敎師は夜中に子供を自分のベットに呼び寄せ

る習慣であつたこと、夜中に一緒に寢た朝におきまりのやうに發作が起つたことを告げた。祖母と醫者は思ひ切つて若い二人をうまく引き離してしまつた。娘も母も先生はお嫁に行くために暇をとつたのだと思つてゐた程であつた。

私は只今の說明を若い夫人に報告することによつて治療は立所に奏効した。

*

額に手をあてるといふ操作によつて引出す說明は時々、非常に著明な形態において、そして無意識的智力の假定をもつともつと釣込むやうな情況の下に現れてくる。ここで私は數年來强迫觀念とホビーにやんでゐる夫人を思ひ出す。この夫人はその病氣の起つたのが娘時代であることは知つてゐたが、何がその病氣の原因をなしてゐたかをまるで思ひ出すことが出來なかつた。彼女は誠實な聰明な女であつて、非常に僅かの程度にしか意識出來ない抵抗を示すに過ぎなかつた。（强迫神經症の精神機構がヒステリー症候に非常に內部的に密接してゐたこと、二つの疾患に對する分析の技術は同一であつたことをここに挿入しておきたい。）

手をあてます時にあなたの目に何が映りますか、あなたの頭の中にどういふ考へが浮びますかと私が夫人に尋ねた時に、何にも目に映りません、何の考へも浮びません、でも今不意に一つの

言葉を思ひ出しましたと返答した。——一つの言葉ですつて。——ええ。でも隨分馬鹿馬鹿しいものですわ。——かまはないから仰しやいませ。——「先生」といふ言葉です。——それでおしまひですか。——いいえ。——私は再び額に手をやつた。そしてもう一つの言葉、「シヤツ」といふ言葉が頭に閃いた。私は新しい方法で解答が下されたことに氣が附いた。再び手をあてた時に一見意味のないやうな言葉が次から次へと現れて來た。先生——シヤツ——ベツト——町——馬車。かういふ言葉は一體どういふ意味ですかと私は尋ねた。夫人は一寸考へた。それから思ひ出した。それは丁度只今私の頭に浮びましたある事件を意味してゐるのでございます。私が十歳ですぐ上の姉さんが十二歳の時に、その姉さんが夜中に突然躁狂の發作を起しまして、縛りつけねばなりませんでした。それから馬車におしこまれて町に送られました。姉さんをおさへつけて病院にまで送つて行つたのは家庭教師でありまする先生であつたとはつきり記憶してゐます。——私達はそれからこの種の訊問を續けて行つて、私達の豫言から、全體としては解釋は出來なかつたが、この物語に引續いてゐる、第二の物語に關聯してゐると認めてもよい他の言葉の系列を聞き出すことが出來た。この回想の意味も早速に明かになつた。姉の病氣は、二人がある祕密を共にしてゐたために、妹に印象を殘したのであつた。二人は一つの部屋に寢てゐた。そしてある晩

ある男子の性的な悪戯を許したのであつた。だが少女時代のこの性的な外傷を報告すると共に、最初の强迫觀念の由來のみならず、後年病原的に作用した外傷も同時に分明した。——この症例の珍奇な點は一つ一つの合言葉の現出にのみ存してゐた。そして私はかやうな合言葉を文章に綴らねばならなかつたのである。といふのは、額をおさへることによつて普通浮び上る全聯想、全場面にも、恰も神話のやうに吐き出されたこれらの言葉にも、無關係と無連絡の外觀が附着してゐた。さらに追求する場合はおきまりのやうに、一見連絡のないやうな回想は思考の連鎖によつて緊密に關聯して、求めてゐる病原的モメントに直接導くものであることが分かるのである。

さらに私は分析のもう一つの症候を思ひ出したい。この症候では額をおさへるといふ結果に對する私の信頼は最初の一つの試金石であつたが、結局は實事なほどに正しいものだといふ自信を持つに至つたのである。非常に聰明な、見たところ非常に幸福さうに見える若い婦人が下腹部における、どんな治療を試みても治らなかつた頑固な疼痛のために私の診察を受けに來た。その疼痛は腹壁に存してゐて、手でもつて分かるぐらゐの筋質硬化と關係があることを認めて、私は局處治療を命じておいた。

數箇月の後に私は患者に再び會つた。患者は私に向つて、當時の疼痛はお蔭で先生の言はれた

治療でなくなつて、長い間再發しなかつたが、今日それが神經性疼痛となつて又ぞろ現れて來たと訴へた。その疼痛が以前のやうに運動の時には最早現れないが、ただあるきまつた時刻、たとへば朝目を覺ました時とか、ある種の興奮に際して現れることを私は知つた。——婦人の診斷は全く正しかつた。今こそこの疼痛の原因を發見すべき秋である。だが彼女は催眠術にかからないために私としては施す術もなかつた。そこで精神集中の狀態において額に手をあてて、頭に何か浮びますか、何か目に映りますかと私が尋ねた時に、彼女はあるものが目に映つたと贊成して、その目に映つたものを私に語り始めた。彼女は光を放つてゐる太陽のやうなものを見た。私はそれを目を壓迫したために生じた閃光現發と觀じなければならなかつた。もつと肝腎なものが續いて現れるだらうと心待ちに待つたが、彼女はただまるで月光のやうな異常に蒼白な光を放つ星を見續けた。私は彼女が顫光、光輝、光點を眼前に本當に見てゐるのだと思つた。私は早くもこの試みが失敗の中に數へられるものだと極めてかかつて、何とかしてこんなものからこつそりと退却したいものだと考へてゐた。その時ふと彼女の描寫する現象の一つに心が惹かれた。彼女は一つの黑色の大きな十字架を見た。その十字架は傾いてゐた。十字架の緣からまるで月光と同じやうな顫光が放射して、この顫光の中にこれ迄に見たすべてのものが輝いてゐた。そして十字架の

腕の上に小さい焰がゆらゆらしてゐた。それは明白に閃光現發でなかつたのである。私は耳を欹てた。かういふ光の中から澤山のものが現れて來た。まるで梵字のやうな形をした奇妙な文字、それから三角形のやうな形狀のもの、その中に大きな三角形、それから又十字架……。今度は私は譬喩的意味を臆測して、その十字架は何ですか？　と質問した。——それは多分痛みを意味してゐるのでございませうと彼女は答へた。——十字架は大概道德的罪惡の意味だと反駁して、痛みのうらに何か隱されてゐないですかと尋ねた。——彼女は何も言はなかつた。そしてじつと見續けた。黃金の光を放つ太陽。彼女もその意味を知つてゐた。——それは神であります。原力であります。それから巨大な蜥蜴。彼女は疑問の眼差で、しかも別に恐ろしいといふ樣子もなしにその蜥蜴を凝視した。次は蛇の塊、その次は再び太陽。今度は柔かい銀色の光を放つてゐた。そして彼女の前に自分とこの光源の間に一つの柵が現れた。その柵は彼女から太陽の中心を隱してしまつた。

これは譬喩だと私はとつくに曉つた。そして早速に一番最後の形像の意味を尋ねた。彼女は別に熟考もせずに答へた。太陽は完全であります。理想であります。そして柵は私と理想の間に横たはる私の弱點であり缺點であります。——あなたは御自身を非難していらつしやるのですね。

あなたは御自身に不滿をお持ちなのですね。――はい。――いつからですか。――丁度神智學協會の會員になりまして、協會發行の書物を讀んでからでございます。私は自分に對していつも貧弱な意見しか作れませんでした。――あなたに一番强い印象を與へたのは何でしたか。――只今分册で出てをりまする梵語の飜譯書でございます。――數分してから私は彼女の精神鬪爭の中に彼女が我と我身に下す自責の中に導かれた。そして彼女の口から自責の機緣となつた以前の器質的疼痛が、興奮轉化の結果として現れたある小さい經驗を聞いた。――私が最初閃光現發と觀じた形像は祕密敎的思考の象徵、恐らく祕密敎の敎本の表紙に書いてあつた裝飾であつたのであらう。

＊

私は今や手で壓迫するといふ補助操作にあまり有頂天になり過ぎて、防禦の若くは抵抗の出發點をすつかり等閑に附してゐた。その結果私はこの小さい詭計によつて人は瀉下療法に抗する心的障碍に打克つ地位にあつたといふ印象を與へたに相違なかつた。併しこれだけを信ずる事は非常な錯誤であつたであらう。私が知る限りにおいては治療上にこれ程の利益のあるものはない。手でおさへ大きな變革のためには、ここにあつてもどこにあつても、異常な努力が必要である。

るといふ操作は、防禦しようとする自我に暫しの間奇襲を試みようとする一つのトリックに外ならぬ。あらゆる重篤な症例において、自我は自らの意企を思ひ出し自らの抵抗を續けて行く。

この抵抗の現れる種々さまざまな形態を考へなくてはならぬ。先づ第一に壓迫するといふ試みは第一回又は第二回におきまりのやうに失敗する。さういふ時に患者は非常に失望して「何か頭に浮んだやうな氣がしましたが、それはたださう思つただけなのです。いくら緊張してゐましても、何にも浮んで參りません。」といふのである。患者がこんな態度をとるといふことは未だ障碍の中に數へることは出來ない。患者はついで「先生は今か今かと待ちかまへていらつしやいましたね。今度こそ何か浮んで參りませう。」そして本當にその通りに行く。患者は――そして最も從順な最も聰明な患者であつても――前以て約束した申合せをいかに完全に忘れることが出來るかは注目に價した。患者は手でおさへられた瞬間に浮び上るものはどんなものでも、たとひそれが關係があらうとなからうと、たとひそれが自分に愉快なものであらうと不快なものであらうと、言ひかへれば選擇なしに、批判や情緒の影響なしに、逐一申告すべきだと約束したのであつた。それにも拘らず、患者はこの約束を履行しない。明かに患者はどうすることも出來ないのだ。作業はいつでも停滯する。今度も何も浮びませんと患者は繰返し主張する。だが患者の言ふところ

を言葉そのまま信じてはいけない。さういふ場合、患者は重要でないとか悲痛だとかの理由で、あるものをひつこめるのだと推定し又公言しなければならないのである。私達は強制して手でおさへることを繰返す。私達はあることを本當に耳にするまで執拗に迫らねばならぬ。ついで患者は「そんなことなら一番劈頭に先生に申上げることが出來たのでありますが。」と附け加へる。――どういふ譯で仰しやらなかつたのでありますか?――私はそれが求めるものだと考へることが出來なかつたのでございます。いつ繰返しても同じものが浮びますので、たうとう私はそれを申上げようと決心したのであります。――あるひは丁度それが求めるものでなければいいがと希望してゐました。私はそれを申上げずに濟んだのでございます。ところがいつ繰返しても同じものが浮びますのではじめて、もうどうもかうもならないと觀念いたしました。――このやうな工合に、あとになつて患者は最初に決して申告しようと欲しなかつた抵抗の動機を漏洩する。患者は明かに抵抗以外何事も行ふことが出來なかつたのである。

かやうな抵抗がしばしばいかなる遁辭のうらに隱されるかは注目すべきである。「どうも今日はぼんやりしてゐます。時計の音が耳につきます。隣室のピアノが耳につきます。」私はさういふ言葉に對して、決してさうではありません、口にのぼす勇氣のしない何かが只今あなたの頭に浮ん

だでせう、いくら逃げても駄目ですよ、それをただ仰しやいませと返答する。——私が手でおさへて患者が口に出す迄の時間が長ければ長い程、私の疑惑はますます濃厚になり、患者が自分に浮んだ聯想を整理して、再生に際してそれを片輪にしてしまふことを私はますます恐れるのである。オペラの乞食に扮裝した皇子のやうな、餘計な扮裝だと片附ける時に、しばしば最も肝腎なところが說明出來る。「只今私にあるものが浮び上りました。でもそれをはつきりしたものにこしらへ上げることが出來ません。先生が全部殘らず知りたいと思つていらつしやいますから、私はそれを申上げるのでございます。」ついでこの前口上と共に大抵の場合長らく待ち望んでゐた解決の曙光が現れてくる。患者がかやうな輕視的な狀態で聯想を語るのを聞き流しにせずに、私はいつも傾聽するのである。といふのは、病原的觀念はそれの再生において大して重要でないといふ姿をとるといふことは、見事に成功した防禦のしるしであるからである。吾々はこれによつて防禦の過程が那邊に存してゐるかを推論することが出來る。その過程は強い觀念から弱い觀念を作り強い觀念から情緒を剝離するところに存してゐる。

この故に私達は患者がその病原的回想をつまらないものと名附け、しかも抵抗をもつてのみ口にのぼす事實によつて、他の違つた姿の下で病原的回想を認識するのである。病原的觀念がそれ

の再生に際してすら、患者によつて認容されないといふ症例も存してゐる。「丁度只今私にあるものが浮びました。でもそれは先生が私に明かに敎へこまれたものであります。」あるひは「私は先生が只今の質問に對してどんなことを豫期していらつしやるかをちやんと知つてゐます。先生は確かに私がかくかくのことを考へてゐたと思つてをられませう。」拒否の特別うまい逃口上は「只今私に勿論あることが浮びましたが、それは私が勝手につけたしたやうな氣がいたしますそれは私にはどうも再生された思考ではないやうに思はれます。」といふところに存してゐる。――私はこれらすべての實例に確乎たる自信をもつて踏みとどまりたい。私はこれらの區別に觸れずに患者に對して、それは私達が結局に承認しなければならぬある回想の再生に對する抵抗の外形であり、抵抗の口實であると說明する。

思考の再生における方が一般に作業は樂に捗る。ものを視覺に浮べやすいヒステリー患者は强迫觀念を持つ人程には分析家を手古摺らすことは少い。回想から一つの光景が浮び上るなら、その光景を口述して行くに從つてそれは一歩一歩瓦解して行き不鮮明になつて行くと患者が訴へるのを私達は聞く。患者はその光景を言葉に直すことによつて、恰もその光景が磨滅して行くやうになるのだ。いかなるものに向つて作業を進むべきやの方向を探すた

めに、私達は今や回想の形像自體に方位をきめる。その形像をもう一度よく熟視して下さい。それは消えましだか。——全體としては消えて行きますが、こまかしいものは未だ殘つてゐます。——では未だ解釋すべきものが殘つてゐますね。それに加へて何か新しいものが浮んで來ませうね。或はその殘つてゐるものを中心に何か思ひ出すものがありませう。——作業が終つた時に、視野は再び自由になる。私達は別の形像をおびき出すことが出來る。併しある場合にはかやうな形像が口で敍述されたにも拘らず患者の眼底に頑固にへばりついてゐることがある。私にとつてはこのことは患者が私に未だすつかり大切なことを述べてはゐないといふ證據になる。患者がその大切なものを口に出してしまへば、丁度さまよへる亡靈が救はれたやうに、その形像は跡形もなく消えてしまふ。

吾々が患者に對して常に正しい態度を持するといふことは、分析の進行に對しても大きな價値を持つてゐる。萬一さうでなければ、患者が正しく私達に報告したかどうかにかかつてくる。この故に壓迫操作は實はたつた一つの症例をのぞいては決して失敗するものでないといふことを聞いて私達は安心する。その除外例といふものを私は後段で述べる積りであるが、それは抵抗への特別な動機に相應してゐるといふ注意をもつて私はそのものを特徴づけることが出來る。この操

作が何ものをも暴露しないといふ情況の下に、この操作を應用するといふやうなことが確かに起り得る。たとへば、既に片附いてしまつてゐるのに、ある症候の病原をもつと尋ねる事がある。あるひはある症候の、たとへば實際は肉體的疼痛であつたところの疼痛の心的發生學を追求することがある。このやうな場合に患者はいつでも自分には何も浮ばないと主張する。そして患者の主張は正しかつたのである。ぢつと靜かに寢てゐる患者の表情から分析中目を離してはならぬといふことを一般の規約とする時に、患者に對して不正を行ふことを保護するであらう。ついで吾吾は非常にたやすくは回想が現れない場合の情神的平靜を、防禦のために患者が浮び上つて來る回想を否定しようと試みる場合の緊張と情緒表出から區別することを學ぶのである。

從つて壓迫操作をもつてしても作業はやつぱり困難である。ただいかなる方向にむかつて探究すべきか、いかなるものを患者に强制すべきかを、この操作の結果から學ぶといふ利益だけが存してゐた。多數の實例に對してこの操作は十分に間に合つた。といふのは祕密を推測し、それを患者に卒直に申述べることが肝要であつたからである。大抵の場合患者は自らの拒絕を棄てなければならなかつた。他の場合は私はそれ以上のことを必要とする。患者の持續する抵抗は、連鎖が破れ、解決が頓挫し、回想された形像が不鮮明、不完全に現れるといふところにその姿を現す

のである。分析の後期から前期を回顧するなら、手でおさへるといふ操作によつて患者からひつぱり出したすべての聯想や光景がいかに歪められてゐたかにしばしば一驚するのである。そこには丁度本質的なもの、卽ち人物とか題目とかの關係が缺けてゐる。このために形像は不可解な姿をとつてゐる。私は病原的回想の最初の現出に際するかやうな檢閲の働きについて一二の實例をお話したい。たとへば患者が女の上體を目に浮べた。その上體はきれをぞんざいに纏つてゐた。ずつとしてから始めて患者はこの上體に頭をつけ、その結果人物とその關係を洩すのであつた。あるひは患者は二人の少年に關する自分の子供時代の記憶を語る。その少年達の姿は患者にはまるではつきりしないが、人は彼等の惡戲を噂したのであつた。患者がこの回想を再び浮べて、二人の少年のうち、一人が患者自身であり、もう一人は彼の兄であることを認める迄には、分析の進行上數箇月を要しさらに大きな進歩を必要とした。かやうな持續した抵抗を克服するために、吾々は今やいかなる方法を講ずべきか。

私達は僅少の方法しか持つてはゐぬが、一人の人間が他の人間に心的作用を與へることの可能な一切の方法を手にしてゐるのである。心的作用、特に久しい以前から持續してゐる抵抗はただ徐々に一歩一歩解消せしめることが出來ると第一に言はなくてはならぬ。兎に角じつと辛抱しな

ければならぬのだ。次に私達は短い作業の後に患者に動き始める知的興味を計算に入れねばならぬ。かやうな分析によつて私達自らがはじめて洞察を贏ち得た心的過程の驚くべき世界を患者に說明し患者に報告することによつて、私達は患者をも共同研究者に加盟さし、研究家の客觀的興味をもつて自らを觀察するやうに患者を促す。かやうにして情緖的土臺に立脚した抵抗を擊退するのである。だが最後に——そしてこれは最も強力な槓杆ではあるが——患者の防衞の動機を推測したあとで、私達はその動機を骨拔にするか、あるひはそれをもつと強い動機によつて置換せしむるやうに努めなくてはならぬ。かういふ場合には精神療法的活動を公式によつて把握する可能は消失してしまふ。私達は無知が臆病を作つた場合は、出來るなら說明者とし、敎師とし、自由なるあるひは優れたる世界觀の代辯者とし、共鳴と尊敬の持續を通して、懺悔のあとでたとへば赦罪を授ける聽罪師として活動することが出來る。自らの人格の廣さ、該症例に對して消費することの出來る同情の度合が許す範圍において、私達は患者にある人間的なことをしてやらうと試みる。かやうな心的活動に對して、人が症例の性質とその症例に作用してゐる防禦の動機をほゞ推測しておくといふことは、不可缺な前提として必要である。そして幸福にも強制と壓迫操作の技術は十分うまく行つたのである。私達がこの種の謎を澤山前以て解決しておけば、それだけ

容易に新しい謎を推測し、それだけ早く本當に治療に導く心的作業を活用することが出來るであらう。その譯は、これを完全に明瞭にしておくことは甚だよいことであるからである。ヒステリー症候を惹起せしめた病原的印象を再生せしめ、それを感情とともに語らしめることによつてヒステリー症候から患者を釋放せしめても、治療における任務は患者をただささやうに導くところに存してゐる。そしてこの任務が一度遂行される時は、訂正すべき、あるひは破棄すべき何ものも醫者には殘されてゐないのである。反對暗示に必要なる一切は、抵抗の駁擊の間に早くも利用されてゐる。症例はいはば閉されたドアになぞらへられる。一度ドアの把手に手をかけさへすれば戸を開くのは極めて容易であるからである。

抵抗の克服のために利用する知的動機と並んで、私達は稀には情緒的動機、卽ち醫師の個人的勢力を必要とする。そして多數の症例において、その情緒的動機のみが抵抗を除去すべき唯一の道具となる。その點は醫術一般と別に變つたところのないものだ。この個體的因子の協力を全然拒否することは、いかなる治療法にも要求さるべきものでないのである。

三

前章の詳説に對し、卽ち無遠慮に剔發した私のテクニークの困難に對して——加ふるに私はそれを最もむづかしい症例から寄せ集めたのであつた。勿論比較的すらすら分析が運ばれ場合もあつたが——かやうな實相に對して、かやうな面倒さをやめて、催眠術を根限りかけるか、あるひは深い催眠狀態に移すべき患者の範圍に瀉下療法の利用を制限すべきかといふことが果して合目的でないかどうかの疑問を何人も提起したいと思つてゐる。後者の提案に對して私は自分の技倆の挺子に合ふ患者數が非常に少なかつたと返答しなければならなかつた。併し前者の提案に對して私は催眠術の强制によつては抵抗なるものは大して除去出來なかつたといふ推測に贊成したい考へである。これに關する私の經驗は實は大變數が少ないのだから、私は推測以上を出ることが出來ない。だが精神集中の代りに催眠狀態における瀉下法を遂行した時に、私に課せられた作業がそれによつて大して輕減しないのを知つた。最近になつてやつと私はこのやうな治療法を完成したのである。それを完成する迄の歲月の間私は下肢のヒステリー性麻痺を消失せしむることに

成功した。その女患者は精神的には覺醒狀態と非常に違つた狀態にあつたし、又肉體的の狀態は私がさあ起きて下さいと呼びかける迄は、患者は兩眼を開くことも起き上ることも不可能であるといふ特色を示してゐた。と申してこの實例における程に大きな抵抗にぶちあつたのは實は私にははじめてであつた。私はこんな肉體的特徵に重きをおかない。そして十箇月にも及んだ診療の最後になつて、その肉體的特徵がいつの間にか消失してしまつた。私が作業を行つた女患者の狀態はこの故に無意識を回想する能力、醫者といふ人間へのきはめて特殊なる關係といふその特色を一つも失つてゐなかつた。エンミー夫人の疾患史において、勿論私は深い夢遊狀態において行つた瀉下療法の、そこでは抵抗なるものが全然役割を演じてゐない實例を敍述したのであつた。併しこの夫人からは私はその申告に際して特別の克服を必要とする何ものも經驗しなかなかつた。長い間の昵懇といくらかの尊敬のため、覺醒狀態においても口に出すことが出來ないといふやうなものをまるで私は經驗しなかつた。私が治療した後彼女の病氣が再發したその原因と確實に一致する、彼女の疾患の根原に私は全然つきあたらなかつた。――それはかやうな治療における私の最初の試みであつた――そして私が偶然エロチークの一部が混ぜられてゐる回想を彼女から要求した時に、後年夢遊狀態におかずにやつた私の女患者のあるもののやうに、彼女はたつた一度

だけ私に反抗して、その報告を誤魔化さうとするのを知つた。夢遊狀態においてさへこの夫人が他の注文や忖度に抵抗をすることについては、彼女の疾患史のところで私は既に述べておいた。他の場合には際立つて從順であるにも拘らず、深い催眠狀態においては、治療的には極度に頑固になるといふ實例を體驗して以來、私は瀉下療法をたやすくするための催眠術の價値に疑惑を懷くに至つた。私はこの種の實例を既に報告しておいたが、なほここに別のものを附加することにする。この經驗は精神の領域においてすら原因と作用の量的關係に對しての私の欲求に惡くは一致しなかつたと一言白狀しておく。

*

これ迄の記述にあつて抵抗なる觀念は私達には殊に顯著であつた。治療的作業において、ヒステリーは和解し難い觀念の抑壓を通じて防禦の動機から發生し、抑壓される觀念は弱い（熾烈でない）回想痕跡として存續し、回想から剝離された情緒は肉體的神經力のために利用される。換言すれば興奮の轉化が生ずるといふ見解に吾々がいかにして到達したかを示した。この故に觀念はそれの抑壓によつて病的症候の原因に、卽ち病原的になるのである。かういふ精神機構を示すヒステリーに「防禦ヒステリー」なる名稱を與へてもよい。さて私達二人、卽ちブロイエル君と私

は幾度となく他の二種のヒステリーについて語つた。その二つの種類に對して、擬眠性ヒステリーと貯溜性ヒステリーの名前を使用したのである。擬眠性ヒステリーといふのは實は最初に私達の視野にはひつたところのヒステリーである。この種のヒステリーを紹介するために、ブロイエルの最初の症例程立派な實例はないと私は考へてゐる。ブロイエルはかやうな擬眠性ヒステリーに對して、轉化防禦の機構とは根本的に相違した精神機構を提唱した。即ちこの場合には特殊なる精神狀態において受け入れられたある觀念が、最初から自我の外にとどまることによつてその觀念が病原的に作用するやうになる。この故に觀念を自我から遠ざけるためには何等の精神力を必要としない。そして若し夢遊的精神活動の助けによつて觀念を自我の中にひき入れるなら、抵抗など喚起される筈がない。アンナの疾患史では實際このやうな抵抗はまるで現れてゐない。

　私はこの相違を根本的なものだと考へてゐる。そのために當然擬眠性ヒステリーを主張する自信を持つやうになつたのだ。注目すべきは私自らの經驗の中では眞正な擬眠性ヒステリーなどなかつた。私の手によつて取扱ふといつでも防禦ヒステリーに變じてしまつた。といつて私は何も隔絕された意識狀態において明かに發生した、この故に自我への採用から閉め出されねばならなかつた症候に一度も出會はなかつたと言ふのではない。私の取扱つた症候の中にもさういふもの

はあつたが、さういふ時に、前以て防禦によつて分裂された精神群が活躍したといふ事情が所謂擬眠状態の分離の原因をなしてゐたことを私は立證することが出來た。略言すれば、擬眠性ヒステリーと防禦ヒステリーはその根元においてはどこかで合致してゐて、その場合防禦が發原であるといふ疑惑をおさへることが出來なかつた。併し私はそれについてはまるで何も知つてゐないのである。

治療的作業が何の抵抗もなしにすらすら運ばれるといふ「貯溜性ヒステリー」に關しての私の批判は當分は同じやうに不正確である。定型的な貯溜性ヒステリーと觀ずべき症例を私は知つてゐる。實は私はあまりすらすらと確實に作業が運ばれるので有頂天になつてゐたが、作業が實際あまりすらすら進行しただけに、それだけ效果の方はから駄目であつた。從つて私は無知に該當する愼重をもつて、貯溜性ヒステリーにおいてもまた、根本的には、全過程をヒステリー性におしやる防禦の一部が發見出來るといふことを推測する。防禦といふ概念をヒステリー全般に普遍することの傾向のために、私が果して偏見と誤謬に陷る危險を冒すかどうかは、新しい經驗が直ちに決定して呉れるだらう。

*

私はこれまでは瀉下療法の困難とその技術について論じて、このテクニークによつて分析がどういふ形態をとつてくるかの二三の指示をも附加しようと思つた。このことは私にとつては實に興味深い題目である。だが未だ嘗てこの種の分析をやつたことのない他人にもこの題目が同じ興味をよびおこすとは私は期待することが出來ない。實を申せば技術については改めて論ずべきであらうが、只今は內容的な困難についてお話することにしよう。その困難は患者だけの責任ではない。擬眠性ヒステリーと貯溜性ヒステリーにおいては一部は、お手本として私の眼前を去らないあの防禦ヒステリーにおけると同一の困難であらねばならなかつた。ここで發見出來る心的特徵は嘗ては觀念動學に對して素材としてある價値をかち得ることが出來たといふ期待をもつて、私は敍述のこの最後の部分から進まうと思つてゐる。

かやうな分析から受ける最初のそして最大の印象は、忘却したと自らきめてかかつてゐる病原的なる心的材料は、自我によつて行使されず、聯想において、回想において、何等の役目をも演じないといへ——しかも何等かの狀態において既に存在し、正しい優れた排列をもつて實在してゐるといふ事實である。この故に道を阻止する抵抗を除去することだけが肝要になる。併しさうでないなら、吾々があるものを知るやうにそれは意識されるのだ。各箇の觀念相互間の、病原的

でない、しばしば回想される觀念との關聯が存在してゐる。そしてその關聯はその當時に形成されて記憶の中に保存されてゐる。病原的なる心的材料は正常な自我の智力と別に逕庭のないところの智力の所産として現れる。第二の自我の假裝はしばしば最も欺瞞的なる姿態をとる。

この印象が正しとされるかどうか、又この際人は解決の結果として現れる心的材料の排列を疾患の時代に引き戻せないかどうかは、私がこれまでに、そしてこの箇所で考察しようと欲しない問題である。かやうな分析に際しての經驗を、いかなる場合にも、解決の後に全體が大觀出來る觀點に達した場合ほどに、容易に明白に敍述することが出來ない。

實相は特別な症例に對して、例へば大きな外傷によつて發生した箇々の症候に對して描寫された程には大抵の場合簡明でない。人は大概たつた一つのヒステリー症候でなく、一部は相互に無關係に、一部は相互にからみ合つてゐる症候の多數を持つてゐる。私達はたつた一つの外傷的回想及びその核心としてのたつた一つの病原的觀念を豫期してはならぬが、部分外傷の系列と病原的思考の連鎖においてそれを把握しなければならぬ。單特症候的な外傷性ヒステリーといふのは私達が普通出くはすやうな重篤なヒステリー性神經症の複雜な構造に比較しては、いはば原生動物、單細胞生物のやうなものである。

かやうなヒステリーの心的材料は少くとも三層より成る多次元の組織としての姿をとる。私はこの繪畫的表現がやがて正當化されることを希望したい。先づ第一に、外傷的因子が頂點を占めてゐるやうな、若くは病原的觀念の最も純粹な形成が發見出來るやうな回想（體驗あるひは思考に對する）の核が存在してゐる。そしてこの核の周圍に、分析によつて作り上げねばならぬ他の回想材料のしばしば極めて莫大なる量が、前述のやうな三重の排列において存在してゐることを知る。第一に各箇のテーマの中に生ずる線狀の年代的の排列が著明である。この實例として私はブロイエルのアンナの分析における排列を引用するだけにとどめておく。そのテーマは聾でありたい、耳に入れたくないものである。ついでそれは七つの條件によつて分化する。そしておのおのの標題の下に十乃至百以上にわたる箇々の回想が年代的な順序で集められる。まるで順序正しく保管された文書を取出すやうな工合であつた。私の女患者なるエンミー夫人の分析において、たとひ完全に敍述されないといへ、同じやうな回想分册が含まれてゐる。併しそれらの分册はすべての分析において非常にありふれた事件を作り、いつでも年代的の順序で現れ、その順序は精神上正常な人間における週日若くは月名の順序のやうに信頼出來るものであり、再生においてそれの發生の順序が顚倒するといふ特徴によつて、分析の作業を困難ならしめる。分册のうちの最

分冊の巻頭に現れ、現實では系列の發端であつた印象が分冊の巻尾を作つてゐる。

私は同種の回想を、丁度書物を積み上げたやうに、小包のやうに、線狀に積重ねた一つの堆積に排列するのを、一つのテーマの形成と名附けた。これらのテーマは第二種の排列を示す。その排列は病原的な核を中心として一層一層積上げられてゐると私は形容せずにをられない。この層は何によつて作られてゐるか、いかなるものに準じて、この排列の大さが增減するかを明言することはさしてむづかしくない。それは核に向つて成長する同じ抵抗の成層であり、從つて各箇のテーマが延長する同じ意識變化の帶である。周邊部の成層は種々なるテーマの回想(若くは分冊)を含み、それらは容易に回想されていつも明瞭に意識にのぼるものである。深層に進むにつれて浮び上る回想を認識することがますます困難となり、最後に私達は核の眞近において患者が再生に際してなほ否認するやうな回想にぶちあたる。

病原的な心的材料を中心とした成層のこの特徴は、かやうな分析の經過に、後段で知るやうな特色ある姿を賦與するところにある。さらに第三種の排列を話さねばならぬ。その排列は最も根本的なものであり、それに關しては少くとも極めて容易に一般的な證左が作られる。それは思考

內容による排列である。核にまで達するところの論理的な絲によつての連絡である。その絲はおのおのの場合において特徴ある、不規則な、幾重にも曲つた道をとる。この排列は前述の二つの成層の形態學的特色に反して動的な特色を有してゐる。前述の二つの成層は、空間的に示した圖式においては、凝固した、弓形の直線によつて示さるべきであつたが、一方私達は論理的關聯の進路を一つの小さい棒をもつて追はねばならなかつた。その小さい棒は曲りくねつた道を表層から深層に向つて行きつ戻りつし、しかも全體からみては周邊部から中心核におし進んで行く。そしてこの際あらゆる宿場に觸れなくてはならぬ。譬へば將棊盤の上を桂馬が電光形の道をとるやうだといへる。

比較されるものの特質に對して正しくない一點を特記するために、私は暫しの間只今の譬喩を固持することにする。論理的連絡は電光形に曲つた線ばかりでなく、むしろ分岐した、特に一點に向つて集合する直線系に一致する。その直線系は二つ又は多數の絲が出會ふ結節點を有してゐる。そこで一度集合して再びそこから前進を始める。そしておきまりのやうに、相互に連絡なしに走る、あるひは分枝によつてところどころで結合する多數の絲がその核に集合するのである。別の言葉を借りて申すなら、大抵の場合、症候は複決定されてゐる點が非常に注目に價する。

若し私がさらに唯一の錯雜を紹介するなら、病原的心的材料の組織を解明する私の試みは成功するであらう。だから病原的な核において一つ以上多數の核が必要であるといふ實例が存在出來る。例へば、その獨自の病原學を有しながら、しかも數年前に克服されたところの、急性ヒステリーの最初の爆發に關聯する第二のヒステリーの爆發を分析するならばさういふことがはつきり分かる。さういふ時に私達は二つの病原的な核の間に連絡をつけるために、どういふ成層と思考の道を結ばねばならぬかを容易に會得することが出來る。

このやうに手に入れた病原的材料の組織の姿に、私はなほ一つ若くは別な言葉を結びつけようと思ふ。この材料については、それは異物のやうな狀態をとると申した。治療はその生きてゐる組織から異物を除去するやうに行ふのである。私達はこの比喩のどこに缺點があるかを検討すべき立場に來た。異物はそれの周圍の組織層と何の連絡も有してゐない。勿論異物はその組織層を變化せしめ、反應的炎症を惹起せしめる。これに反して私達がいふ病原的精神群は自我から綺麗さつぱり除去することは出來ない。その精神群の外層は四方八方から正常な自我の領域に向つて枝を張り、病原的組織に屬すると同じに又正常なる自我にも屬してゐることになる。兩者の限界は分析においては純粹に慣習的なものである。ある時は前者に、ある時は後者にはひりこんでゐ

て、それぞれの場所においてははつきりした區別が立てられない。病原的なるものの境界はどこにも示されずに、成層の內部は自我からますます遠ざかつて行く。病原的組織は實は異物のやうにふるまふのでなくて、むしろ浸潤物のやうにふるまふのである。この譬喩によつて抵抗は浸潤するものとして考へねばならぬ。治療は何ものかを剔出するところに存してゐない――精神療法によつて今日そんなことは出來ない――抵抗を解消せしめ、これまで栓塞されてゐる領域に血液循環の道をつけてやるやうなものである。

(私はここで譬喩の系列を使用する。この譬喩はすべて私のテーマに對して非常に極限された類同を有してゐて、彼等相互の間にさへ一致點がない。私はこのことを承知してゐる。そしてその價値を過重する危險を持つてゐないが、最も複雜な未だ嘗て記述されたことのない思考對象を種種なる方向から闡明することが私のいだく意圖である。かういふ理由から、後段において可なり非難はあるが譬喩なるものを挿入する自由を私に許していただきたい。)

若し解決が完成した後に私が只今承認した、複雜きはみなき多次元の組織における病原的材料を第三者に示すことが出來るなら、その人は當然に、そんな駱駝はどうして針の孔を通つたのであるかといふ疑問を提起するであらう。私達は不條理にも「意識の隘路」などを口にしない。術

語はかやうな分析を行ふ醫者に對して意義と活氣を手に入れる。自我意識の中へはいつでも各個の回想がはひりこむことが出來る。このものの推敲に專心になる患者は、あとからはひつて來たものをまるで見ずに、さきにはひりこんだところのものを忘れてしまふ。この一つの病原的回想の克服が困難に逢着するなら、例へば、患者がその回想に對する抵抗を克服しないなら、患者が回想を抑壓し若くは回想を片輪にしようと思ふなら、隘路はまるで栓塞されてしまふ。作業は停滯する。二進も三進も行かなくなる。そして爆發狀態にある回想は、患者がそれを自我の面積の中に取り入れるまで、患者の面前に宙ぶらりになつてゐる。病原的材料が空間的にひろがつてゐる全量は、このやうにして狹い裂目からひつぱり出され、切片又は帶に分割されたやうになつて意識に到達する。そのものから推定する組織に再び合成することが精神療法家の任務である。譬喩の好きなお方はこの點において判じ物を思ひ出されるがよい。

病原的材料のかかる組織が期待出來るやうな分析に着手するにあたつて、私達は經驗の次のやうな成果を利用することが出來る。直接短刀直入に病原的組織の核內におしいることはまるで望めないものだ。たとひそのものが臆測出來ても、患者は自分に與へられた說明をどうしてよいやら分からぬし、その說明によつて精神上別に變化も示されない。

何はともあれ病原的な精神構造の周邊部にふみ止まるより外に施すべき術がない。患者が知つてゐるもの、患者が思ひ出せるものを患者に語らしめることでもつて開始するのだ。この際私達は早くに彼の注意力を指導し、壓迫操作を利用することによつて輕度の抵抗を克服する。私達がこの操作をもつて新しい道を打開する時はいつでも、患者は新しい抵抗なしにそれを一歩前進さすだらうと期待してもよい。

私達がこのやうなやり方で暫しの間作業を繼續するなら、普通患者の方に協力してやらうとする氣分が湧いてくる。さしあたつてこちらから患者に質問や題目を與へなくても、回想の多數のものが患者に浮び上つてくる。この時にこそ私達は成層の內部を切り開いたことになる。患者はこの成層內において今や同一の抵抗の材料を自發的に使用しようとする。暫しの間患者に勝手に再生せしめることはいいことである。患者は自力では重要な關聯を發見することは出來ないが、私達の方から患者に同一の成層內へ手引してやつても差支へない。患者がこのやうにして持ち出す事物はしばしば四分五裂の觀を呈してゐるが、兎にも角にもそれは材料なのだ。後日になつて明瞭になる關係をもつて、その材料は生きてくる。

一般にいへば二つのことを警戒しなければならぬ。患者に溢れ出てくる聯想の再生において私

達が患者を阻止するなら、私達は多くのものを却つて埋めてしまふことになる。そのためにそれはあとになつて却つて非常な努力で解放しなければならないものになる。他方において私達は彼の無意識的「智力」を過重評價してはならない。そして患者に全作業の指導を任かしてしまつてはならぬ。作業の樣式を圖式で示さうと思へば、私はかう言つてよい。吾々は自ら成層內部の開鑿、放射狀の方向における推進を行ひ、一方患者は周邊部の擴大をはかれと言ふことが出來る。

前述の方法をもつて克服することによつて推進が行はれる。併し規則としては前以てさらに他の任務を解決しておかねばならぬ。人は論理的の絲の一部を手にしなければならぬ。それの指導の下に私達はひたすらに內層に穿入する希望が懷けるのである。患者の自由な報告、多くの場合上層に存在する材料は、分析家に對して、どの箇所からはひれば深層に到達出來るか、どの點に求めてゐる思考關係が結びついてゐるかを容易に認識せしめると期待してはならぬ。全くあべこべである。求めるものこそ注意深く隱蔽されてゐるのだ。患者の描寫は完全なやうに響く、それ自體に固着されてゐるやうに響く。人はともあれ一切の展望をさへぎつてゐる壁の前に、どんなものがその背後に隱されてゐるかを豫想せしめる壁の前に立つことになる。

だが私達が患者から多くの努力なしに、多くの抵抗もなしに贏ち得た敍述を批判眼をもつて檢

討する時に、その敍述の中に脫漏や損傷をはつきり發見するであらう。ここでは連鎖は明白に中斷の姿を呈し、話し方によつて、又十分な報告によつて、患者の方から辛じて補充される。かしこでは正常な人間においては無力と名附くべきであつた動機にぶちあたる。注意してやらねば、患者はこれらの脫漏に氣が附かないだらう。併し醫者がこれらの弱い箇所のうらに深層の材料に達する通路を求めるなら、醫者が丁度その箇所において壓迫操作によつて嗅ぎつける連鎖の絲を發見することを希望するなら、醫者は正しい道を歩んだことになる。私達は患者にかう言ふ。あなたは間違つてゐる、あなたが語るものは當面問題としてゐるものと何の係りもないものである。只今私が手でおさへる際にあなたに浮ぶであらう他のものにぶちあたらねばならぬ。

ヒステリー患者の思考において、たとひ無意識に達しても、吾々が正常な個體において提出すると思はれる同一の、論理的關聯及び十分の理由を要求してもよい。この關係の粗雜な點は神經症の勢力範圍に存してゐない。神經症患者、特にヒステリー患者の觀念的關聯が違つた印象を與へるなら、又種々なる觀念の强度關係が一見心理學的條件のみから說明出來ないなら、私達はかやうな外觀を作る原因を知つたことになり、それを祕密な無意識的動機の存在と名附けるべきことを知る。卽ち連鎖におけるかやうな飛躍、常態において正常化される原因力の尺度の背馳が立

證されるところには、常にかやうな祕密な動機の存在を忖度しなければならぬ。

觀念聯合の一般心理學的法則を破棄する自由はスチグマとしては特有なものであるところの、又何等動機のないある任意の觀念が極度に熾烈に生長する、變質した平衡を失つた、異常な腦髓を取扱つてゐるといふ理論的偏見に對しては、私達はかやうな作業にあつては勿論自由であらねばならぬ。心理學的根據のない他の觀念は荒廢することなしにそのまま殘留することが出來る。經驗の示すところによると、ヒステリーでは正反對だ。隱された——しばしば無意識裡にある——動機を剔出して、それを勘定の中に入れるなら、ヒステリーの思考關係にでも反則な不可解なものはまるでないことを知る。

卽ちかやうにして「間違つた連結」によつてしばしば蔽はれてゐる患者の最初の敍述の中に間隙をかぎつけることによつて、私達は周邊部にある論理的の絲の一部をひつつかまへ、壓迫操作を利用して、それを絲口としてさらに道を切り開くことが出來る。

非常に稀であるが、その絲をたよりに內部成層にまで到達することに成功するが、大概はその操作が失敗に終るがために、途中で絲が跡切れて何の結果も惠まれないことがある。あるひはどんなに苦心しても、はつきりしない、二進も三進も行かない結果だけが惠まれる。かういふ實例

において吾々は明白な錯誤に警戒しなければならぬことを早速に學ぶ。患者の表情から、分析が最後に到達したか、あるひはわざわざ心的解明を必要としない症例に遭遇してゐるのか、さてはそれが作業を堰止める巨大なる抵抗であるかを決定しなければならぬ。その抵抗を直ちに打開することが出來なければ、今までのところ未だ透明とはいへない成層の中まで絲をたどつたと假定してもよいのである。恐らくずつと深層にまでたどれるであらう他の絲をつかまへるために、今握つてゐる絲を手放してもよい。若しこの成層に存するすべての絲がたどれるなら、その中に結び目が發見出來るなら、その結び目のために各箇の絲がめいめい單獨に最早たどれないなら、私達は新しく又ぞろ抵抗にぶちあたつたのだと考へることが出來る。

人はかやうな仕事がいかに輻輳してゐるかをたやすく想像することが出來る。私達は抵抗を絶えず克服しながら、成層の內部に進入し、この成層に蓄積されてゐるテーマの知識と、この成層を走るところの絲を手にし、私達が現在手にしてゐる方法と、私達の贏ち得た知識によつて、どれ程深層までおし入ることが出來るかを吟味し、壓迫操作によつて、最も表面の成層の內容から最初の手掛りを作り、絲を手放したり手にとりあげたりして、結び目のところまで絲を追求し、絶えず取り返し、回想の分册を辿りつつ、最後は再び本流に注ぎこむ支流にいつも到達する。か

やうにして私達は結局一層一層の作業をすてて行き、そして本道を通つて直接病原的組織の核心におし入ることが出來るまでになる。かくて鬪爭は戰ひとられるが鬪爭はこれで未だ終焉したのでない。私達は他の絲を取り返し材料を汲み出さねばならぬ。併し患者は今や力の限り共働して呉れ、彼の抵抗は大抵の場合完全に破れてしまふ。

私達が關聯の絲を推定して、それを發見する前に、患者にその關聯の絲を報告するなら、それは作業のこの後段に對して利するところが多い。若し私達が正しく推定したなら、分析の道程を促進さすことが出來る。だが正しくない推定でも、患者に協力を强制し、確實なさらによき知識を洩すところの力限りの拒絶を患者からおびき出すことによつて、その推定は兎に角役に立つてくる。

患者が口先きだけで否定する事物について、患者に何ものかをおしつけることが、あるひは分析の成果を彼の期待の興奮を通して、影響せしめることが不可能であることをはつきり知つて驚き入る。回想の再生又は事件の關聯を私の豫告によつて變化さしたり、僞造さしたりすることに私は一度も成功しなかつた。さういふものは結局は構造の中の矛盾によつて暴露されねばならぬものであつた。私が豫告するやうにあることが起るなら、私の推定が正しかつたことが、幾重も

の信頼すべき回想によつて常に立證される。卽ち人は患者に對して次に來るべき關聯について何等かの意見を公言することを恐れる必要はない。それは何ものをも損ずるものでないからである。

たびたび目につく機會を持つ他の觀察は患者の獨自の再生に關してゐる。かやうな分析の間には、意味を含まないやうな回想は一つだつて現れないと主張することが出來る。重要なるものと何等かのつながりで聯合してゐる無關係な回想形像の混入は本當は起るものでない。深い關係のある二つの回想の聯合が行はれることによつて、それ自體は重要ではないが挿入部として必要缺くべからざる回想に對して、反則でない例外を要求しても差支へない。――回想が患者の意識の前面の狹路にとどまつてゐるまでの時間は、既に述べたやうに、回想の意味と直接の關係を保つてゐる。消え去らうとしない形像はさらに自らの評價を要求する。解決に導けない思考はさらに深く追求さるべきものである。回想が解決される時は、その回想は決して二度と浮んで來るものでない。口に出してしまつた形像は再び目に浮んでこない。萬一再度現れば、二回目では新しい思考內容は形像に、新しい推論は聯想に結びついてゐること、換言すれば、完全な解決が行はれたのでないことをきつぱり期待してもよい。これに反して種々なる强さにおける再歸、最初は仄

かにして、ついで十分な鮮明さをもつてしばしば現れるが、それは只今提出した主張と別に矛盾するものでない。

分析の使命なるものが、强度の亢進若くは再歸を可能とさす症候（疼痛、嘔吐のやうな刺激症候、感動、攣縮）の除去であるなら、私達は作業の間にこの症候の側から「共に話し合ふ」ことの興味ある可なり望ましい現象を觀察する。今問題とする症候は、この症候の病原を包容する病原的組織の圏内に人が觸れるや否や再現するか、あるひは劇しい强度でもつて現出してくる。そしてその症候は今や醫者にとつて有益なる特色ある變動をもつてずつと作業に隨伴して來る。その症候（例へば嘔吐癖）の强さは、それに關する病原的回想の一つに深く觸れれば觸れる程ますます亢進して來る。その病原的回想を口に出す直前に强さは最高に達し、口に出して言つてしまへば强さは突然に消失するか、あるひは暫時の間完全に消失してしまふ。患者が抵抗のため口に出すことを長らく躊躇するなら、感動のたとへば嘔吐癖の緊張をぐつと喰ひしめることが出來なくなり、若し口に出すやうに强制出來ぬ時は、本當に嘔吐が現れて來る。「嘔吐」はヒステリーの轉化說が主張するやうに心的行爲（ここでは口に出すことの）の代用をなしてゐるといふ生きた印象を吾々は受けることが出來る。

ヒステリー症候の側からの强度の變動は、新しい病原的囘想に觸れる度每に繰返しきまつて現れて來る。症候はいはば全時日間議事日程にあるのだ。この症候のかかつてゐる絲を暫く手放すと、症候も暗黑の中に退却し、分析の後期にはひつて再び浮び上るのである。この症候に對する病原的材料が完備されることによつて最後の解決がなされる迄この遊戲はずつと繼續される。嚴密に申せば、この場合、ヒステリー症候は囘想形像又は手の壓迫で引き出した再生の思考に外ならないやうな觀を呈してゐる。ここかしこにおいて、患者の囘想における再歸の同じ强迫的な執拗が解決を熱望する。一見突發的であるやうなヒステリー症候の現出にのみ區別が存してゐるが、一方私達は光景と觀念を自ら引き出したことを思ひ出す。だが實際においては、感動に滿ちた體驗と思考行爲の不變の囘想殘餘の連綿たる系列をヒステリー症候、それの囘想象徵に至るまで誘導するのである。

分析中にヒステリー症候を共に話し合ふといふ現象は、患者を妥協せしめることの出來ない實地上不都合な狀態を伴つてくる。症候の分析を一氣呵成に仕上げることは絕對に不可能である。さらに解決における休止點と合致さすやうに、作業における間歇を按排することも不可能である。むしろ治療の副狀態、たとへば遲刻するといふやうなことによつて絕對的に決定される中止

が、しばしば最も巧妙とはいへぬ場所、將に解決が招來されようとする場所、新しいテーマが浮び上らうとする場所に現れる。新聞の讀者が連載の新聞小說を讀みながら、女主人公の强硬な言葉とか銃聲のすぐあとで「續」といふ字を見た瞬間に感ずるのと同じ不都合な狀態である。私達の症例では攪亂されて、しかも解決に至らないテーマ、はじめは强くしかも未だ闡明されない症候が、患者の精神生活に存續し、他の症例よりももつと凶惡に患者にのしかかる。だが患者は丁度そのものと妥協しなければならぬ。それは違つたやうに整理されるべきである。かやうな分析中に一度觸れたテーマは二度と手放すことの出來ぬ患者が存在してゐる。さういふ患者は二度の治療の休止期においてもそのテーマによつて强迫される。そして患者が自力でもつて解決と共に前進しないために、治療前よりは最初の程は大いに煩悶する。かういふ患者もまた醫者にすがり病原的材料の解決に對して自らが持つ興味のすべてを、治療の時迄猶豫することを結局習得する。そして患者は休止期に自ら自由を感じ始めるのである。

＊

かやうな分析にある患者の一般狀態も注目に價するやうに見える。暫しの間治療の感化を受けずに前から作用してゐる因子の表現が存續してゐるが、ついで患者が「摑まへ」られ、彼の興味

することになる。新しい説明が與へられ、分析の構成における重要なる一章が手にはひる時にはいつも、患者は重荷をおろしたやうに感じ、解決が目睫に迫つたといふ豫感を經驗する。作業の各段階において切迫する混亂において、患者を壓倒する重荷が加重し、自らの不幸感、自らの不能力が高まつてくる。勿論二つの狀態は單に暫らくの間である。と申すのは、分析はさらに前進し、健康の瞬間を吹聽することを恥とし、無頓着にも陰鬱の時期を看過してしまふ。患者の健康における偶然の變動が、自らが引出した自らが理解したものによつておきかへられたなら、それは全般として喜ばしいことである。丁度それは症候の偶然な消失の場所に、分析の桶に該當する議事日程が現れたのを見る喜びである。

以前に記載した成層的な精神構成に深くはひればはひる程、作業はますます暗黑に、ますます困難になるのが普通である。だが一度核にはひりこめば、光が四散する。そして患者の一般狀態は最早强烈な陰鬱を恐れる必要がない。併し私達が各箇の症候に完全な分析を施した時にはじめて、作業の報酬、卽ち症候の消失を期待してもよいのである。確かに各箇の症候は幾重もの結節點によつて相互に關聯してゐるから作業中の部分的成功に喜び勇むのは早すぎる。多數に存する

因果的結合の力によつて、未だ解決されない病原的觀念は、神經症の全創造に對する動機として作用し、分析の最後の言葉をもつてはじめて、全症狀は再生された各箇の回想がふるまつたと全く同じやうに消失してしまふ。——

自我意識から遠ざけられた病原的回想若くは病原的關聯が、分析の作業によつて發見されて自然に組合はされるなら、かやうにして豐富にされた心的人格において、それぞれの所得を述べようとするさまざまなしかたを觀察する。私達が苦心してやつと患者にある知識を強制したあとで、患者は「そのことならいつも頭に浮んでゐました。そんなことなら先生にちやんと申上げることが出來ましたのに。」と言ふことが特別頻繁に現れてくる。洞察力の強い患者はあとでこれを自己欺瞞だつたと認めて自らの不明を責めるのである。さうでない時は一般に新しい所得に對する自我のとる態度は、分析のいかなる成層からこの新しい所得が發してゐるかにかかつてゐる。一番外層に近いものなら何の苦心もせずに認識出來る。それは自我の所有に屬してゐるからである。そして病原的材料の深層とそのものの關係のみが、自我に對しては新しいものなのである。これらの深層から浮び出るものに對して勿論認識と承認が下されるが、しばしば長い熟慮と躊躇のあとでやつとそれがなされる。視覺的回想形像はこの點において單なる思考からなる回想群よ

りも否定される場合が少いのである。最初の程は患者はよく次のやうに言ふ。「そのことなら當然頭にあつた筈なのですが、實は思ひ出すことが出來なかのです。」そしてこの推定に長らく親しんだあとで初めてそれに對する認知が成立する。患者は自らに回想し、この思考を實際一度は持つてゐたといふ事を僅かの聯想から立證する。併し私は分析中に浮び上る回想の評價を患者の承認とは無關係に保つやうにした。私達の方法で引つぱり出したすべてのものを私達は餘儀なく承認するのだと私は倦まず撓まず繰返す。たとひその中に純粹ならざるもの、眞實ならざるものが存在してゐても、そんなものはあとになつてその關聯の上から排除出來ることを知るだらう。折角承認した回想をあとから取消すといふ場合も稀に存することを附言しておきたい。強制的な矛盾の最も欺瞞的な外觀に拘らず、浮び上がるものはどんなものでも最後に正しいと證明されるのである。

病原的組織の核を形成する、最深層に發してゐる觀念は、患者すら回想として承認することが困難である。たとひすべてのものが仕上がつても、たとひ患者が論理的強制によつて壓倒され、さういふ觀念の現出に伴ふ治癒作用によつて說得されても、——たとひ患者がたとへば自分はかくかくのことを考へたと假定しても、患者はしきりに「でもさう考へたといふことは私には思ひ

出すことが出來ません。」と附け加へる。ついで私達は患者と一緒にそれが無意識的思考であつたことを容易に理解する。だがこの狀況を私達の心理學的見解にどういふ風に登錄してよいか、作業が完成された曉には無動機となる、患者の方から拒否される承認を私達は一蹴すべきであるか。實際に生じなかつた、存在の可能性だけがあつた、從つて治療はその當時實行されなかつたある心的行爲を遂行することになるといふやうな思考が問題にされてゐると假定すべきであるか。特に意識の本質に關して吾々の心理學的立場を根本的にはつきりしておかねば、このことに對して、言ひかへれば、分析前の病原的材料の狀態に對して、とやかう言ふことが出來ないのはあまりにも明瞭である。かやうな分析において、意識から無意識內への（即ち回想としては絕對に承認されない）思考の流を追求し、ついで無意識からその思考をある距離だけ再び意識にひつぱり出し、再び無意識內にその思考の終末を見ることが出來るといふことは、一考に價する事實である。「心的照明」のこの轉換は、それ自體において、その論理性において、その各部の關係において、何ものをも變へないだらう。私がその時この思考の流を私の前に持つたとて、患者によつて回想としていかなる部分が承認され、いかなる部分が承認されないかを私は推測出來なかつたであらう。私達の正常な心的過程について主張されるものとあべこべに、私はいはば思考の流

の尖端が無意識内に沈んでゐるのを見るだけである。

＊

かやうなる瀉下的分析の實行に、あるものが不都合にも一つの大きな役割を演じてゐるといふテーマを最後に論じなくてはならぬ。壓迫操作が失敗して、あらゆる保證と强制にも拘らず、何の囘想も呼び出せないといふことがあり得ると私は旣に告白しておいた。ついで私は、二つの場合が可能であると申した。卽ち第一に、探究を目指す丁度その箇所には實は何も現れてこないのだ。このことは非常に冷靜な患者の表情から認めることが出來る。第二に、後段においてはじめて克服出來る抵抗にぶちあたる。私達は未だ侵入出來ない新しい成層の前に立つ。そしてこの場合も患者の緊張した、精神的努力を語る表情からこれを讀むのである。併しなほ第三の場合が可能である。それは一つの妨害を意味するが、內容的妨害でなく、外面的妨害である。醫者對患者の關係がかきみだされる時に、この第三の場合があらはれる。それは吾々が遭遇するうちの最も極惡な妨害を意味する。この妨害はどんな眞劍な分析にも算入することが出來る。

抵抗の精神力を征服すべき動機の創作において醫者の人物がどれ程重要な役割を演ずるかを旣に指示しておいた。可なり多數の實例について、特に婦人において、そしてエロチックな思考の

闡明を問題とする場合において、患者の共働は愛の何等かの代用によつて代償されなくてはならぬ個人的犧牲となる。醫者の努力と醫者の忍耐强い友情はかやうなものの代用物として十二分である。

若し醫者對患者のこの關係がかき亂されるなら、患者の意氣込も役に立たない。若し醫者が最近の病原的觀念を知らうとするなら醫者に對して鬱々としてゐる不快の意識が患者に割り込んでくる。私が知つてゐる限りでは、この妨害は次の三つの項目に分類出來る。

(一) 患者自ら冷遇され、蔑視され、侮辱されたと信ずるか、あるひは醫者及びその治療法に關して不都合なことを耳にした時の、個人的隔意の場合。この場合は少くとも重大なものである。たとひヒステリー患者の敏感と不機嫌が場合によつて想像もつかぬ廣さにおいて現れることがあつても、口に出すことによつて、あるひは說明によつてその妨害はたやすく克服出來る。

(二) 自分は醫者の人物にあまりに親しみすぎてゐる、自分は醫者に對して自分の獨立性を失つてゐる、自分は性的方面においてさへ醫者にたよらうとしてゐるといふ心配が患者に湧き上がる場合。この場合は意義重大である。といふのは、個人的に條件づけられることが少ないからである。この妨害への動機は治療的不安といふ性質に含まれてゐる。患者はある回想においてばか

りでなく、治療のあらゆる試みにおいて現れる抵抗に對して動機を持つのである。私達が壓迫操作を行ふ時に、患者は頭痛を訴へるのを常とする。抵抗に對してのこの新しい動機は患者にとつては大概無意識的である。そして患者は新しく作つたヒステリー症候によつてこれを表現する。頭痛は醫者から干渉を忌避することを意味する。

(三) 分析の內容から現れる悲痛な觀念を醫者といふ人物に交付することに患者が恐怖する場合。これはよくあることである。大抵の分析においておきまりのやうに現れてくる。醫者への交付は間違つた連結によつて惹起される。私はここへ一つの實例をあげなくてはならぬ。あるヒステリー症候の起原は、私の女患者のうちの一人にあつては、彼女がある時話し合つてゐた男子が、彼女を情熱的にいだきしめ、自分に接吻を强要するであらうといふ、數年前に懷いた、そして直ちに無意識內におしやられた願望であつた。さてある日のこと、その日の治療が濟んだ時に、私といふ人物に對して患者の心中にさういふ願望が浮んだのである。彼女はその願望を恐れて、一夜まんじりとしなかつた。そして次回において、治療を拒絕しなかつたとはいへ、患者は作業に對しては全く不合格であつた。私がその妨害を見附け出し、それを除去したあとで、作業は再び進捗した。そして患者の恐れてゐた願望は、最も近い病原的回想、卽ち論理的關係から今

や要求されたものとして現れた。言ひかへれば次のやうに運ばれたのである。先づ第一に患者の意識の中に願望の內容が浮び上つた。勿論この願望を過去に移すことの出來る副狀況に對する囘想は浮ばなかつた。現存する願望は、患者の腦裏を占領することの出來る私といふ人物に對して、意識界を支配する聯想强制によつて結びつけられてゐた。そして——私が間違つた連結と呼ぶ——このメザアンスにおいて、そのはじめ患者をこの許すべからざる願望の拒絕に强制した同一の情緖がよびさまされた。私がこのことを知るや否や、私といふ人物へのあらゆる類似の要求から交付と間違つた連結が再び起つたのだと前提することが出來た。患者は新しいあらゆる機會において瞞着の犧牲となつたことは注目すべきである。

以上の三つの出來事から生ずる抵抗にどういふ場合にぶちあたるかを知らないなら、分析を終結にまで導くことは不可能である。併し古いモデルによつて新しく作られたこの症候を、古い症候のやうに取扱ふやうに決心する時には終結に導く道が發見出來る。患者の「妨害」を意識化さすことが當面の任務となる。壓迫操作を突然に拒絕した、そして(一)のもとで述べたやうな無意識的觀念を假定すべき理由が持てる患者において、私ははじめてこの任務に奇襲的に當面した。私は患者にかう言つた。それは治療の進行への一つの妨害となるに相違ない。だが壓迫操作は少

くともあなたにこの妨害を示す力を持つてゐる。そして私は患者の頭をおさへた。患者はびつくりしたやうに申した。私はここの椅子に腰かけていらつしやいます先生の姿を見ます。でも隨分馬鹿馬鹿しいことですわ。これは又どういふ意味でございませう。——私はそれを說明することが出來た。

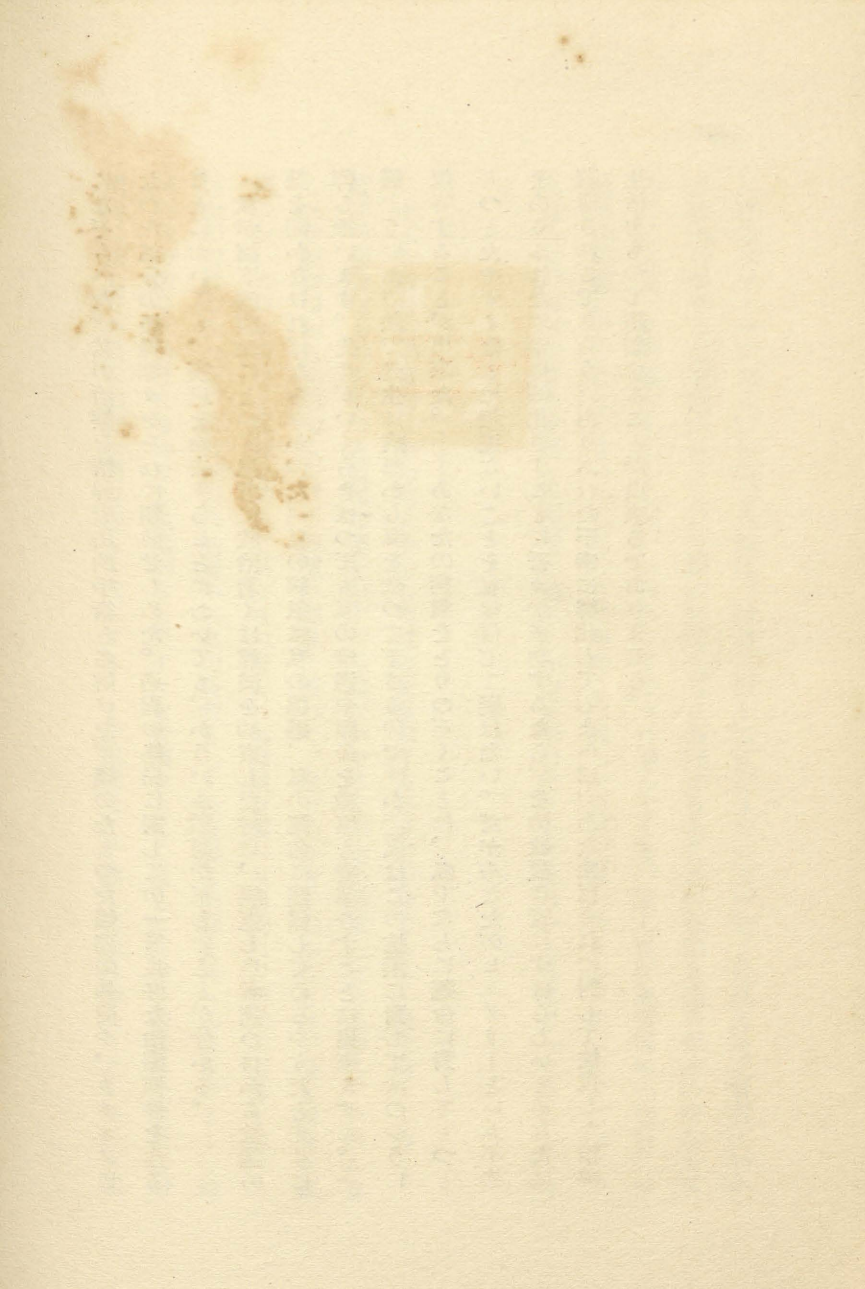
別の患者において、妨害は直接壓迫に際しては出現しないのを常とした。併しその妨害が發生した瞬間へその女患者を引き戾してやつた時に、いつでもそれが立證出來た。壓迫操作はこの瞬間を返却することを決して吾々に拒まなかつた。妨害の發見と證明とをもつて第一の困難は除去された。だがさらに大きな困難が殘つてゐる。一見個人的關係が考察出來る場合に、第三者の人物と醫者といふ人物が合致する場合に、報告をするやうに患者を動かすところにその困難が存してゐる。最初私は私の心的作業のこの加重について腹を立ててゐたのであつたが、最後に全過程の合則性を洞察することを學ぶに至つたのである。そしてその時私はまたかやうな交付によつて別段作業が加重されないことに氣が附いた。患者に對する作業は變るところがない。自分がこの種の願望をたとひ一瞬間でも懷くことが出來たといふ悲痛な情緒を患者は克服しなければならない。そして患者がこの心的反撥を歷史的症例において、あるひは、最近の症例において、私と共

に作業のテーマに取上げるかどうかは、結果に對してはどうでもよいやうに見える。醫者といふ人物へのかやうな交付において、分析の終結と共に融解するところの强迫と瞞着が中心をなしてゐることを、患者達はしだいしだいに洞察するやうに學んでくる。若し私が患者達に「妨害」の性質を明瞭にすることを怠つてゐたなら、突然に發展した他の症候の代りに、新しい、勿論ずつと穩かな、ヒステリー症候を患者達に簡單に作つてやつたことになつたと私は考へてゐるのである。

*

かやうな分析の實行とその際に手にした經驗を暗示するだけで十分であると私は考へてゐる。實際の場合はもつともつと複雜な姿を示す。私達がかやうな作業に從事してゐる時に、いろんなことがおのづから生じてくる。この種の要求に面して、瀉下的分析を行ふことは、最も稀有な症例においてのみ醫者と患者に酬いて吳れるのだといふ印象を與へる目的に、作業の困難を數へ上げたのではなかつた。私は反對の前提から私の醫者としての行動に影響を與へしめる。――一般神經症の治療における重要なる包括的なるテーマを評價することとなしに、只今敍述した治療法の應用に際しての最も確實な適應症も公式化することが出來ない。瀉下的精神療法をよく外科手術

になぞらへた。私の治療を精神療法的手術と名附けた。膿のたまつた體腔の切開や、カリエスになつた部分の掻爬等々をそれに類同せしめた。過程の終局に對しての一層良好な治癒條件を作ることにおいても、疾患を除去することにおいても、かういふ類同が正しいことが分かる。

私が瀉下的療法によつて患者に救治若くは輕減を約束した時に、繰返し患者達の口から抗議の聲を聞かなければならなかつた。「私の病氣は私の境遇、私の運命に關係してゐるやうだと先生は仰しやいます。先生がいくらきばつても私の境遇や運命を微塵も變革さすことは出來ません。一體どういふ方法で先生は病氣から私を救つて下さるのですか。」私はこの抗議に對して次のやうに返答することが出來た。――あなたの病氣をとりのぞくことは、私でなしに運命に對してもつともつとたやすくなるに相違ないことを私は信じて疑はない。だがあなたのヒステリーといふ不幸をありふれた不幸に轉化さすことに吾々が成功するなら、その收穫は實にすばらしいとあなたは確信されるであらう。ありふれた不幸に轉化してしまへば、あなたはそれに對して恢復した精神生活をもつて防禦することが出來るでありませう。

ヒステリー

定價金壹圓五拾錢

昭和五年十一月六日印刷
昭和五年十一月十日發行

譯著者　安田徳太郎

發行者　北原鐵雄
東京市神田區今川小路二ノ一

印刷者　宮下桃太郎
東京府戸塚町一〇九

發行所　東京市神田區今川小路二ノ一
アルス
電話九段（二一七五番・三一七六番）
振替東京二四八八八番

Freud

Studien über Hysterie

ヒステリー

FREUD

フロイド

精神分析大系

VOL. I

フロイド精神分析大系

最近の學界を惡魔の如く攪亂し神の如く驚倒歸依せしめたる

大膽奇拔の新學說「精神分析」とは何ぞや

こは……人間行爲の錯誤、夢の諸現象を分析闡明する微妙なる心理研究の結晶である。

こは……人間の現實生活を左右する驚くべき恐るべき潜在意識の摘抉である。

こは……神と惡魔とを同時に忌憚なく暴露し人間內奥の眞を示す新しき哲學である。

こは……勃起恐怖、中絕性交、潜在的同性愛、近親相姦等精神と性慾の聯關交錯を立證せる新しき實驗科學である。

こは……恐怖、假面、催眠狀態、死の象徵、詩的描寫、處女錯綜、夢の怪奇性、罪惡意識等精神作用の神祕を解明せる新心理學である。

こは……狂氣、ヒステリー、一切の精神病の原因を分析し、適切なる療法を明示せる最新の醫學である。

豫約に非ず選擇隨意

ヒステリー

フロイド精神分析大系

フロイド 著

安田德太郎 譯

ヒステリー

ARS

フロイド精神分析大系

今後の文藝、美術、哲學、凡そ人間生活を基礎とする萬般の諸問題は精神分析に依つてのみ解譯される。心の不思議、性の秘密を知らんとする人は讀め！

赤刷は既刊

第一卷 ヒステリー
ヒステリー研究・ヒステリーの病理
醫學博士 安田德太郎

第二卷 夢判斷（上）
學習院教授 東大講師 新關良三

第三卷 夢判斷（下）
學習院教授 東大講師 新關良三

第四卷 日常生活の異常心理
東北帝大教授 醫學博士 丸井淸泰

第五卷 戀愛生活の心理
リビド說・文化的性道德と近代生活・戀愛生活の心理
醫學士 經濟學士 木村廉吉

第六卷 快感原則の彼岸
集團心理・快感原則の彼岸
廣島文理大教授 文學博士 久保良英

第七卷 精神分析入門（上）
醫學博士 安田德太郎

第八卷 精神分析入門（下）
醫學博士 安田德太郎

第九卷 洒落の精神分析
醫學博士 正木不如丘

第十卷 藝術の分析
レオナルド・妄想と夢・作爲と眞實・ミケランゼロ
慶大教授 茅野蕭々

第十一卷 トーテムとタブウ
トーテムとタブウ・精神分析運動史
大倉高商講師 關榮吉

第十二卷 幻想の未來
幻想の未來・素人分析・自傳
帝大助教授 木村謹治

譯者は悉く學界の最高權威！ 現代に於て求め得べき最適者のみであります。

フロイド精神分析大系は始祖フロイドの全集により其の全學說を譯出したものです。

豫約に非ず選擇隨意

フロイド精神分析大系

最近の學界を惡魔の如く攪亂し神の如く驚倒歸依せしめたる

大膽奇拔の新學說「精神分析」とは何ぞや

これ……人間行爲の錯誤、夢の諸現象を分析闡明する微妙なる心理研究の結晶である。

これ……人間の現實生活を左右する驚くべき恐るべき潛在意識の摘抉である。

これ……神と惡魔とを同時に忌憚なく暴露し人間內奧の眞を示す新しき哲學である。

これ……勃起恐怖、中絶性交、潛在的同性愛、近親相姦等精神と性慾の聯關交錯を立證せる新しき實驗科學である。

これ……恐怖、假面、催眠狀態、死の象徵、詩的描寫、處女錯綜、夢の怪奇性、罪惡意識等精神作用の神祕を解明せる新心理學である。

これ……狂氣、ヒステリー、一切の精神病の原因を分析し、適切なる療法を明示せる最新の醫學である。

豫約に非ず選擇隨意

フロイド精神分析大系

今後の文藝、美術、哲學、凡そ人間生活を基礎とする萬般の諸問題は精神分析に依つてのみ解譯される。心の不思議、性の祕密を知らんとする人は讀め！

赤刷は既刊

第一卷 ヒステリー
ヒステリー研究・ヒステリーの病理
醫學博士 安田德太郎

第二卷 夢判斷（上）
學習院教授 東大講師 新關良三

第三卷 夢判斷（下）
學習院教授 東大講師 新關良三

第四卷 日常生活の異常心理
東北帝大教授 醫學博士 丸井清泰

第五卷 戀愛生活の心理
リビド說・文化的性道德と近代生活・戀愛生活の心理
醫學士 經濟學士 木村廉吉

第六卷 快感原則の彼岸
集團心理・快感原則の彼岸
廣島文理大教授 文學博士 久保良英

第七卷 精神分析入門（上）
醫學博士 安田德太郎

第八卷 精神分析入門（下）
醫學博士 安田德太郎

第九卷 洒落の精神分析
醫學博士 正木不如丘

第十卷 藝術の分析
レオナルド・妄想と夢・作爲と眞實・ミケランゼロ
慶大教授 茅野蕭々

第十一卷 トーテムとタブウ
トーテムとタブウ・精神分析運動史
大倉高商講師 關榮吉

第十二卷 幻想の未來
幻想の未來・素人分析・自傳
帝大助教授 木村謹治

譯者は悉く學界の最高權威！現代に於て求め得べき最適者のみであります。

フロイド精神分析大系は始祖フロイドの全集により其の全學說を譯出したものです。

豫約に非ず選擇隨意